公益財団法人　大阪府文化財センター調査報告書　第 261 集

高槻市

梶　原　西　遺　跡

主要地方道伏見柳谷高槻線（高槻東道路　梶原工区）道路改良事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2015 年 8 月

公益財団法人　大阪府文化財センター

公益財団法人　大阪府文化財センター調査報告書　第 261 集

高槻市

梶　原　西　遺　跡

主要地方道伏見柳谷高槻線（高槻東道路　梶原工区）道路改良事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

公益財団法人　大阪府文化財センター

調査区遠景（西から）　北（左）から順に名神高速道、JR 東海道本線、阪急京都線、国道 171 号、淀川がみえる
JR 東海道本線と国道 171 号の間が調査地

方形周溝墓 2（南東から）

方形周溝墓１（南から）

方形周溝墓１（西から）

南部域群集土坑（西から）

方形周溝墓土器

方形周溝墓土器

土器棺墓土器

序　　文

大阪府の北東部、北摂山地の山裾にひろがる梶原西遺跡一帯は、東西に走る街道や淀川の水運を活かし、古くから交通の要所として栄えた場所にあります。現在もＪＲ東海道本線、阪急京都線、国道171号が遺跡内を東西に横断し、東にはＪＲ東海道新幹線が通るなど、大阪と京都を結ぶ要の場所であることに変わりありません。

南の国道171号から北の山中に建設中の新名神高速道路にアクセスするために、主要地方道伏見柳谷高槻線道路改良工事が計画された折、該当地にかかる埋蔵文化財が確認されました。それにより、新規発見の遺跡として梶原西遺跡と命名され、今回道路改良工事が実施されるにあたって、当センターで文化財調査を行うこととなりました。

その結果、弥生時代中期前葉の方形周溝墓群や、古代の集落跡、弥生時代後期の土器棺墓、古代の群集土坑など、多様な時期、性格の遺構や遺物が発見され、大きな調査成果をあげることができました。なかでも、方形周溝墓群の発見は、近隣に立地する、北摂の弥生時代を代表する環濠集落、安満遺跡と同時期のものであり、弥生時代のムラや墓のあり方を考える上で、非常に大きな意味をもつと思われます。この地域のみならず、各地における弥生時代の社会や墓制を解明する一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査にあたって、大阪府茨木土木事務所、大阪府教育委員会、高槻市教育委員会をはじめとする関係各位より多大なご協力を賜りました。心より感謝申し上げます。

今後とも埋蔵文化財調査へのご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成27年8月

公益財団法人　大阪府文化財センター

理事長　田邉　征夫

例　　言

1．本書は大阪府高槻市梶原五、六丁目に所在する梶原西遺跡（調査名：梶原西遺跡 13－1・14－1）の発掘調査報告書である。

2．調査は、大阪府茨木土木事務所の委託を受け、大阪府教育委員会の指導の下、公益財団法人大阪府文化財センターが実施した。

3．受託契約名、受託期間、調査及び整理体制は以下の通りである。

受託契約名：主要地方道伏見柳谷高槻線（高槻東道路　梶原工区）道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査業務委託
受 託 期 間：平成 26 年 1 月 6 日～平成 26 年 8 月 25 日
調 査 体 制：〔平成 25（2013）年度〕事務局次長　江浦　洋、調整課長　岡本茂史、
調査課長　岡戸哲紀、調査第一課長補佐　金光正裕、副主査　川瀬貴子、
副主査　信田真美世、技師　河本純一
〔平成 26（2014）年度〕事務局次長　江浦　洋、調整課長　岡本茂史、
調査課長　岡戸哲紀、調査第二課長補佐　金光正裕、副主査　川瀬貴子、
副主査　若林幸子、副主査　信田真美世

受託契約名：主要地方道伏見柳谷高槻線（高槻東道路　梶原工区）道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査業務委託（その 2）
受 託 期 間：平成 26 年 8 月 1 日～平成 27 年 8 月 31 日
調査・整理体制：〔平成 26（2014）年度〕事務局次長　江浦　洋、調整課長　岡本茂史、
調査課長　岡戸哲紀、調査第二課長補佐　金光正裕、副主査　川瀬貴子
〔平成 27（2015）年度〕事務局次長　江浦　洋、調整課長　岡本茂史、
調査課長　岡戸哲紀、調査課長補佐　金光正裕（平成 27 年 4 月 30 日まで）、
副主査　川瀬貴子、専門員　片山彰一（写真室）、専門員　山口誠治（保存室）

4．遺物写真撮影は写真室が行い、金属製品の保存処理は保存室が行った。

5．胎土分析は株式会社パレオ・ラボに委託し、第 4 章第 1 節に掲載した。この分析に使用した試料のうち梶原瓦窯跡出土瓦に関しては、高槻市教育委員会のご理解とご配慮を得て、提供を受けた。

6．発掘調査及び整理作業の過程で以下の諸氏ならびに諸機関にご指導・ご教示を賜った。記して感謝の意を表したい。（敬称略）
早川圭（高槻市立埋蔵文化財調査センター）、橋本久和（前高槻市立埋蔵文化財調査センター）、森田克行・高橋公一・今西康雄・内田真雄（高槻市立今城塚古代歴史館）、宮崎康雄（高槻市立しろあと歴史館）、高槻市教育委員会、大阪府教育委員会

7．本書の作成は、執筆・編集を川瀬が担当した。

8．本書に関わる梶原西遺跡についての写真・実測図などの記録類・出土遺物は公益財団法人大阪府文化財センターにおいて保管している。今後、広く活用されることを希望する。

凡　　例

1．遺構実測図の基準高は、東京湾平均海面（T.P.）を使用している。使用単位はmである。
2．座標値は世界測地系（測地成果 2000）による平面直角座標系第Ⅵ系に基づき表示し、単位はmである。
3．全体図及び遺構実測図の方位はすべて平面直角座標系に基づく座標北を示す。
4．現地調査及び遺物整理に際しては、当センターの『遺跡調査基本マニュアル』2010 に準拠した。
5．土層断面図の土色は小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』2006 年度版　農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修を用いた。記号、土色名、土質名の順に記述している。
6．遺構名は、検出順の通し番号（連番）の後ろに遺構の種類（例：１土坑）をつけて表示している。個々の遺構（柱穴、溝など）を組み合わせて性格を把握できる遺構については、それとは別個に性格を表す名称と番号の遺構名を付与した（例：掘立柱建物１、方形周溝墓１）。
7．本書では、遺構全体図は 200 分の１か 300 分の１、遺構平・断面図は 40 分の１を原則として使用しているが、一部のものに関してはその限りではない。
8．遺物実測図の縮尺は４分の１を基本として掲載するが、一部のものに関しては、石器を３分の２にした様に縮尺を変更して掲載している。写真図版の遺物は縮尺を統一していない。
9．掲載遺物は通し番号を与えて表示し、本文・挿図・写真図版ともに一致する。
10. 本書を作成するにあたり、主に以下の文献を引用および参照した。

高槻市史編纂委員会　1977 『高槻市史』 第１巻　本編１
森田克行編　1977 『高槻市文化財報告書第 10 冊　安満遺跡発掘調査報告書』 高槻市教育委員会
宮崎康雄編　1988 『梶原南遺跡発掘調査報告書』 梶原遺跡調査会
鎌田博子編　1998 『名神高速道路内遺跡調査報告書第３輯　梶原瓦窯跡発掘調査報告書』 名神高速道路内遺跡調査会
橋本久和編　2007 『史跡・安満遺跡　保存管理計画書』 高槻市教育委員会
鎌田博子　1994 「梶原窯跡の調査」『高槻市文化財年報』 平成４年度　高槻市教育委員会
橋本久和・高橋公一・木曽広　2002 「神内遺跡の調査」『高槻市文化財年報』 平成 12 年度　高槻市教育委員会
黒須亜希子編　2013 『萩之庄南遺跡』 公益財団法人大阪府文化財センター
三宮昌弘編　2015 『井尻遺跡』 公益財団法人大阪府文化財センター
森田克行　1990 「摂津地域」『弥生土器の様式と編年　近畿編Ⅱ』 木耳社
中世土器研究会　1995 『概説　中世の土器・陶磁器』 真陽社

目　　次

巻頭図版
序　文
例　言
凡　例
目　次

第１章　調査にあたって …… 1
　第１節　調査の経緯と経過 …… 1
　第２節　調査・整理の方法 …… 3
第２章　遺跡の位置と環境 …… 8
　第１節　地理的・歴史的環境 …… 8
第３章　調査成果 …… 13
　第１節　基本層序 …… 13
　第２節　北部域の調査 …… 21
　　（１）遺構 …… 21
　　（２）遺物 …… 38
　第３節　中央域の調査 …… 42
　　（１）遺構 …… 42
　　（２）遺物 …… 68
　第４節　南部域の調査 …… 82
　　（１）遺構 …… 82
　　（２）遺物 …… 104
第４章　自然科学分析 …… 109
　第１節　群集土坑の粘土、出土瓦と梶原瓦窯跡出土瓦の胎土分析 …… 109
第５章　総括 …… 121
　第１節　方形周溝墓について …… 121
　第２節　群集土坑について …… 133

写真図版
抄　録
奥　付

挿　図　目　次

第１図　調査区位置図…… 1
第２図　地区割図…… 3
第３図　調査区一覧…… 5
第４図　周辺遺跡図…… 9
第５図　基本層序模式図…… 15
第６図　東西壁断面図…… 16
第７図　南北壁断面図（１）…… 17・18
第８図　南北壁断面図（２）…… 19・20
第９図　１区方形周溝墓６（67周溝）平・断面図 …… 21
第10図　67周溝土器出土状況図 …… 22
第11図　北部域全体平面図 ……23・24
第12図　１区・１－２区方形周溝墓３（69・331周溝）
　　平・断面図…… 26
第13図　４区方形周溝墓７(275・277・240周溝)平・断面図、
　　５区方形周溝墓４　平面図…… 27
第14図　５区方形周溝墓４(260周溝)断面図…… 28
第15図　２－２区方形周溝墓８（273・250・240周溝）
　　平・断面図、方形周溝墓５（260周溝）平面図 29
第16図　273周溝土器出土状況図…… 30
第17図　２－２区方形周溝墓８(240周溝)　断面図…… 31
第18図　240周溝土器出土状況図…… 32
第19図　２－２区方形周溝墓５(260周溝)断面図…… 33
第20図　２－２区掘立柱建物１　平・断面図 …… 34
第21図　１・４・２－２区遺構断面図 …… 36
第22図　２－１・２－２区遺構断面図 …… 37
第23図　北部域方形周溝墓出土遺物実測図 …… 39
第24図　１～３区包含層出土遺物実測図 …… 41
第25図　中央域全体平面図 ……43・44
第26図　６－１区・７区方形周溝墓２（341周溝）
　　平・断面図…… 46
第27図　６－１区・７区方形周溝墓２（341周溝）
　　断面図…… 47
第28図　341周溝土器出土状況図…… 48
第29図　１－３区方形周溝墓１(434周溝)　平・断面図… 49
第30図　１－３区方形周溝墓１(434周溝)　断面図…… 50
第31図　434周溝土器出土状況図…… 51
第32図　６－１区・10区掘立柱建物２、７区掘立柱建物３
　　平・断面図 …… 55
第33図　７区掘立柱建物４　平・断面図 …… 56
第34図　６－１区柱列１・２・３　平・断面図 …… 57
第35図　１－３区432井戸　平・断面図 …… 59
第36図　１－２・１－３・６－１区遺構断面図 …… 60
第37図　６－２区155土坑土器出土状況図…… 62
第38図　155土坑土器棺墓推定復元図…… 63
第39図　６－２区171土坑・211土坑・106土坑
　　平・断面図 …… 64
第40図　６－１・６－２・８区遺構断面図 …… 66
第41図　中央域方形周溝墓出土遺物実測図 …… 69
第42図　１－３区432井戸・434周溝上層他出土遺物実測図
　　…… 71
第43図　６－１・７区遺構・包含層出土遺物実測図 …… 73
第44図　１－３区出土瓦実測図 …… 75
第45図　６－２区155土坑・177土坑・163ピット出土遺物
　　実測図…… 77
第46図　６－２区包含層出土遺物実測図 …… 79
第47図　６－２区出土瓦実測図 …… 81
第48図　南部域全体平面図 ……83・84
第49図　12－１区280井戸　平・立面図 …… 85
第50図　28溝土器出土状況断面図 …… 86
第51図　12－１区296土坑・281土坑　平・断面図…… 88
第52図　12－１区300土坑・301土坑・304土坑・309土坑・
　　310土坑　平・断面図 …… 89
第53図　12－２区41土坑・54土坑　平・断面図 …… 91
第54図　12－２区５土坑・26土坑・27土坑・38土坑・40
　　土坑　平・断面図 …… 92
第55図　12－２区１土坑・２土坑・３土坑・７土坑
　　平・断面図 …… 93
第56図　12－１区・13区遺構断面図(１) …… 95
第57図　12－１区・13区遺構断面図(２) …… 98
第58図　12－２区遺構断面図 ……100

第59図　12－2区・14区遺構断面図 …… 103
第60図　12－1・12－2・13区遺構・包含層出土遺物実測図 …… 106
第61図　12－1・12－2・13区出土瓦実測図 …… 108
第62図　試料採取地点 …… 110
第63図　元素分布図 …… 117
第64図　Al_2O_3・SiO_2分布図 …… 118
第65図　方形周溝墓群平面図 …… 123・124
第66図　三島地方の弥生時代遺跡分布図 …… 125
第67図　安満遺跡遺構分布及び東部方形周溝墓群平面図 …… 127・128
第68図　神内遺跡方形周溝墓群平面図 …… 130
第69図　群集土坑の埋土による類別 …… 138
第70図　土坑の深さと位置との相関関係 …… 139

写　真　目　次

写真1　機械掘削……6
写真2　レベル測量……6
写真3　高所作業車を使った写真撮影……7
写真4　遺構実測……7
写真5　ヘリコプタを使った航空測量……7
写真6　理事長調査指導……7
写真7　遺物洗浄……7
写真8　遺物実測……7
写真9　デジタルトレース……7
写真10　ロットリングトレース……7
写真11　梶原寺跡（現　畑山神社）……11
写真12　畑山神社参道……11
写真13　梶原寺の礎石……11
写真14　梶原瓦窯跡の説明板……11
写真15　現在の梶原瓦窯跡付近風景（1）……11
写真16　現在の梶原瓦窯跡付近風景（2）……11
写真17　方形周溝墓1（西から）……53
写真18　434周溝西・北辺（西から）……53
写真19　434周溝西辺断面（北から）……53
写真20　胎土分析試料……119
写真21　胎土中の粒子の偏光顕微鏡写真……120
写真22　梶原西遺跡方形周溝墓群……132

表　目　次

表1　分析を行った試料とその詳細……111
表2　胎土中の微化石類と砂粒物の特徴……114
表3　粘土および砂粒組成の特徴……115
表4　岩石片の起源と組み合わせ……115
表5　蛍光X線分析結果……116
表6　梶原西遺跡方形周溝墓一覧……122
表7　梶原西遺跡群集土坑一覧……134～136

写 真 図 版 目 次

巻頭図版１

１.調査区遠景(西から)

２.方形周溝墓２(南東から)

巻頭図版２

１.方形周溝墓１(南から)

２.方形周溝墓１(西から)

巻頭図版３

１.南部域群集土坑(西から)

２.方形周溝墓土器

巻頭図版４

１.方形周溝墓土器

２.土器棺墓土器

写真図版１

１.調査区全景(西から)

２.調査区全景(南から)

写真図版２

１.１区、２－１区、３区全景(北から)

２.１区全景(北から)

写真図版３

１.１区方形周溝墓３　69周溝(西北から)

２.１区方形周溝墓６　67周溝(南西から)

写真図版４

１.１区67周溝土器出土状況(南東から)

２.１区67周溝土器出土状況(南から)

３.１区72土坑完掘状況(南東から)

写真図版５

１.１区69周溝東西断面(北から)

２.１区69周溝南北断面(東から)

３.１区67周溝南北断面(東から)

写真図版６

１.２－１区全景(南から)

２.２－２区、４区、５区全景(南から)

写真図版７

１.４区方形周溝墓７(北東から)

２.２－２区方形周溝墓８(南西から)

写真図版８

１.２－２区方形周溝墓８　273周溝(西から)

２.４区275周溝(北東から)

写真図版９

１.２－２区方形周溝墓８　240周溝(西から)

２.２－２区260周溝(南東から)

写真図版10

１.２－２区260周溝断面(西から)

２.２－２区260周溝断面(東から)

３.５区260周溝断面(西から)

写真図版11

１.２－２区240周溝土器出土状況(西北から)

２.２－２区240周溝断面(東から)

３.４区240周溝断面(東から)

写真図版12

１.２－２区250周溝断面(北から)

２.２－２区273周溝土器出土状況(西から)

３.２－２区273周溝断面(西から)

写真図版13

１.４区275周溝東西断面(南から)

２.４区275周溝南北断面(西から)

３.４区277周溝断面(西から)

４.２－２区279周溝断面(西から)

５.２－２区245土坑断面(南東から)

６.２－２区272土坑断面(北から)

写真図版14

１.２－２区掘立柱建物１(北から)

２.掘立柱建物１　261ピット(南東から)

３.掘立柱建物１　262ピット(南から)

４.掘立柱建物１　263ピット(東から)

５.２－２区271土坑(南から)

写真図版15

１.１－２区全景(南から)

２.１－２区方形周溝墓３　331周溝(南東から)

写真図版16

1．1－2区331周溝断面(東から)

2．1－2区334土坑断面(南から)

3．1－4区341周溝断面(東から)

写真図版17

1．6－1区、7区方形周溝墓2　341周溝(南東から)

2．6－1区、7区方形周溝墓2　341周溝(西北から)

写真図版18

1．6－1区341周溝土器出土状況(南西から)

2．6－1区341周溝断面(西から)

写真図版19

1．6－1区、7区掘立柱建物2、柱列2・3(南東から)

2．7区掘立柱建物3・4　(南西から)

写真図版20

1．6－1区、7区掘立柱建物2、柱列1(西から)

2．7区掘立柱建物3(北から)

3．7区掘立柱建物4(南西から)

写真図版21

1．掘立柱建物2　357ピット(南西から)

2．掘立柱建物2　358ピット(南から)

3．掘立柱建物3　416ピット(南から)

4．掘立柱建物4　409ピット、364ピット(南から)

5．柱列2　388ピット(南から)

6．柱列2　387ピット(南から)

7．柱列1　352ピット(西から)

8．柱列3　391ピット(南から)

写真図版22

1．1－3区方形周溝墓1検出状況(南から)

2．1－3区全景(南から)

写真図版23

1．方形周溝墓1　434周溝完掘状況(南から)

2．434周溝東辺(北西から)

写真図版24

1．434周溝土器出土状況(北西から)

2．434周溝東西断面(南から)

3．434周溝南北断面(東から)

写真図版25

1．432井戸最上層(西から)

2．432井戸上層(南から)

3．432井戸土器検出状況(東から)

4．432井戸石組検出状況(南から)

5．432井戸最下層曲物井筒検出状況(西から)

6．433溝断面(東から)

7．446土坑(南西から)

8．449溝断面(南から)

写真図版26

1．6－2区全景(西から)

2．6－2区東半全景(北から)

写真図版27

1．6－2区西半全景(北から)

2．155土坑土器出土状況(南から)

写真図版28

1．6－2区東半北部近景(北西から)

2．6－2区東半中央部近景(北東から)

3．6－2区東南部近景(北西から)

写真図版29

1．6－2区171土坑(東から)

2．6－2区171土坑北半南北断面(東から)

3．6－2区東半西壁地震による変形土坑断面(東から)

写真図版30

1．6－2区106土坑炭検出状況(北から)

2．6－2区106土坑完掘状況(南から)

3．6－2区211土坑完掘状況(西から)

写真図版31

1．8区、11区全景(北から)

2．9区全景(北から)

写真図版32

1．12－1区、13区遺構検出状況(南西から)

2．12－1区、13区全景(西から)

写真図版33
1.12－1区、13区全景(西から)
2.14区全景(北から)
写真図版34
1.12－1区近景(北西から)
2.12－1区近景(西南から)
3.12－1区、13区近景(北から)
写真図版35
1.281土坑断面(南から)
2.283土坑断面(東北から)
3.281土坑土器出土状況(南から)
4.290土坑断面(南東から)
5.287土坑断面(東から)
6.297土坑断面(東から)
7.311土坑断面(南東から)
8.296土坑断面(東から)
写真図版36
1.295土坑断面(西から)
2.298土坑断面(東から)
3.291土坑断面(南から)
4.299土坑断面(南から)
5.321土坑断面(西南から)
6.322土坑断面(北東から)
7.323土坑断面(南から)
8.324土坑断面(南東から)
写真図版37
1.280井戸最上面平面(東南から)
2.280井戸掘形掘削状況(東南から)
3.280井戸1段目桶枠(東南から)
4.280井戸2段目側板(東南から)
5.280井戸2段目桶枠(東南から)
6.280井戸2段目断面(東南から)
7.308土坑断面(北西から)
8.314土坑断面(南から)
写真図版38
1.12－2区西半遺構検出状況(南から)
2.12－2区東半全景(南から)
写真図版39
1.12－2区西半全景(南から)
2.12－1区東半全景(南から)
写真図版40
1.12－1区西半近景(南東から)
2.12－1区3土坑(南西から)
3.12－1区5・26土坑(南西から)
写真図版41
1.12－2区27土坑(南から)
2.12－2区38土坑(南西から)
3.12－1区54土坑(西から)
写真図版42
1.2土坑断面(南西から)
2.37土坑断面(南から)
3.43土坑断面(南西から)
4.39土坑断面(南から)
5.35土坑断面(南から)
6.45土坑断面(南から)
7.47土坑断面(南西から)
8.51土坑断面(西から)
写真図版43
1.58土坑土器出土状況(西から)
2.12－1区東壁断面(西から)
3.12－1区東壁断層(西から)
写真図版44
1.1－4区、7－2区全景(南西から)
2.1－4区、7－2区全景(北東から)
写真図版45　1・4・2－2区方形周溝墓遺物
1.1区67周溝
2.4区273周溝
3～5.2－2区273周溝
6.1区67周溝、5区260周溝
写真図版46　2－2区方形周溝墓遺物
1.2－2区240周溝、250周溝
2.2－2区240周溝
写真図版47　2－2・6－1・7－2区方形周溝墓遺物
1.2－2区240周溝
2.6－1区341周溝

3．7－2区341周溝
写真図版48　7・7－2・1－3区方形周溝墓遺物
1．7区341周溝、1－3区434周溝
2．7－2区341周溝
3．1－3区434周溝
写真図版49　1－3区434周溝上層遺物
1～6．1－3区434周溝上層
写真図版50　1－3・6－1・7区遺構・包含層遺物
1．6－1区391ピット
2、3．1－3・7－2区433溝
4、8、9．1－3区432井戸
5．6－2区第3層
6．6－1区387ピット
7．6－1区357ピット
写真図版51　6－2区遺構・包含層遺物
1、2．6－2区第2層
3～5．6－2区141周溝
6．6－2区171土坑
7、8．6－2区155土坑
写真図版52　12～14区遺構・包含層遺物
1．12－2区57土坑
2．12－2区28溝
3．12－1区307土坑
4．12－1区307土坑、296土坑
5．12－2区54土坑、55土坑、3土坑、
36土坑、第2層
写真図版53　出土遺物(瓦)
1．1－3・12－1・12－2区丸瓦・平瓦
(凸面)
2．1－3・12－1・12－2区丸瓦・平瓦
(凹面)
写真図版54　出土遺物(石器・瓦・土製品・金属製品)
1、2．6－2区第2層、163ピット、12－2区
第2層、12－1区第2層
3．1－3区第2層
4．6－2区第2層
5．1－4区341周溝
6．6－2区第2層、1－3区432井戸

第１章　調査にあたって

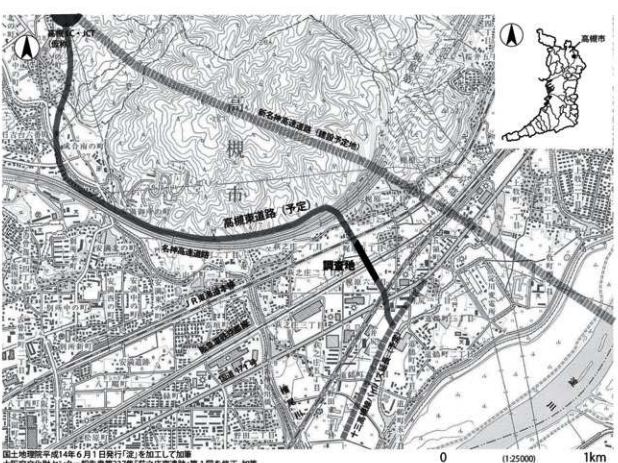
第１節　調査の経緯と経過

（１）調査の経緯

梶原西遺跡は、高槻市梶原五、六丁目に所在する遺跡である。梶原西遺跡は北からは北摂山地が張り出し、南を淀川、西を檜尾川に画された狭小な沖積低地に位置する。遺跡範囲の北側をＪＲ東海道本線、中央を阪急電鉄京都線が東西に横断し、東にはＪＲ東海道新幹線が北東から南西に通り、南は国道 171 号が接するなど、交通の要所に立地している。

主要地方道伏見柳谷高槻線（高槻東道路）は、新名神高速道路（高槻以西間）の開通にあわせ、高槻ジャンクション・インターチェンジ（仮称）へのアクセス機能向上や幹線道路の渋滞緩和、地域の活性化などを目指して、大阪府と高槻市によって整備が進められている。計画路線長は約 3.3㎞で、新たな淀川右岸の幹線道路として期待される都市計画道路十三高槻線と、国道 171 号の合流点よりやや西を起点として北上し、ＪＲ東海道本線、阪急電鉄京都線、名神高速道路を縦断して新名神高速道路入口へ接続する（第１図）。

道路予定地の近辺には、西側に弥生時代の大規模な環濠集落であり、多数の方形周溝墓が発見された安満遺跡や、梶原西遺跡と同じく、工事に先立って発見された遺跡であり、弥生時代後期から古墳



国土地理院平成14年６月１日発行「淀」を加工して加筆
大阪府文化財センター報告書第237集「萩之庄南遺跡」第１図を修正、加筆

第１図　調査区位置図

時代初めの住居や方形周溝墓が発見された萩之庄南遺跡が存在する（第４図）。東には古代や中世の集落遺跡である梶原南遺跡、上牧遺跡などが、山麓部には梶原寺跡や多数の古墳が点在する。また、古代の幹線道路であった山陽道などが近いことから、道路改良工事に先だって埋蔵文化財の有無を把握する試掘調査が行われることとなった。

主要地方道伏見柳谷高槻線（高槻東道路　梶原工区）の道路改良事業に先立って、大阪府教育委員会の指導のもと、公益財団法人大阪府文化財センター（以後、当センターと記述）が平成 25 年４月から６月に試掘調査を行った。南北 600 mにわたって 20 のトレンチを設定し、地表から 1.0 ～ 3.0 mの深度まで掘削した。その結果、ＪＲ東海道本線より北では明確な遺構、遺物が認められず、ＪＲ東海道本線より南では溝・土坑などの遺構や弥生土器、古墳時代前期の土器が出土した。よって、遺跡の範囲が確定し、平成 25 年９月新規発見の遺跡として梶原西遺跡と命名され、周知の遺跡となった。

この結果を受け、前述の道路改良事業に先だって、大阪府茨木土木事務所の委託を受けて当センターが発掘調査を実施することとなった。

（２）調査の経過

今回の調査対象箇所は、道路予定地（１～ 14 区）の東西約 40 m、南北約 240 m内の、面積にして約 4820㎡の区画と、一辺が８m四方の送電線移設個所（15 区）面積約 60㎡、あわせて総面積 5000㎡強に及ぶ。調査区は当初 14 箇所設定したが、工事の工程上１つの区を複数に分割を余儀なくされたり、調査区が追加になるなどして、最終的には 23 の区を設定することとなった（第３図）。

道路は東西両側に幅約 10.0 mで側面にコンクリート擁壁や排水溝をもつ構造で、東西道路をつなぐ用水路でも深度が深く遺構面に達するものは調査区として設定し、調査を行った（５・10・11 区）。また、東西の道路の間には一辺約 15.0 m四方の橋脚が７箇所存在する（３・４・７－２・７・８・９・13・14 区）が、これも調査対象区である。

平成 26 年１月５日に委託契約を結び、平成 26 年１月から７月にかけて発掘調査を行った。

阪急電鉄京都線以北と以南では工区が分れるため、あるいは場内に掘削土を仮置きするには隣接する調査区を交互に調査する必要があるため、複数の調査区を並行して調査を進めた。また、この期間に未買収地などで調査できなかった部分は、工事の進捗にあわせて後日調査を行うこととなった。

この調査で、確認調査では予測できなかった、弥生時代中期前半から後葉の方形周溝墓群の発見や、古代末の掘立柱建物などの居住域、群集土坑などの遺構を多数検出し、大きな調査成果をあげることができた。

平成 26 年７月 31 日に結んだ委託契約（その２）では、平成 26 年８月から平成 27 年５月にかけて中部調査事務所での報告書作成のための整理事業が主な事業である。この中で、残された調査区の発掘調査も行った。平成 26 年 12 月に未調査区（１－４区と７－２区の大部分、15 区）の現地調査を行い、１－２区や１－３区で検出した方形周溝墓の続きを検出した。また、平成 27 年４月に未調査区の１－４区と７－２区の残りを調査し、現地調査は完了した。

この調査成果も盛り込んで整理作業を引き続き行い、報告書を平成 27 年８月に刊行して、すべての作業を完了した。

調査や整理作業のやり方の詳細は次節に、調査成果は第３章以下にまとめたのでそちらを参照されたい。

第２節　調査・整理の方法

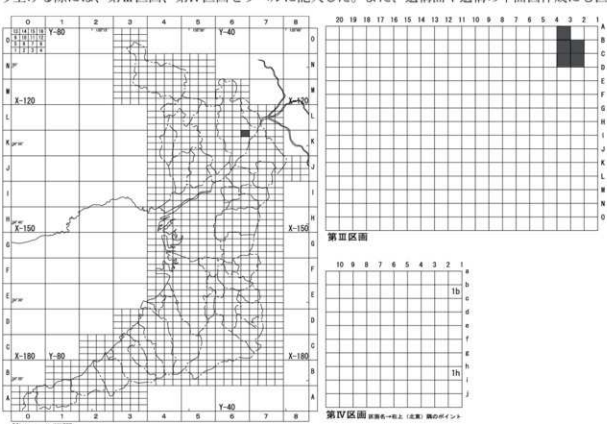
発掘調査及び整理作業は、当センター『遺跡調査基本マニュアル』2010 に従って実施している。

（１）調査の方法

調査区割　遺物の取り上げや遺構の位置確認に関しては、当センターマニュアルに基づき平面直角座標系第Ⅵ系（世界測地系）を基準とした区画を使用した。これにのっとり、第Ⅰ～第Ⅳまでの大小４段階の区画を設定した（第２図）。

第Ⅰ区画は、大阪府の南西端 X=－192,000 m、Y=－88,000 mを基準とし、南北方向に６㎞、東西方向に８㎞で府域を 62 区画に分割したものである。表示は、南西端を基点に北へＡ～Ｏ、東へ０～８とする。第Ⅱ区画は、第Ⅰ区画を南北方向に 1.5㎞、東西方向に 2.0㎞でそれぞれ４分割し、計 16 区画を設定する。表示は南西端を１とし、東へ４まで、あとは西端を５、９、13、北西端を 16 と平行式で表す。第Ⅲ区画は第Ⅱ区画を 100 m単位で、南北 15、東西 20 に区画する。表示は北東端を基点に、南へＡ～Ｏ、西へ１～ 20 とする。第Ⅳ区画は、第Ⅲ区画を 10 m単位で南北方向、東西方向ともに 10 に区画する。表示は北東端を基点に南へａ～ｊ、西へ１～ 10 とする。

今回の調査地は第Ⅰ区画がＫ６、第Ⅱ区画が 16、第Ⅲ区画が３Ａ、３Ｂ、３Ｃ、２Ｂ、２Ｃにあたる。第Ⅳ区画は２Ｂが９ｊ、10 ｈ～ 10 ｊ、２Ｃが８ａ、９ａ、９ｂ、10 ａ～ 10 ｃ、３Ａが５ｉ、５ｊ、６ｉ、６ｊ、７ｉ、７ｊ、３Ｂが１ｆ～１ｊ、２ｅ～２ｊ、３ｂ～３ｊ、４ａ～４ｊ、５ａ～５ｈ、６ａ～６ｆ、７ａ～７ｄ、３Ｃが１ａ～１ｃ、２ａ～２ｃ、３ａ、３ｂとなる。出土遺物を取り上げる際には、第Ⅲ区画、第Ⅳ区画をラベルに記入した。また、遺構面や遺構の平面図作成にも区



第２図　地区割図

画名を表記するようにした。なお、方位は座標北を使用し、水準はすべて東京湾平均海面（T.P.）からのプラス値を用いた。

調査区の設定・呼称　今回の調査区は道路用地であるため幅約 10 m、南北約 240 mの細長い範囲に、調査区の道路部が東西に約 20 mの間隔で２本並走し、その間を一辺 15.0 m程度の正方形もしくは長方形の橋脚部分が７箇所存在する。その北西道路部分を１区、北東道路部分を２区、中央道路部分を６区、南道路部分を 12 区、橋脚部分を北から３区、４区…といったある程度のまとまりで調査区名を設定していた（第３図）。

しかしながら、調査区内で掘削土を仮置きする必要がある、隣接する水田などの水入れ時期や農道の付け替え時期と調整して調査を行う事態が起きたり、１つの調査区に未買収地が含まれるなどの理由から、設定した調査区をさらに分割する必要が生じた。そのため、２－１区、２－２区といった枝番号を与えた区名を複数作り、最終的には 23 の調査区を設定した。ただし、６－２区と９区、12－１区と 13 区などは調査区の境界が接しているため、掘削自体は１つの区として掘削、調査し、遺物の取り上げなどの時のみ調査区名を区別したところもある。

遺構名　調査区に関わらず、遺構の検出順に１からの通し番号を遺構種別の前に付与した（例：１土坑、２溝）。連続して同一の遺構になる場合でも調査区が異なると別個の遺構番号を与え、整理作業時にどちらかに統一した。また、複数調査区を並行して調査していたため、遺構番号が調査区内でも連続しない場合がある。

また、掘立柱建物や方形周溝墓などは各柱穴や周溝に調査時は遺構番号を付与し、整理する際に掘立柱建物１、方形周溝墓２等の、遺構種類を前に、番号を後ろにした遺構番号を別個付与することとした。調査区複数に存在する周溝などでは、同一周溝の遺構番号が複数生じたものもあるが、あえてそのままにしてあるものもある。

掘削方法　建物建設時の盛土、近世～近代期の耕作土層、確認調査坑の撹乱などを重機で掘削した（写真１）。機械掘削深度は堆積が薄い北部域では 0.2 m、厚いところでは 0.6 ～ 0.7 mあった。

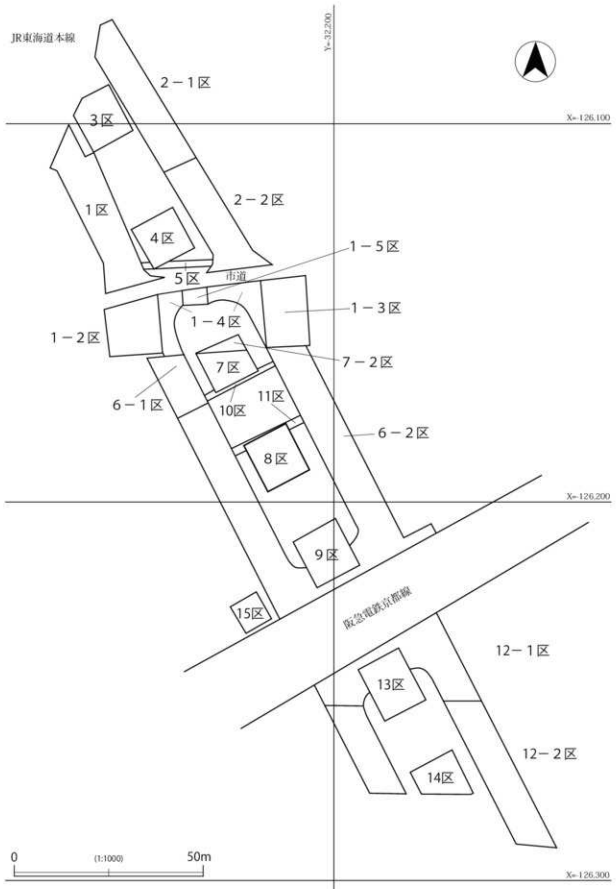
それ以下を人力によって層序ごとに掘削を行い、遺構面、遺構の確認及び遺物の取り上げに努めた。人力掘削は 0.2 m、厚いところでは 0.6 ～ 0.7 mあった。人力掘削はシャベル等を使用して行い、土砂の排出はベルトコンベアを使用した。遺構の掘削はヘラやスコップを用いて慎重に行った。湧水や雨水はポンプを用いて場外へ排出した。

遺構面と層　近～現代の整地層や盛土は除外して、近世～近代耕作土を第１層、遺物を包含する古代末～中世後半と考えられる土を第２層とし、遺構面を形成する弥生時代中期から古代の土壌層を第３層とした。検出した遺構面は機械掘削終了した土壌層上面（第２層上面）を第１面とし、地山上面を第２面と呼称した。しかし、第１面は中世後半期以降の鋤溝を検出した耕作面であり、調査区によっては検出し得なかったところもある。よって、本報告書では第２面のみを遺構面として掲載している。

記録作業　遺構面は平板測量で 1/100 や 1/50 の平面図を作成した。レベル測量を行い、高低差など地形の変化を記録した。また、個別遺構の平面図・断面図・立面図については必要に応じて 1/10・1/20 等で適宜作成した。土層観察用の断面に関しては 1/20 の断面図を作成した（写真２・４）。

現場での写真撮影は、６×７カメラ、35㎜カメラを使用し、それぞれ黒白フィルム、カラーリバーサルフィルムを用いて行った。また、写真台帳作成用にデジタルカメラを使用して撮影を行った。

主要な遺構面の全景写真撮影に関しては足場及び高所作業車を用いて行った（写真３）。特に重要な


JR東海道本線
Y=-32,200
X=-126,100
X=-126,200
X=-126,300
2－1区
3区
1区
2－2区
4区
1－5区
5区
市道
1－3区
1－4区
1－2区
7－2区
7区
6－1区
11区
10区
6－2区
8区
9区
15区
阪急電鉄京都線
12－1区
13区
12－2区
14区
0
(1:1000)
50m
国道171号

第３図　調査区一覧

遺構面に関しては、ヘリコプターによる航空測量を５回、クレーンによる航空測量を２回行った（写真５）。垂直写真と斜め写真、1/50 の平面図と遺構図、1/100 の縮小平面図等がその成果品である。

立会など　各調査区の調査が終了した時点や、指示を仰ぐ必要がある時などは、大阪府教育委員会の立会を受けた。全調査区で計８回行い、完了すると茨木土木事務所に引き渡しを行った。また、１－３区で方形周溝墓を検出した際には、当センター理事長の調査指導を受け（写真６）、高槻市教育委員会など関係諸機関の指導や助言も得た。

基礎整理作業　現地調査の合間には遺物の登録、洗浄、注記や遺構実測図、遺構写真の整理などの基礎整理作業を行った（写真７）。

（２）整理の方法

主要遺構については現地で作成した実測図や航空測量図を編集し、遺構挿図を作成した。挿図の合成は adobe 社製 PhotshopCS3 を用いて行い、浄書は IllustratorCS3 を用いてデジタルトレースを行ったものとロットリングによるトレースを行ったものがある（写真９）。

出土遺物は、接合、復元を行なった後、実測作業を実施した（写真８）。また、一部の遺物に関しては拓本を採った。実測図は遺構、包含層ごとにレイアウトを作成し、ロットリングトレースを行って遺物挿図を作成した（写真 10）。

現地で撮影した遺構面及び個別遺構の写真に関しては、報告書に掲載するものを選別し、現像・焼付け・貼り込み作業を行い、写真図版を作成した。また、出土遺物については、報告書に掲載するものを選別して写真撮影を行い、現像・紙焼作業を行い、写真図版を作成した。

以上の作業と併行して文章を作成し、編集作業を実施して報告書を完成した。入稿後、校正作業を経て本書の刊行をもって完了した。

また、編集作業と併行して、出土遺物は報告書掲載遺物と未掲載遺物に分類し、挿図や写真図版番号が確定すると個々の遺物に掲載遺物ラベルを記入し、掲載順にコンテナに収納作業を行った。

遺物台帳、写真台帳はファイルメーカーでデータベースの台帳を現地作業時から作成していたが、掲載遺物番号、掲載写真番号なども登録し、収納場所などが検索できるよう整備し、今後の活用に対応できるよう努めた。

写真１　機械掘削

写真２　レベル測量

写真３　高所作業車を使った写真撮影

写真４　遺構実測

写真５　ヘリコプタを使った航空測量

写真６　理事長調査指導

写真７　遺物洗浄

写真８　遺物実測

写真９　デジタルトレース

写真10　ロットリングトレース

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的・歴史的環境

（１）地理的環境

梶原西遺跡は大阪府の北部、高槻市梶原五・六丁目にかけて所在する。東西約 0.35km、南北約 2.4km の範囲で広がる弥生時代から中世の複合遺跡である。

檜尾川の東岸、北摂山地の山裾に広がる扇状地縁辺の、工業地や水田が広がる地域に位置する。遺跡の北端をＪＲ東海道本線、中央を阪急電鉄京都線が東西に横断し、東にはＪＲ東海道新幹線が北東から南西に通り、南は国道 171 号が接するなど、交通の要所に立地している。

古代においても難波宮や平安京に近く、山陽道の駅家があったとされる場所にも近い。中世でも当時の幹線道路であった西国街道や淀川の水運を利用して栄え、その立地条件を活かして人や物資が集まる場所だったといえよう。

梶原西遺跡の所在する高槻市は大阪府北東部にあり、ちょうど大阪と京都の中間に位置する。北は京都府亀岡市及び京都市西京区、東は島本町、南は淀川を隔てて枚方市と寝屋川市、西は茨木市と摂津市に接している。近年は交通の利便性の良さからもベッドタウンとして発展し、人口 35 万人を抱え、堺市、東大阪市と並び、中核都市として知られる。

北半部は丹波高地から続く標高 200 m以上の北摂山地が形成され、南半部には大阪平野の北部を形成する、標高 10 m以下の淀川低地が広がる。北摂山地と淀川低地の間には丘陵地が広がり、西側では富田台地が舌状に南に突き出ている。北摂山地から南に流れ込む川は中央が芥川、その東が檜尾川で、南下して淀川に合流する。これらの河川やその支流の氾濫、堆積作用で形成された沖積低地が生産や居住の主要地域となり、梶原西遺跡もこの沖積低地に立地する。梶原西遺跡のおおよその標高は 5.0 ～ 8.0 mであり、北の山裾から南の淀川にむかって低くなる。

調査区の西を流れる檜尾川は、北摂山地のポンポン山東部を源として南に向かい、成合谷の谷底平野を形成する。淀川低地にでると山地の裾をめぐるように南東に流れ、萩之庄付近で屈曲して、再び南下する。しかし、扇状地の広がり方や等高線の入り方から、本来の檜尾川は屈曲せずそのまま南下して分流や移動を繰り返し、周辺に土砂を堆積させていたであろう。当遺跡西にある安満遺跡でも、弥生時代の集落が東に移動することが知られており、その原因の一つとして檜尾川の移動があげられる。檜尾川は、ある時期に人為的に流路が固定されたと推測できる。

その流路がいつ固定されたかは明らかでない。しかし、周辺は室町時代前期まで春日大社安満庄として存続し、15 世紀前期には安満村市場が成立していることが文献でも知られている。耕地開発の途上で、耕地を守るために人工的な固定化が行われたと考えられる。

人工的な堤防による固定化により堤内の土砂が堆積し、氾濫の危険性が増すと再び堤防をかさ上げすることが繰り返された結果、檜尾川は天井川化した。よって、現在は檜尾川からの取水は行われておらず、農業用水も淀川の水をポンプアップして用水路に取り入れている。そのため、檜尾川東岸の梶原西地域では用水路が縦横に存在している。当調査区でも南北、東西に多数の用水路が走り、１区などは用水路によって遺構面が撹乱されている。

（2）歴史的環境（第4図）

高槻市域の遺跡分布は丘陵地帯を南北に流れる芥川により、東西に二分できる。梶原西遺跡の所在する東部の遺跡、史跡について主に概観する。

旧石器・縄文時代　旧石器時代の遺跡は主に芥川西岸の低位段丘や丘陵部に分布する。郡家今城遺跡や、郡家本町遺跡、津ノ江南遺跡で礫群やナイフ形石器などの石器が出土している。

縄文時代になると、やや遺跡数が増える。淀川の自然堤防上にある大塚遺跡や柱本遺跡で早期、前期の北白川下層式などの土器が出土する。中期では丘陵縁辺では塚穴遺跡や天神山遺跡がある。後期は芥川遺跡や、宮田遺跡、上田部遺跡等が出現する。芥川遺跡では定住がより進んだことがうかがえる。搬入土器も認められる。晩期になると遺跡数は飛躍的に増加し、安満遺跡、宮田遺跡、嶋上郡衙跡、大塚遺跡等で終末期の長原式土器などみられる。

弥生時代　梶原西遺跡より西へ約0.5㎞の安満遺跡は、縄文時代から中世にかけての遺跡である。なかでも、昭和40年代からの発掘調査によって、環濠を伴う大規模な集落や、水田遺構、100基以上の方形周溝墓などの墓域を検出したことから、近畿の弥生時代を代表する遺跡として広く知られる。

安満遺跡は前期には集落を形成し、これを囲んで水田、用水路、堰などが作られ、農耕具などの木製品が出土したことから、早くより稲作を開始したことが分かっている。前期の集落遺跡は他に、津ノ江南遺跡、上田部遺跡、芥川遺跡、大蔵司遺跡などがあるが、環濠は認められない。

国土地理院平成14年6月1日発行「淀」を加工・加筆

第4図　周辺遺跡図

中期になると安満遺跡は集落が東西に分散、巨大化する。遺跡東方には50基超の方形周溝墓が2群に分かれて形成される。また、中期後半には西方にも墓域が形成される（第5章第1節参照）。高槻市の東端から島本町では、やはり山裾の微高地部に中期前半の方形周溝墓群を有する神内遺跡がある。竪穴住居10棟と方形周溝墓20基がみつかっており、墓域はさらに広がると予測される。現在は神南備の杜跡として、一部公園として整備されている。

紅茸山南遺跡など平野部での遺跡の増加が進むとともに、丘陵部でも天神山遺跡のような遺跡がみられるようになる。

後期には古曽部・芝谷遺跡等の高地性集落や安満遺跡の東尾根上に見張り場的な萩之庄遺跡が出現し、後期後半にこれらが終息すると、大形高地性集落の紅茸山遺跡が営まれる。芥川周辺では嶋上郡衙跡、芥川遺跡などの集落が営まれる。

古墳時代　萩之庄遺跡では、古墳時代前期の古墳が2基確認され、1号墳は竪穴式石室内部に粘土床と割竹形木棺をもつ構造である。

萩之庄古墳より南西に位置する安満宮山古墳は、淀川から大阪湾を見渡すことのできる場所に位置する、最古級の古墳である。中国魏の年号である青龍3（235）年銘の方格規矩神獣鏡と三角縁神獣鏡5面が出土している。他に大規模古墳としては、前期から中期の弁天山古墳や郡家車塚古墳があげられる。

後期になると芥川右岸の平野部に今城塚古墳が築かれる。また、丘陵斜面から裾部にかけて群集墳が築かれるようになる。安満山古墳では40基強、磐手杜古墳では3基、梶原古墳群では25基の横穴式石室をもつ円墳が確認される。馬具や鉄製品など多様な副葬品が出土している。

集落は古墳時代前期には、梶原西遺跡の東に位置する上牧遺跡や井尻遺跡、梶原南遺跡で検出されている。後期には梶原遺跡で竪穴建物や掘立柱建物がみつかっている。

古代・中世　嶋上郡衙跡は畿内で最初に確認された郡衙跡である。奈良時代から平安時代にかけて、遺跡の南側を山陽道が通り、その北側に郡庁や郡寺（芥川廃寺）がある。隣接する郡家今城遺跡は郡衙官人の居住域と考えられているが、平安時代中頃には消失する。また、郡家川西遺跡の調査から、萩之庄南遺跡、安満遺跡の北側を山陽道が通っていたことが判明している。安満遺跡や郡家川西遺跡などの集落遺跡は、この山陽道の縁辺に位置している。しかしながら、これらの集落も中心が移動していく傾向が認められる。

天長9(832)年、嶋上郡の安満を中心に天皇家私領である、223歩の勅使田がおかれた。これは中世期には、春日大社安満庄に変貌する。

12世紀に入ると、郡家今城遺跡が廃絶後、西に宮田遺跡が出現する。宮田遺跡は3つの群に大別でき、それぞれに母屋と副屋、櫃、井戸、土坑墓などをもつ屋敷地が形成される。

古代末以降、山陽道の縁辺のみならず、淀川の氾濫原にも集落が造られるようになる。上牧遺跡は国衙領で、その名の通り馬を飼っていた牧と推定される。同時に、平安時代以降、淀川は運河の開削によって瀬戸内水運と直接結ばれ、人の往来や物資の運搬に重要な役割を果たした。

上牧遺跡、それと隣接する井尻遺跡では、奈良時代から平安時代の掘立柱建物がまとまって検出され、区画溝や青磁碗などを副葬する土壙墓などもみつかっていることから、屋敷地を形成し、集落が存在していたことが明らかである。

梶原西遺跡の北0.5kmの山地斜面から山裾には、7世紀中葉から8世紀中葉と目される梶原寺跡と梶

写真11　梶原寺跡（現　畑山神社）

写真12　畑山神社参道

写真13　梶原寺の礎石

写真14　梶原瓦窯跡の説明板

写真15　現在の梶原瓦窯跡付近風景（1）

写真16　現在の梶原瓦窯跡付近風景（2）

原瓦窯跡がある。梶原寺・梶原瓦窯跡は正倉院文書に記載があり、天平勝宝９（757）年摂津職解では、造東大寺司が太政官府によって摂津職に命じ、摂津職から梶原寺に東大寺大仏殿歩廊用の瓦 4000 枚の製作を依頼している。この文書から奈良時代に梶原寺と瓦窯があり、東大寺などからも受注を受ける連続的な瓦生産が行われていたことが明らかである。

梶原寺は以前から梶原一丁目の畑山神社境内付近と推定されてきたが、発掘調査で僧坊とされる２間×７間の掘立柱建物などが発見され、ほぼ確定された。現在も境内には建物の礎石が残されている（写真 11 ～ 13）。

梶原瓦窯跡では７世紀中葉の地下式窖窯３基、半地下式窖窯１基、８世紀前半のロストル式平窯１基が検出された。瓦は淀川から木津川を通って奈良へ運ばれたと考えられる。梶原瓦窯跡は名神高速道路建設工事に伴って発掘調査されたが、現在は説明板が残るのみで面影をとどめていない（写真 14 ～ 16）。

梶原南遺跡は奈良時代を中心とする集落遺跡で、18 棟の掘立柱建物を検出している。「新屋首乙賈」という木簡や製塩土器、鋳造関連遺物も出土しており、梶原寺などと関連した古代の居住域を考える上で、興味深い。

中世以降　安満遺跡や上牧遺跡では 13 世紀から 15 世紀の集落が確認されており、安満ノ庄、萩ノ庄といった荘園の存在も文献から確認されている。武士の荘園支配が進み、この地域では真上氏、溝咋氏が有力御家人として勢力をふるった。鎌倉時代末、真上氏が滅びると芥川氏が西国御家人として台頭してくる。その後も三好氏、高山氏らの戦国大名へと支配は受け継がれ、高槻市域は全国支配の下に組み込まれていくのである。

＜参考・引用文献＞
高槻市史編纂委員会　1973 『高槻市史』 第６巻　考古編
高槻市史編纂委員会　1977 「Ⅰ高槻の自然環境」『高槻市史』 第１巻　本編１
森田克行・橋本久和編　1977 『安満遺跡発掘調査報告書－９地区の調査－』 高槻市教育委員会
宮崎康雄編　1988 『梶原南遺跡発掘調査報告書』 梶原遺跡調査会
鎌田博子編　1998 『梶原瓦窯跡発掘調査報告書』 名神高速道路内遺跡調査会
橋本久和編　2007 「第１章第１節　遺跡の位置と環境」『史跡・安満遺跡　保存管理計画書』高槻市教育委員会
黒須亜希子編　2013 「第３章　調査地周辺の環境」『萩之庄南遺跡』 公益財団法人大阪府文化財センター
高槻市立今城塚古代歴史館　2013 『平成 25 年春季特別展　三島弥生文化の黎明　安満遺跡の探求』
高槻市立今城塚古代歴史館　2014 『平成 26 年春季特別展　淀川中流域の弥生文化』
笹栗拓・伊藤武編　2014 「第２章　地理的・歴史的環境」『成合遺跡・金龍寺旧境内跡２』 公益財団法人大阪府文化財センター
三宮昌弘編　2015 『井尻遺跡』 公益財団法人大阪府文化財センター

第３章　調査成果

第１節　基本層序（第５～８図）

第２章の地理的環境でも述べたように、調査区は、北摂山地の山裾から下降する檜尾川によって形成された沖積地に立地する。北摂山地が北に、淀川が南に位置しており、調査区は北から南へ低くなる。第５図をみても、北の１区は現地標高が 8.4 m前後で、中央域の６－２区では 7.9 ～ 8.1 m前後、南の 12 －２区では 7.2 m前後と徐々に低くなるのが読み取れる。また、東西では東から西へ低くなる傾向をもつが、南北ほど比高差は顕著でない。

南北約 240 m、東西約 40 mの調査区範囲での地層堆積状況を把握できるように、東西、南北それぞれ調査区外周に排水の機能も兼ねて側溝を掘削し、壁面で土層を観察する断面調査を行った。

東西断面については調査区が電車の線路や市道によって大きくは３つに分断される。よって、１区、２－２区、５区を連続する南壁（X＝－ 126,135 ～－ 126,140 付近）と、６－１区、７区、６－２区を連続する北壁（X＝－ 126,155 ～－ 126,160 付近）、６－２区の南壁（X＝－ 126,200 ～－ 126,210 付近）、12区の北壁（X＝－ 126,230 ～－ 126,235 付近）といった 20 ～ 50 m離れた４箇所で、調査区の東西幅約 40 mにわたる連続した断面の観察調査を行い、写真撮影と断面図を作成した。

本報告書では、その中で最も低位まで掘削していることから、６－２区南壁の東西断面図を選択して、圧縮表現して掲載した（第６図）。

南北断面は調査区の東端、西端それぞれを通して実測するように努めた（東端は Y＝－ 32,210 ～－ 32,220 付近、西端は Y＝－ 32,250 ～－ 32,260 付近）。南北断面図（第７・８図）は全調査区の東壁（ただし、１－３区のみ西壁）を抽出し、圧縮表現したものである。

盛土や包含層の厚さなどは場所によって違いはあるものの、基本層序はおおむね３層に大別できる。基本層序模式図（第５図）に従って、各層の説明を行う。

・表土層・盛土層…旧作土の上に覆われた表土や宅地造成の際に盛られた近現代の土を指す。砂礫や砕石を含む、灰褐色や黄褐色のシルト層などである。機械にて掘削した。

ほとんどの調査区では厚さ 0.1 ～ 0.3 m程であるが、宅地だった１－２～１－５区などでは 0.8 ～ 1.0 m、工場用地だった 12 －２区の南側では、0.6 ～ 0.8 mと厚かった。そのため、１－３区は現地標高も接する南の６－１区、６－２区と比較してもかなり高く、9.0 m前後ある。

・旧作土層…近現代の耕作土を示す。T.P. ＋ 8.0 ～ 8.2 m前後でみられる。主に灰色礫混じりシルト層である。機械にて掘削した。主に北部域でみられた。この下層に厚さ約 0.05 mの床土がみられる箇所もある。

・第１層…主に近世以降の耕作土層を示す。2.5 Y 6/4 にぶい黄色の粗砂から小礫を多く含むシルトをベース土とする。ベース土中にマンガンを含有するためか、ベース土中に茶褐色の斑点状のものが認められる。厚さ 0.1 ～ 0.2 mであり、機械にて掘削した。

第１層と第２層の間に、0.05 mほどの厚さで、間層として青灰色砂礫混じりシルトの床土がみられる場合もある。また、マンガンの含有量などによって、第１層をさらに細かく分層することも可能である。調査区全域でみられたが特に中央部域の６－２区中央で厚く堆積する。わずかに近世陶磁器な

どを含む。

・**第２層**…第１層を除去すると、2.5 Y 6/2 灰黄褐色粗砂から小礫混じりのシルトや、10 Y 6/1 灰色シルトをベース土とする第２層を検出した。第２層上面で南北方向や東西方向の鋤溝を多数検出したが、これは第１層の下面遺構と考えられる。厚さ 0.1 ～ 0.5 mである。

ほぼ全域で認められるが、調査個所によって第２層の厚さは厚い、薄いの差が認められる。

第２層の堆積が厚いところでは、層中にマンガン斑が顕著にみられる。第２層を、マンガン斑が多いため酸化の状態によって茶褐色がかってみえる上層と、マンガン斑が少ないため青灰色がかってみえる下層の、２層に分層することも可能である。少量であるが、中世後半以降の遺物を包含する。２－１区や 12 －２区など調査区東半で堆積が厚い傾向がある。

・**第３層**…主要遺構面を形成する土壌層である。ほぼ全域で認められる。10 Y R 5/1 褐灰色シルトから 10 Y R 6/2 灰黄褐色の、シルトから極細砂をベースとする。層の厚さは 0.1 ～ 0.3 mである。

この層の上面、あるいは下面から遺構を多数検出した。弥生時代から古代の遺物を包含し、古代以前の遺構面と考えられる。北の１区では T.P. ＋ 7.8 m、南の 12 区では T.P. ＋ 5.8 mと、調査区の端と端では標高差は２mに及ぶ。

長時期にわたる遺物を含むが、量的に多いのは９世紀から 11 世紀の古代の遺物である。

以下の層は、12 －２区の中央より南から落ちる谷に堆積する層である（第８図）。

・黒色シルト層（弥生遺物包含層）…10 Y R 4/1 褐灰色シルトでやや撹拌されている。弥生時代中期の土器の破片が出土した。

・灰色シルト層…12 －２区の南半、X = － 126,170 以南からは急激に落ち込む。その谷部分に灰色シルト層および黒色シルト層が厚く堆積する。10 Y R 5/1 褐灰色シルトもしくは 2.5 Y 5/2 暗灰黄色シルトで層厚は 0.2 ～ 0.6 mに及ぶ。

・黒色シルト層…灰色シルト層と黒色シルト層は帯状に互層になって３層ずつ堆積する。10 Y R 3/2 黒褐色シルトもしくは 2.5 Y 3/1 黒褐色シルトで、層厚は 0. 1 ～ 0.2 mに及ぶ。

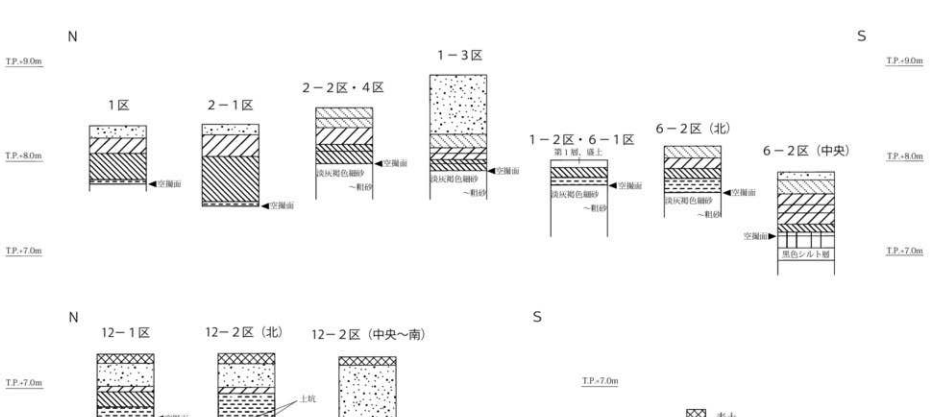
第５～８図を参照すると、山側にあたる最北部の１区では現地標高は 8.4 m前後で、盛土の厚い１－３区を除いては最も高く、地山面の標高も 7.8 m前後である。

北から南にいくにつれ、標高は次第に低くなる（第７・８図）。緩やかな地形の傾斜以外にも、６－２区の中央から約 40 mにわたって（X = － 126,180 以南）段状に落ちる地形がみてとれ、低い部分の地山面標高は 7.2 mである。段落ちした低地部分には、灰色シルトなどの第２層が厚く堆積する。

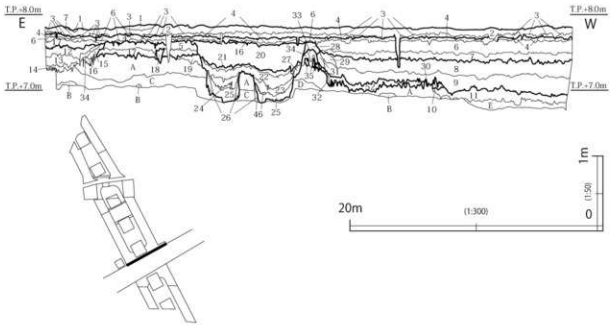
さらに南に進んで、阪急電車以南の 12 区、13 区、14 区でもその傾向は続き、12 －１区北端では地山面の標高は 6.7 mであるが、12 －２区の中央辺りでは 6.0 m前後となる。X = － 126,270 以南になると急激に落ち込む谷地形となり、最低標高は 4.0 mまで下がる。

第３層の下層は、12 区で東西北端に部分的にトレンチを設定した。T.P. ＋ 5.0 m前後まで掘削して、地山より下層の層序の確認を行った。浅瀬状のところで部分的に足跡などを検出したが、ほとんどは自然堆積層であった。

12 区のトレンチ調査の最下層で、最低部の 12 －２区南東部で大きな地層のずれ（断層）や、液状化現象による墳砂などの地震痕跡も確認した（写真図版 43 －３）。


N
S
T.P.+9.0m
T.P.+8.0m
T.P.+7.0m
1区
2－1区
2－2区・4区
1－3区
1－2区・6－1区
第1層、盛土
6－2区（北）
6－2区（中央）
空撮面
淡灰褐色細砂
～粗砂
黒色シルト層
12－1区
12－2区（北）
12－2区（中央～南）
12－2区（最南）
上坑
T.P.+6.0m
T.P.+5.0m
断層
弥生遺物包含層
黒色シルト～粘土
黒色シルト
～粘土
表土
盛土
旧作土
灰色シルト
第1層 :2.5Y6/4 にぶい黄粗砂～小礫を
多く含むシルト
＝近世以降耕作土層
第2層 :2.5Y6/2 灰黄褐粗砂～小礫混シルト
＝中世以降耕作土層
第3層 :10YR5/1 褐灰シルト＝土壌層

第5図　基本層序模式図



1　10YR5/2灰黄褐小礫混じりシルト～細砂～表土層
2　10YS/1灰小礫混じりシルト～極細砂～現代作土層
3　10YR6/6明黄褐粗砂～小礫多く含むシルト～細砂～現代床土
4　2.5Y5/3黄褐粗砂～小礫多く含むシルト～細砂～第1層
5　10YR4/2灰黄褐粗砂～小礫混じりシルト～第3層
6　2.5Y6/2灰黄粗砂～小礫混じりシルト～極細砂～第1層作土層
7　2.5Y6/2灰黄粗砂混じりシルト～極細砂～第1層作土層
8　2.5Y6/1黄灰粗砂混じりシルト～第2層作土層
9　10Y6/1灰粗砂混じりシルト～第2層作土層
10　N5/0灰シルト～土壌化層
11　N4/0灰中砂～粗砂混じりシルト～土壌化層
12　2.5Y7/2灰黄中砂混じりシルト～極細砂
13　5Y6/1灰シルト36　5Y5/1灰シルト(2.5Y7/6明黄褐シルトブロック含む)
14　5Y5/1灰シルト(2.5Y7/6明黄褐シルトブロック含む)
15　10YR4/2灰黄褐粗砂混じりシルト(2.5Y6/6明黄褐シルトブロック含む)
16　10YR4/2灰黄褐粗砂混じりシルトと2.5Y6/6明黄褐シルトがブロック状に混じる
17　10YR5/3にぶい黄褐シルト～極細砂～第3層
18　10YR5/2灰黄褐シルト～極細砂
19　2.5Y6/3にぶい黄粗砂混じりシルト～細砂～弱く土壌化
20　10YR5/3にぶい黄褐粗砂混じりシルト～極細砂　(160･161土坑の1)
21　5Y4/1灰シルト～黒色土壌化　(160･161土坑の2)
22　5Y5/1灰シルト～極細砂　(160･161土坑の3)
23　2.5Y5/1黄灰シルト～極細砂　(160･161土坑の4)
24　2.5Y7/2灰黄シルト
25　N5/0灰粘土～シルト(炭細片少し含む)　(160･161土坑の5)
26　2.5Y6/6明黄褐シルトと5Y4/1灰シルトがブロック状に混じる　(160･161土坑の6)
27　10YR5/1黄灰シルト～極細砂　(161土坑)
28　2.5Y5/2暗灰黄粗砂混じりシルト
～極細砂(2.5Y6/4にぶい黄シルト～極細砂のブロック含む)＝1層系か
29　2.5Y6/1黄灰粗砂混じりシルト～極細砂＝1と同一層
30　N6/1灰粘土～シルト　やや黒色を帯びる
31　2.5Y5/2暗灰黄粗砂混じりシルト～極細砂
32　2.5Y5/1黄灰シルトと2.5Y6/6明黄褐シルトがブロック状に混じる
33　2.5Y5/1黄灰粗砂混じりシルトがブロック状に混じる
34　2.5Y4/2暗灰黄シルト～極細砂と2.5Y7/6明黄褐シルトがブロック状に混じる
35　2.5Y5/3黄褐シルト～極細砂
A　2.5Y7/4浅黄粗砂混じりシルト～極細砂
B　5Y7/2灰白細砂～中砂
C　5Y7/1灰白シルト
D　5Y7/2灰白細砂～中砂
E　7.5Y5/1灰粗砂～小礫

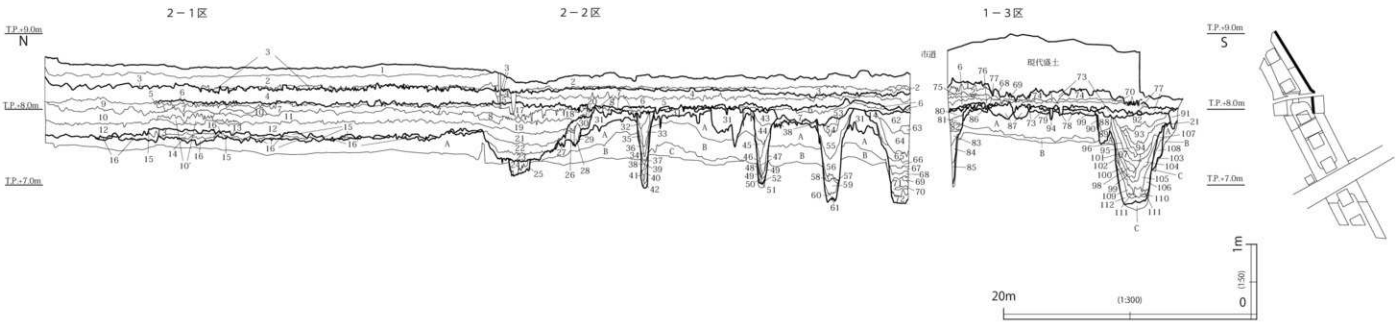
第６図　東西壁断面図

この地震痕跡は、断層の始まる層序から類推すると、中世以降の地震と考えられる。有名なものでは慶長の大地震になる可能性もあるが断定はできなかった。６－２区では第２層や第３層で、地震によると思われる変形が生じた土坑も複数検出した。地震も一度でなく、数回にわたって起こったとも考えられる。

砂礫層に人や牛が踏み込んで生じた足跡が残る滞水堆積層も確認できたが、ほとんどは淡灰褐色細砂から粗砂の砂礫層、さらに下層は灰色シルトや黒色シルトから粘質土に自然木などの有機物が混じる、洪水などの流水による自然堆積層となる。

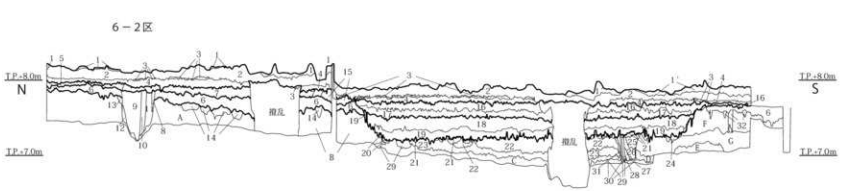
断層で落ち込んだT.P. ＋ 5.7 ～ 5.8 mの黒色シルト層内で弥生土器を含む層を確認したのが、含有遺物層の最低位レベルとなる。

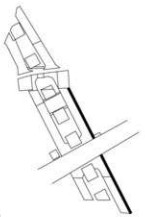
以上のような層序を確認した。このうち、機械掘削を終了した第２層上面では鋤溝を多数検出したが、状況により平面実測を行った場合と行わなかった場合がある。第２層を掘削して第３層上面で遺構の検出を試みた。遺構面としては、第３層下面で空撮を行った。この遺構面で、方形周溝墓、柱穴や溝、土坑、井戸等を多数検出した。



1　10YR5/3にぶい黄褐粗砂～小礫混じりシルト～細砂＝表土層
2　10YR5/1灰小礫混じりシルト～細砂＝現代作土層
3　2.5Y6/4にぶい黄粗砂～小礫混じりシルト～極細砂＝第1層作土層
4　2.5Y6/3にぶい黄粗砂～小礫非常に多く含むシルト～細砂＝第1層作土層
5　2.5Y 6/2灰黄粗砂～小礫多く含むシルト～極細砂＝第1層作土層
5'　2.5Y6/4にぶい黄粗砂～小礫多く含むシルト～細砂＝第1層～作土層
6　10YR6/2灰黄褐粗砂～小礫混じりシルト～極細砂＝第2層作層
7　10YR5/2灰黄褐小礫混じりシルト～極細砂＝第2層作土層
8　7.1C第3層のパラブロック含む
9　2.5Y6/2灰黄小礫多く含むシルト＝第2層作土層
10　10YR6/2灰黄褐粗砂～小礫混じりシルト(細砂～粗砂・小礫のブロック多く含む)
10'　2.5Y5/1黄褐粗砂～小礫多量に含むシルト(マンガン多量に沈着)＝作土層
11　2.5Y5/1黄褐粗砂～小礫混じりシルト(マンガン多く沈着)＝作土層
12　5Y6/1灰粗砂混じりシルト＝作土層
13　10YR7/2にぶい黄粗粗砂～小礫混じりシルト
14　2.5Y7/1灰白小礫混じりシルト
15　2.5Y6/3にぶい黄褐細砂～細砂含むシルト＝堆積層か
16　5YR4/1褐シルト～土壌間か
A　2.5Y6/8明黄褐シルト～極細砂
B　2.5Y6/8明黄褐シルト～細砂
C　10YR6/3にぶい黄橙2.5Y7/1灰白等シルト混じり細砂～粗砂・小礫
17　2.5Y6/6明黄褐中砂～粗砂、小礫とシルトがブロック状に混ざる
18　2.5Y6/1黄灰小礫混じりシルト～盛土層または作土層(～7の土色質が変化)
19　5Y6/1灰粗砂混じりシルト=作土層（＝11の土色質が変化）
20　10YR6/2灰黄褐粗砂～小礫混じりシルト(シルトのパブロック多く含む)＝盛土層
21　10YR6/1褐灰粗砂～小礫混じりシルト(～12の土色質が変化)
22　10YR5/1褐灰粗砂～小礫多く含むシルト
23　10YR5/1褐灰粗砂～小礫混じりシルト～極細砂
24　2.5Y4/1黄灰シルト
25　24に2.5Y6/6明黄褐シルト～極細砂のブロック多く含む
26　10YR4/2灰黄褐粗砂混じりシルト＝盛土層
27　10YR5/3にぶい黄褐粗砂混じりシルト～極細砂～盛土層
28　10YR3/2黒褐粗砂～小礫混じりシルト～盛土層
29　10YR5/2灰黄褐粗砂混じりシルト～極細砂＝盛土
30　10YR7/4にぶい黄橙シルト～極細砂＝盛土層
31　10YR5/2灰黄褐粗砂混じりシルト～極細砂＝第3層
32　10YR4/3にぶい黄褐粗砂～小礫を非常に多く含むシルト～細砂(273周溝)
33　10YR4/4褐粗砂～小礫を非常に多く含むシルト～細(273周溝)
34　10YR4/4褐粗砂～小礫多く含むシルト～極細砂(273周溝)
35　10YR4/2灰黄褐粗砂～小礫混じりシルト～極細砂(273周溝)
36　10YR4/3にぶい黄褐粗砂～小礫混じりシルト(273周溝)
37　10YR6/3にぶい黄橙シルト～極細砂(273周溝)
38　2.5Y6/2灰黄シルト～極細砂(273周溝)
39　2.5Y6/4にぶい黄褐中～粗砂・小礫とシルトがブロック状に混じる(273周溝)
40　2.5Y6/2灰黄粗砂～小礫混じりシルト(273周溝)
41　2.5Y6/1黄灰シルト極細砂がブロック状に混じる(273周溝)
42　2.5Y5/2暗灰黄粗砂～小礫とシルトがブロック状に混じる(273周溝)
43　10YR4/3にぶい黄褐粗砂～小礫混じりシルト～極細砂(240周溝)
44　10YR4/4褐粗砂～小礫多く含むシルト～極細砂(240周溝)
45　10YR4/2灰黄褐粗砂～小礫多く含むシルト～細砂(240周溝)
46　10YR4/2灰黄褐粗砂混じりシルト～極細砂(240周溝)
47　2.5Y5/4黄褐粗砂混じりシルト～極細砂(240周溝)
48　2.5Y6/2灰黄粗砂～小礫多く含むシルト～極細砂(240周溝)
49　2.5Y6/4にぶい黄シルト～極細砂(シルトブロック多く含む)(240周溝)
50　2.5Y6/2灰黄粗砂混じりシルト～極細砂(パブロック多く含む)(240周溝)
51　2.5Y5/1黄灰シルト(極細砂のパブロックも含む)(240周溝)
52　5Y5/1灰細砂～粗砂～礫と5Y7/1灰白シルト～極細砂がブロック状に混じる(240周溝)
53　10YR5/3にぶい黄褐粗砂～小礫混じりシルト～極細砂(260周溝)
54　10YR4/4褐粗砂～小礫多く含むシルト(260周溝)
55　10YR5/2黒褐粗砂～小礫非常に多く含むシルト～極細砂(260周溝)
56　10YR5/4にぶい黄褐粗砂混じりシルト～細砂(260周溝)
57　10YR5/1褐灰シルト～極細砂(260周溝)
58　10YR6/4にぶい黄橙シルト～細砂(260周溝)
59　10YR4/1褐灰シルト(260周溝)
60　2.5Y6/2灰黄シルト　5Y7/2灰白シルト　2.5Y6/2灰黄褐砂～粗砂、小礫　5Y3/1オリーブ黒シルトブロック混じる(260周溝)
61　2.5Y6/2灰黄シルト　(260周溝)
62　10YR4/3にぶい黄褐粗砂～小礫多く含むシルト～細砂(276周溝)
63　10YR4/3にぶい黄褐粗砂～小礫非常に多く含むシルト～細砂(276周溝)
64　10YR5/3黒褐粗砂～小礫非常に多く含むシルト～細砂
65　10YR5/2灰黄褐粗砂～小礫非常に多く含むシルト～細砂
66　10YR5/1褐灰粗砂～小礫多く含むシルト～細砂
67　10YR5/1褐灰粗砂混じりシルト～細砂
68　2.5Y5/1黄灰粗砂混じりシルト(2.5Y6/6明黄褐シルトの小ブロック少し含む)
69　2.5Y6/4にぶい黄シルト～極細砂
70　5B4/1暗青灰シルト(中位に中砂～粗砂のラミナ)
71　5B4/1暗青灰シルト(中位に中砂～粗砂のラミナ)
72　5B7/1明青灰極細砂がシルトブロック含む)
73　5B4/1暗青灰粗砂～小礫混じりシルト～細砂＝旧表土層
74　2.5Y6/2灰黄粗砂～小礫混じりシルト～細砂＝旧作土層
75　10YR5/6黄褐粗砂～小礫混じりシルト～細砂＝床土層
76　10YR6/2灰黄褐粗砂～小礫多く含む　シルト～細砂～第1層～作土層
77　10YR6/3にぶい黄橙粗砂～小礫混じりシルト～細砂～第1層～作土層
78　10YR6/1褐灰粗砂～小礫混じりシルト～細砂～第2層～作土層
79　10YR5/3にぶい黄褐シルト～極細砂(10YR5/2灰黄褐シルトのブロック含む)
80　10YR5/4にぶい黄褐粗砂～小礫多く含むシルト～細砂～周溝最上層～平安中期(434周溝)
81　10YR5/3にぶい黄褐粗砂～小礫非常に多く含むシルト～細砂～周溝上層～平安中期(434周溝)
82　10YR4/3にぶい黄褐粗砂～小礫非常に多く含むシルト～細砂　(434周溝)
83　10YR4/2灰黄褐粗砂～小礫非常に多く含むシルト～細砂(434周溝)
84　10YR6/2灰黄褐粗砂～小礫多く含むシルト　(434周溝)
85　2.5Y5/3黒褐シルト混じり細砂～粗砂(小礫含む)(434周溝)
86　10YR3/2黒褐斑砂混じりシルト～極細砂
87　2.5Y6/3にぶい黄褐粗砂～小礫混じりシルト(2.5Y5/1黄灰シルトの小ブロック含む)＝崩れ
88　10YR5/2灰黄褐粗砂～小礫多く含むシルト～細砂(433周溝)
89　10YR4/1褐灰粗砂～小礫混じりシルト～細砂(2.5Y6/6明黄褐シルト～極細砂のブロック含む)(433周溝)
90　2.5Y6/4にぶい黄～褐粗砂混じりシルト～極細砂(10YR5/2灰黄褐シルト～極細砂のブロック含む)(433周溝)
91　10YR4/2灰黄褐粗砂～小礫混じりシルト～細砂(2.5Y6/4にぶい黄シルトの小ブロック,炭小片、土器片含む)＝平安時代の遺構か
92　10YR4/3にぶい黄褐粗砂～小礫多く含む～細砂(10世紀後葉～11世紀前葉の土器を多く含む)＝周溝最上層(434周溝)
93　10YR4/2灰黄褐粗砂～小礫多く含むシルト～細砂(10世紀後葉～11世紀前葉の土器を多く含む)＝周溝上層(434周溝)
94　10YR5/1褐灰粗砂～小礫混じりシルト＝堆積層か(434周溝)
95　10YR4/3にぶい黄褐粗砂～小礫多く含むシルト～細砂(434周溝)
96　10YR3/2黒褐粗砂～小礫非常に多く含むシルト～細砂(434周溝)
97　10YR3/3暗褐粗砂～小礫多く含むシルト～細砂(434周溝)
98　10YR3/2黒褐粗砂～小礫多く含むシルト～細砂(434周溝)
99　10YR4/1褐灰粗砂～小礫多く含むシルト～細砂(434周溝)
100　10YR5/2灰黄褐粗砂～小礫多く含むシルト～中砂(434周溝)
101　10YR4/4褐粗砂～小礫多く含むシルト～細砂　(434周溝)
102　10YR5/4にぶい黄褐粗砂～小礫多く含むシルト～細砂(434周溝)
103　10YR2/1黒粗砂～小礫混じりシルト～堆積層か　(434周溝)
104　10YR3/1黒褐粗砂～小礫混じりシルト～堆積層　(434周溝)
105　2.5Y6/3にぶい黄褐砂～小礫混じりシルト(2.5Y5/1黄灰シルトの小ブロックを含む)
106　2.5Y5/1黄灰粗砂～小礫混じりシルト～堆積層　(434周溝)
107　2.5Y6/4にぶい黄中砂～粗砂混じりシルト～極細砂～基盤層の崩れ(434周溝)
108　10YR6/2灰黄褐シルト混じり細砂～粗砂(小礫含む)～基盤層の崩れ(434周溝)
109　2.5Y5/1黄灰シルト混じり細砂～中砂(粗砂～小礫、シルトのパブロック含む)(434周溝)
110　2.5Y5/2暗灰黄細砂～粗砂～小礫(ラミナあり)　(434周溝)
111　N4/0灰～2.5Y6/1黄灰シルト～堆積層　(434周溝)
112　2.5Y6/1黄灰シルト混じり細砂～粗砂～小礫シルトのパブロック含む)(434周溝)

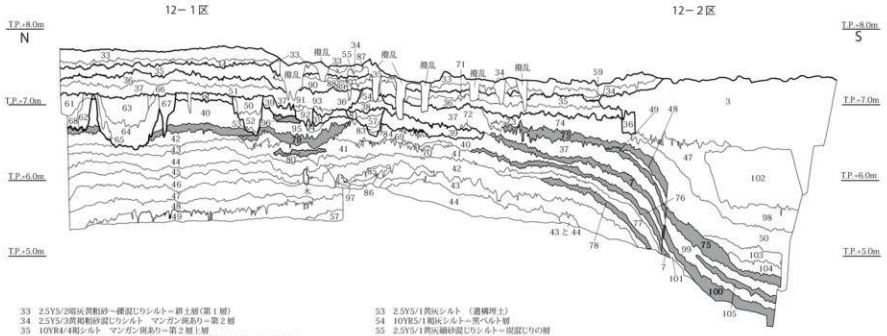
第７図　南北壁断面図(１)



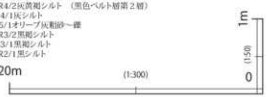


1　10YR5/2灰黄褐小礫混じりシルト～細砂＝表土層
1'　10YR6/1灰小礫混じりシルト～細砂＝旧作土層
2　10Y5/1灰小礫混じりシルト～極細砂＝現代作土層
3　10YR6/6明黄褐細砂～小礫多く含むシルト～細砂＝現代床土
4　2.5Y5/3黄褐粗砂～小礫多く含むシルト～細砂＝第１層
5　10YR4/3にぶい黄褐細砂～小礫多く含むシルト～細砂＝434周溝最上層～上層
6　10YR4/2灰黄褐細砂～小礫混じりシルト＝第３層
7　10YR6/3にぶい黄橙粗砂～小礫混じりシルト～細砂＝第２層作土層
8　2.5Y5/2暗灰黄細砂～小礫多く含むシルト～細砂　（地震変形土坑）
9　10YR3/2黒褐細砂混じりシルト　（地震変形土坑）
10　2.5Y6/4にぶい黄細砂混じりシルト　（地震変形土坑）
11　2.5Y6/2灰黄細砂～小礫非常に多く含むシルト～中砂　（地震変形土坑）
12　2.5Y6/4にぶい黄細砂～小礫混じりシルト～細砂　（地震変形土坑）
13　2.5Y5/3黄褐細砂～小礫混じりシルト
14　2.5Y5/3黄褐シルト
15　2.5Y6/1黄灰粗砂混じりシルト～極細砂＝旺畔盛土
16　2.5Y6/2灰黄細砂～小礫混じりシルト～極細砂＝第１層作土層
17　2.5Y6/2灰黄細砂混じりシルト～極細砂＝第１層作土層
18　2.5Y6/1黄灰粗砂混じりシルト～第２層作土層
19　10Y6/1灰粗砂混じりシルト～第２層作土層
20　10Y5/1灰シルト＝第２層
21　N5/0灰シルト＝土壌化
22　7.5Y6/1灰シルト＝極細砂
23　N4/0灰中砂～粗砂混じりシルト＝土壌化
24　7.5Y5/1灰シルト＝溝
25　2.5Y5/1黄灰シルト～極細砂　（地震変形土坑）
26　N5/0灰シルト　（地震変形土坑）
27　7.5Y6/1灰シルト～極細砂　（地震変形土坑）
28　N4/0灰中砂～粗砂混じりシルト＝土壌化　（地震変形土坑）
29　5Y7/2灰白シルト～細砂＝基盤層と同一　（地震変形土坑）
30　5Y5/1灰中砂～粗砂・小礫＝基盤層と同一　（地震変形土坑）
31　10YR4/1褐灰粗砂混じりシルト　（地震変形土坑）
32　10YR5/2灰黄褐細砂混じりシルトと2.5Y6/4にぶい黄混じりシルトがブロック状に混じる

A　2.5Y6/3にぶい黄細砂～粗砂・小礫（シルト含む）
B　2.5Y6/6明黄褐シルト
C　5Y5/1 灰中砂～粗砂・小礫
D　N5/6 灰シルト（N3/0暗灰シルトのラミナあり）
E　5Y7/2 灰白細砂～中砂
F　2.5Y7/4 浅黄色細砂混じりシルト～極細砂
G　5Y7/1 灰白シルト



33　2.5Y5/2暗灰黄粗砂～礫混じりシルト＝耕土層（第１層）
34　2.5Y5/3黄褐細砂混じりシルト　マンガン斑あり＝第２層
35　10YR4/4褐シルト　マンガン斑あり＝第２層上層
36　2.5Y6/3にぶい黄シルト　マンガン斑あり　青っぽくみえる層～第２層中層
37　5Y4/2灰オリーブシルト　青っぽくみえる層＝第２層下層
38　2.5Y4/2暗灰黄シルト
39　2.5Y4/3オリーブ褐シルト
40　10YR5/1褐灰シルト
41　10YR5/2灰黄褐シルト
42　2.5Y5/2暗灰黄褐砂～シルト
43　5Y5/1灰シルト
44　7.5Y4/1灰シルト
45　7.5Y3/2オリーブ黒シルト　有機物含む　境界には7.5Y5/1灰シルトがうすく堆積する
46　7.5Y3/1オリーブ黒シルト　有機物含む
47　5Y3/2オリーブ黒シルト　（砂混じり）
48　5Y3/2オリーブ黒シルト　（砂混じり）
49　5Y6/2灰オリーブ褐砂　粒径きわめて細かい
50　10YR4/4暗褐砂混じりシルト　（遺構埋土）
51　10YR4/6褐シルト　（遺構埋土）
52　5Y3/1オリーブ黒シルトに2.5Y5/1黄灰シルトの細かいブロック含む　（遺構埋土）
53　2.5Y5/1黄灰シルト　（遺構埋土）
54　10YR5/1褐灰シルト＝黒ベルト層
55　2.5Y5/1黄灰細砂混じりシルト＝撹乱じりの層
56　5Y4/2灰オリーブシルト混じり細砂～中砂
57　2.5Y3/2黒褐シルト
58　5Y4/2灰オリーブシルト　わずかに細砂含む
59　2.5Y5/2暗灰黄シルト
60　5Y4/1灰細砂混じりシルト＝杭痕
61　10YR4/2灰黄褐シルト　（308土坑?埋土）
62　10YR4/1褐灰シルトに5Y6/1灰シルトの大きなブロックが混じる　（308土坑?埋土）
63　10YR4/2灰黄褐細砂混じりシルト　（312土坑埋土）
64　2.5Y4/2暗灰黄シルトに複拝されたように10cmシルト層が混じる　（312土坑埋土）
65　10YR6/2灰黄褐シルト≥2.5Y5/1黄灰シルトがブロック状に混じる　（312土坑埋土）
66　10YR4/2灰黄褐シルト　（312土坑埋土）
67　2.5Y6/2暗灰黄シルト≥2.5Y4/1黄灰シルトが細かいブロック状に混じりあう　（遺構埋土）
68　10YR4/1褐灰シルト　（308土坑?埋土）
69　5Y6/1灰シルト混じり微砂
70　2.5Y6/2灰黄シルト混じり微砂
71　2.5Y5/3黄褐微砂混じりシルト
72　2.5Y5/1黄灰シルト　やや黒色ベルト層
73　2.5Y6/3にぶい黄シルト
74　10YR5/1褐灰シルト
75　10YR4/1褐灰シルト　やや撹拌されたように見受けられる
（黒色ベルト層第１層）
76　2.5Y4/2暗灰黄シルト　（黒色ベルト層第３層）
77　5Y3/1オリーブ黒シルト　21層と22層の間層に5Y5/1灰シルトが薄く入る
78　2.5Y3/2黒褐シルト　22層と10層の間層に5Y5/1灰シルトが薄く入る
（黒色ベルト層第４層）
79　2.5Y4/4オリーブ褐シルト　（柱）
80　2.5Y5/3黄褐シルト　（柱）
81　5Y5/2灰オリーブシルト　マンガン斑含む　（溝埋土）
82　2.5Y5/2暗灰黄シルト　（溝埋土）
83　5Y5/1灰シルト　（溝埋土）
84　2.5Y7/1灰白シルト　（溝埋土）
85　2.5Y5/3黄褐礫砂
86　10YR3/2黒褐シルト
87　2.5Y5/3黄褐礫混じりシルト＝盛土層の一部
88　2.5Y6/4にぶい黄橙砂混じりシルト
89　2.5Y6/2灰黄シルト
90　5Y5/2灰オリーブシルト
91　10YR5/4にぶい黄褐シルト＝土坑埋土
92　10YR3/2黒褐シルト＝土坑埋土
93　10YR4/4褐シルト
94　10YR5/2灰黄褐シルト＝第２層
95　5Y5/2灰オリーブシルト
96　7.5Y5/2灰オリーブ褐砂～細砂混じりシルト
97　10YR3/1黒褐微砂混じりシルト
98　10YR5/6黄褐細砂～礫
99　10YR5/1褐灰シルト
100　10YR4/2灰黄褐シルト　（黒色ベルト層第２層）
101　7.5Y4/1灰シルト
102　5GY5/1オリーブ灰細砂～礫
103　10YR3/2黒褐シルト
104　2.5Y3/1黒褐シルト
105　10YR2/1黒シルト



第８図　南北壁断面図（２）

第２節　北部域の調査

第２節から第４節にかけては、調査で検出、出土した遺構、遺物について説明する。

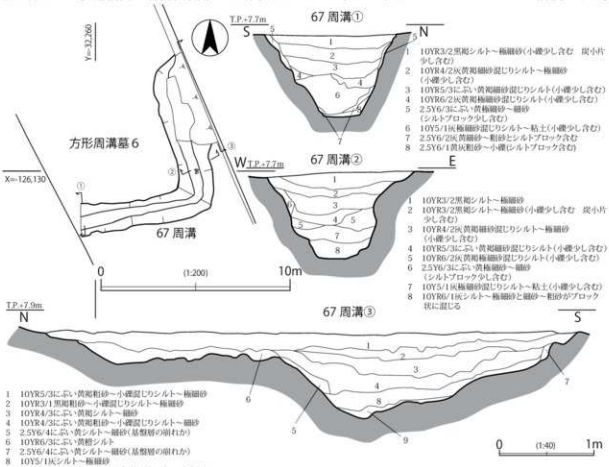
調査区は南北に 240 mと長く、山裾の北から南にかけて低くなる地形にあわせて検出する遺構の性格も異なる。また、調査区の北端はＪＲ東海道線が、１区、２区と１－２～１－５区の間を市道が、６－２区と12－１区の間を阪急京都線がそれぞれ横断する（第３図参照）。この途切れる箇所によって、遺構の性格も異なる。

そこで、調査区を道路や線路で途切れる部分によって３つに分け、それぞれを北部域、中央域、南部域と呼称した。順に節だててそれぞれの調査域の遺構、遺物を詳しくみていきたい。

（１）遺構（第９～ 22 図、写真図版２～ 14）

北部域とはＪＲ東海道線より南から市道までの範囲を指す。道路西側の１区、東側の２－１区、２－２区、橋脚部の３区、４区、用水路にあたる５区が含まれる。おおよそＸ＝－ 126,080 ～－ 126,140、Ｙ＝－ 32,220 ～－ 32,270 の範囲にあたる（第 11 図）。

近世の整地層や耕作土層（第１層）を機械掘削し、１区南半や４区、２－２区の第２層上面で鋤溝を検出した。鋤溝は第１層の下面遺構と考えられ、第２層には中世後半期以降の遺物が含まれるので、それ以降の遺構となる。その後、第２層を人力掘削して検出した基盤層上面を第１面（最終面）として調査を行なった。遺構面は北側、東側がやや高くなるものの、ほぼ平坦で T.P. ＋ 7.7 ～ 7.9 m前後となる。



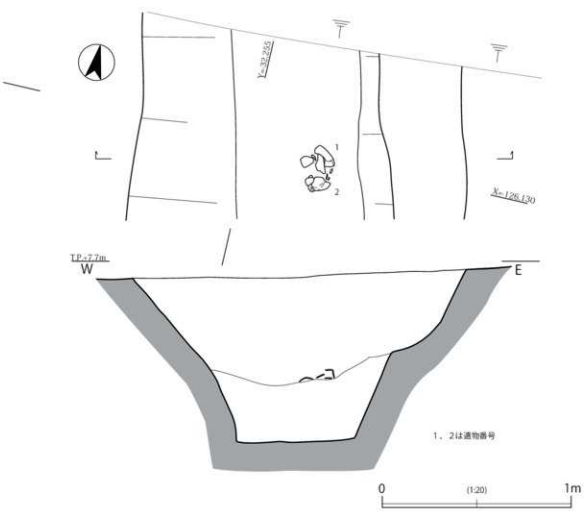
第９図　１区方形周溝墓６（67周溝）　平・断面図

北部域では、弥生時代中期の方形周溝墓６基や、古代から中世と考えられる掘立柱建物１棟、これに伴う時期の溝や土坑、柱穴などを多数検出した（第 11 図）。

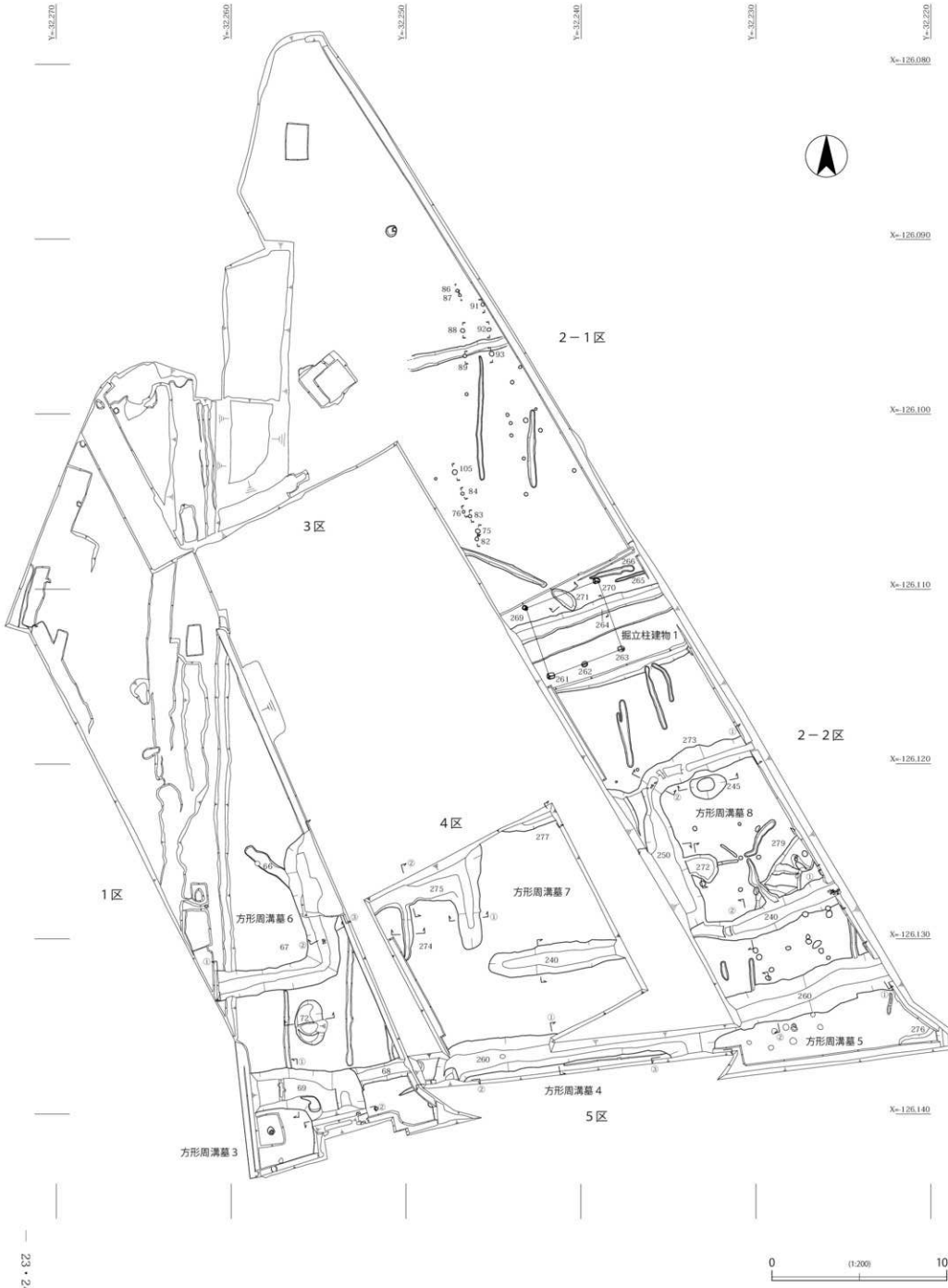
１区の北側 1/2 と３区、２－１区の北側 1/2 は、現代に大きな用水路を造成した際に、著しく撹乱を受けており、地山面まで乱されていた。そのため、部分的に第２層など包含層は認められるものの、遺構を検出できなかった。３区の中央にみられる正方形の撹乱坑が確認調査の調査区であり、ここから弥生時代中期の溝や土坑、弥生時代中期壺の破片が検出され、弥生時代の遺構の存在が示唆されていた。つまり、今回は確認されなかったが、遺存状態が良かった南半で検出された方形周溝墓がここまで及んでいた事も示唆される。

また、各調査区の調査は調査の都合上、一度に行われたのでない。北部域の場合、１区と３区、２－１区を同時に行い、間隔をおいて２－２区と４区、５区の調査を行った。方形周溝墓の周溝も最初は周溝と認識しないで調査を行った場合もある。そのため、周溝の遺構名称の付け方に不統一が生じてしまった。例えば、東辺と南辺で１つの名称になっている周溝（67 周溝、275 周溝）、２つの方形周溝墓の周溝だが１つの名称のもの（240 周溝、260 周溝）、同一の周溝だが調査区が別のため２つの名称をもつもの（69 周溝と 331 周溝）などである。報告書で名称を統一する選択もあったが、あえて調査時のままとした。

１区では弥生時代の遺構と、古代末以降の遺構が切り合い関係をもって検出された。66 溝、68 溝、



第10図　67周溝土器出土状況図



第11図　北部域全体平面図

72 土坑は、出土遺物や遺構の切り合いから古代以降の遺構と考えられる。弥生時代の遺構としては、2基の方形周溝墓の周溝を検出した。

方形周溝墓（第9～19・65図、写真図版2～13）

方形周溝墓6（67周溝）（第9・10図、写真図版2～5）

方形周溝墓6は北辺と西辺の周溝は撹乱によって消失しており、東と南側の周溝（69周溝）を、逆L字形に検出したにすぎない。つまり、方形周溝墓としては全体の約1/2を検出しただけで、北西部は不明である。東辺も北側の一部は撹乱される。墳丘は削平されており、木棺などの埋葬施設も確認できなかった。

67周溝は現存する1辺の長さは、7、8mである。周溝の上面幅は1.5m、下底幅は0.4m、深さは0.9mで、鋭角的に掘られていて断面は逆台形を呈する（第9図、写真図版5－3）。

埋土は上層から下層にわたって水平に堆積する。上層は礫混じりの黒褐色シルト、下層は細砂混じりの黄褐色シルトで細砂ブロックを含む。東辺と南辺はほぼ直角に交わるが、東辺の北側はやや蛇行して膨らみ、南北に広がる。

67周溝の東辺の中層で土器が出土した（第10図、写真図版3－2、4－1・2）。土器は大きな破片がかたまって検出されたが、当初、上向きだったか、横向きだったかなど置かれた状態は分からなかった。復元したところ、古墳時代甕の口縁部（第23図－1、写真図版45－1）と弥生土器壺の底部（第23図－2、写真図版45－6）となった。弥生土器壺は弥生時代中期前半、摂津Ⅱ様式である。他に遺物は出土していない。弥生土器は供献土器と考えられるが、墳丘から滑り落ちて周溝に入ったものか不明である。

方形周溝墓の規模などに不明な点はあるが、4区で検出した275周溝を南辺とする方形周溝墓と67周溝東辺を共有する可能性をもつ。

方形周溝墓3（69周溝、331周溝）（第12図、写真図版2・3・5・15）

1区で周溝の北辺（69周溝）とそこから屈曲してのびる東辺の一部を検出した。東辺はそのまま1区から南進していき、1－2区の331周溝につながると予測される。67周溝と69周溝南辺はほぼ平行に位置し、その距離は約5mである。従って、331周溝が方形周溝墓3の南周溝となり、周溝墓の南北辺の東端と東周溝を部分的に検出したことになる。

方形周溝墓3は南北辺推定長12mの規模である。周溝墓の西側が調査区外までのびていくため、長方形か正方形かの周溝墓の平面形状は不明である。墳丘部は削平され、埋葬施設は確認できなかった。

69周溝の上面幅は2.3～3.0m、下底幅は0.9～1.9m、深さは0.8～1.3m、断面は逆台形を呈する（第12図、写真図版5－1、2）。埋土は水平に堆積する。67周溝同様、上層は礫や炭化物混じりの褐灰色や黒褐色シルト、下層は地山の土をブロック状に含むオリーブ灰色から黒褐色シルトである。

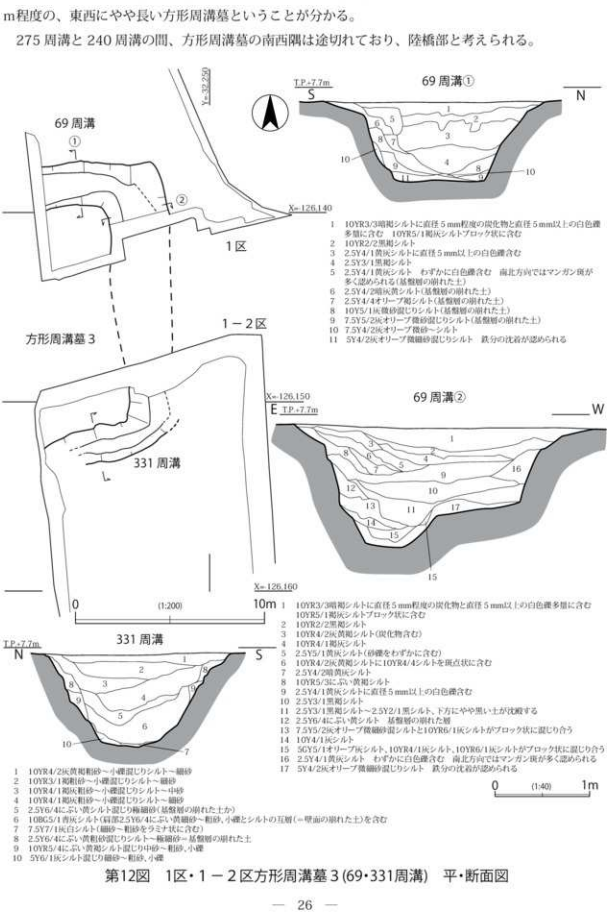
331周溝の上面幅は2.0m、下底幅は0.5m、深さは1.0m、断面はU字形を呈する（第12図）。埋土は水平に堆積する。上層は褐灰色シルトから細砂、下層は地山の土をブロック状に含む黄褐色シルトである。

69周溝、331周溝とも遺物は出土していない。従って、方形周溝墓3の正確な時期は不明だが、他の方形周溝墓と関連して一群をなすとすると、弥生時代中期前半と推測して差支えないだろう。

方形周溝墓7（275周溝、277周溝、240周溝、250周溝）（第13図、写真図版6・7・8・11・13）

4区の北東部で、277周溝を北辺、275周溝を西辺、240周溝を南辺、2－2区の250周溝を東辺とする方形周溝墓7を検出した。4辺を検出したことで、方形周溝墓7は南北長が7.0m、東西長が9.0m程度の、東西にやや長い方形周溝墓ということが分かる。

275周溝と240周溝の間、方形周溝墓の南西隅は途切れており、陸橋部と考えられる。

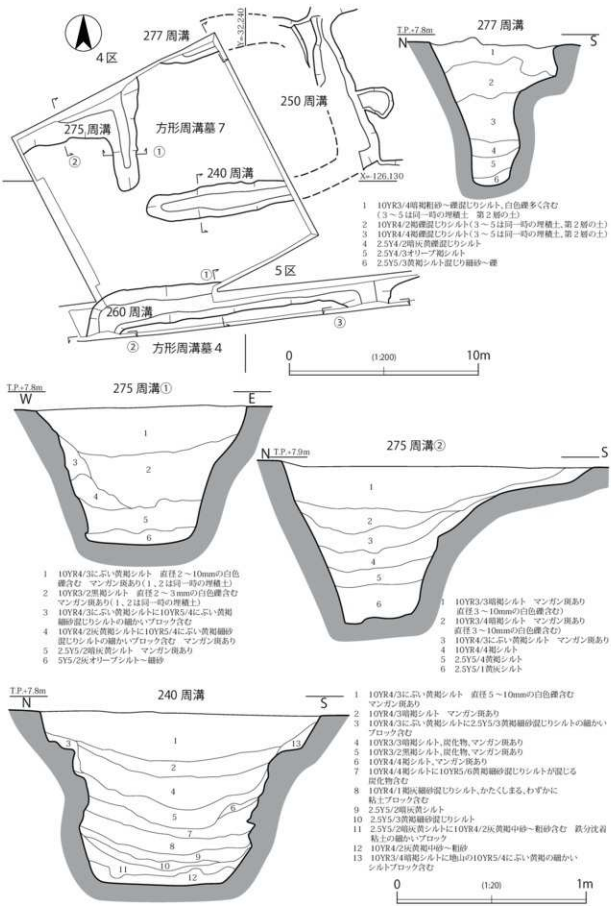


1 10YR4/2灰黄褐粗砂～小礫混じりシルト～細砂
2 10YR3/1黒褐砂～小礫混じりシルト～細砂
3 10YR4/1褐灰粗砂～小礫混じりシルト～中砂
4 10YR4/1褐灰粗砂～小礫混じりシルト～細砂
5 2.5Y6/4にぶい黄シルト混じり極細砂(基盤層の崩れた土か)
6 10BG5/1青灰シルト(斜面2.5Y6/4にぶい黄細砂～粗砂、小礫とシルトの互層(～壁面の崩れた土)を含む
7 7.5Y7/1灰白シルト(細砂～粗砂をラミナ状に含む)
8 2.5Y6/4にぶい黄粗砂混じりシルト～極細砂～基盤層の崩れた土
9 10YR5/4にぶい黄褐シルト混じり中砂～粗砂、小礫
10 5Y6/1灰シルト混じり細砂～粗砂、小礫

1 10YR3/3暗褐シルトに直径5mm程度の炭化物と直径5mm以上の白色礫多量に含む 10YR5/1褐灰シルトブロック状に含む
2 10YR2/2黒褐シルト
3 2.5Y4/1黄灰シルトに直径5mm以上の白色礫含む
4 2.5Y3/1黒褐シルト
5 2.5Y4/1黄灰シルト わずかに白色礫含む 南北方向ではマンガン斑が多く認められる(基盤層の崩れた土)
6 2.5Y4/2暗灰黄シルト(基盤層の崩れた土)
7 2.5Y4/4オリーブ褐シルト(基盤層の崩れた土)
8 10Y5/1灰微砂混じりシルト(基盤層の崩れた土)
9 7.5Y5/2灰オリーブ微砂混じりシルト(基盤層の崩れた土)
10 7.5Y4/2灰オリーブ微砂～シルト
11 5Y4/2灰オリーブ微細砂混じりシルト 鉄分の沈着が認められる

1 10YR3/3暗褐シルトに直径5mm程度の炭化物と直径5mm以上の白色礫多量に含む 10YR5/1褐灰シルトブロック状に含む
2 10YR2/2黒褐シルト
3 10YR4/2灰黄褐シルト(炭化物含む)
4 10YR4/1褐灰シルト
5 2.5Y5/1黄灰シルト(砂礫をわずかに含む)
6 10YR4/2灰黄褐シルトに10YR4/4シルトを斑点状に含む
7 2.5Y4/2暗黄灰シルト
8 10YR5/3にぶい黄褐シルト
9 2.5Y4/1黄灰シルトに直径5mm以上の白色礫含む
10 2.5Y3/1黒褐シルト
11 2.5Y3/1黒褐シルト～2.5Y2/1黒シルト、下方にやや黒い土が沈殿する
12 2.5Y6/4にぶい黄シルト 基盤層の崩れた層
13 7.5Y5/2灰オリーブ微細砂混じりシルトと10YR6/1灰シルトがブロック状に混じり合う
14 10Y4/1灰シルト
15 5GY5/1オリーブ灰シルト、10YR4/1灰シルト、10YR6/1灰シルトがブロック状に混じり合う
16 2.5Y4/1黄灰シルト わずかに白色礫含む 南北方向ではマンガン斑が多く認められる
17 5Y4/2灰オリーブ微細砂混じりシルト 鉄分の沈着が認められる

第12図 1区・1－2区方形周溝墓3(69・331周溝) 平・断面図



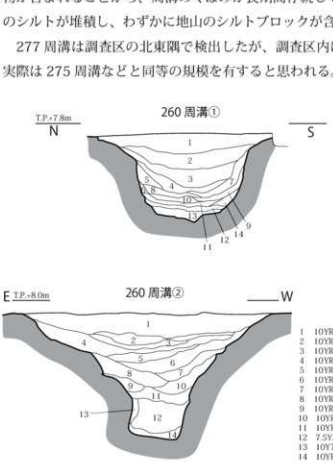
第13図　4区方形周溝墓7（275・277・240周溝）平・断面図、5区方形周溝墓4　平面図

東辺の 250 周溝は東にある方形周溝墓 8 の西辺でもあり、方形周溝墓 7 と方形周溝墓 8 は周溝を共有することとなる。また、275 周溝は逆 L 字状になった東西と南北の溝をあわせて呼称するが、この東西部を南辺とし、67 周溝を西辺とする方形周溝墓が、4 区のさらに北に存在する可能性も高い。

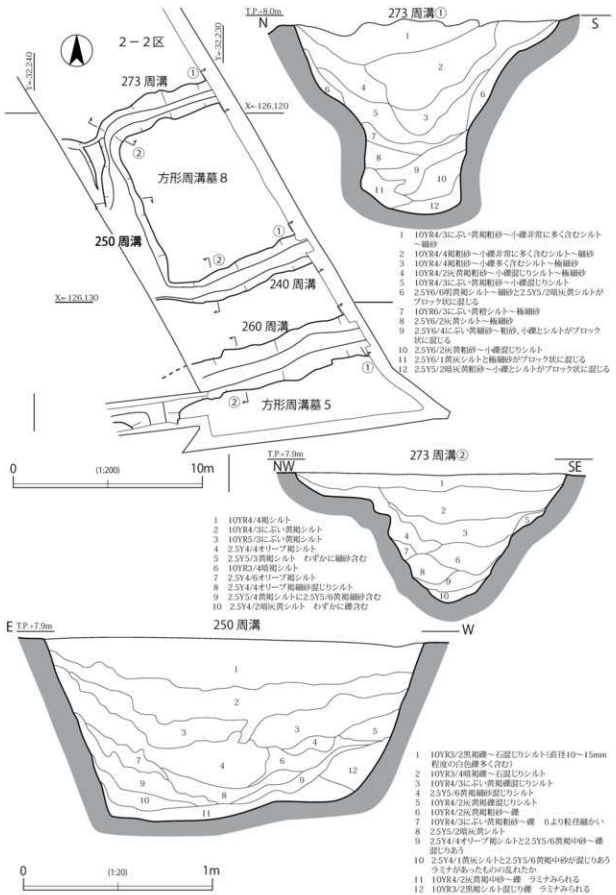
方形周溝墓 7 でも埋葬施設は確認できなかった。

275 周溝は東西長が約 7.0 m、上面幅は 1.15 ～ 1.5 m、下底幅は 0.3 ～ 0.55 m、深さは 0.7 ～ 0.8 m、断面は逆台形を呈する（第 13 図、写真図版 13 － 1 ・ 2）。下底が狭く周溝が鋭角的に掘りこまれるのが特徴である。上層は包含層（第 2 層）の白色礫混じりの黄褐色シルトを埋土とし、古代の遺物が含まれることから、周溝のくぼみが長期間存続していたと推測できる。下層には褐灰色や暗灰色のシルトが堆積し、わずかに地山のシルトブロックが含まれる。

277 周溝は調査区の北東隅で検出したが、調査区内にあるのは幅にして全体の約 1/2 と思われる。実際は 275 周溝などと同等の規模を有すると思われる。推定長が約 7.0 m、現存上面幅は 0.6 m、現



第14図　5区方形周溝墓 4（260周溝）　断面図



第15図　2－2区方形周溝墓 8 (273・250・240周溝)　平・断面図、方形周溝墓 5 (260周溝)　平面図

存下底幅は 0.2 m、深さは 0.75 m、断面は逆台形を呈する（第 13 図、写真図版 13 － 3）。白色礫混じりの黄褐色シルトから暗灰黄色シルトを埋土とする。275 周溝、277 周溝埋土の上層は第 2 層の土が堆積したもので、古代末、10 世紀頃から中世、13 世紀頃の遺物を含む。

240 周溝は 250 周溝と交わる地点から計測すると、長さが約 11.0 m、上面幅は 1.5 m、下底幅は 0.7 m、深さは 0.9 m、断面は逆台形を呈する（第 13 図、写真図版 11 － 3）。上層は第 2 層の暗褐色シルト、暗灰黄色シルトを埋土とする。今までの周溝同様、上層から下層までほぼ水平の堆積がみられるのは、周溝の埋没過程が短期間の人為的な埋め戻しなどでなく、時間をかけて自然に堆積していったと考えるべきだろう。つまり、方形周溝墓の周溝としての機能は失われても、溝として開いたまま古代末や中世まで存続していたと推測できる。

250 周溝については、共有する方形周溝墓 8 のところで記述する。

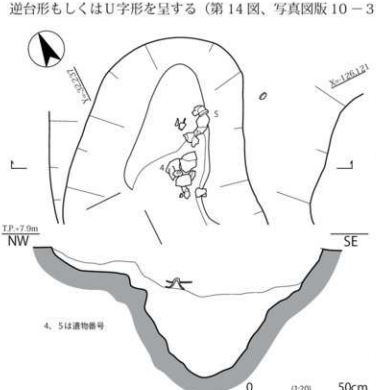
275 周溝から弥生土器広口壺が出土している（第 23 図－ 3、写真図版 45 － 2）。弥生時代中期前半、摂津Ⅱ様式のものであり、方形周溝墓 7 も他の方形周溝墓と同時期の遺構といえる。

方形周溝墓 4（260 周溝）（第 13・14 図、写真図版 10 － 3）

5 区で方形周溝墓 4 の北辺である 260 周溝を検出した。北辺から東辺・西辺にカーブを描いて屈曲する箇所までを検出したので、北辺の長さは約 12.0 m と判明した。

東辺、西辺は市道で遮られて検出し得ないが、南辺は中央域 1 － 4 区で検出した方形周溝墓 2 の 341 周溝北辺とつながる可能性が高い（第 26 図）。すると、南北長 10.0 m、東西長 12.0 m 程度の東西に長軸をもつ方形周溝墓となる。しかし、その内側の 1 － 5 区で検出した溝（1 － 4 区では 260 溝として調査）になる可能性も否定できないため、ここでは北辺の説明のみにとどめる。

260 周溝は上面幅が 1.85 ～ 3.6 m、下底幅は 0.5 ～ 1.1 m、深さは 0.9 ～ 1.3 m をはかる。断面は逆台形もしくは U 字形を呈する（第 14 図、写真図版 10 － 3）。上層は白色礫混じりの黄褐色シルト、中層から下層は灰褐色シルトを埋土とする。



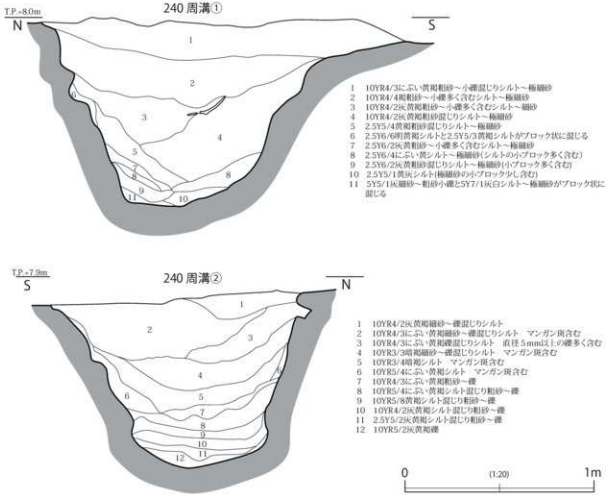
第16図　273周溝土器出土状況図

周溝北辺中央辺りから弥生土器甕（第 23 図－ 13、写真図版 45 － 6）が出土している。弥生時代中期前半、摂津Ⅱ様式のものである。

方形周溝墓 8（273 周溝、250 周溝、240 周溝）（第 15 ～ 18 図、写真図版 7 ～ 9・11・12）

2 － 2 区で方形周溝墓 8 の北辺になる 273 周溝と西辺になる 250 周溝、南辺になる 240 周溝を検出した。

250 周溝の西辺から南・北端でカーブを描いて屈曲する箇所までを検出したので、周溝墓西辺の長さは約 8.0 m と判明した。本遺跡で検出した方形周溝墓の中では、中規模の方形周溝墓といえる。



第17図　２－２区方形周溝墓８(240周溝)　断面図

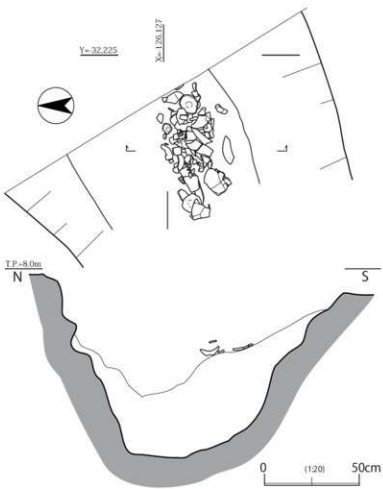
250周溝は隣接する方形周溝墓７と周溝を共有する。形状、規模も方形周溝墓７と相似するとすれば、東西にやや長い方形周溝墓で、調査区のさらに東に１、２ｍのびると思われる。木棺などの埋葬施設は確認できなかった。

273周溝は上面幅が1.4ｍ、下底幅は0.3～0.5ｍ、深さは0.65～1.0ｍをはかる。断面は逆台形もしくはU字形を呈する（第15図、写真図版８－１、12－３）。上層は白色礫混じりの褐色シルト、中層から下層は黄灰色シルトを埋土とする。

西辺の250周溝と交わる273周溝のコーナー付近の上層で土器が出土した（第16図、写真図版12－２）。細かな破片で個体を識別できないほどだったが、弥生土器高杯（第23図－４、写真図版45－４）と弥生土器甕（第23図－５、写真図版45－５）を復元し得た。いずれも弥生時代中期前半、摂津Ⅱ様式のものである。

250周溝は上面幅が2.0ｍ、下底幅は1.25ｍ、深さは0.95ｍをはかる。断面は逆台形を呈する（第15図、写真図版12－１）。上層は白色礫混じりの黒褐色シルト、中層から下層は灰黄褐色から黄灰色シルトを埋土とする。上層は第２層の土である。このように250周溝も上層には古代末以降の包含層、第２層が堆積する。

250周溝の中央（Ｘ＝－126,125付近）で、弥生土器甕（第23図－12・13、写真図版46－１）が出土した。12は上層からの出土で埋没しきらない周溝に入ったと思われる、弥生時代後期の甕である。



第18図　240周溝土器出土状況図

13は弥生時代中期前半、摂津Ⅱ様式の甕である。

240周溝は上面幅が1.4～2.0m、下底幅は0.6～0.7m、深さは0.9～1.0mをはかる。断面は逆台形を呈する（第17図、写真図版11－1・2）。

上層はにぶい褐色シルト、中層から下層は灰黄褐色シルトを埋土とする。

240周溝の調査区東壁付近の中層で土器が出土した（第18図、写真図版11－1）。細かな破片になって出土したが、弥生土器広口壺（第23図－6・7・8、写真図版47－1、46－2）、弥生土器直口壺（第23図－9、写真図版46－1）、弥生土器壺底部（第23図－10・11、写真図版46－2）を復元し得た。直口壺のみ、頸部に櫛描直線文と波状文を巡らし、やや新しい様相をもつ弥生時代中期中頃、摂津Ⅲ様式のものである。それ以外の土器は、弥生時代中期前半、摂津Ⅱ様式のものである。

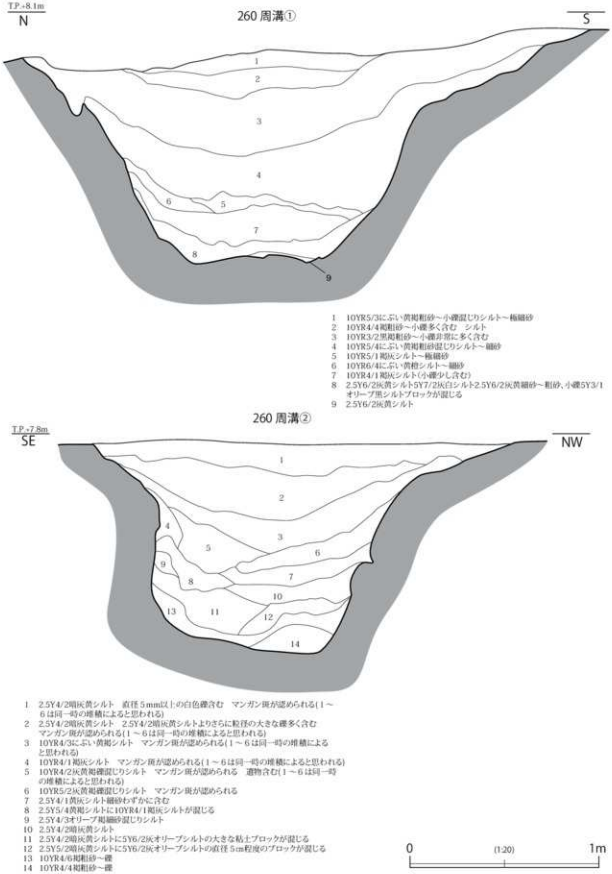
方形周溝墓5（260周溝）（第15・19図、写真図版10－1・2）

方形周溝墓5も方形周溝墓4同様、2－2区で北辺周溝のみを検出した。北辺の長さは10.0m以上である。北辺は方形周溝墓4の260周溝の延長部にあたる。東辺、西辺は市道で遮られて検出し得ないが、南辺は1－3区で検出した方形周溝墓1の433周溝北辺と共有となる可能性もある。

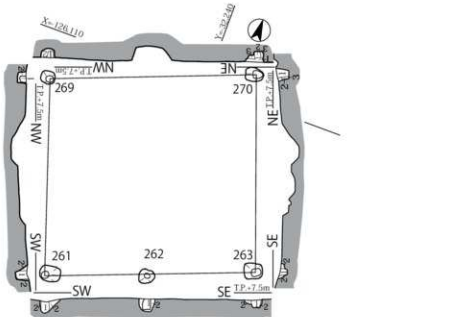
この周溝墓のものと考えられる箇所の260周溝は、上面幅が2.2～3.0m、下底幅は0.8～1.0m、深さは1.0～1.1mをはかる。上段南肩は緩やかにひろがっている箇所から、段落ちのように垂直に下がる。断面は逆台形もしくはU字形を呈する（第19図、写真図版10－1・2）。上層はにぶい黄褐色シルト、中層から下層は暗灰黄色シルトを埋土とする。

以上のような、北部域の方形周溝墓は1辺7、8m程度で、正方形に近い形状のものが多く、北の方形周溝墓6・7・8が東西一列に、それより約3m離れて、その南の方形周溝墓3・4・5が東西一列に並び、2列になっている。方形周溝墓7のさらに北側には、方形周溝墓が並んでいた可能性をもつ。

本遺跡方形周溝墓群の特徴として、隣接する墓の周溝を共有し、周溝は上幅に比べて下底がかなり狭く、断面が逆台形やV字に近いU字形といってもよいくらい、溝の壁面が直線的に落ちて深いことがあげられる。河内地方の方形周溝墓の周溝などと大きく異なり、中世屋敷地の区画溝などに近い。周溝墓のベース土の様相の相違による可能性があるかもしれない。



第19図　2－2区方形周溝墓5(260周溝)　断面図



261
1　7.5YR3/1 黒褐シルト～極細砂（柱痕）10YR5/2 灰黄褐シルトの小ブロック含む
2　2.5Y6/4 にぶい黄シルト～極細砂
262
1　7.5YR3/1 黒褐シルト～極細砂（柱痕）10YR5/2 灰黄褐シルトの小ブロック含む
2　2.5Y6/4 にぶい黄シルト～極細砂
263
1　2.5Y5/3 黄褐シルト～極細砂（柱痕）10YR5/2 灰黄褐シルトの小ブロック含む
2　2.5Y6/4 にぶい黄シルト～極細砂
269
1　10YR4/2 灰黄褐シルト～極細砂
2　2.5Y6/4 にぶい黄シルト～極細砂
270
1　7.5Y4/1 灰シルト
2　5Y3/1 オリーブ黒シルト（7.5Y7/1 灰白極細砂（基盤層）の小ブロック含む）
3　7.5Y7/1 灰白極細砂（5Y3/1 オリーブ黒シルトの小ブロック少し含む）

第20図　２－２区掘立柱建物１　平・断面図

方形周溝墓８の 240 周溝から出土した弥生時代Ⅲ様式の壺１点を除けば、供献土器はすべて弥生時代、摂津Ⅱ様式のものである。このことから、北部域の方形周溝墓はいずれも、さほど時期を隔てして、築造されたと考えられる。

掘立柱建物（第 20 図、写真図版 14）

２－１区と２－２区の境界近く、X＝－ 126,110 付近から北はやや段状の落ちがつき、低地部となる。ここで掘立柱建物１棟を検出した。この掘立柱建物より北の２－１区南辺でも、建物には復元し得なかったが、等間隔に並ぶ柱穴列（91 ～ 93 ピット、86 ～ 89 ピットなど）を複数検出した。建物群が広がっていた可能性をもつ。

掘立柱建物１（第 20 図、写真図版 14）

X＝－ 126,105 ～－ 126,110、Y＝－ 32,238 ～－ 32,243 の範囲で検出した、南北１間、東西２間の掘立柱建物である。後出遺構があるため柱穴を５基しか検出できておらず、２間四方の建物の可能性もある。

264 溝や 271 土坑と切り合いをもつ。北列中央の柱穴は上層の 271 土坑によって切られたためか、検出できなかった。真方位より北で西にふる。東西列の柱間隔（１間）は 2.0 ～ 2.1 mである。柱穴は直径 0.2 ～ 0.3 mの円形もしくは隅丸方形を呈し、中心に直径 0.1 ～ 0.15 mの柱痕をもつ。柱穴断面はU字形をなし、深さは 0.2 ～ 0.3 mをはかる。

遺物は出土していないが、柱穴の形状や規模から、中世の遺構と考えられる。

２－２区では調査区の中央から南にかけても多数の柱穴や土坑、溝を確認している。建物には復元できなかったが、２－１区の南半から２－２区にかけて集落域が広がっていたと予想される。

溝・土坑他（第 21・22 図、写真図版 4・13・14）

１区では方形周溝墓の周溝を切る溝である 66 溝、68 溝や 72 土坑などを検出した。

68 溝（第 21 図）

１区の南東端で検出した。東西方向の溝で、69 周溝の上面の遺構で 69 周溝を切る。５区の西端から始まり、１区の西端まで続いていたとすると、長さは約 10.0 mである（第 11 図）。

上面幅が 1.15 m、下底幅は 0.6 ～ 0.7 m、深さは 0.45 mをはかる。断面は逆台形を呈する。第１層、第２層の土が堆積する。

72 土坑（第 21 図、写真図版４－３）

１区の南側、67 周溝と 69 周溝に挟まれた地点で検出した。長円形の大形土坑である。長径 3.7 m、短径 1.4 m、深さ 1.9 mをはかる。断面は逆台形を呈する。壁際の崩れた土を除けば、埋土は２層に分層でき、粗い砂や礫で一度に埋め戻しが行われたような状況を示す。他の遺構が上層の土が経年とともに、自然堆積した状況を示すのに対し、特徴的である。時期は不明である。

274 溝（第 21 図）

４区の北西部で検出した南北方向の溝である。275 周溝を切る。現存長約 3.0 m、幅 0.6 m、深さ 0.1 mをはかる。断面は皿形を呈する。時期は不明である。

245 土坑（第 21 図、写真図版 13 －５）

２－２区の北側、273 周溝に北を接するように検出した。長円形の大形土坑である。長径 2.0 m強、短径 1.5 m、深さ 0.7 mをはかる。断面はU字形を呈する。

底の崩れた土を除けば、埋土はおよそ２層に分層でき、一度に埋め戻しが行われたような状況を示す。埋土が粗い砂や礫でないが、１区の 72 土坑と規模や堆積過程が似たような状況を示す。時期は不明である。

271 土坑（第 21 図、写真図版 14 －５）

２－２区の北端、264 溝に接するように検出した。北西－南東に長軸をもつ不整形の土坑である。短径 0.75 m、深さ 0.15 mをはかる。断面は皿形を呈する。時期は不明である。

279 溝（第 21 図）

２－２区の中央東端、240 周溝に切られるように検出した。北東から南西にふる、不整形の溝もしくは土坑である。徐々に広がって、調査区半ばで 240 周溝に収束する。幅 1.5 m、深さ 0.45 mをはかる。断面はU字形を呈する。

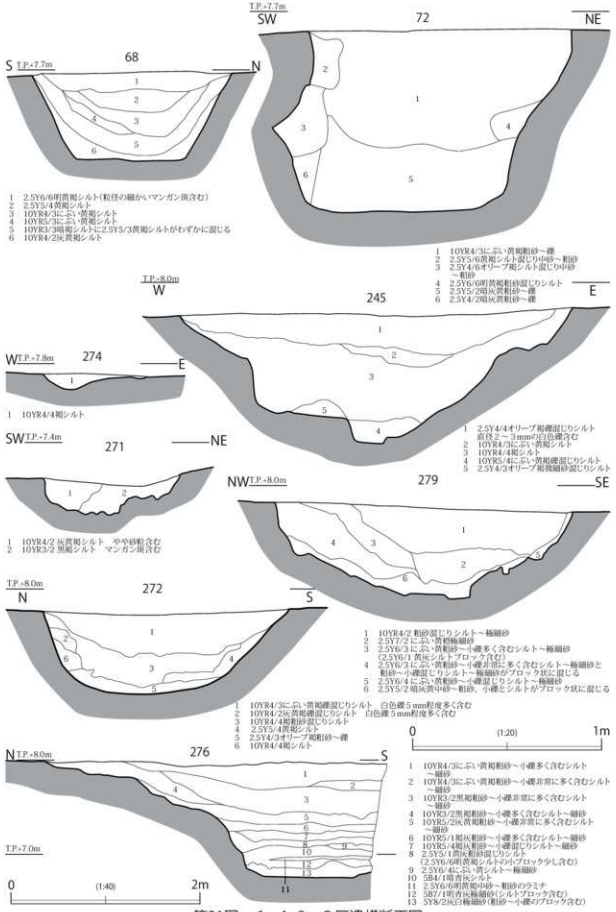
底面が平らでなく、人が踏み込んで歩いたような跡がところどころに残ることから、湿地状で時間経過した状況が推測できる。方形周溝墓と同時期か、それ以前の遺構といえる。

272 土坑（第 21 図、写真図版 13 －６）

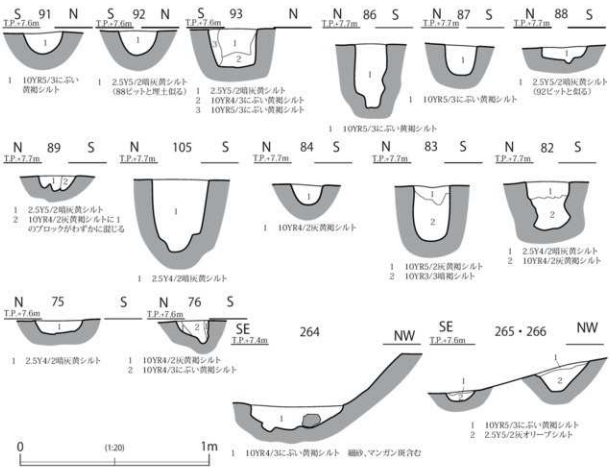
２－２区の中央東で、東側を 250 周溝に切られて検出した。不整円形の大形土坑である。短径 1.3 m、深さ 0.4 mをはかる。断面は椀形を呈する。時期は不明である。

276 溝（第 21 図）

２－２区の南西隅で検出した。不整形の溝もしくは土坑である。東端が最も広い。上面幅 3.6 m、



第21図　1・4・2－2区遺構断面図



第22図　2－1・2－2区遺構断面図

下底幅 1.3 m、深さ 1.2 mをはかる。断面は逆台形を呈する。埋土は水平に堆積する。溝断面の形状や規模からは周溝になる可能性も考えられるが、260 周溝に近すぎることや、ごく一部の検出にとどまるため推測の域をでない。

91・92・93 ピット（第 22 図）

2－1区の中央東端で検出した円形のピットである。ピットとピットの間隔が約 1.5 mの等間隔で並ぶため、掘立柱建物の柱穴の可能性をもつ。各ピットは直径 0.2 ～ 0.25 m、深さ 0.1 ～ 0.2 mをはかる。

断面は 91・92 ピットが円形、93 ピットが逆台形を呈する。92 ピットと 88 ピットは埋土が似ており、柱列や柵列といった関連する遺構とも考えられる。

86・87・88・89 ピット（第 22 図）

2－1区の中央東端で検出した円形のピットである。91・92・93 ピットの約 1.5 m西に、上記例と同じく約 1.5 mの等間隔で並ぶため、91･92･93 ピットと関連する遺構になる可能性をもつ。各ピットは直径 0.15 ～ 0.2 m、深さ 0.1 ～ 0.35 mをはかる。

断面は 86･87 ピットがU字形、88･89 ピットが皿形を呈する。89 ピットは埋土が垂直方向に分かれ、柱の抜き取り跡や柱痕とも考えられる。

105・84・76・83・75・82 ピット（第 22 図）

2－1区の南西端で検出した円形のピットである。105・84・83・82 ピットはやはり約 1.5 mの等間隔で並ぶため、掘立柱建物などになる可能性をもつ。各ピットは直径 0.15 ～ 0.25 m、深さ 0.1

～0.3 mをはかる。断面は82・83ピットがU字形、それ以外が皿形を呈する。

第22図のピットはいずれも遺物が出土していないが、形状や、包含層から中世、13世紀の陶磁器などが出土していること（第24図）から、掘立柱建物1より新しい中世後半の遺構かと考えられる。

264溝（第22図）

2－2区の北端で検出した、地形に沿って東西を指向するが東でやや南にふる溝である。幅1.0 mで北側1/2は段落ちに急激になって落ちる。深さ0.1 mをはかる。断面は皿形を呈する。掘立柱建物1に切られるため、それ以前の遺構といえる。掘立柱建物1と264溝は平行だが、新旧は不明である。

265溝・266溝（第22図）

2－2区の北東端で検出した東西溝である。265溝は幅0.15 mで深さ0.05 mをはかる。断面は皿形を呈する。266溝は幅0.3 mで深さ0.1 mをはかる。断面は逆台形を呈する。両溝は関連する遺構であろう。2－1、2－2区でみられる他の溝は南北方向であるのに対し、東西方向であることから他の溝とは性格や形成時期が異なると考えられる。

（2）遺物（第23・24図、写真図版45～47）

方形周溝墓出土遺物（第23図、写真図版45～47）

1は1区の方形周溝墓6の67周溝中層から出土した（第10図、写真図版4－1・2）。土師器甕口縁部から頸部である（写真図版45－1）。

口径20.5㎝、残存高7.6㎝をはかる。浅黄橙色を呈する。口縁部は外面に一部煤が付着し、口縁端部は折り返し、丸みをもつ。口縁部から頸部は「く」の字状に屈曲する。内外面とも磨滅や剥離が著しく調整は不明である。形状から古墳時代前期、布留式土器の甕と思われる。

2は1区の方形周溝墓6、67周溝中層から出土した（第10図、写真図版4－1・2）。弥生土器壺の体部下半から底部である（写真図版45－6）。口縁部から体部上半は欠損する。底径5.7㎝、残存高10.8㎝をはかる。にぶい黄橙色を呈する。内外面とも磨滅や剥離が著しく、調整は不明である。弥生時代中期前葉、摂津Ⅱ様式の壺と考えられる。

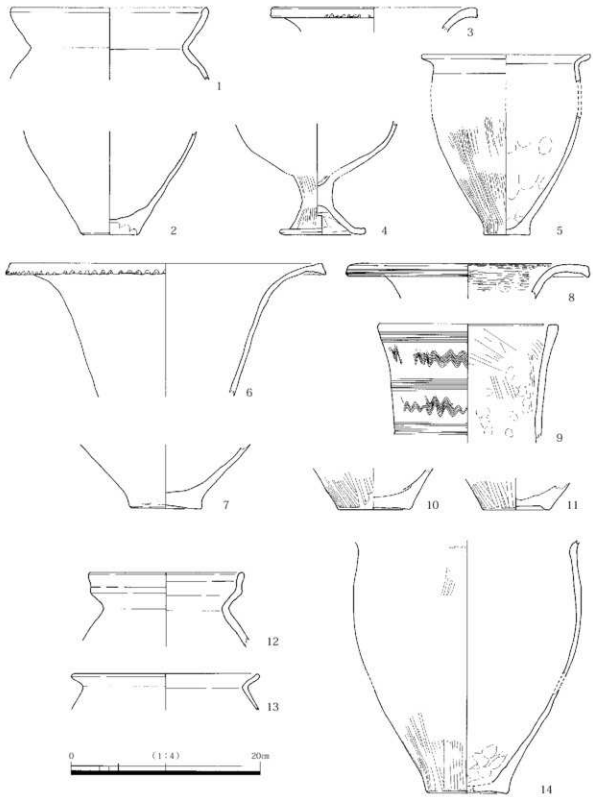
3は4区の方形周溝墓7の275周溝から出土した。弥生土器広口壺の口縁部である（写真図版45－2）。口径21.7㎝、残存高2.5㎝をはかる。灰黄褐色からにぶい黄橙色を呈する。内面にヨコ方向のハケメが認められ、口縁外面端部には1㎝に2個の割合で刻み目をもつ。弥生時代中期前葉、摂津Ⅱ様式の壺と考えられる。

4は2－2区の方形周溝墓8の273周溝土器集中部から出土した（第16図、写真図版12－2）。弥生土器高杯の杯部下半から脚部である（写真図版45－4）。

杯部の最大径17.0㎝、脚部底径9.0㎝、残存高11.6㎝をはかる。にぶい黄橙色を呈する。鉢部は内外面とも磨滅や剥離が著しく調整は不明であるが、脚部は板ナデの後、1㎝につき5条のタテハケメを施す。高槻市安満遺跡で同器形の高杯の出土がみられ、それによると杯部は内面がヨコハケメ、外面上半がヨコハケメ、下半がタテハケメである。弥生時代中期前葉、摂津Ⅱ様式の高杯と考えられる。

5も2－2区の方形周溝墓8の273周溝土器集中部から出土した（第16図、写真図版12－2）。弥生土器甕である（写真図版45－3・5）。

口径17.6㎝、底径4.8㎝、推定高19.0㎝をはかる。にぶい橙色を呈する。口縁部は短く屈曲し、口縁端部にはわずかに刻み目が認められる。外面にタテ方向のミガキを施す。内外面ともに一部煤が付



第23図　北部域方形周溝墓出土遺物実測図

着し、使用痕跡が認められる。弥生時代中期前葉、摂津Ⅱ様式の甕と考えられる。

6と7は2－2区の方形周溝墓8の240周溝から出土した（第18図、写真図版11－1）。弥生土器広口壺である。同一個体とみられるが、口縁部から頸部と、底部に分かれており、体部は器形を復元できるほど出土していない。

6は口縁部から頸部で、口径 32.8cm、残存高 14.0cmをはかる（写真図版 47 － 1）。浅黄橙色を呈する。内外面ともナデ調整と思われる。口縁は下端をわずかに拡張して外面端部には刻み目を施す。

7は底部で、底径 7.3cm、残存高 6.8cmをはかる。浅黄橙色を呈する。内外面ともナデ調整と思われる。内面には粘土紐の接合痕が残る。6、7は弥生時代中期前葉、摂津Ⅱ様式の壺と考えられる。

8は2－2区の方形周溝墓8の240周溝から出土した（第18図、写真図版 11 － 1）。弥生土器広口壺の口縁部である（写真図版 46 － 2）。

口径 25.2cm、残存高 3.6cmをはかる。にぶい黄橙色を呈する。口縁部外面にはナデによる凹凸か、2条の線が入る。外面は磨滅のため調整不明だが、タテ方向のハケメないしミガキの痕跡が残る。内面はヨコハケメが認められる。

9は2－2区の方形周溝墓8の240周溝から出土した（第18図、写真図版 11 － 1）。弥生土器直口壺の頸部である（写真図版 46 － 1）。

口径 18.4cm、残存高 12.4cmをはかる。にぶい橙色を呈する。口縁端部は平らで、外面はナデの後直線文を3段、波状文を2段、交互に巡らす。文様は 1.25cmの原体幅に8条の櫛描線が入る。内面は口縁部近くでタテ方向のハケメが認められるが、体部に近い部位では指オサエの痕跡が残る。

今回検出した方形周溝墓から出土した弥生土器のなかで、9だけが唯一若干新しい、弥生時代中期中葉、摂津Ⅲ様式の壺かと考えられる。

10は2－2区の方形周溝墓8の240周溝から出土した（第18図、写真図版 11 － 1）。弥生土器壺の底部である（写真図版 46 － 2）。

底径 6.8cm、残存高 3.3cmをはかる。にぶい橙色を呈する。外面はタテ方向のミガキである。底部外面がやや窪んだようになっているのは、底部と体部の接合時の整形が粗雑なためである。底部内面は剥離する。

11は2－2区の方形周溝墓8の240周溝から出土した（第18図、写真図版 11 － 1）。弥生土器壺の底部である（写真図版 46 － 2）。

底径 7.1cm、残存高 4.3cmをはかる。浅黄橙色を呈する。外面はタテ方向のミガキである。底面にはケズリとナデを施す。底部内面は剥離する。

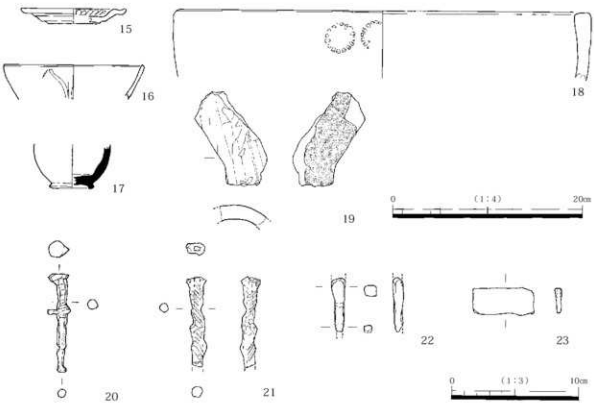
12は2－2区の方形周溝墓8の250周溝から出土した。弥生土器甕の口縁部から頸部である（写真図版 46 － 1）。口径 16.2cm、残存高 7.2cmをはかる。胎土は粗く、にぶい橙色を呈する。口縁部と頸部は鋭く屈曲して段をなし、その後口縁部は直立してやや外に開き気味で受口状を呈する。口縁部はヨコナデだが、それ以外は磨滅のため調整不明である。弥生時代後期と考えられる。

13は2－2区の方形周溝墓8の250周溝から出土した。弥生土器甕の口縁部である（写真図版 46 － 1）。口径 19.2cm、残存高 3.8cmをはかる。にぶい橙色を呈する。内外面とも磨滅が著しく、調整は不明であるが、外面に煤が付着する。

14は4区の方形周溝墓4の260周溝から出土した。弥生土器甕の体部から底部である（写真図版 45 － 6）。口縁部は欠損する。

底径 8.0cm、残存高 26.6cmをはかる。にぶい黄橙色を呈する。内外面とも磨滅や剥離が著しく調整不明だが、外面は底部近くにタテ方向のハケメが認められる。底部には内外面とも指オサエの痕跡が残る。外面の一部に焼成痕が認められる。弥生時代中期前葉、摂津Ⅱ様式の甕と考えられる。

1から14はすべて方形周溝墓の周溝から出土したが、すべてが墓に伴う供献土器と考えられず、



第24図　1～3区包含層出土遺物実測図

1や12は埋まりきっていない周溝の凹状部に入っていた上層の遺物である。中層から下層の遺物では、9はⅢ様式に下るが、それ以外は弥生時代中期前葉、摂津Ⅱ様式におさまり、方形周溝墓3から方形周溝墓8はほぼ同時期に築造されたと思われる。

ただし、検出時に器形を留めたままのものはほぼなく、復元しても途中の部位がないものもある。このことから、これらの土器は墳丘上などの当初据え置かれた位置から滑り落ち、周溝に破損した状態で入った状態で、長期間存在したと考えられる。つまり、周溝がすぐに埋められることなく、長期間開いた状態を保っているうちに多くの破片が紛失したと推察できる。

また、実測可能なものはなくほとんどが砕片だったが、周溝部の上層には9世紀から11世紀、一部13世紀等の遺物が含まれていた。方形周溝墓の規模と比較して出土した供献土器が少ないのも、多くは古代から中世段階に失われたと推測できる。

1～3区包含層出土遺物（第24図）

15は2－1区の第1層から出土した。陶器皿である。

口径10.6cm、底径5.6cm、器高1.6cmをはかる。素地は灰白色だが、内外面とも灰オリーブ色の釉薬で施釉される。高台は削り出し、内面見込みから体部は直線的に立ち上がり、口縁端部は水平を保ちながら、厚く折り返す、折縁ヘギ皿である。内面は4mm幅で連続した菊花状の彫りこみが施される。胎土や釉薬から、国産瀬戸系の陶器と思われる。中世後半期のものか。

16は2－1区の第1層及び第2層から出土した。青磁碗の口縁部から体部である。

口径14.7cm、器高3.6cmをはかる。素地は灰白色だが、内外面ともオリーブ灰色の釉薬で施釉される。口縁端部は丸くつまみあげる。体部外面には鎬蓮弁文が施される龍泉窯系青磁であり、13世紀代か。

17は3区の撹乱から出土した。須恵器壺Mである。底径4.0cm、残存高4.6cmをはかる。回転ロク

ロナデ形成され、底部内面には自然釉が残る。また、底部外面には工具痕が認められる。

18は2－2区の低地部、第2層から出土した。瓦質土器浅鉢である。火舎や火鉢とも称される、暖をとる器具である。口径42.6cm、残存高7.1cmをはかる。口縁端部は平らで、外面には菊花状のスタンプが刻印される。奈良火鉢として室町時代以降、広く流通した製品で、14、15世紀のものである。

19は2－1区の第1層から出土した。丸瓦である。残存長9.9cm、残存幅5.0cm、厚み1.5cmをはかる。凸面は長辺に対して平行な板ナデ、凹面には布目が残る。焼成は良好で、内外面とも灰色を呈する。

20から23は金属製品である。いずれも1区から出土した。

20は鉄釘である。第1層から出土した。残存長7.7cm、幅1.0cm、直径0.8cmをはかる。断面形は円形である。頭は軸部よりやや大きく直径1.0cmで扁平である。軸部の先端もやや扁平になる。錆が付着するが、除去すると木目痕がみられる。また、上から約1/3の部分で直交するように結束されたものか、別の線状の鉄製品が付着する。

21は鉄釘である。第1層から出土した。残存長7.1cm、幅0.7cm、厚み0.7cmをはかる。断面形は長方形である。周囲には錆が厚く付着するが、斜め方向の木目が残る。上下端を欠損する。

22は鉄釘である。第2層から出土した。残存長4.2cm、幅1.0cm、厚み0.9cmをはかる。断面形は長方形である。上下端を欠損する。20から22は近接した位置から出土したが、形状が少しずつ異なり、同じ材に使われていたものかは不明である。

23は鉄の板状製品である。第1層から出土した。残存長4.8cm、残存幅2.2cm、厚み0.3cmをはかる。何かの部材の一部か。

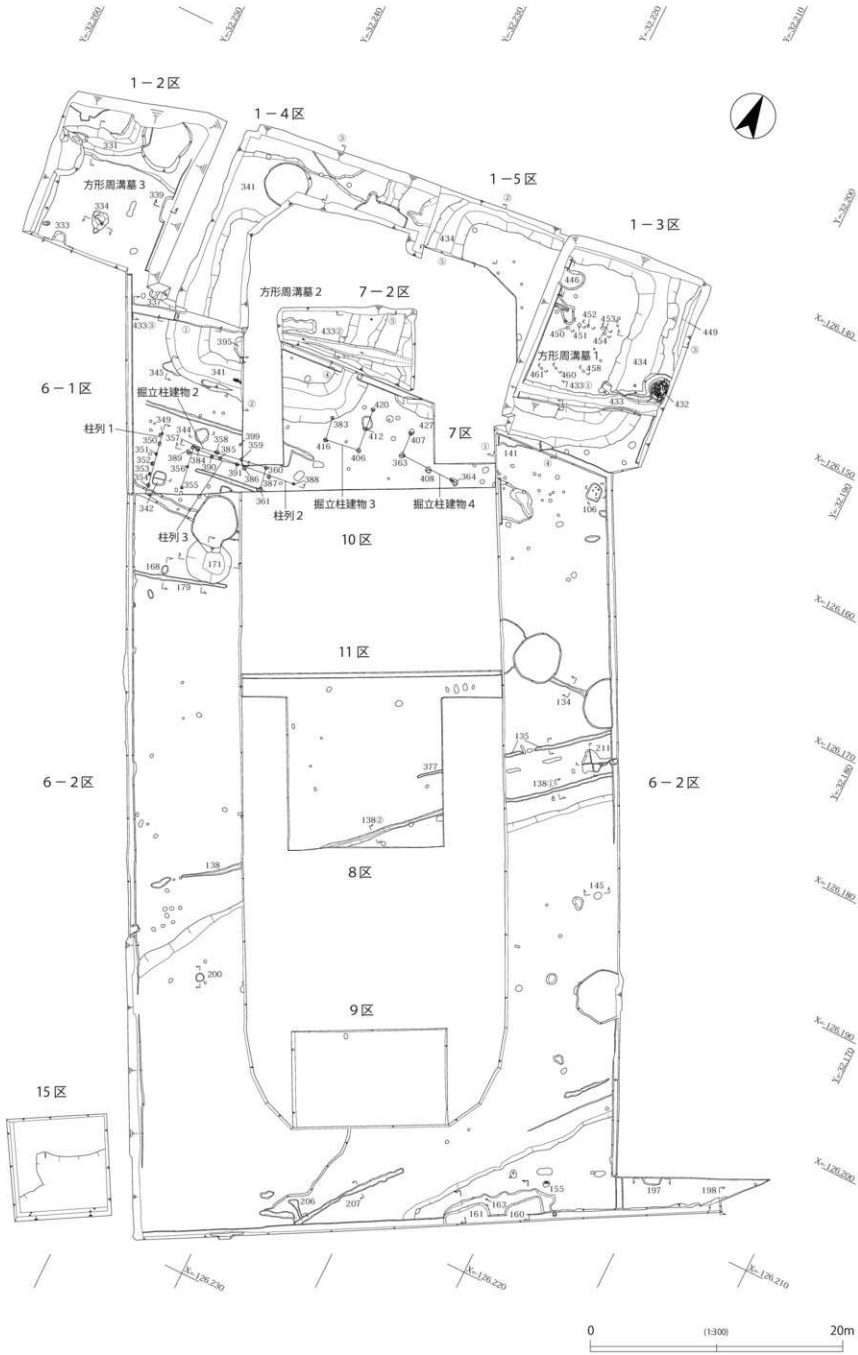
第3節　中央域の調査

（1）遺構（第25～40・65図、写真図版15～31、44）

中央域とは、北部域から市道を挟んだX＝－126,140～－126,145を北限とし、阪急京都線の線路で画されるX＝－126,205辺りまでを南限とする、南北約80mの区間をいう。調査区は1－2区、1－3区、1－4区、1－5区、7－2区、7区、10区、6－1区、6－2区、11区、8区、9区、15区を指す（第25図）。7区から11区が橋脚とそれに伴う用水路部分、15区が関西電力の鉄塔移設に伴って追加調査が生じた区域で、それ以外が道路予定地である。

1－2区から1－5区、7－2区は宅地があった部分にあたるため盛土が厚く、盛土を0.8～1.3m機械掘削した。それより南の調査区では、盛土は比較的薄く0.2m前後だが、表土と耕作土の機械掘削を行った。機械掘削が終了したところでは、鋤溝を検出した。その後は平均して0.5m前後人力掘削を行い、地山を検出した。

1－2区から6－1区、7区、6－2区までは北部域で検出した方形周溝墓群の続きと、それより時期の新しい遺構面として古代の掘立柱建物、井戸、溝、土坑などの集落跡を検出した。それより南では、多様な時期の土坑、溝、ピット、土器棺墓などを検出した。この区域は、138溝より南（X＝－126,170～－126,195辺り）で地山が段状に落ち込み低地となる。比高差は約0.2～0.5mである。そのため、落ち込んだ低地部には第1層、第2層が厚く堆積する。比較的遺構が希薄で、時期も弥生時代、古代、中世が混在するようである。



第25図　中央域全体平面図

方形周溝墓（第 26・27 図、写真図版 17・18、22 ～ 24、44）

中央域北端から南北約 20 mの区域（1－2～1－5区、6－1区、7区、7－2区）では、弥生時代の遺構と、古代末以降の集落関連遺構が切り合い関係をもって検出された。

この区域は、弥生時代、古代以降とも遺構の密集度が高いが、これは中央域の中央から南（6－2区）は、畑などの耕作地として利用されていたため、遺構面が削平、撹乱されてしまったのに対し、北側は宅地として厚く盛り土が覆っていたため、遺存状態が良かったからと考えられる。

弥生時代の遺構としては、2基の方形周溝墓を検出した。それ以外にも、方形周溝墓に隣接した、周溝の可能性をもつ溝などを検出した（449 周溝など）。方形周溝墓以外の遺構は、遺物の出土がみられないこともあり、確実に弥生時代に属すると判断できるものはなかった。北部域の方形周溝墓の続きであろう方形周溝墓については、重複するのでこの節では説明しない。

方形周溝墓 2（341 周溝）（第 26 ～ 28 図、写真図版 17・18・44）

方形周溝墓 2 は 341 周溝南辺を 6 － 1 区と 7 区で、周溝西辺と北辺を 1 － 4 区で、周溝東辺を 7 － 2 区で検出した。調査区外には、341 周溝東辺北半から北周溝へのコーナーや西辺の一部が存在する（第 26 図）。

墳丘部の大部分は調査区外となり、墳丘部も削平されているため、埋葬施設等は確認できなかった。

341 周溝は上層の中世遺構面の溝、433 溝に切られる（第 25 図）。

341 周溝の各辺の長さは、南北辺が 12 m、13 m、東西辺が 14 m、15 mと南北にやや長い主軸をとる、長方形である。周溝の上面幅は 3.1 ～ 3.3 m、下底幅は 1.9 m、深さは 0.9 ～ 1.0 m、断面は椀形か逆台形を呈する（第 26 図、写真図版 18）。北部域の周溝と比較して、周溝の下底幅が広く、深さも深い。北辺は上面幅がやや膨らんで広がり、そこから幅が狭まって落ちる、2段落ちのような形状をとる。

方形周溝墓 2 は、方形周溝墓の範囲や周溝とも大規模なのが特徴である。

周溝の埋土は水平に堆積し、徐々に周溝が埋積していった状況がうかがえる。上層は第 2 層である礫混じりの灰黄褐色シルトで、古代から中世の遺物を少量だが包含する。下層は細砂混じりのにぶい黄色シルトである。

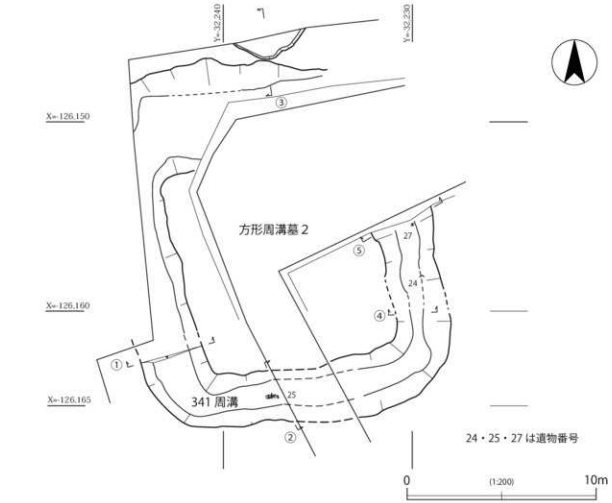
周溝 4 辺はほぼ直角に交わるが、西辺はさらに西にあると推測できる別の南北方向の周溝と接して膨らむ。北辺も別の溝と接する。東辺周溝は、方形周溝墓 1 の 434 周溝西辺とは周溝を共有せず、独立している（第 25 図）。

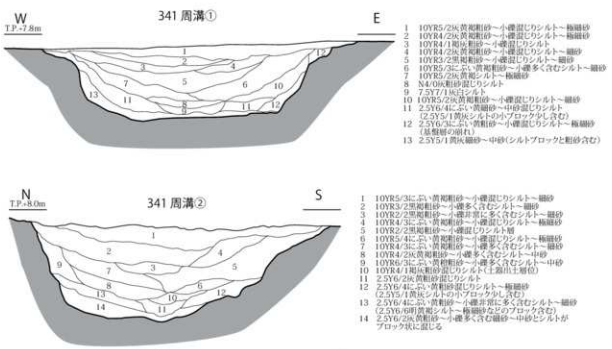
南辺周溝の中層から下層で供献土器がかなり細片になった状態ではあるが、かたまって出土した（第 28 図）。東辺でも数か所に散在してだが、供献土器の出土がみられた（写真図版 44）。西辺の中層では銅製品も出土したが、後述するように、これはおそらく古代以降の遺物が埋まりきっていない周溝部に入ったものと考えられる（第 41 図－ 30）。

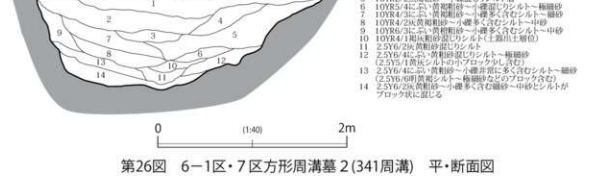
これらのうち弥生土器を接合した結果、復元できた個体としては、広口壺と甕が 2 個体ずつあることが分かった（第 41 図、写真図版 47・48）。南辺、東辺それぞれから壺と甕がセットで出土しており、方形周溝墓築造時に墳丘もしくは周溝にセットで置かれたという推測ができる。いずれも残存状況はよくなかったが、弥生時代中期前半、摂津Ⅱ様式の土器である。

よって、方形周溝墓 2 は北部域の方形周溝墓と同様の時期の方形周溝墓といえるだろう。

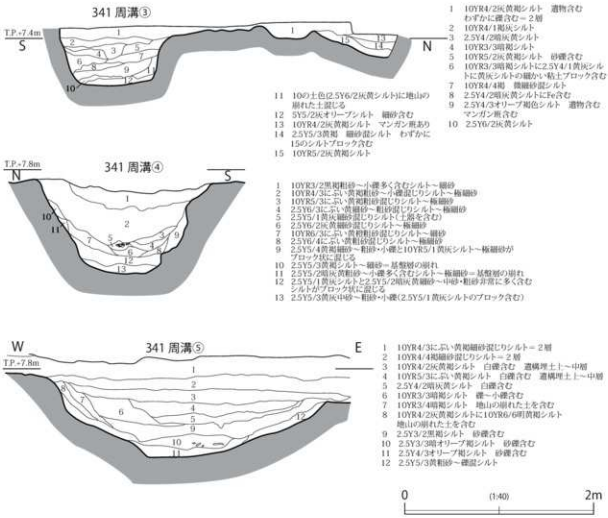
また、墳丘や周溝の規模が大きいことから、東に位置する方形周溝墓 1 とともに、この方形周溝墓群の中心的存在を示す方形周溝墓であったと考えられる。







第26図　6－1区・7区方形周溝墓２(341周溝)　平・断面図



第27図　6－1区・7区方形周溝墓2(341周溝)断面図

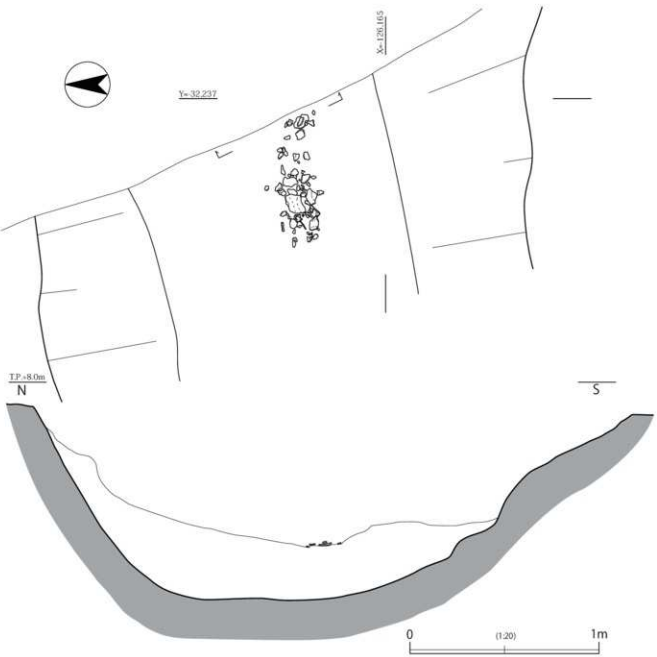
方形周溝墓1（434周溝、141周溝、427周溝）（第29～31図、写真図版22～24）

方形周溝墓1は434周の東辺すべてを1－3区で、北辺の大半を1－3区と1－4区で、南辺の約半分を1－3区で検出した。6－2区と7区では、434周溝南辺の続きと思われる141周溝、427周溝を検出した。西辺は7－2区と1－4区で部分的に検出した。周溝の北西、北東、南東隅を検出し得たことで、方形周溝墓1の規模や形状が判明した。

434周溝は上層の古代から中世の溝である433溝や432井戸に切られる（第25図）。

434周溝の1辺の長さは、南・北辺が14 m、15 m、東・西辺が12 m、13 mと東西にやや長い長方形であるのが、方形周溝墓2がやや南北に長いのと異なる。434周溝の上面幅は2.5～4.5 m、下底幅は1.7～2.0 m、深さは1.0～1.2 m、断面は逆台形もしくは椀形を呈する（第29・30図、写真図版24）。今回検出した方形周溝墓の中で、墳丘層東部、周溝とも最大の規模である。北辺は北東部が調査区外のため、全部を検出できなかったが、上面幅がやや膨らんで広がり、そこから幅が狭まって落ちる、2段落ちのような形状をとる。

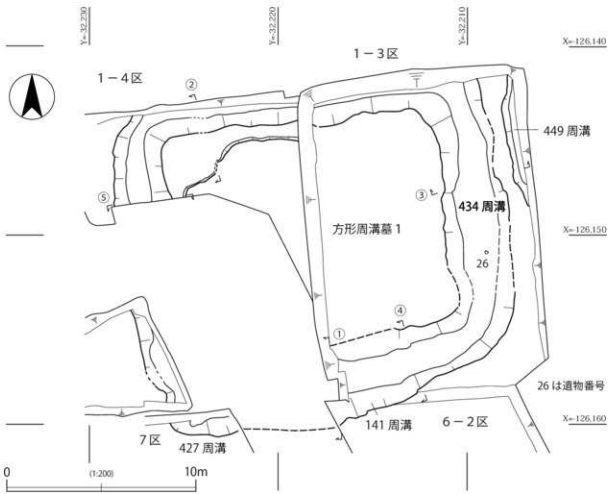
墳丘は削平されており、埋葬施設等は確認できなかった。1－3区と1－4区の境界付近がちょうど方形周溝墓の中心にあたるため、平面精査や土層断面観察により木棺痕跡や土坑などの有無を精査したが、確認できなかった。

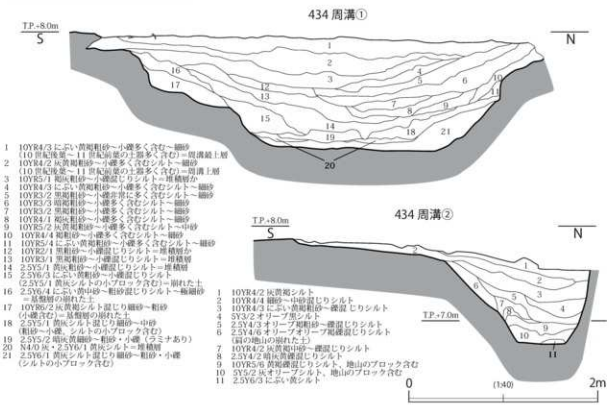


第28図　341周溝土器出土状況図

434 周溝の埋土は水平に堆積する。上層は第２層にあたる白色礫混じりのにぶい黄褐色シルトで堆積が厚い。下層は細砂混じりの黄灰色シルトで、周溝の肩が崩れた際生じた地山の細かいブロックを含む（第 29・30 図、写真図版 24、写真 19）。最下層は薄く灰色シルトが堆積した後、黒褐色、灰褐色の礫や石などの砂礫層となる。

434 周溝や 141 周溝の上層から中層にかけては、古代末から中世の土師器、黒色土器Ｂ類、篠窯産須恵器などの土器や、梶原瓦窯跡で出土するのと同型式の瓦などの遺物を多く包含していた（第 42・43 図）。７区、６－２区、１－３区では広い範囲で、掘立柱建物や井戸、柱穴などの、古代末の集落関係遺構が検出されており、これらの遺物もそれに伴うものと思われるが、周溝の埋土内に広くみられることは、周溝が当該期までは完全に埋没することなく凹み状を呈していたことを示す。下層は弥生土器などを含むが、量的には少ない。

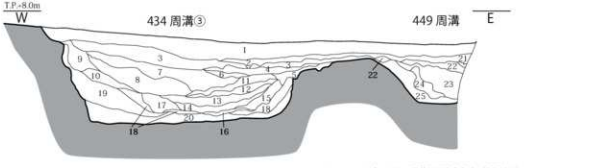




1　10YR4/3 にぶい黄褐粗砂～小礫多く含む～細砂
　(10 世紀後葉～11 世紀前葉の土器多く含む)＝周溝最上層
2　10YR4/2 灰黄褐粗砂～小礫多く含むシルト～細砂
　(10 世紀後葉～11 世紀前葉の土器多く含む)＝周溝上層
3　10YR5/1 褐灰粗砂～小礫混じりシルト＝堆積層か
4　10YR4/3 にぶい黄褐粗砂～小礫多く含むシルト～細砂
5　10YR3/2 黒褐粗砂～小礫非常に多く含むシルト～細砂
6　10YR3/3 褐褐粗砂～小礫多く含むシルト～細砂
7　10YR3/2 黒褐粗砂～小礫多く含むシルト～細砂
8　10YR4/1 褐灰粗砂～小礫多く含むシルト～細砂
9　10YR5/2 灰黄褐粗砂～小礫多く含むシルト～中砂
10　10YR4/4 褐粗砂～小礫多く含むシルト～細砂
11　10YR5/4 にぶい黄褐粗砂～小礫多く含むシルト～細砂
12　10YR2/1 黒粗砂～小礫混じりシルト＝堆積層か
13　10YR3/1 黒褐粗砂～小礫混じりシルト＝堆積層
14　2.5Y5/1 黄灰粗砂～小礫混じりシルト＝堆積層
15　2.5Y6/3 にぶい黄粗砂～小礫混じりシルト
　(2.5Y5/1 黄灰シルトの小ブロック含む)＝崩れた土
16　2.5Y6/4 にぶい黄中砂～粗砂混じりシルト～極細砂
　＝基盤層の崩れた土
17　10YR6/2 灰黄褐シルト混じり細砂～粗砂
　(小礫含む)＝基盤層の崩れた土
18　2.5Y5/1 黄灰シルト混じり細砂～中砂
　(粗砂～小礫、シルトの小ブロック含む)
19　2.5Y5/2 暗灰黄細砂～粗砂・小礫（ラミナあり）
20　N4/0 灰・2.5Y6/1 黄灰シルト＝堆積層
21　2.5Y6/1 黄灰シルト混じり細砂～粗砂・小礫
　(シルトの小ブロック含む)

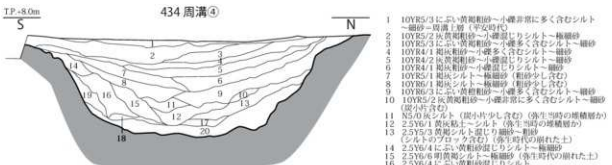
1　10YR4/2 灰黄褐シルト
2　10YR4/4 細砂～中砂混じりシルト
3　10YR4/3 にぶい黄褐粗砂～礫混じりシルト
4　5Y3/2 オリーブ黒シルト
5　2.5Y4/3 オリーブ褐粗砂～礫混じりシルト
6　2.5Y4/6 オリーブオリーブ褐礫混じりシルト
　(扇の地山の崩れた土)
7　10YR4/2 灰黄褐中砂～礫混じりシルト
8　2.5Y4/2 暗灰黄礫混じりシルト
9　10YR5/6 黄褐礫混じりシルト、地山のブロック含む
10　5Y5/2 灰オリーブシルト、地山のブロック含む
11　2.5Y6/3 にぶい黄シルト

第29図　1－3区方形周溝墓1（434周溝）　平・断面図

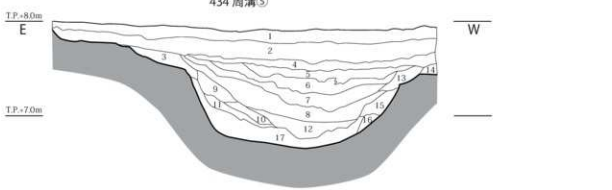


1 10YR4/3 にぶい黄褐粗砂～小礫混じりシルト～細砂
（混小炭少し含む）～上層（平安時代）
2 10YR6/1 褐灰粗砂～小礫混じりシルト（混小炭含む）
3 10YR4/2 灰黄褐粗砂～小礫非常に多く含むシルト～細砂
4 10YR2/1 黒粗砂～小礫多く含むシルト（強くう攪生する）
5 2.5Y4/1 黄灰粗砂混じりシルトと 2.5Y6/2 灰黄褐粗
～小礫混じりシルト～細砂がブロック状に混じる
6 10YR4/2 灰黄褐粗砂～小礫非常に多く含むシルト～細砂
7 10YR4/1 灰褐粗砂～小礫非常に多く含むシルト～細砂
8 10YR5/2 灰黄褐粗砂～小礫非常に多く含むシルト～細砂
9 10YR5/3 にぶい黄褐粗砂～小礫多く含むシルト～細砂
10 10YR6/3 にぶい黄粗粗砂～小礫混じり細砂～中砂
（シルトのブロック含む）
11 N4/0 灰褐砂～小礫多く含むシルト（基盤粒に含まれる粗
～小礫をランダムに多く含む 堆積層ではなく崩れたときは埋め戻し土）
12 2.5Y6/1 黄灰粗砂～小礫混じりシルト（基盤粒に含まれる粗砂
～小礫をランダムに多く含む 堆積層ではなく崩れたときは埋め戻し土）
13 5Y7/1 灰白粗砂混じりシルト（弥生当時の堆積層か）
14 N4/0～5/0 白シルト～堆積層（弥生当時の堆積層か）
15 2.5Y6/4 にぶい黄粗砂～小礫混じりシルト（弥生当時の崩れた土か）
16 2.5Y6/1 黄灰シルト～堆積層（弥生当時(最初の堆積層)
17 2.5Y6/2 灰黄粗砂～小礫非常に多く含むシルト～中砂
（シルト等のブロック多く含む）（弥生当時の崩れた土か）
18 2.5Y6/6 明黄褐粗シルトと 2.5Y6/1 黄灰シルト 2.5Y6/2 灰黄粗砂
～小礫がブロック状に混じる（弥生当時の崩れた土か）
19 2.5Y6/2 灰黄シルト混じり細砂～粗砂・小礫（シルトのブロック含む）
（最初の崩れ）
20 2.5Y6/2 灰黄褐砂～粗砂・小礫（シルトのパブロック含む）（最初の崩れ）

449 周溝
21 10YR1.7/1 黒粗砂～小礫混じりシルト～極細砂
22 10YR4/1 褐砂混じりシルト～極細砂
23 2.5Y6/6 明黄褐シルト～極細砂
24 2.5Y/6/6 明黄褐粗砂混じり細砂～中砂（シルトのブロック含む）
25 2.5Y6/2 灰黄粗砂～小礫混じり細砂～中砂（シルトの小ブロック含む）



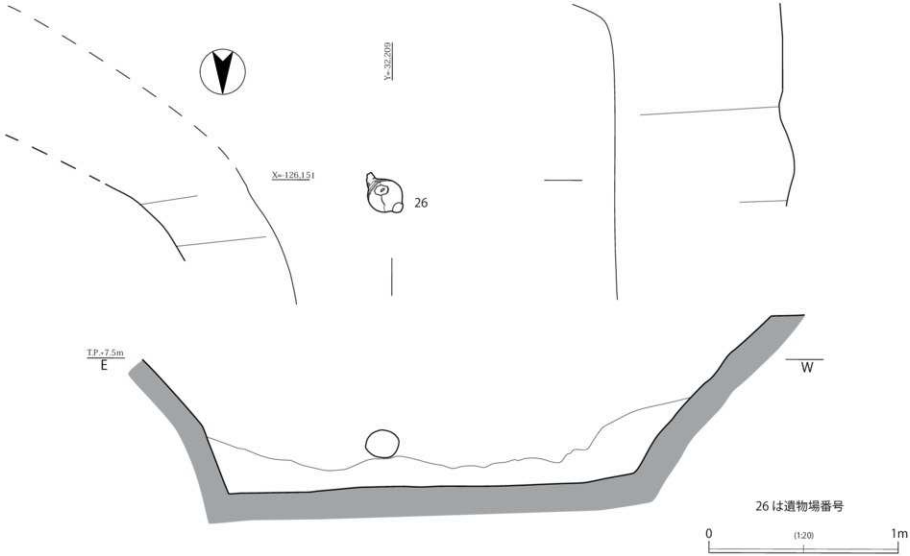
1 10YR5/3 にぶい黄褐粗砂～小礫非常に多く含むシルト
～細砂～周溝上層（平安時代）
2 10YR5/2 灰黄褐粗砂～小礫混じりシルト～極細砂
3 10YR5/3 にぶい黄褐粗砂～小礫多く含むシルト～細砂
4 10YR4/1 褐灰粗砂～小礫多く含むシルト～細砂
5 10YR4/2 灰黄褐粗砂～小礫混じりシルト～細砂
6 10YR4/1 褐灰粗砂～小礫混じりシルト～細砂
7 10YR5/1 褐灰シルト～極細砂（粗砂少し含む）
8 10YR6/1 褐灰シルト～極細砂（粗砂少し含む）
9 10YR6/3 にぶい黄粗粗砂～小礫多く含むシルト～細砂
10 10YR5/2 灰黄褐粗砂～小礫非常に多く含むシルト～細砂
（炭小片含む）
11 N5/0 灰シルト（炭小片少し含む）（弥生当時の堆積層か）
12 2.5Y6/1 黄灰粘土～シルト（弥生当時の堆積層か）
13 2.5Y5/3 黄褐シルト混じり細砂～粗砂
（シルトのブロック含む）（弥生時代の崩れた土）
14 2.5Y6/4 にぶい黄粗砂混じりシルト～極細砂
15 2.5Y6/6 明黄褐シルト～極細砂（弥生時代の崩れた土）
16 2.5Y6/4 にぶい黄粗砂混じりシルト
（細砂のブロック含む）（弥生時代の崩れた土）
17 N4/0 灰シルト 2.5Y6/2 灰黄シルト 5Y5/1 灰黄砂が
ブロック状に混じる（弥生時代の崩れた土）
18 N4/0 灰粗砂混じり粘土～シルト～最初の堆積層
19 2.5Y6/2 灰黄粗砂～小礫混じり細砂～中砂
20 2.5Y6/2 灰黄小礫混じり細砂～粗砂
（シルトのブロック含む）（最初期の崩れ）



1 10YR4/3 にぶい黄褐粗砂～礫混じりシルト～周溝最上層
2 10YR4/2 灰黄褐粗砂～礫混じりシルト 遺物細片含む～周溝上層
3 10YR4/4 褐シルト
4 10YR3/4 暗褐粗砂～礫混じりシルト
5 10YR4/2 灰黄褐粗砂～礫混じりシルト 3の粘土ブロックをわずかに含む
6 10YR3/2 黒褐粗砂～礫混じりシルト
7 10YR4/1 褐灰粗砂～礫混じりシルト
8 2.5Y4/2 暗灰黄粗砂～礫混じりシルト
9 10YR5/4 にぶい黄褐粗砂混じりシルト
10 10YR4/6 褐粗砂混じりシルト
11 2.5Y4/2 暗灰黄粗砂～礫混じりシルト
12 5Y4/1 灰粗砂混じりシルト
13 2.5Y5/4 黄褐粗砂混じりシルト
14 10YR3/3 暗褐シルトに 10YR4/4 褐シルト（地山）のブロックを含む
15 2.5Y5/3 黄褐シルト～極細砂
16 10YR4/1 褐灰粗砂～礫
17 2.5Y5/1 黄灰粗砂～礫に 2.5Y5/4 黄褐シルトのブロックを多く含む

0 (1:40) 2m

第30図　1－3区方形周溝墓1(434周溝)　断面図



第31図　434周溝土器出土状況図

434 周溝東辺のX＝－126,150 よりやや南にあたる位置で、頸部から体部に櫛描直線文をもつ供献土器の壺が出土した（第 31 図、写真図版 24）。壺は周溝最底部近くにおいて横位の状態で、頸部を南東にむけた状態で検出した。口縁部を欠損し、体部の 1 箇所に穿孔をもつ（第 41 図－ 26、写真図版 48 － 3）。完形に近い状態で出土した供献土器は、本遺跡の方形周溝墓全体でこれのみである。弥生時代中期前葉、摂津Ⅱ様式の壺である。その他、周溝東辺からは同時期の甕も出土している（第 41 図－ 29、写真図版 48 － 1）。

方形周溝墓 1 は本遺跡方形周溝墓群の中では、全体の約 3/4 と最も広い範囲を検出できた方形周溝墓である。周溝規模も最大で、墳丘規模も明確である。北部域の方形周溝墓のように周溝を共有することなく、独立した形態をとることも、この方形周溝墓の独自性、優位性を語っている。方形周溝墓 2 とともに、方形周溝墓群で中心的役割を果たした方形周溝墓と考えて差し支えないだろう。

ただ、方形周溝墓 1 と方形周溝墓 2 とで、長軸方向が東西と南北に分れるのが何らかの意味をもつかは不明である。周溝に切り合いや共有等もないのは、相互を意識したうえで方形周溝墓が築造されたからといえる。

また、1 － 3 区の東端で検出した 449 周溝が別の方形周溝墓の西辺周溝になるとすると、東西一列に少なくとも 3 基の方形周溝墓が並んでいたといえる。北部域でも方形周溝墓は 3 基から 4 基で東西一列をなしていたのでその蓋然性が高い。

中央域で検出した方形周溝墓は出土遺物などからは、細かな時期差は特定できなかった。しかし、規模などからは北部域の方形周溝墓よりまさり、この方形周溝墓群のなかでまず、中央域の方形周溝墓 1 と 2 が築造され、それに付随するように北部域の方形周溝墓が築造され、群をなすよう拡大していったという、推測が成り立つ。

449 周溝（第 29 図、写真図版 25）

1 － 3 区の北東部で、434 周溝東辺に接するように位置する溝である。1 － 3 区内では南北 6 、 7 mの長さにわたって確認できるが、434 周溝東辺と並行関係を保ちつつ、やや湾曲しながら南北端とも調査区よりさらに東にのびていく。

周溝現存幅は、上面幅が 1.0 m以上、下底幅が 0.5 m以上、深さ 0.6 mをはかる。断面は逆台形を呈する。埋土は 434 周溝東辺と同じである。

断面の形状が 434 周溝に似ることから方形周溝墓の周溝と判断した。ただし、現状では慎重を期して、固有の方形周溝墓番号は付与しない。449 周溝の存在は、方形周溝墓群が今回の調査区よりさらに東に広がることを示唆する。遺物は出土していない。

以上、北部域から中央域の北にかけて、弥生時代中期前半の方形周溝墓が少なくとも 8 基、449 周溝も含めると 9 基あることが判明した。東西一列に 3 基ずつ、南北にも 3 列あることが判明したが、東西方向にさらに広がっていた可能性もある。

各方形周溝墓は、時期的にも大きな差はなく、比較的短期間に形成された墓域といえる。方形周溝墓 1 と方形周溝墓 2 が初めに形成され、それらを中心として、墓域が形成されていったと思われる。当遺跡の西に位置する安満遺跡などでも、同時期に同様の方形周溝墓域が形成されており、北摂地域では一般的なあり方だったといえる（第 5 章第 1 節参照）。

この墓域を形成した人々の生活域（ムラ）や生産域（水田など）は、調査区内では検出されていない。

写真17　方形周溝墓１（西から）

写真18　434周溝西・北辺
（西から）

写真19　434周溝西辺断面
（北から）

北は山になり南は急激な谷地形になることを考えると、調査区より西か東にあると推測する。

掘立柱建物・柱列（第 32 ～ 34 図、写真図版 19 ～ 21）

6－1区と7区、10区では、第2層の堆積が薄く、他の調査区では第2層上面で検出する遺構を最終遺構面（地山面）で検出した。主な遺構としては、古代末以降中世前半までに相当する掘立柱建物3棟、柱列2本を検出した。

1－3区でも、建物には復元し得なかったが、柱穴等を複数検出した。この区では、石組の井戸（432井戸）なども検出した。この区域に2－1、2－2区につながるか、あるいは独立した建物群が広がっていた可能性をもつ。

掘立柱建物2（第32図、写真図版19－1、20－1、21－1・2）

6－1区と7区にまたがって、X＝－126,170 ～－126,175、Y＝－32,232 ～－32,238の間で検出した、南北2間、東西3間の東西を桁行とする掘立柱建物である。柱穴は7基検出した（355 ～ 361柱穴）。北列と西列は検出したが、包含層が削られているため東列は一部のみ、南列は検出できていない。主軸は真方位より北で西にふる。東西列の柱間隔（1間）は1.9 ～ 2.0 mである。

柱穴は直径0.2 ～ 0.4 mの円形もしくは長円形を呈し、中心に直径0.1 ～ 0.2 mの柱痕をもつものもある。断面は皿形か椀形をなし、深さは0.15 ～ 0.2 mをはかる。

遺物は357柱穴から須恵器の短頸壺が出土している（第43図－53、写真図版50－7）。これが後述する、柱列1の352柱穴出土の須恵器と接合した。掘立柱建物2の西辺に、柱列1が約2.5 m間隔で平行して並ぶことからも、柱列1は掘立柱建物2に伴う柵列など、付随する施設として作られた可能性が高い。9世紀後半から10世紀のものであろうか。

掘立柱建物3（第32図、写真図版19－2、20－2、21－3）

7区のX＝－126,161 ～－126,165、Y＝－32,226 ～－32,229の間で検出した、南北2間、東西1間の南北を桁行とする掘立柱建物である。掘立柱建物2の北東に位置する。

柱穴は5基検出した（383、416、406、412、420柱穴）。南列と東列は検出したが、西列は一部のみ、北列は検出できていない。主軸は真方位とほぼ同じである。南北列の柱間隔（1間）は1.8 ～ 1.9 mである。東西列の2つの柱穴の間隔が3.0 m近くあるので、検出できていないが、この間にも柱穴があった可能性がある。

柱穴は直径0.2 ～ 0.4 mの円形を呈し、中心に直径約0.2 mの柱痕をもつものもある。断面はU字形をなし、深さは0.2 ～ 0.3 mをはかる。柱穴から遺物は出土していない。

掘立柱建物2に付随する建物と考える。

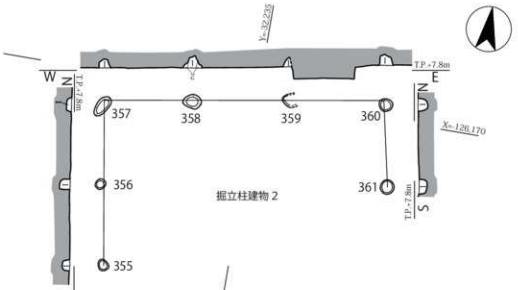
掘立柱建物4（第33図、写真図版19－2、20－3、21－4）

7区、10区のX＝－126,162 ～－126,164、Y＝－32,218 ～－32,223の間で検出した、南北1間、東西2間の東西を桁行とする掘立柱建物である。掘立柱建物3の東に位置する。

柱穴は重複例を含め5基検出した（407 ～ 409、363、364柱穴）。南列と西列は検出したが、東列と北列は検出できていない。主軸は真方位とほぼ同じである。柱間隔（1間）は2.0 ～ 2.3 mである。

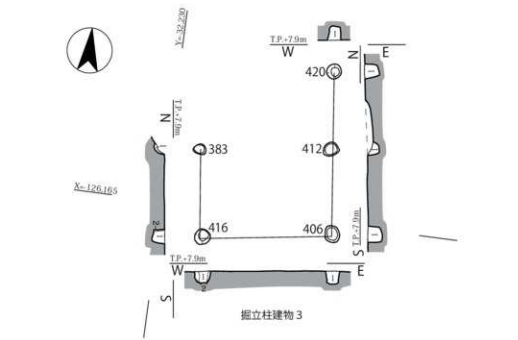
柱穴は直径0.4 ～ 0.5 mの長円形を呈する。断面はU字形や逆台形をなし、深さは0.2 ～ 0.4 mをはかる。364柱穴と409柱穴は切り合いをもつ。

遺物は小片だが、363柱穴から黒色土器A類椀や土師皿が出土しており、10世紀頃の年代が与えら



355
1　10YR4/2 灰黄褐シルト（2.5Y6/4 にぶい黄シルトの小ブロック含む）
356
1　10YR3/2 黒褐シルト（2.5Y6/4 にぶい黄シルトの小ブロック含む）
357
1　10YR4/1 褐灰シルト（2.5Y6/4 にぶい黄シルト～極細砂の小ブロック含む）
358
1　10YR4/1 褐灰シルト（2.5Y6/4 にぶい黄シルト～極細砂の小ブロック含む）
2　2.5Y6/4 にぶい黄シルト～極細砂（10YR5/3 にぶい黄褐シルトのブロックを含む）

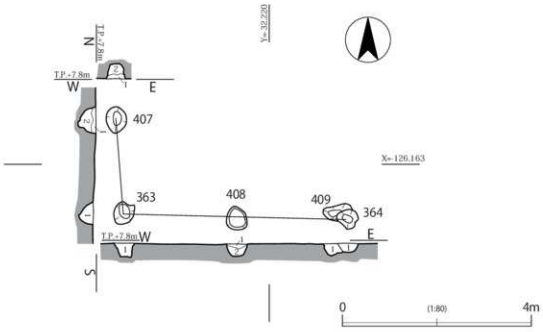
359
1　10YR4/1 褐灰シルト（2.5Y6/4 にぶい黄シルト～極細砂の小ブロック含む）
360
1　10YR4/1 褐灰シルト（2.5Y6/4 にぶい黄シルト～極細砂のブロック含む）
361
1　10YR4/2 灰黄褐シルト（2.5Y6/4 にぶい黄シルトの小ブロック含む）



383
1　10YR4/2 灰黄褐粗砂混じりシルト～極細砂
406
1　10YR4/2 灰黄褐粗砂混じりシルト（2.5Y6/6 明黄褐粗砂～小礫多く含むシルト、中砂のブロック含む）
412
1　10YR3/3 暗褐シルト～極細砂（10YR6/6 明黄褐シルト～極細砂の小ブロック含む）
416
1　10YR4/3 にぶい黄褐粗砂～小礫混じりシルト～極細砂（炭小片少し含む）
2　2.5Y6/6 明黄褐シルト～極細砂と 10YR4/3 にぶい黄褐粗砂～小礫混じりシルト～極細砂がブロック状に混じる
420
1　10YR4/2 灰黄褐粗砂混じりシルト～極細砂（2.5Y6/6 明黄褐シルト～極細砂の小ブロック含む）

0　(1:80)　4m

第32図　６－１区・10区掘立柱建物２、７区掘立柱建物３　平・断面図



363
1　10YR4/3にぶい黄褐粗砂混じりシルト～細砂と2.5Y6/6明黄褐シルト～細砂の小ブロック含む　炭の小片少し含む）
364
1　10YR5/4にぶい黄褐粗砂混じりシルト～極細砂と2.5Y6/6明黄褐シルト～極細砂がブロック状に混じる
407
1　10YR4/3にぶい黄褐粗砂～小礫混じりシルト～極細砂(2.5Y6/6明黄褐粗砂混じりシルト～細砂の小ブロック少し含む)
2　10YR4/3にぶい黄シルト～極細砂(2.5Y6/6明黄褐粗砂混じりシルト～細砂の小ブロック少し含む)
408
1　10YR5/2灰黄褐シルト、2.5Y6/4にぶい黄シルト～極細砂がブロック状に混じる(炭の小片少し含む)
409
1　10YR4/3にぶい黄褐粗砂～小礫混じりシルト～細砂と2.5Y6/6明黄褐シルト～極細砂がブロック状に混じる(炭小片少し含む)

第33図　7区掘立柱建物4　平・断面図

れる。柱穴の規模がやや大きくなり、柱間隔が長くなるなど異なる点はあるが、やはり掘立柱建物2、3に付随する建物と考える。

柱列1（第34図、写真図版20－1、21－7）

6－1区の掘立柱建物2の西辺に平行に並ぶ南北柱列である。列の柱間隔（1間）は約1.0mに6基の柱穴が並ぶ（349～354柱穴）。掘立柱建物2との距離は約2.0mである。

柱穴は直径0.2～0.3mの円形もしくは隅丸方形を呈し、中心に直径0.1～0.15mの柱痕をもつものもある。断面は皿形かU字形をなし、深さは0.1～0.3mをはかる。

遺物は、352柱穴の底から須恵器の短頸壺片が出土し、これが掘立柱建物2の357柱穴遺物と接合した（第43図－53、写真図版50－7）。このことからも、掘立柱建物2と柱列1は相関すると言える。建物を取り囲む柵列などの機能が考えられるだろうか。

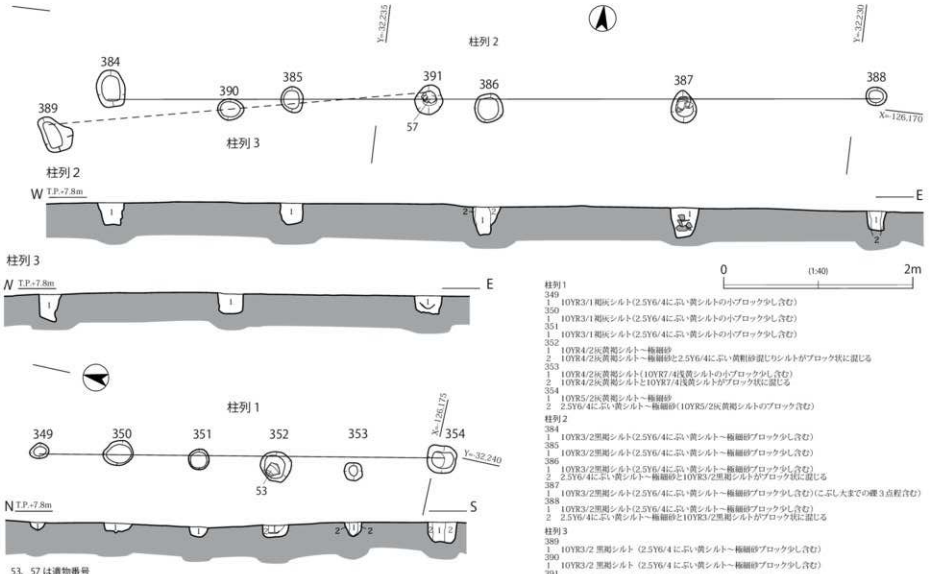
柱列2（第34図、写真図版19－1、21－5・6）

6－1区の掘立柱建物2の北辺より内側で検出した、東西柱列である。列の柱間隔（1間）は約2.0mで5基の柱穴が並ぶ（384～388柱穴）。掘立柱建物2との距離は約1.0mである。

柱穴は直径0.2～0.3mの円形もしくは長円形を呈し、中心に直径0.1～0.15mの柱痕をもつものもある。断面は逆台形をなし、深さは0.2～0.3mをはかる。

複数の柱穴は、底面に石や土器が根石として敷かれていた。387柱穴から、土師器羽釜が出土した（第43図－54、写真図版50－6）。

掘立柱建物2の北列に平行でないことや、建物より内側に入ることから、柱列2は柱列1とは異なり、



第34図　6－1区柱列1・2・3　平・断面図

掘立柱建物２に付随する施設ではないと考えられる。時期差があるとも考えられる。

柱列３（第34図、写真図版19－1、21－8）

6－1区の掘立柱建物2の北辺より内側に並ぶ柱列である。柱列2と交差するが、やや西で南にふる。列の柱間隔（1間）は約2.0 mで3基の柱穴が並ぶ。掘立柱建物2との距離は約0.8～1.0 mである。

柱穴は直径0.2～0.3 mの円形もしくは長円形を呈し、中心に直径0.1～0.15 mの柱痕をもつものもある。断面は逆台形をなし、深さは0.2～0.3 mをはかる。

底面に土器が置かれた391柱穴から黒色土器A類椀がほぼ器形を保って出土した（第43図－57、写真図版50－1）。10世紀後半のものである。柱列3は柱列2同様、掘立柱建物2に付随するのではなく、時期的には掘立柱建物2と前後する施設と考えられる。

以上、6－1区と7区で検出した掘立柱建物や柱列は、小時期差はあるものの、まとまりとして集落域を形成しており、その時期としては10世紀の主に後半が与えられる。2－2区で検出した掘立柱建物1より時期的に古くなるので、別の一群として考えた方がよいだろう。

北半の井戸・溝・土坑（第35・36図、写真図版25）

432井戸（第35図、写真図版25）

1－3区の東端中央で検出した。434周溝を切っており、弥生時代より後出期の遺構である。

井側に石を用いた石積みの井戸だが、上段は石が崩れた状態で検出した（第35図－A、写真図版25－1、2）。

これを掘り進めていくと、中心部が直径0.4 mの環状に、石が積まれた状況が検出できた（第35図－B、写真図版25－3・4）。石はすべて自然石で、10cm程度のものから人頭大のものまで、大きさは様々である。3段から4段は石積みが確認できた。石積みが途切れる個所から1 m下からは掘形が狭まり、掘形の直径は0.5～0.6 mとなる。最底部には曲物の側板が井筒として据えられていた（第35図－C、写真図版25－5）。曲物は遺存状態が脆弱であり、形状をわずかにとどめているにすぎない。

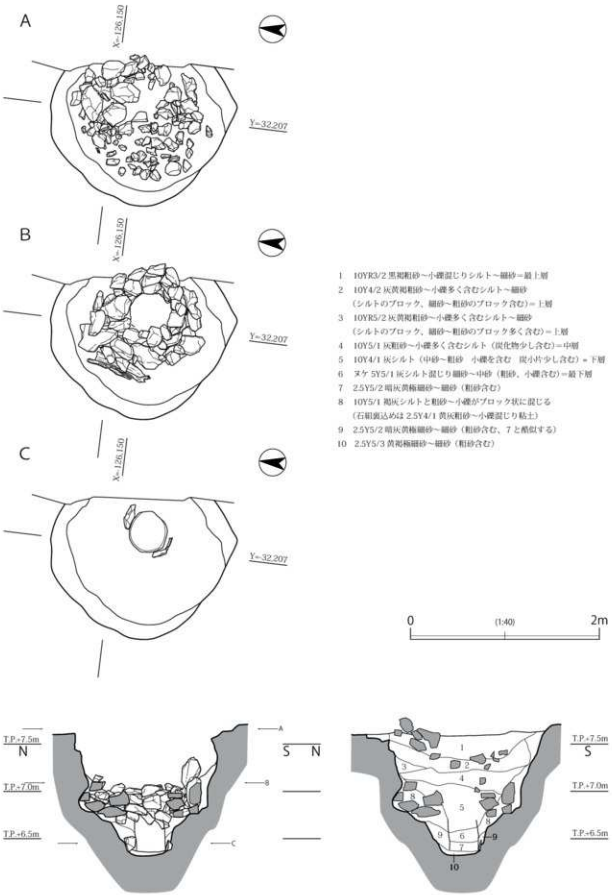
上面の掘形は直径2.0 mの円形で、東側は調査区東壁に相当し未検出である。最底部は直径約0.5 m、深さは1.3 mをはかる。断面は深いU字形を呈する。おそらくもっと上層から掘りこまれた井戸であったが、上層は後世の造成によって削平されたのだろう。

井戸からは、ほぼ完形の土師皿や鞴の羽口、土師器羽釜の破片などが出土している（第42図－31～37、写真図版50－4・8・9、54－5）。なかでも、土師器の羽釜の口縁部から鍔部の破片が多数出土した。そのため、羽釜の胴部を井筒に転用した井戸かとも考えたが、口縁部から鍔部の破片が主で体部が少なく、ある程度の形になるほど接合復元できるものがないことから、土師器羽釜は破片の状態で井戸に廃棄されたと考えられる。

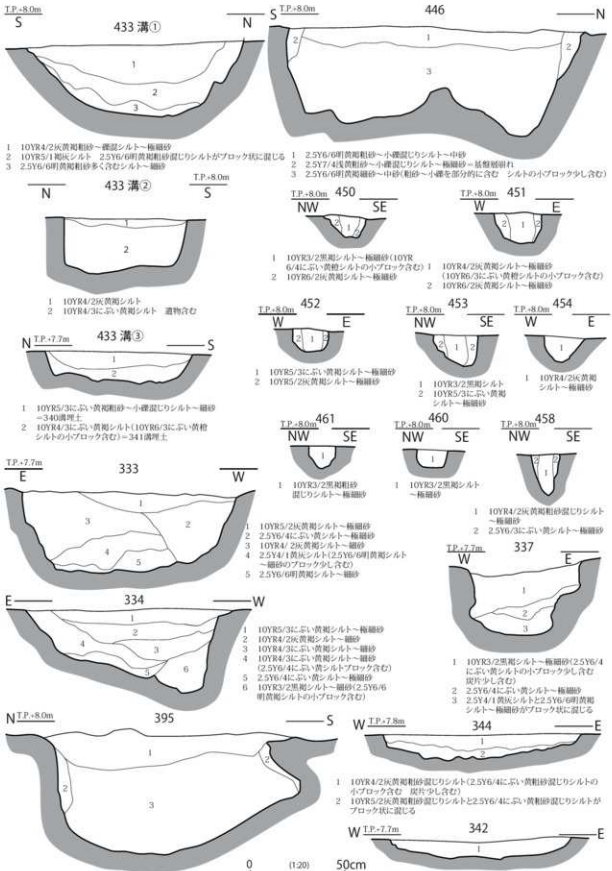
出土遺物の時期から、432井戸は10世紀頃の時期が与えられるか。

432井戸の周辺包含層からは京都産の緑釉陶器耳皿（第42図－39、写真図版49－4）や篠窯産須恵器こね鉢（第42図－47、写真図版49－1）なども出土しており、同様の時期を示す。432井戸は掘立柱建物2～4と同時期で、これらの建物に伴う遺構と考えられる。

石積みの井戸は高槻市内の他の遺跡でも報告されている。安満遺跡では東部地区で集落に伴って複数井戸が検出されており、石積みの井戸は奈良時代としている。宮田遺跡では、12世紀以降の屋敷地内で、底に桶枠や曲物を置いた栗石積みの井戸が報告されている。この地域では古代から中世にわたっ



第35図　1－3区432井戸　平・断面図



第36図　1－2・1－3・6－1区遺構断面図

て、一般的な形態の井戸だったと考えられる。

433 溝（第 36 図、写真図版 25 － 6）

1 － 3 区、7 － 2 区、6 － 1 区を横断して東西に走る溝である。方形周溝墓 1 、 2 を切る後出の遺構である。7 － 2 区では 845 溝、6 － 1 区では 340 溝としていたが、同一の溝であるので、本報告時に呼称を統一した。東西端ともさらに調査区外にのびる。検出長は約 42.0 m、幅は 0.65 ～ 1.15 m、深さ 0.15 ～ 0.45 mをはかる。断面は皿形を呈する。

1 － 3 区で瓦器椀が、7 － 2 区で瓦器皿が出土した（第 42 図－ 43、52、写真図版 50 － 2 、 3）。いずれも 13 世紀代のもので、433 溝は掘立柱建物群や 432 井戸よりさらに新しい、中世の遺構といえる。

446 土坑（第 36 図、写真図版 25 － 7）

1 － 3 区の北西部で検出した大形の土坑である。長円形で、長径 1.5 m、短径 0.7 m、深さ 0.5 mをはかる。断面はW字形を呈する。埋土が上下 2 層に分かれ、粗砂や礫である。この埋土の堆積状況や土坑の形状、規模が 1 区で検出した 72 土坑や、 2 － 2 区で検出した 272 土坑に相似する。

450・451・452・453・454 ピット（第 36 図）

1 － 3 区の中央、方形周溝墓 1 の墳丘部位置で検出した、列状に並ぶピットである。柱痕が認められるものもあり、柱穴になる可能性もあるが、建物や柱列としては復元し得なかった。直径 0.15 ～ 0.25 mの円形のピットで、深さは 0.1 ～ 0.2 mをはかる。断面は椀形か皿形を呈する。いずれも遺物は出土しなかった。

461・460・458 ピット（第 36 図）

1 － 3 区の中央、方形周溝墓 1 の墳丘部位置で検出した、列状に並ぶピットである。450 ～ 454 ピットの列より約 3 m南に位置する。直径 0.15 mの円形のピットで、深さは 0.1 ～ 0.2 mをはかる。断面は椀形かU字形を呈する。いずれも遺物は出土しなかった。458 ピットは柱痕が認められる。

337 土坑（第 36 図）

6 － 1 区の東側で 1 － 2 区との境界部、北壁で検出した土坑である。北半は調査区外にあり、未検出である。方形で、 1 辺が 0.6 m、深さ 0.3 mをはかる。断面はU字形を呈し側面や底面は凹凸がみられる。

333 土坑（第 36 図）

1 － 2 区の南半、調査区南壁際で検出した土坑である。南半は調査区外にあり、未検出である。おそらく長円形で、直径が 1.1 m、深さ 0.4 mをはかる。断面は深い椀形を呈する。

334 土坑（第 36 図）

1 － 2 区の南半で検出した不整形の土坑である。直径が 1.1 m、深さ 0.45 mをはかる。断面は逆台形を呈する。

395 土坑（第 36 図）

6 － 1 区の東側、西壁際で検出した土坑で、東側は未検出である。341 周溝の内側、墳丘部に存在する。円形もしくは長円形と推測される。直径が 1.2 m、深さ 0.6 mをはかる。断面は袋状に広がる形を呈する。埋土が 2 層に分かれ、シルトや細砂の堆積である状況が、 1 区で検出した 72 土坑や、 2 － 2 区で検出した 272 土坑、 1 － 3 区で検出した 446 土坑に類似する。

344 土坑（第 36 図）

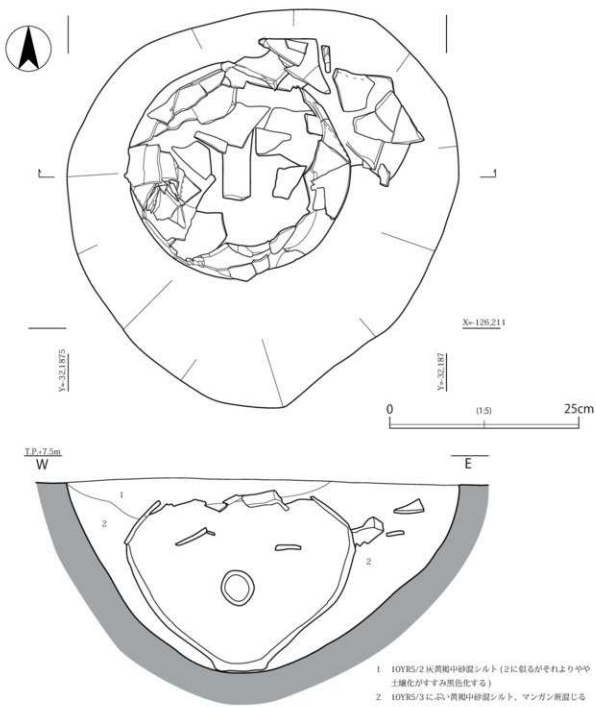
6 － 1 区の掘立柱建物 2 の北西で検出した土坑である。円形で、直径 1.05 m、深さ 0.2 mをはかる。断面は皿形を呈する。

342 土坑（第 36 図）

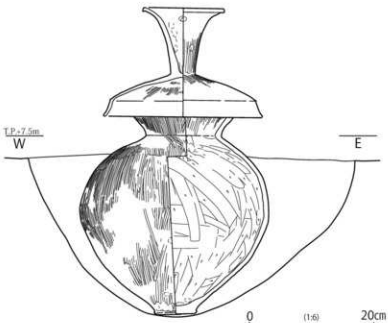
6－1区の掘立柱建物2の西で検出した土坑である。隅丸方形で、長辺 1.1 m、短辺 0.95 m、深さ 0.1 mをはかる。断面は皿形を呈する。

中央～南半の溝・土坑（第 37 ～ 40 図、写真図版 26 ～ 31）

中央から南半とは、6－2区、11 区、8区、9区、15 区を指す。南北約 60 mにわたる範囲だが、X＝－ 126,175 からX＝－ 126,220 の間にわたっては段状に落ち込む低地部となる。低地部では



第37図　6－2区155土坑土器出土状況図



第38図　155土坑土器棺墓推定復元図

200土坑や、207溝等以外はほとんど遺構が認められず、9区や15区では人や偶蹄類の足跡以外の遺構は皆無に等しい（写真図版31－1）。

155土坑（第37・38図、写真図版27－2）

6－2区の南東隅で検出した円形の土坑である。直径0.5m、深さ1.5mをはかる。断面は椀形を呈する。

土坑のほぼ中心から、弥生土器壺が底部を底面につけ、口縁部を北西寄りにやや傾いた状態ではあるが、球形の胴部の状態を保ったままで出土した（第37図、写真図版27－2）。

壺の上面は土圧のためか割れて胴部の内部に落ち込み、また、壺の北東肩にも土器が割れた状態でかたまって出土した。壺の胴部内に脚部や鉢状に広がる破片があるため、壺以外の個体があることは明白であった。

土坑内では、壺の周囲の埋土も頸部付近で2層に分層でき、壺を意図的に埋納した埋土と、土圧等によって割れ、たわみが生じた後に埋積した埋土とに分けることができる。壺が口縁を上に向けて据え置かれた状態であることや、埋土の状況からも意図的にこの土器を埋納するために掘られた土坑と断定できる。

出土遺物を復元したところ、ほぼ完形の弥生土器壺と高杯となった（第45図－70・71、写真図版51－7、8）。いずれも弥生時代後期、Ⅴ様式のものである。

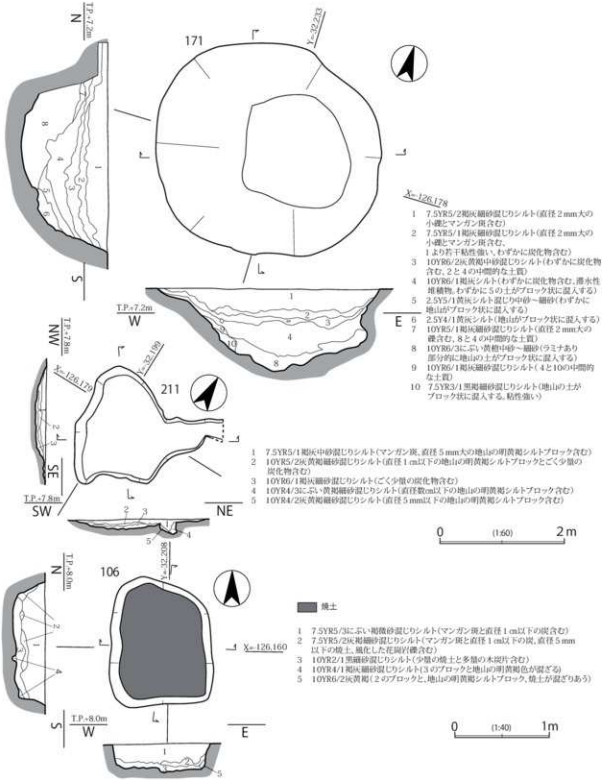
高杯の脚部が壺体部内に落ち込み、杯部が壺の外にかたまってみられたことから、壺を底面に正置し、壺の口縁部に高杯を逆さまにしてかぶせたと推測される（第38図）。すなわち、壺を身、高杯を蓋として利用した土器棺墓だったと考えてよいだろう。

171土坑（第39図、写真図版29－1・2）

6－2区西側の北部で検出した、大形の円形だがややいびつな土坑である。撹乱によって切られ、南端は179溝に接する。

直径3.4～3.6m、深さ1.4mを呈する。断面は椀形を呈する。埋土は水平に堆積する。上層は小礫やマンガン斑を含んだ褐灰色シルト、中層は炭化物を含んだ灰黄褐色シルト、下層はにぶい黄橙色細砂である。遺物が一定量含まれており、口縁が短く鍔から直立する土師器羽釜が出土する（第45図－72、73）。遺物から9世紀から10世紀の遺構か。

171土坑はさらに上層から掘りこまれていたとも考えられる。形状や埋土に炭化物や砂を含む点からは、素掘りの井戸だったのでは、と推測できる。出土遺物の時期から、北側で検出した掘立柱建物2や柱列1に伴う遺構の一つとも考えられる。



第39図　6－2区171土坑・211土坑・106土坑　平・断面図

211 土坑（第 39 図、写真図版 30－3）

6－2区東側の中央部で検出した、不定形の土坑である。135 溝と 138 溝の間に位置する。

長辺 2.3 m、短辺 1.8 m、深さ 0.1 ～ 0.2 mをはかる。断面は皿形を呈する。埋土はブロックや炭化物を含んだシルトである。炭化物は全面にみられるが、次に述べる 106 土坑のように土坑内で何かを焼成したような状況ではない。

106 土坑（第 39 図、写真図版 30－1・2）

6－2区東側の北部で検出した、長方形の土坑である。南北に長軸線があり、ほぼ真方位である。

長辺 1.2 m、短辺 1.0 m、深さ 0.3 mをはかる。断面は長方形を呈する。表面には小穴が多数認められる。埋土は細砂混じりの灰褐色シルトである。

106 土坑の大きな特徴は、底面に一面に敷き詰められたような木炭片と焼土を確認したことにある。土坑内で何かを焼成したと考えられる。1－3区や6－2区で鋳造関連製品が出土していることもあり、関連が示唆される。また、南部域では粘土採掘坑と考えられる土坑を多数検出しており、これらの土坑から粘土を採掘して瓦や土器の製作に用いたという推測もたてており、それと関連する遺構との推定も成り立つ。ただし、106 土坑のような焼成土坑はこれ 1 基のみであり、土器や瓦の焼成施設と考えるには、小規模すぎて難しい。

また、106 土坑の西側壁際で検出した土坑としたものは、地震による変形を受けた自然営為痕と考えられる。地震によって土壌が地殻変動を受け、平面では下層の細砂層が、馬蹄状あるいは環状に隆起したように認められる。断面はさざ波のように波立っているのが特徴で、風倒木痕とは異なる（第 8 図、写真図版 29－3）。

地震による変形土坑は、6－2区の他の地点でも数ヶ所認められた。また、南部域の 12－2区の東壁では大きな断層も観察でき、本遺跡で大きな地震があったことがうかがえる（写真図版 43－3）。ただし、地震の発生時期がいつなのか、6－2区と 12－2区の地震が同一時期のものか等は不明である。

134 溝（第 40 図）

6－2区東側の中央部で検出した溝である。西北から東南にのびる。2つの撹乱土坑によって切られる。検出長 3.0 m、幅 0.25 m、深さ 0.1 mをはかる。断面は逆台形を呈する。6－1区の、掘立柱建物 2 付近で同じ方向をとる溝があるので、同一の溝となる可能性があろうか。

135 溝（第 40 図）

6－2区東側の中央部で検出した溝である。北東から南西にのびる。8区では 377 溝と呼称していたが同一の溝とみて差し支えないだろう。検出長 11.0 m、幅 0.3 m、深さ 0.05 mをはかる。断面は皿形を呈する。時期は不明である。

179 溝・168 土坑（第 40 図）

6－2区西側の北部で検出した溝と土坑である。179 溝は 6－1区の溝と同じ方向である。現存長 7.0 m、幅 0.4 m、深さ 0.1 mをはかる。断面は皿形を呈する。168 土坑は 179 溝と南を接する。直径 0.4 m、深さ 0.1 mをはかる円形の土坑である。断面は皿形を呈する。171 土坑に切られるので、古代以前の遺構である。時期は不明である。

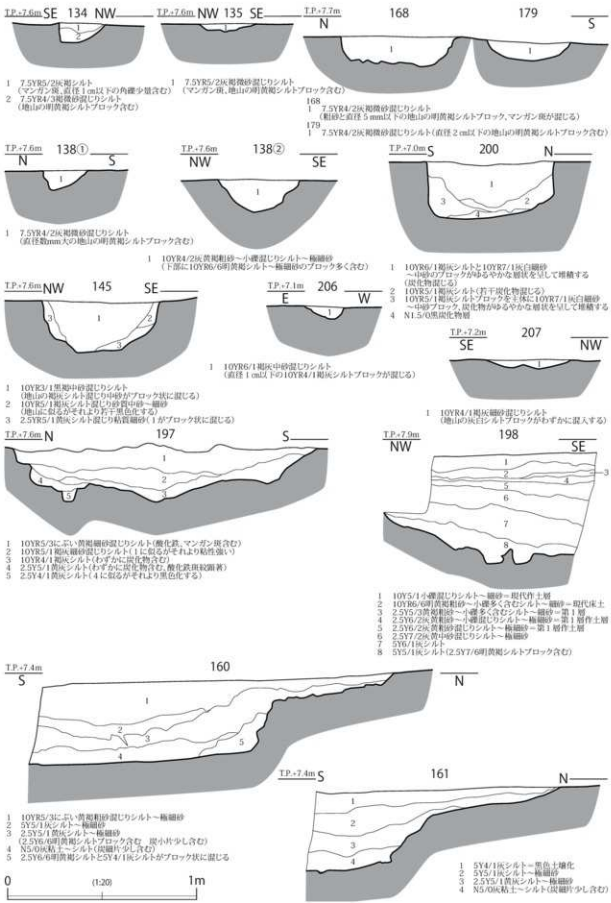
138 溝（第 40 図）

6－2区東側の中央部で検出した溝である。北東から南西に流れる。8区では 378 溝、6－2区西側では 193 溝と呼称していた。135 溝より南にあり、並行なので両溝は関連すると思われる。検出長 35.0 m、幅 0.2 ～ 0.4 m、深さ 0.1 ～ 0.15 mをはかる。断面は皿形を呈する。時期は不明である。

200 土坑（第 40 図）

6－2区西側の南部で検出した土坑である。円形で直径 0.7 m、深さ 0.3 mをはかる。断面は長方形を呈する。時期は不明である。

145 土坑（第 40 図）



第40図　6－1・6－2・8区遺構断面図

6－2区東側の中央部で検出した土坑である。円形で直径 0.6 m、深さ 0.35 mをはかる。断面は椀形を呈する。時期は不明である。

206 溝（第 40 図）

6－2区南側の中央部で検出した南北溝である。207 溝に切られる。検出長 8.0 m、幅 0.2 m、深さ 0.05 mをはかる。断面は皿形を呈する。時期は不明である。

207 溝（第 40 図）

6－2区南側の中央部で検出した溝である。中央の 135 溝、138 溝などと同じ傾きである。検出長 10.0 m、幅 0.45 m、深さ 0.05 mをはかる。断面は皿形を呈する。時期は不明である。

197 土坑（第 40 図）

6－2区南側の東に突き出た箇所で検出した土坑である。北半は調査区外である。隅丸方形の土坑か。幅 1.6 m、深さ 0.3 mをはかる。断面は椀形を呈する。197 土坑、198 土坑、160 土坑、161 土坑、163 ピットは、低地部から再び上昇して台地状になる箇所に位置する。時期は不明である。

198 土坑（第 40 図）

6－2区南側の東に突き出た箇所の南壁際で検出した土坑である。残存幅が 1.2 m、深さ 0.6 mをはかる。断面は逆台形を呈する。全形を検出していれば、160 土坑・161 土坑のような大形土坑になると思われる。時期は不明である。

160 土坑・161 土坑（第 40 図）

6－2区東側の南壁際で検出した大形の土坑である。南半は調査区外である。

どちらも方形で、160 土坑は上面幅 1.8 m、下底幅 1.2 m、深さ 0.4 mをはかる。断面は逆台形を呈する。161 土坑は上面幅 1.3 m、下底幅 0.45 m、深さ 0.4 mをはかる。断面は逆台形を呈する。

両土坑は規模や形状、埋土の堆積状況から、南部域で検出した群集土坑と同一の性格をもつ土坑と思われる。群集土坑の北限が 198 土坑、160 土坑、161 土坑のあたりまで及んでいたといえる。出土遺物から、古代の時期が相当する。

163 ピット（第 25 図）

6－2区東側の 161 土坑の北東肩で検出したごく小形のピットである。直径 0.1 mをはかる。弥生時代の有茎石鏃が出土し、弥生時代の遺構と考えられる（第 45 図－ 74、写真図版 54 － 1）。163 土坑の北東には弥生時代後期の土器棺墓、155 土坑も検出された。

以上、中央部域の中央から北半にかけては、間に遺構が希薄となる低地部を挟んで、北側は古代の遺構が多く、南側は弥生時代や古代の遺構が散見される。ただし、北側と南側の古代の遺構に相関性はあまり認められない。6－2区の包含層出土遺物からも、北側からは土師器や黒色土器A類などが、中央では比較的新しい遺物が多く、南側では土器棺以外にも石器などの弥生時代の遺物も含むことが判明した（第 46・47 図）。

中央部域の中央から南半は遺構が少なく、全体を通しての遺構面の時期や性格も不明確である。しかしながら、弥生時代後期の土器棺墓（155 土坑）や炭混じりの土坑（106 土坑）など注視すべき遺構もある。

中央部域の北端ではに遺構が密集し弥生時代の方形周溝墓群と古代の集落跡を検出した。それより南では、遺構・遺物の密度は低いが、弥生時代から中世まで連綿と人が生活していたことが判明した。

（2）遺物（第41～47図、写真図版47～51、53、54）

方形周溝墓出土遺物（第41図、写真図版47・48・54）

24から29は方形周溝墓1、2の周溝から出土した弥生土器である。

24は7－2区の方形周溝墓2、341周溝東辺最下層から出土した。弥生土器広口壺の口縁部から頸部と体部下半である（写真図版47－3）。

体部上半は復元できなかった。口縁部は口径21.6cm、残存高11.4cmをはかる。体部下半は底径7.1cm、体部最大径22.8cm、残存高17.8cmをはかる。壺全体の高さとしては、35～40cmと推測される。橙色からにぶい黄橙色を呈する。口縁部は外方に開き、端部を折り返す。内外面とも磨滅や剥離が著しく、調整は不明である。弥生時代中期前葉、摂津Ⅱ様式の壺と考えられる。

25は6－1区の方形周溝墓2の341周溝南辺から破片がまとまった状態で出土した。弥生土器広口壺の頸部から体部である（写真図版47－2）。

口縁部は欠損する。頸部径10.0cm、底径6.0cm、体部最大径21.0cm、残存高28.2cmをはかる。にぶい黄橙色を呈する。内外面とも磨滅や剥離が著しく、調整は不明であるが、底部内面には指オサエの痕が残る。体部下半の一部には煤が付着する。弥生時代中期前葉、摂津Ⅱ様式の壺と考えられる。24よりやや小形だが、ほぼ同器形である。

26は1－3区の方形周溝墓1の434周溝東辺最下層から出土した。弥生土器壺の頸部から体部である（写真図版48－3）。口縁部は欠損する。供献土器中、26のみが周溝の底に近い箇所から器形を保ったまま、横に倒れた状態で出土した（第31図、写真図版24－1）。

頸部径8.0cm、底径5.6cm、体部最大径18.0cm、残存高26.6cmをはかる。浅黄橙色を呈する。体部最大径の辺りに打ち欠きによると思われる、直径6cm程度の孔が1箇所認められる。人為的な打ち欠きでなく欠損の可能性もあるが、その場合でも相当の時間経過した欠損と思われる。

頸部と体部の境界から体部上半にかけて、5段の櫛描き直線文を施す。直線文の原帯幅・条数は1.2cmに6条である。磨滅のため調整は不明だが、外面は穿孔の上部に黒斑が認められる。また、体部下半にはヨコ、上半にはタテのミガキになるか、わずかな筋状の痕跡が認められる。底部と体部の接合部は指ナデである。内面は体部にはヨコ方向のハケメ、頸部と体部の接合部はケズリと斜めにナデ上げられた痕跡がある。弥生時代中期前葉、摂津Ⅱ様式の壺と考えられる。

27は7－2区の方形周溝墓2の341周溝東辺最下層から出土した。24と27は周溝の広い範囲で点在するように出土した（第28図）。弥生土器甕である（写真図版48－2）。

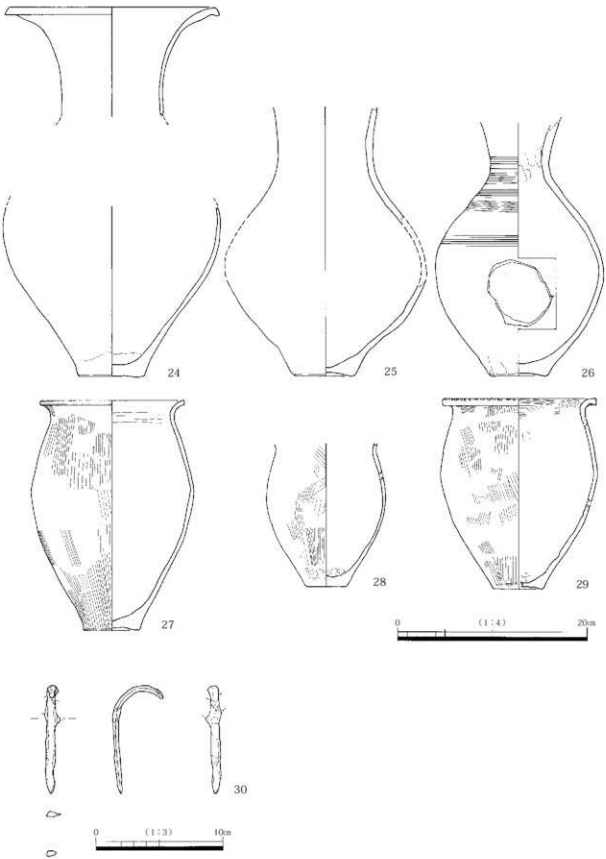
口径15.0cm、底径6.0cm、器高24.2cmをはかる。黄褐色を呈する。外面はタテハケメ、内面は磨滅のため調整は不明だが、口縁部付近は粗いヨコハケメが認められる。弥生時代中期前葉、摂津Ⅱ様式の甕と考えられる。27は次の28、29に比べやや古いか。

28は7区の方形周溝墓2の341周溝南辺から出土した。弥生土器甕である（写真図版48－1）。

口縁部を欠損する。体部最大径13.6cm、底径4.0cm、残存高15.0cmをはかる。にぶい黄褐色から黒褐色を呈する。外面はタテハケメ、内面は磨滅のため調整は不明だが、底部付近は指オサエが認められる。弥生時代中期前葉、摂津Ⅱ様式の甕と考えられる。

29は1－3区の方形周溝墓1の434周溝東辺最下層から出土した。弥生土器甕である（写真図版48－1）。

口径16.0cm、底径5.2cm、器高20.0cmをはかる。灰黄褐色を呈する。外面はタテハケメ、内面は磨



第41図　中央域方形周溝墓出土遺物実測図

滅のため調整は不明だが、口縁部付近は粗いヨコハケメが認められる。口縁部外面は刻み目をもつ。弥生時代、摂津Ⅱ様式の甕と考えられる。

方形周溝墓1と方形周溝墓2から出土した土器は、残存状態も悪く、出土位置も不明なものが多いながらも、弥生時代、摂津Ⅱ様式の壺と甕の組み合わせになっていることが判明した。これは北摂地域の代表的な方形周溝墓をもつ遺跡、安満遺跡などでも一般的にみられる組み合わせであり、供献土器として普遍的なあり方だったといえる。

30は1－4区の方形周溝墓2の341周溝西辺中層、黒色シルト層から出土した。

341周溝の遺物だが、本来の周溝底部付近ではなく、凹地のままであった341周溝が西にある溝と接する箇所でで出土した。341周溝が長期間存在していたため、黒色シルト層の遺物は432井戸や434周溝上層遺物同様、弥生時代に限定されないで、古代末やそれ以降になる可能性をもつ。

金属製品で緑青の状態から銅・青銅製品と推定できる（写真図版54－4）。細く平たい棒状製品であり、長さ8.5cm、幅1.2cm、厚さ0.5cmをはかる。断面は三角形状をなす。

上方が鉤状に曲がるが、これは後の土圧による変形であろう。上下端は先細りするよう整えられているようにみえるが、左右には約1.5cm幅で外方に飛び出す部分が認められる。が、その厚みは中心の棒状部分と比較するときわめて薄い。

形状がやや類似するものとして、大阪市細工谷遺跡で出土した和同開珎の枝銭の棹部がある。当遺跡では、銅銭は全く出土していないが、これより東の1－3区や6－2区で鞴の羽口や溶解炉の炉壁が出土しており、何らかの鋳造行為を行っていた可能性がある。仮に枝銭棹部としても中世以降のものか。

1－3区432井戸・434周溝上層他出土遺物（第42図、写真図版49・50・54）

31から38は井戸側が自然石積みで、最下層に曲物水溜めをもつ432井戸から出土した。

31は432井戸の下層から出土した（第35図,写真図版25－3）。土師器皿でほぼ完形品である（写真図版50－4）。

口径10.6cm、器高1.7cmをはかる。素地破面は灰白色だが、内外面とも灰黄色を呈する。胎土は精良で、ナデにより丁寧に仕上げられている。口縁端部は成形時に沈線がつく。また、底部外面には煤状の使用痕跡が残る。いわゆる、ての字状口縁皿で、10世紀代のものである。

32は432井戸の上層から出土した。軟質の陶器底部と思われる。

底径6.6cm、残存高1.2cmをはかる。にぶい黄橙色を呈する。ロクロ形成による粘土の盛り上がり、ナデの痕跡が底部外面に認められる。

33は432井戸の最上層から出土した。土師器椀の底部である。底径7.6cm、残存高2.7cmをはかる。灰白色を呈する。

34は432井戸の最下層から出土した。土師器羽釜の鍔部で小片である。灰黄褐色を呈する。

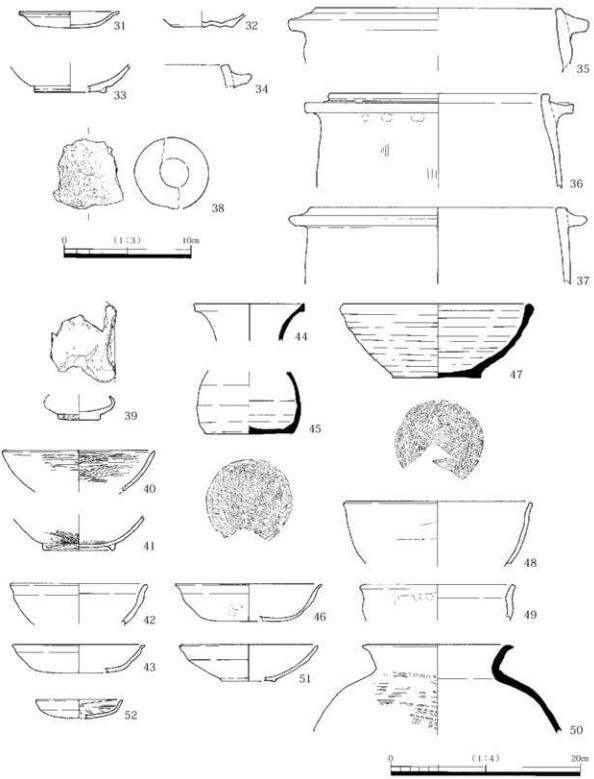
35は432井戸の最上層から出土した。土師器羽釜の口縁から鍔部である（写真図版50－9）。

口径26.0cm、残存高5.8cmをはかる。にぶい黄橙色から灰黄褐色を呈する。口縁部から鍔部はナデで、体部外面はタテハケメを施す。京都で生産される瓦質羽釜を模した摂津型の羽釜である。

36は432井戸の最上層から出土した。土師器羽釜の口縁から鍔部である（写真図版50－8）。

口径23.2cm、残存高9.8cmをはかる。にぶい黄橙色を呈する。口縁部から鍔部はナデで、体部外面はハケメの後ナデを施す。35同様の摂津型の羽釜である。

37は432井戸の最上層から出土した。土師器羽釜の口縁から鍔部である。



第42図　1－3区432井戸・434周溝上層他出土遺物実測図

口径 27.0cm、残存高 8.0cmをはかる。にぶい黄橙色を呈する。口縁部と鍔部の間隔が短く、体部はやや内傾する。摂津型の羽釜である。

38 は 432 井戸上層から出土した。鞴の羽口である（写真図版 54 － 5）。

直径 5.5cm、孔の直径 2.3cm、残存長 5.5cmである。土師質で灰色を呈するが、外面の約半分に被熱による気泡や変質、変色が認められる。

432 井戸からは他にも多数、土師器羽釜の破片が出土した。羽釜を井筒に転用したものかと当初考えたが、旧状に復元できるものがほとんどなく、別個体多数にわたるため、破片等の状態で廃棄されたと判断した。432 井戸はこれらの出土品より 9 世紀から 10 世紀にわたる遺構といえる。

39 から 40、42 から 50 は 1 － 3 区の 434 周溝上層、41 は第 2 層、51・52 は 433 溝から出土した遺物である。

39 は 434 周溝東辺の最上層から出土した。緑釉陶器の耳皿である（写真図版 49 － 4）。

耳皿とは浅い皿の 2 辺の縁を内側に折り曲げたものである。39 は皿底部の約 1/4 と耳の片方を欠損する。本来の口径約 10.0cm、底径 4.3cm、残存高は耳のたちあがったところで 3.0cmである。削り出し高台で、底面は糸切り底である。内外面ともに緑色の釉薬がかかっていたが、磨滅や剥離が著しいため釉薬は高台と内面見込みにわずかに残るのみである。

胎土が精良で緻密であることと、削り出し高台であることから、京都洛西産の耳皿と考えられる。平安京などで出土例がみられる。9 世紀後半以降のものか。

40 は 434 周溝南辺の上層から出土した。黒色土器 B 類椀の口縁部から体部である（写真図版 49 － 6）。口径 16.0cm、残存高 4.2cmをはかる。口縁端部はつまみあげ沈線を施す。内外面には細いミガキが入り、内面は体部下半まで認められる。

41 は 1 － 3 区の第 2 層から出土した。黒色土器 B 類椀の体部から底部である。

底径 7.4cm、残存高 3.3cmをはかる。体部外面は高台近くまで細いミガキが密に入る。内面見込みにも放射線状に細いミガキが密にみられる。10 世紀中頃のものか。

42 は 434 周溝の上層から出土した。黒色土器 A 類椀の口縁部から体部である。

口径 14.2cm、残存高 4.3cmをはかる。にぶい黄橙色から灰黄色で、外面口縁部のみ黒色を呈する。10 世紀前半から中頃のものか。

43 は 434 周溝の南辺上層から出土した。土師器杯である（写真図版 49 － 6）。

口径 13.9cm、器高 2.9cmをはかる。内外面とも灰黄色を呈する。体部から口縁部は緩やかにたちあがり、口縁端部は外に開き気味につまみあげる。

44 は 434 周溝の最上層から出土した。須恵器壺口縁部である（写真図版 49 － 5）。

口径 11.6cm、残存高 3.9cmをはかる。内外面とも灰黄色を呈する。胎土は精良、緻密で、口縁端部は外下方に拡張させる。

45 は 434 周溝の最上層から出土した。須恵陶器壺の体部である（写真図版 49 － 2）。

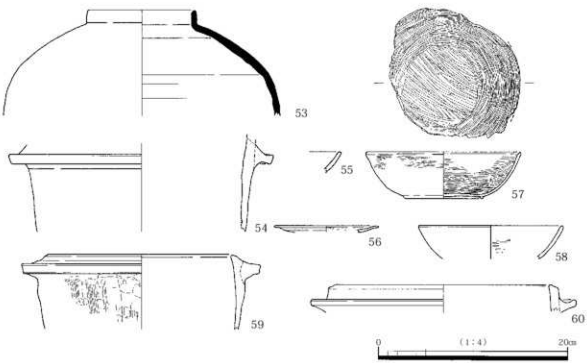
底径 9.1cm、残存高 6.6cmをはかる。口縁部から頸部は欠損する。内外面とも灰色を呈する。体部下半に重心をもち、回転ロクロナデで仕上げられる。底部は糸切り底である。底部には高台がなく、篠窯のものであろう。

46 は 434 周溝東辺上層から出土した。土師器杯である（写真図版 49 － 6）。

口径 15.4cm、器高 3.9cmをはかる。内面にぶい橙色、外面浅黄色を呈する。口縁部は緩やかにたちあがり、外方に開く。口縁部はヨコナデにより段がつく。

47 は 434 周溝東辺最上層から出土した。篠窯産須恵器こね鉢である（写真図版 49 － 1）。

口径 19.8cm、底径 9.3cm、器高 7.7cmをはかる。内外面とも灰色を呈する。回転ロクロナデで仕上げられており、底部は糸切底である。体部は丸みを帯びてたちあがり、口縁端部は丸く肥厚する。9 世紀代のものである。



第43図　6－1・7区遺構・包含層出土遺物実測図

48は434周溝最上層から出土した。土師器椀の口縁部から体部である（写真図版49－6）。

口径19.4cm、器高6.4cmをはかる。内面は浅黄色、外面は灰黄色を呈する。口縁部は緩やかに外反し、深い椀形の器形をなす。口縁端部は平らである。

49は434周溝最上層から出土した。土師器の甕もしくは壺の口縁部である。

口径15.6cm、残存高3.7cmをはかる。内面はにぶい黄橙色、外面は黄灰色を呈する。口縁部は短くたちあがる。外面は口縁部と体部の境に指オサエの痕が残り、内面は磨滅するがナデで仕上げられている。

50は434周溝東辺の最上層から出土した。須恵器壺の口縁部から肩部である（写真図版49－3）。

口径16.0cm、残存高9.0cmをはかる。内外面とも灰色を呈する。球形の体部から口縁部が短くたちあがる。口縁端部は細くとがる。外面は格子タタキである。

51は434周溝を切る、より上層の433溝から出土した。瓦器椀である。

口径14.5cm、器高3.8cmをはかる。内外面とも炭素の吸着がやや悪く、灰黄色を呈する。口縁端部は細くつまみ上げ、沈線は認められない。高台は形骸化して高さを失ったものが貼りつく。口縁に比して高さも低く、和泉型Ⅳ－1型式、13世紀前半のものと思われる。

52は7－2区で検出した433溝から出土した。瓦器皿である（写真図版50－3）。

口径9.0cm、器高1.9cmをはかる。灰色を呈する。内面見込みに平行線状のミガキ、体部にも疎らだがミガキが認められる。51とほぼ同時期のものである。

以上の遺構において、所属型式や時期がおおむね特定できるものに関しては個別に記したが、それ以外の資料は、9世紀から10世紀に属するものであろう。

6－1区、7区遺構・包含層出土遺物（第43図、写真図版50）

53は6－1区の掘立柱建物1の357柱穴及び柱列1の352柱穴の底から出土した破片が接合した（第32、34図、写真図版21－7）。柱の敷石に転用されていたものか。篠窯産の可能性がある須恵

器短頸壺の口縁部から体部である（写真図版50－7）。口径11.0cm、残存体部最大径29.2cm、残存高11.0cmをはかる。内外面はオリーブ灰色から灰黄色を呈する。胎土はきわめて精良である。ほぼ球形の体部に、短い直立した口縁部がつく。外面には自然釉が付着する。

54は6－1区の柱列2の柱穴、387ピットの底から出土した（第34図、写真図版21－6）。柱の敷石に転用されていたものか。土師器羽釜の鍔部から体部である（写真図版50－6）。

鍔径28.0cm、残存高9.3cmをはかる。内外面ともにぶい黄橙色を呈する。ほぼ寸胴の体部に幅1.0cm、厚さ2.0cmの断面長方形の鍔がつく。体部はタテハケメである。瓦質羽釜を模した、摂津でよくみられる羽釜である。

55は7区の掘立柱建物4の363柱穴から出土した（第33図）。黒色土器A類椀の口縁部である。

小片のため断面実測のみにとどまった。内面はにぶい黄橙色、外面はオリーブ黒色を呈する。

56も7区の掘立柱建物4の363柱穴から出土した（第33図）。土師器皿である。口径10.8cm、器高0.7cmをはかる。内外面とも浅黄橙色を呈する。器壁は薄く、口縁部は大きく外方に開く。

57は6－1区の柱列3の391柱穴から出土した（第34図、写真図版21－8）。黒色土器A類椀で、約2/3が残存する（写真図版50－1）。

口径16.2cm、底径8.2cm、器高4.9cmをはかる。胎土は精良で器壁は極めて薄い。外面はにぶい黄橙色に上部1/3に炭素が付着して黒色を呈する。内面は一面が黒色である。

内面は見込みに平行線状のミガキを施したのち、口縁部から体部は、見込みとの境まで密にミガキが施される。外面は口縁部にはヨコ方向のミガキがみられる。外面下半には工具等を使ってナデを施したか、ハケメのような筋状の痕跡がわずかにみえる。口縁端部は内側に巻き込み、沈線をもつ。器形から、10世紀半ばから後半のものであろう。

58は7区の422柱穴から出土した。黒色土器A類の椀である。

口径15.2cm、器高3.5cmをはかる。外面はにぶい黄橙色、内面は黒褐色を呈する。内外面とも磨滅や剥離が著しいが、内面はわずかにヨコミガキが認められる。

59は7区の第2・3層から出土した。土師器羽の口縁部から体部である。

口径19.3cm、鍔径25.0cm、残存高7.8cmをはかる。内外面ともにぶい黄橙色を呈する。ほぼ寸胴の体部に幅1.0cm、厚さ2.0cmの断面長方形の鍔が垂直につく。内面は調整不明だが、一部に煤が付着する。外面は鍔を装着する際の指オサエが残る。体部は1cmにつき7.3条のタテハケメを施す。鍔より下では一部に煤が付着し、使用されていたことがうかがえる。

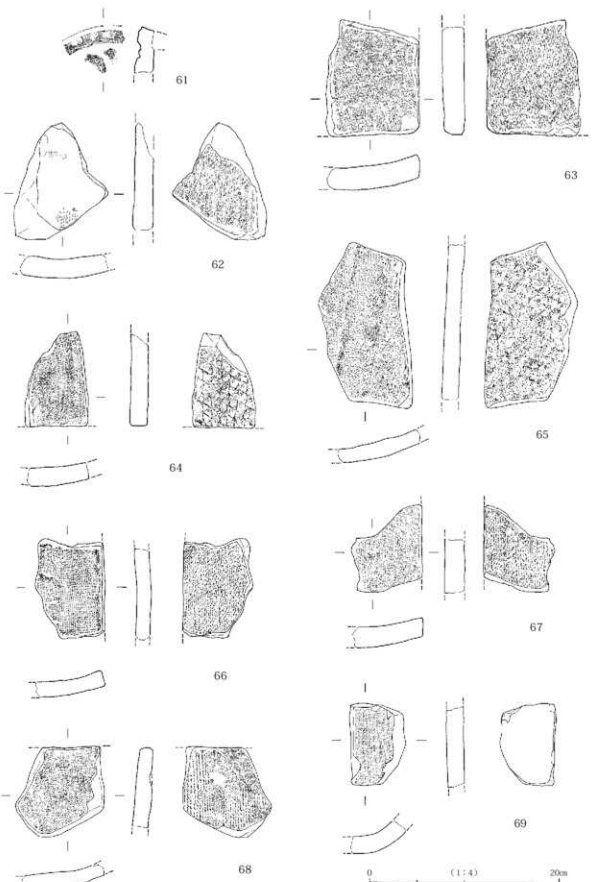
60は7区の422柱穴から出土した。土師器羽釜の口縁部から鍔部である。口径22.4cm、鍔径28.0cm、残存高2.9cmをはかる。内外面ともにぶい橙色を呈する。幅0.6cm、厚さ1.8cmの鍔がつく。鍔先端は丸みをもつ。

1－3区出土瓦（第44図、写真図版53・54）

61は1－3区の第2層から出土した。軒丸瓦である（写真図版54－2）。

残存長6.5cm、残存幅5.5cm、厚さ2.0cmをはかる。凸面褐灰色、凹面灰白色を呈する。瓦当の一部のみだが、外縁は平縁で、単弁八弁蓮華文軒丸瓦である。近接した梶原瓦窯跡出土瓦と同笵で、梶原Ⅰ～Ⅲ型式にあたると思われる。

62は1－3区の432井戸最上層から出土した。平瓦である。残存長11.3cm、残存幅9.3cm、厚さ2.2cmをはかる。凸面灰色、凹面にぶい黄橙色を呈する。凸面には縄目文で、凹面は磨滅が著しいがわず



第44図　1－3区出土瓦実測図

かに布目痕が残る。煤が一部付着する。梶原瓦窯跡1号窯f型式T132、T133が類例と思われる。

63は1－3区の432井戸直上層から出土した。平瓦である（写真図版53）。

残存長12.1cm、残存幅10.2cm、厚さ2.3cmをはかる。凹凸面とも灰白色を呈する。凸面には斜めの縄目文を施し、凹面は磨滅が著しいがわずかに布目痕が残る。梶原瓦窯跡1号窯f型式T132、T133が類例と思われる。

64は1－3区の434周溝東辺上層から出土した。平瓦である（写真図版53）。

残存長9.6cm、残存幅7.0cm、厚さ1.9cmをはかる。凹凸面ともにぶい黄橙色を呈する。凸面は大きい斜め格子タタキを施し、凹面は布目痕が残る。梶原瓦窯跡1号窯f型式T136～T138が類例と思われる。

65は1－3区の434周溝南辺最上層から出土した。平瓦である（写真図版53）。

残存長16.2cm、残存幅8.7cm、厚さ1.8cmをはかる。凸面浅黄色、凹面にぶい黄橙色を呈する。凸面は大きい斜め格子タタキを施し、凹面は布目痕が残る。桶枠造りによって生じる、布の端と端を重ねあわせて綴じた縫い目の部分がみられる。梶原瓦窯跡1号窯f型式T136～T138が類例と思われる。

66は1－3区の434周溝東辺最上層から出土した。平瓦である。

残存長9.1cm、残存幅7.2cm、厚さ1.7cmをはかる。凸面黄灰色、凹面灰黄色を呈する。凸面は縄目タタキを施し、凹面は布目痕が残る。梶原瓦窯跡1号窯f型式T132、T133が類例と思われる。

67は1－3区の434周溝南辺上層から出土した。平瓦である。

残存長7.9cm、残存幅7.3cm、厚さ2.1cmをはかる。凹凸面ともにぶい橙色を呈する。凸面は縄目タタキを施し、凹面は布目痕が残る。梶原瓦窯跡1号窯f型式T132、T133が類例と思われる。

68は1－3区の434周溝最上層から出土した。平瓦である。

残存長8.4cm、残存幅8.4cm、厚さ1.8cmをはかる。凸面灰色、凹面灰白色を呈する。凸面は縄目タタキを施し、凹面は布目痕が残る。梶原瓦窯跡1号窯f型式T132、T133が類例と思われる。

69は1－3区の434周溝東辺上層から出土した。丸瓦である（写真図版53）。

残存長8.4cm、残存幅5.7cm、厚さ1.9cmをはかる。凸面灰黄色、凹面黄灰色を呈する。凸面はナデを施し、凹面は布目痕が残る。梶原瓦窯跡1号窯a 1型式T118～T120が類例と思われる。

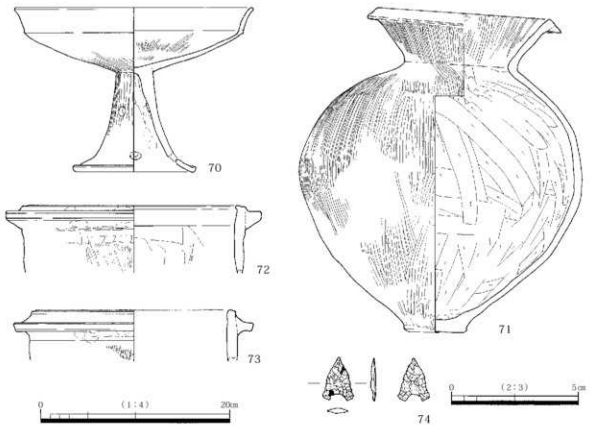
1－3区では小片も含めると、一定量の瓦の出土がみられたが、軒丸瓦が1点、丸瓦が1点でそれ以外は平瓦である。また、瓦は散在して出土していることから、当地での瓦葺き建物の存在を示すものでない。しかし、どれも北東約0.5kmの距離にある梶原瓦窯で製作された製品が、何らかのかたちで近隣に供給された可能性を示す。梶原瓦窯は7世紀半ばから8世紀前半存続したと報告されるが、61から69は7世紀後半を主体とする製品であろう。

6－2区遺構出土遺物（第45図、写真図版51・54）

70と71は6－2区の155土坑から出土した（第37図、写真図版27－2）。検出時には71が正立しており、その中に70が破損して落ち込んでいるか、71の外方肩部分に破片となってかたまっている状況であった。接合・復元したところ、70、71ともほぼ完全な器形になった。そのため、高杯（70）を蓋とし、壺（71）を身として、組み合わせた土器棺墓だったと考えられる（第38図）。

70は弥生土器高杯である（写真図版51－7）。

杯部は約2/3が、脚部はほぼ残存する。口径24.8cm、脚部径12.4cm、器高17.3cmをはかる。内外面ともにぶい橙色を呈する。杯部は外面がタテミガキ、内面も放射線状のミガキを施す。浅く直線的な杯部がおよそ1/2の高さで段をもち、外方に開く。口縁端部は丸くおさまる。



第45図　6－2区155土坑・177土坑・163ピット出土遺物実測図

脚部は外面に丁寧なタテミガキが施される。内面は指ナデ・指オサエ、杯部との接合部には粘土の絞り目が残る。脚裾端は折り返す。脚柱に3箇所、裾に4箇所の穿孔をもつ。弥生時代後期、摂津Ⅴ様式の高杯である。

71は弥生土器壺である。ほぼ完全な形に復元できた（写真図版51－8）。

口径18.2cm、体部最大径30.0cm、底径5.7cm、器高34.2cmをはかる。器壁の厚さは平均1.0cmである。ややいびつな器形をなす。内外面とも浅黄橙色を呈する。口頸部と体部の境部はくの字に鋭く屈曲し、口縁端部は断面三角形の粘土帯を外面に貼付して拡張する。

外面は底部にケズリか、底部と体部の接合は板ナデもしくはヘラナデがみられる。口縁部から体部までタテ方向のヘラミガキを施す。体部下半に一部黒斑が認められる。内面は、体部は一面にヨコ及び斜め方向のケズリを施す。口縁部はその後、タテ方向のヘラミガキを施す。弥生時代後期、摂津Ⅴ様式の壺である。

72と73は6－2区の171土坑から出土した（第39図）。72は土師器羽釜の口縁部から体部である（写真図版51－6）。

口径22.0cm、残存高7.1cmをはかる。内外面とも灰黄褐色を呈する。口縁と鍔の間隔がきわめて短く、鍔が体部に垂直につく。外面は磨滅のため詳細は不明だが、鍔を体部に装着後、板ナデを施し、体部はタテハケメを施しているようである。内面はタテとヨコに板ナデが認められる。内面に煤が付着する。

73も土師器羽釜の口縁部から体部である（写真図版51－6）。

口径20.3cm、残存高5.4cmをはかる。内外面とも灰黄褐色、にぶい黄橙色を呈する。口縁と鍔の間隔がきわめて短く、鍔が体部に垂直につく。外面は、鍔を体部に装着したヨコナデや指オサエの痕が残る。

体部は1㎝につき6条のタテハケメを施している。

74は6－2区の163ビットから出土した。サヌカイトの凹基無茎石鏃である（写真図版54－1）。

長さ1.7㎝、幅0.7㎝、最大厚0.2㎝をはかる。使用痕跡は認められない。弥生時代のものと思われるが、法量の小さい石鏃である。

6－2区包含層出土遺物（第46図、写真図版51・54）

75は黒色土器A類椀である。6－2区の北東隅にある141周溝最上層から出土した。141周溝は1－3区で検出した434周溝の続きになると思われる溝である。

口径15.3㎝、底径8.4㎝、器高5.3㎝をはかる。外面はにぶい黄橙色、内面は暗灰色を呈する。口縁端部はつまみあげる。内面は体部から見込みまで細いミガキが認められる。10世紀中頃のものである。

76は6－2区の141周溝直上の第1層、第2層から出土した。黒色土器B類椀である。

底部は欠損する。口径16.0㎝、残存高4.7㎝をはかる。内外面はオリーブ黒色を呈する。口縁端部は巻き込み、沈線が入る。内外面とも体部から見込みまで細いミガキが認められる。

77は6－2区の141周溝直上の第1層、第2層から出土した。黒色土器A類椀である。

底部は欠損する。口径16.0㎝、残存高4.7㎝をはかる。口縁部はつまみあげ、強いヨコナデが入る。内外面とも磨滅が著しいが、細いミガキが認められる。

78は6－2区の141周溝最上層から出土した。黒色土器B類椀である（写真図版51－4）。

口径16.6㎝、底径8.6㎝、器高5.6㎝をはかる。内外面とも黒色を呈する。口縁端部はつまみあげ、沈線をもつ。内面は見込みに斜め方向の暗文といえるミガキを施したのち、口縁部からヨコミガキを密に巡らす。外面は磨滅のため不明瞭だが、やはり体部下半までミガキが密に入る。

79は6－2区の北東部、第2層から出土した。黒色土器A類椀である（写真図版51－1）。

口径17.6㎝、底径8.0㎝、器高6.3㎝をはかる。外面はにぶい黄橙色、内面は黒色を呈する。口縁端部はつまみあげる。深い椀形を呈し、磨滅が著しいがミガキが認められる。10世紀後半のものか。

80は6－2区の141周最上層から出土した。黒色土器A類椀底部である。

底径7.5㎝、残存高1.2㎝をはかる。外面はにぶい黄橙色、内面はオリーブ黒色を呈する。高台は断面三角形で、外側に張り出す。

81は6－2区の141周溝直上の第1層、第2層から出土した。土師器椀である。

口径18.6㎝、残存高3.2㎝をはかる。外面は灰白色、内面はにぶい黄橙色を呈する。口径に比べると器高が浅く、体部が直線的に外に開く。

82は6－2区の北東部、北側溝上層から出土した。土師器皿である。

口径12.6㎝、器高2.4㎝をはかる。内外面とも浅黄橙色を呈する。ナデにより、器壁が薄く仕上げられている。

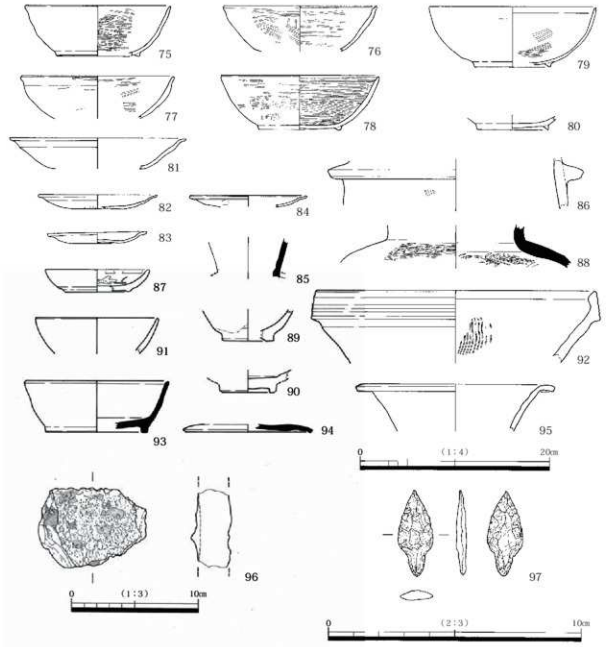
83は6－2区の北東部、北壁上層から出土した。土師器皿で、ほぼ完形である（写真図版51－3）。口径10.4㎝、器高1.5㎝をはかる。内外面ともにぶい黄色から浅黄橙色を呈する。口縁端部を内側に巻き込む、いわゆるての字状口縁皿である。10世紀末から11世紀初めか。

84は6－2区の北東部、第2層から出土した。土師器皿である。

口径12.3㎝、器高1.2㎝をはかる。外面は浅黄橙色、内面は灰白色を呈する。ての字状口縁皿である。

85は6－2区の141周溝直上の第1層、第2層から出土した。須恵器壺の頸部である。

壺Lのような器形をとると思われる。体部との接合部で直径7.0㎝をはかる。内外面とも灰白色を



第46図　６－２区包含層出土遺物実測図

呈する。

75から85は１－３区で検出した434周溝の続きの141周溝が古代末、10世紀代においても、たわんだ状態で溝の機能を保っていたと推測される。１－３区や６－１区、７区で検出された古代の集落跡に伴う遺構は、６－２区では検出されていないが、その影響が６－２区の北東には及んでいたと推測される。

86は６－２区の141周溝第３層から出土した。土師器羽釜である（写真図版51－５）。

鍔と体部の一部のみ残る。鍔径27.0cmをはかる。内外面ともにぶい黄橙色を呈する。

87は６－２区の東側中央、第１層、第２層から出土した。削り出し高台の陶器皿である。

口径11.0cm、底径6.8cm、器高2.3cmをはかる。内面口縁部に２条の圏線、見込みに花文が鉄釉で描かれ、内外面全面とも浅黄色の釉薬を流しかける。唐津系の陶器と思われる。

88は6－2区の東側中央、第1層、第2層から出土した。須恵器壺の肩部である。

頸部径14.8cm、残存高4.5cmをはかる。外面には横方向のタタキ、内面は同心円文タタキが認められる。

89は6－2区の東側中央、第1層、第2層から出土した。陶器天目茶碗の体部下半から底部である。底径5.2cm、残存高3.4cmをはかる。明褐灰色の素地にオリーブ黒色の釉薬を内外面に流しかける。胎土がやや軟質であるので、中世後半期瀬戸美濃で量産された国産陶器と考える。

90は6－2区の東側中央、第1層、第2層から出土した。青磁碗の底部である。

底径5.2cm、残存高2.4cmをはかる。削り出し高台で、底部が厚い。灰白色の素地にオリーブ灰色の釉薬を内外面に流しかける。龍泉窯青磁であろう。

91は6－2区の東側中央、第1層、第2層から出土した。陶器碗で、底部を欠損する。

口径13.0cm、残存高3.7cmをはかる。口縁部を細くつまみあげ、内外面は淡緑色に施釉される。瀬戸系の近世陶器と思われる。

87から91は東側中央の近接した箇所で、最終遺構面より上層から出土した。第2層上面では鋤溝が多数検出されており、遺物の示す時期から中世後半期から近世にかけての耕作地だったと推測される。

92は6－2区の中央南、第1層、第2層から出土した。陶器擂鉢である。

赤褐色を呈する備前焼擂鉢で、底部は欠損する。口径29.2cm、残存高7.6cmをはかる。口縁部は外側に厚く折り返し、段をなす。中世後半期以降のものである。

93は6－2区の東側南、第2層から出土した。須恵器杯Bである（写真図版51－2）。

口径15.1cm、底径10.4cm、器高5.4cmをはかる。

94は6－2区の西側中央、第1層から出土した。須恵器杯蓋である。

口径13.1cm、残存高0.8cmをはかる。天井部を欠損する。

95は6－2区の西側南、第3層から出土した。弥生土器壺の口縁部である。

口径21.08cm、残存高4.9cmをはかる。口縁端部は平らで、折り返す。内外面とも橙色を呈する。内外面とも磨滅や剥離が著しく、調整は不明である。

96は6－2区の西側南、第2層から出土した。土師質の板状塊であるが、内面には気泡が多く、鉄やガラス質の物質が多く付着することから溶解炉壁の一部と判断した（写真図版54－5）。

残存長8.6cm、残存幅6.3cm、厚さ2.5cmをはかる。灰色を呈し、内側にやや湾曲する。

1－3区で鞴の羽口、1－4区の周溝で銅・青銅の鋳造に関連する可能性を一部示す資料も出土している。出土位置はかなり離れるが、鋳造に関連する遺物が複数出土することは、この場所で鋳造行為が行われていたことを示唆するものとして、興味深い。

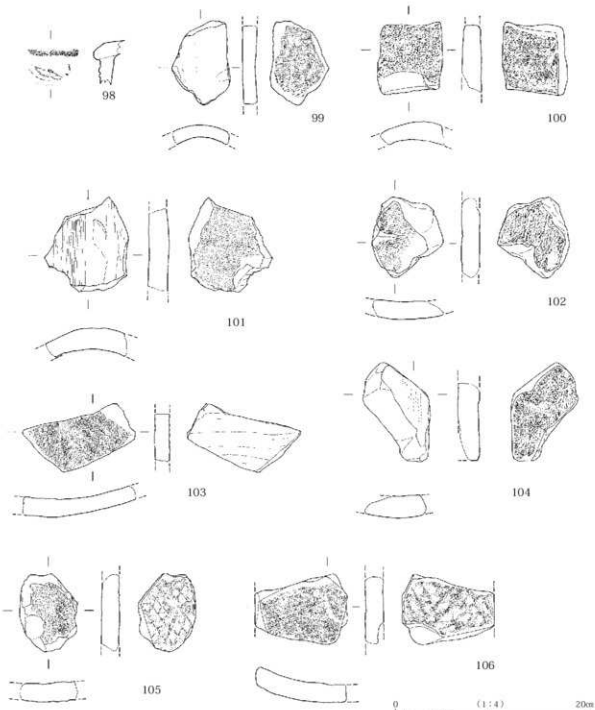
97は6－2区の西側南、第2層から出土した。サヌカイトの有茎石鏃である（写真図版54－1）。長さ3.4cm、幅1.4cm、厚さ0.4cmをはかる。弥生時代のものである。

6－2区は面積も広く、台地状の部分とそれから下降する低地部とに分かれる。また、中世以降の作土層である第1層、第2層と、弥生時代や古代末の遺物が含まれる第3層と、包含層遺物といっても時期が多岐にわたる。

6－2区出土瓦（第47図、写真図版54）

98は6－2区の西側中央、第2層から出土した。軒平瓦である（写真図版54－3）。

残存長3.2cm、瓦当幅5.4cm、厚さ1.5cmをはかる。凹凸面とも灰色を呈する。唐草文軒平瓦と思われる。梶原瓦窯跡出土軒平瓦は重弧文がほとんどで、平城宮系の均整唐草文もあるが、98は中世末のもので、



第47図　6－2区出土瓦実測図

梶原瓦窯との関連はない。

99は6－2区の東側南端、第2層から出土した。丸瓦である。

残存長8.3cm、残存幅5.0cm、厚さ1.5cmをはかる。凹凸面とも灰色を呈する。凸面にはナデ、凹面には布目が施される。

100は6－2区の西側北部、第2層から出土した。丸瓦である。

残存長7.0cm、残存幅6.7cm、厚さ2.0cmをはかる。凹凸面とも浅黄橙色を呈する。凸面は磨滅が著しいが縄目が認められる。凹面も磨滅著しいが布目痕が残る。

101は6－2区の第3層から出土した。丸瓦である。

残存長 8.6cm、残存幅 8.5cm、厚さ 2.1cmをはかる。凹凸面ともにぶい褐色を呈する。凸面は縦ナデが認められる。凹面は布目痕が残る。

102 は 6 － 2 区の第 2 層から出土した。平瓦である。

残存長 7.3cm、残存幅 6.9cm、厚さ 1.9cmをはかる。凹凸面とも灰白色を呈する。凸面は縄目タタキが認められる。凹面は布目痕が残る。

103 は 6 － 2 区の東側南端、第 2 層から出土した。平瓦である。

残存長 11.9cm、残存幅 5.0cm、厚さ 2.0cmをはかる。凹凸面とも灰白色を呈する。凸面は横方向のナデで仕上げられる。凹面はヘラケズリ及び布目痕が残る。凹面に煤が付着する。

104 は 6 － 2 区の東側中央の第 2 層、低地部から出土した。平瓦である。

残存長 8.4cm、残存幅 6.3cm、厚さ 2.3cmをはかる。凹凸面とも灰色を呈する。凸面は縄目タタキで仕上げられる。凹面は布目痕が残る。

105 は 6 － 2 区の東側南端、第 2 層から出土した。平瓦である。

残存長 8.0cm、残存幅 6.1cm、厚さ 1.9cmをはかる。焼成不良か、凹凸面とも浅黄色を呈する。凸面は斜め格子タタキで仕上げられる。凹面は布目痕が残る。

106 は 6 － 2 区の東側北端、141 溝もしくは第 3 層から出土した。平瓦である。

残存長 9.6cm、残存幅 7.3cm、厚さ 2.0cmをはかる。凹凸面とも浅黄橙色を呈する。凸面は粗い斜め格子タタキで仕上げられる。凹面は布目痕が残る。

6 － 2 区で出土した瓦は、98 を除く 99 から 106 は 1 － 3 区で出土した瓦と同様に梶原瓦窯跡で作られたものと考えられる。時期も 7 世紀後半から 8 世紀前半までにおさまる。理化学的な手法を用いた、胎土組成分析による比較も行っている（第 4 章第 1 節）。

第 4 節　南部域の調査

（1）遺構（第 48 ～ 59 図、写真図版 32 ～ 43）

阪急京都線の線路より南調査区を南部域と称する。

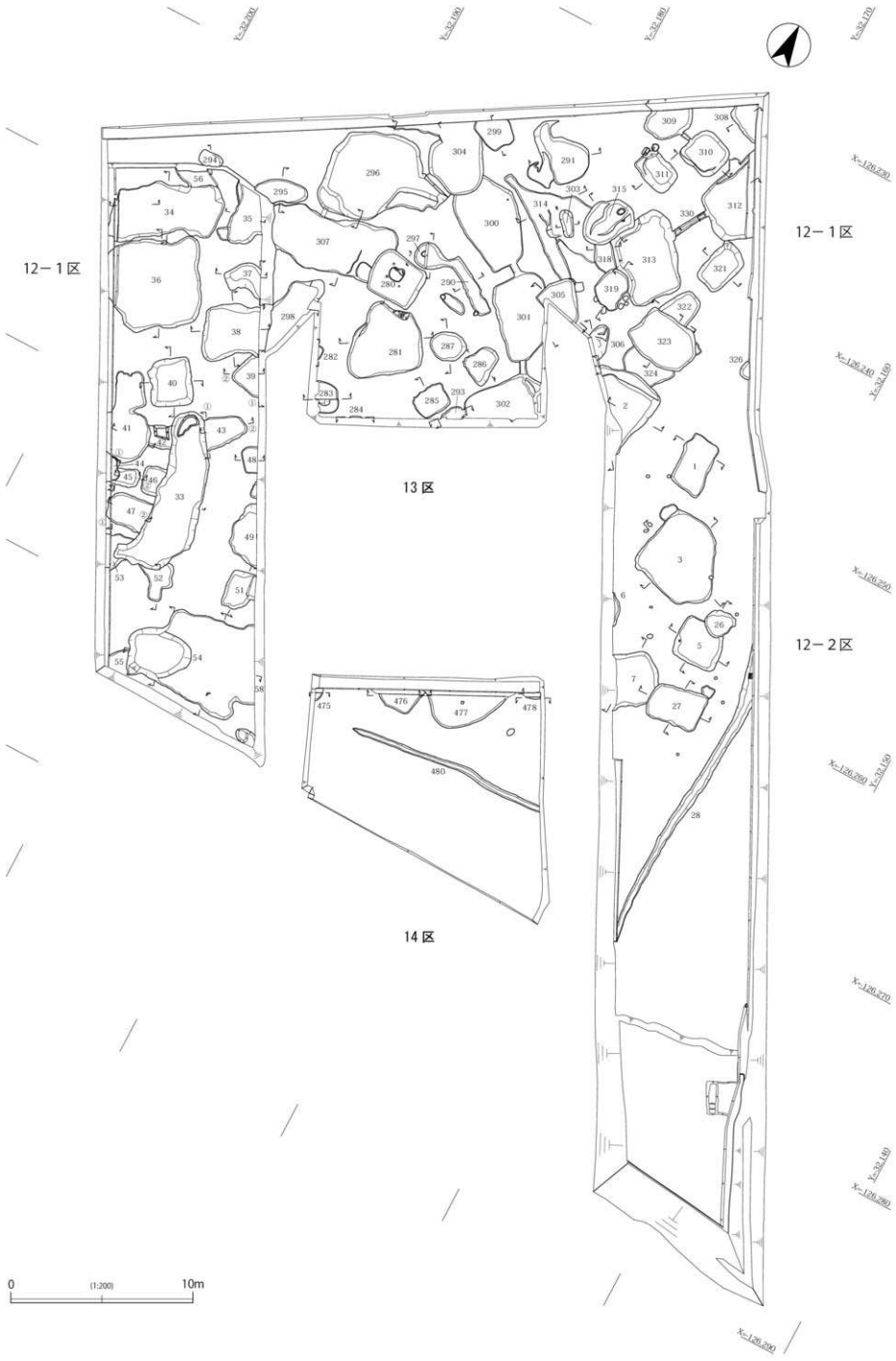
X ＝ － 126,230 ～ － 126,290、Y ＝ － 32,145 ～ － 32,210 の範囲内に位置する、南北約 60 m × 東西約 35 mの範囲である。道路部分を 12 区とし、12 － 1 区と 12 － 2 区に分けて調査した。橋脚部は 13 区と 14 区となる。12 － 1 区と橋脚部の 13 区の北は接する。

遺構は 28 溝や 480 溝、280 井戸といった、古代以降と思われる時期の下る遺構と、調査区の大部分を占める、それ以前の時期の群集土坑群に大別できる。12 － 2 区は南に行くに従い、急激に落ちる谷地形となり、遺構は検出されない。12 － 2 区南端東壁で地震による大きな地層のずれ（断層）を観察できる。

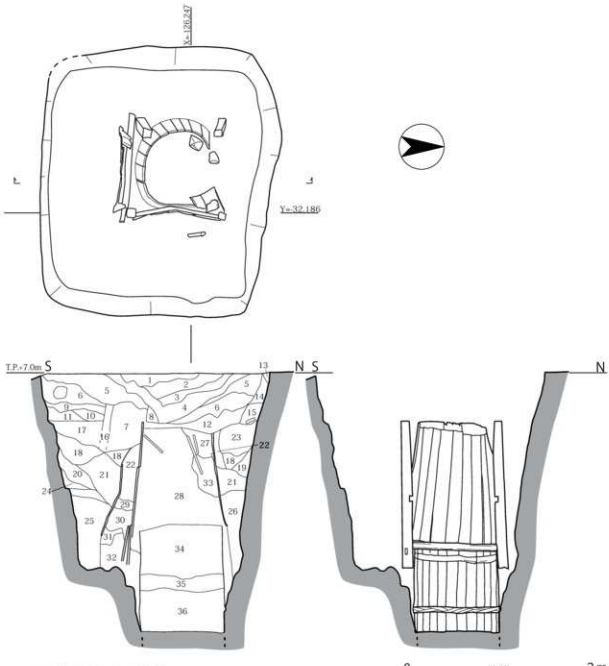
また、12 区においては、12 － 1 区西端と 12 － 2 区東端をトレンチ状に深掘りし、下層確認を行った。ここでは、砂層や有機遺物を含む堆積層などの自然堆積層と、湿地状の低地部に残る人の足跡などを確認した。トレンチ部の最下層からは、地震の液状化現象による墳砂痕跡も検出されているが、地震の時期は不明である。

遺構面の井戸・溝（第 48 ～ 50 図、写真図版 32 － 2、33 － 1、37、39 － 2）

280 井戸（第 49 図、写真図版 37）



第48図　南部域全体平面図



1 10YR4/6褐細砂混じりシルト　酸化鉄含む
2 2.5Y5/2暗灰黄細砂混じりシルトに10YR4/1褐灰シルトの大きな粘土ブロックが混じる　マンガン斑あり
3 2.5Y5/3黄褐シルト　マンガン斑あり
4 2.5Y6/2灰黄シルトに10YR5/8黄褐細砂混じりシルトが混じる
5 10YR5/2灰黄褐シルト中砂含む　マンガン斑あり
6 2.5Y4/2暗灰黄シルト　マンガン斑あり
7 2.5Y5/3黄褐シルト　酸化鉄含む
8 5Y5/2灰オリーブ細砂混じりシルト
9 2.5Y5/2暗灰黄細砂混じりシルトにわずかに2.5Y5/2暗灰黄シルトブロック含む
10 5Y4/1灰中砂混じりシルトにわずかに2.5Y5/2暗灰黄シルトブロック含む
11 10YR4/3にぶい黄褐細砂混じりシルト　酸化鉄含む
12 2.5Y4/1黄灰細砂混じりシルト　酸化鉄含む
13 10YR4/4褐シルト　マンガン斑あり　炭込め土
14 2.5Y4/3オリーブ褐シルト　炭込め土
15 2.5Y4/1黄灰シルト　炭込め土
16 2.5Y5/2暗灰黄シルトに7.5YR4/6褐細砂含む　マンガン斑あり
17 7.5Y4/1灰シルトに5Y3/2オリーブ黒シルトや10YR3/2黒褐シルトの大ブロック含む　礫含む
18 2.5GY4/1暗オリーブ灰シルトに10YR4/1褐灰細砂混じりシルトブロックや礫含む
19 5Y4/2灰オリーブシルトに10YR4/1褐灰シルトブロック含む
20 5GY4/1暗オリーブ灰シルトに10YR4/1褐灰シルトブロック含む
21 7.5GY4/1暗緑灰細砂混じりシルトに10YR4/1褐灰シルト、7.5Y4/2灰オリーブシルトブロック含む
22 5GY4/1暗オリーブ灰シルトに2.5Y4/6オリーブ褐細砂含む
23 5Y5/2灰オリーブ細砂混じりシルトに2.5Y4/2暗灰黄細砂混じりシルトの大きなブロック含む　石、礫含む
24 2.5Y4/1黄灰細砂混じりシルト
25 5GY5/1オリーブ灰粘土に7.5Y5/2灰オリーブ細砂が部分的に混じる
26 10YR3/2黒褐細砂混じりシルト
27 2.5Y4/2暗灰黄細砂～中砂混じりシルト
28 10Y4/1灰シルト～粘土
29 7.5Y5/2灰シルト混じり細砂
30 7.5Y5/2灰シルトに32の小ブロック含む
31 10Y4/2オリーブ灰シルトに10Y4/2オリーブ灰細砂混じる
32 5Y3/1オリーブ黒シルトわずかに細砂含む
33 10Y4/1灰シルト～粘土に7.5YR4/6褐礫含む
34 10Y4/1灰細砂混じりシルト
35 7.5Y4/2灰オリーブシルト混じり微砂
36 7.5Y4/2灰オリーブ微砂～細砂

第49図　12－1区280井戸　平・立面図

12－1区と13区にまたがって検出した井戸である。X＝－126,246～－126,249、Y＝－32,185～－32,188の範囲内に位置し、ほぼ真方位にのる。

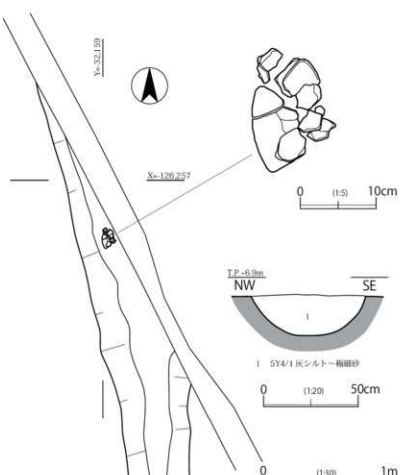
方形の掘形をもつ井戸で、掘形の1辺は南北約2.4 m、東西約2.9 mをはかる。深さは2.7 mまで掘削し、さらに下にも続くが、安全上掘削不能と判断して図化した深さまでにとどめた。断面は逆台形を呈する。底面は円形の掘形となり、直径は0.9 m程度である。

地表面から約0.5 m掘削すると、掘形の中心よりやや北西寄りに、桶を転用した井筒とその周囲を板や杭で囲った井戸側を検出した。井戸側は四隅に0.1 m角の角材を打って枠とし、横木を上下2段にわたってほぞ孔に通して骨組みとしたものである。これに長さ1.1 m、幅0.25 mの板を1辺に4、5枚並べて囲ってある。土圧によってか、板は骨組みから外れたり、上部を欠損したり、折れ曲がるなど変形していた。井側は約1.0 m四方である。

井側の内側には桶転用井筒を検出した。桶井筒は2段確認できたが、下層には板が土中から覗いており、さらに下に続いていると思われる。井筒の桶の直径は約0.7～0.9 m、高さ1.2 m前後ある。1段目は下方に開くが、2段目は上と下の直径がほぼ同じで、直立する。幅0.1 m程度の板を隙間なく円状に並べ、上下2箇所を縄状の箍で緊縛する。

埋土は井筒の高さまでは、井筒を入れて周囲に裏込めとして粘土や薄く剥いだ平たい石を詰めていた。井筒より上は、井戸廃絶後に自然堆積したものであろう。

桶を井筒としている点や、出土遺物が陶磁器（第60図－119～121）である点から、280井戸は中世後半以降の遺構といえる。



第50図　28溝土器出土状況断面図

28溝（第50図、写真図版39－2）

12－1区東半の中央より南、X＝－126,255～－126,274、Y＝－32,158～－32,159の範囲内に位置する。ほぼ南北方位にのびる溝である。

検出長は約18.0 mで、調査区の南北にさらにのびる。幅は0.6 m、深さは0.2 m、断面は椀形を呈する。埋土は灰色シルトから極細砂である。急激に落ちていく台地から谷への変換点縁辺部にあたり、地形の何らかの境界を示す遺構とも考えられる。

28溝の北端で土師器椀が出土した（第60図－113、写真図版52－2）。よって、28溝は古代、10世紀頃の遺構と思われる。

480溝（第48図、写真図版

33－2）

14区で検出したほぼ東西方向に走る溝である。検出長11.0m、幅0.5m、深さ0.1～0.2mをはかる。東壁で途切れるが、12－1区東半まではのびていない。

群集土坑（第51～59図、写真図版32～43）

南部域のX＝－126,270を南限とし、広範囲で方形や長方形、不定形の土坑を多数検出した。

調査区内で約80基検出したが、壁断面でのみ検出したものも含めるとそれ以上になり、13区と14区の間の未調査区にも土坑が広がっていたと推定できる。おそらく、100基以上で土坑群を形成していたと考えられる。群集土坑の北限は、中央域で検出した160土坑、161土坑、198土坑も含まれるとすると、X＝－126,210辺りになり、群集土坑の範囲は南北約60mにわたると考えられる。

隣接する土坑は、お互いを意識して平行に掘削されているようだが、時期差によるのか切り合いを2重、3重にもつものもある。309土坑と310土坑、312土坑と313土坑のように2つの土坑を連結する溝をもつものもある（第48図）。

群集土坑から出土する土器は弥生時代から古代までにわたる。よって、群集土坑は長期間にわたって形成された、あるいは存続した遺構群ともいえる。が、後述するように、古代の所産である可能性が高いだろう。

296土坑（第51図、写真図版35－8）

12－1区の中央、北端に位置する大形の土坑である。隅丸方形の形に付加して304土坑への連結部であったか、東へ溝状に飛び出す形状をとる。

方形部は長辺5.1m、短辺4.0m、突起部まで含めると東西長は6.5mとなる。深さは0.8～0.9mをはかる。断面は長方形を呈する。307土坑と連結部でつながる。

埋土は細かく分層できるが、各層ともにシルトブロックを含み、掘削で生じた土が再び埋められた状況を示す。弥生土器壺の底部などの破片が出土している（第60図－115・116、写真図版52－4）。

281土坑（第51図、写真図版35－1、3）

13区の西側に位置する大形の不定形の土坑である。北東隅は280井戸へ接する。1辺約4.0m、深さは0.6mをはかる。断面は長方形を呈し、壁面が垂直におちる。

埋土は水平に堆積するが、上層、下層でシルトブロックを含む層がある。シルトブロックはまんべんなく全層に含まれるのではない。

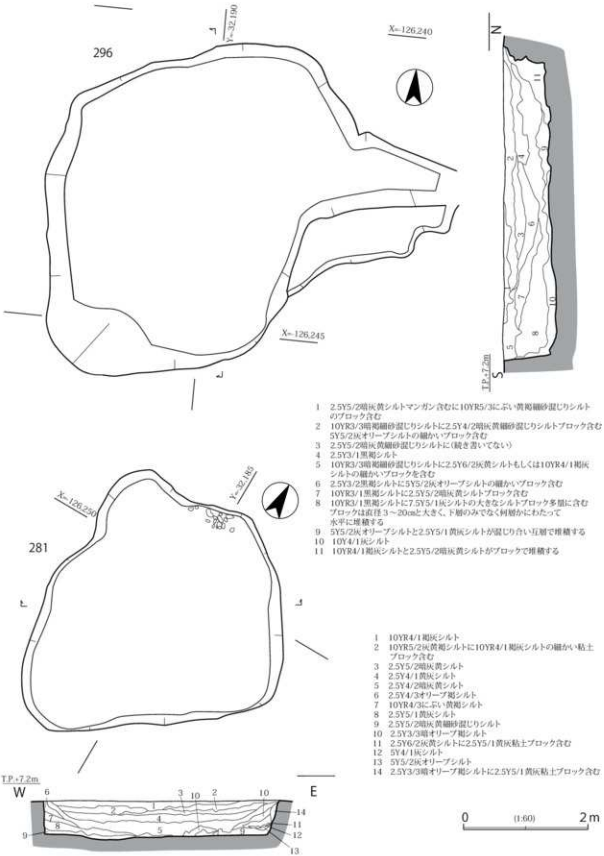
土坑北東部の上層で土器がかたまって出土した。砕片で摩耗著しかったが、復元したところ弥生土器となった壺（第60図－114）や須恵器片が出土している。

304土坑・300土坑・301土坑（第52図、写真図版34－3）

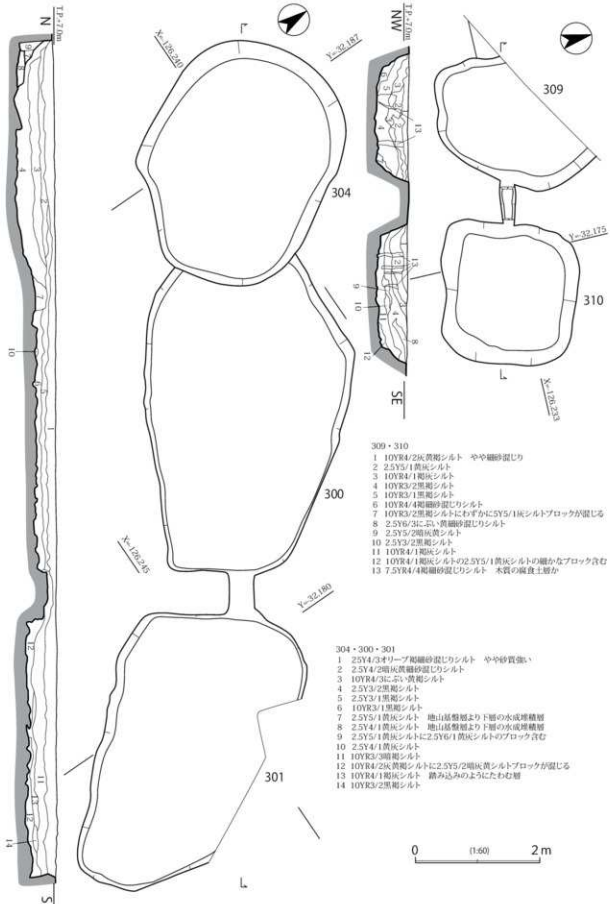
12－1区と13区にまたがって、北西から南東にややふるように連なって検出した。304土坑が300土坑を切る。300土坑と301土坑、302土坑は各々が連結部のような短い溝で接続していて、数珠つなぎ状になる。300土坑と301土坑、302土坑は同時性、関連性のある遺構だろう。

304土坑は長円形で、長径3.9m、短径3.0m、深さ0.6mをはかる。断面は長方形を呈し、壁面が垂直におちる。黒褐色シルトから黄褐色シルトを埋土とする。凸面縄目タタキ、凹面布目の平瓦（第61図－132、写真図版53）や土師器片が出土する。古代の遺構か。

300土坑は長円形で長径5.5m、短径3.1m、深さ0.3mをはかる。断面は長方形を呈し、壁面が垂



第51図　12－1区296土坑・281土坑　平・断面図



309・310
1 10YR4/2灰黄褐シルト　やや細砂混じり
2 2.5Y5/1黄灰シルト
3 10YR4/1褐灰シルト
4 10YR3/2黒褐シルト
5 10YR3/1黒褐シルト
6 10YR4/4褐細砂混じりシルト
7 10YR3/2黒褐シルトにわずかに5Y5/1灰シルトブロックが混じる
8 2.5Y6/3にぶい黄細砂混じりシルト
9 2.5Y5/2暗灰黄シルト
10 2.5Y3/2黒褐シルト
11 10YR4/1褐灰シルト
12 10YR4/1褐灰シルトの2.5Y5/1黄灰シルトの細かなブロック含む
13 7.5YR4/4褐細砂混じりシルト　木炭の微量土層か

304・300・301
1 2.5Y4/3オリーブ褐細砂混じりシルト　やや砂質強い
2 2.5Y4/2暗灰黄細砂混じりシルト
3 10YR4/3にぶい黄褐シルト
4 2.5Y3/2黒褐シルト
5 2.5Y3/1黒褐シルト
6 10YR3/1黒褐シルト
7 2.5Y5/1黄灰シルト　地山基盤堆より下層の水成堆積層
8 2.5Y4/1黄灰シルト　地山基盤堆より下層の水成堆積層
9 2.5Y5/1黄灰シルトに2.5Y6/1黄灰シルトのブロック含む
10 2.5Y4/1黄灰シルト
11 10YR3/3暗褐シルト
12 10YR4/2灰黄褐シルトに2.5Y5/2暗灰黄シルトブロックが混じる
13 10YR4/1褐灰シルト　踏み込みのようにたわむ層
14 10YR3/2黒褐シルト

第52図　12－1区300土坑・301土坑・304土坑・309土坑・310土坑　平・断面図

直におちる。黒褐色シルトから黄褐色シルトを埋土とする。土師器片が出土している。古代以前の遺構か。

301 土坑は長円形もしくは隅丸方形で、長径 4.5 m、短径 3.0 m、深さ 0.5 mをはかる。断面は長方形を呈し、壁面が垂直におちる。黒褐色シルトを埋土とする。300 土坑と 301 土坑の間には、南北中心に長さ 0.6 m、幅 0.4 m、深さ 0.1 mの短い溝が存在し、2つの土坑をつなぐ。301 土坑はさらに南にある 302 土坑とも同規模の溝でつながっている。溝は土坑ほど深くなく、上層の滞水を排水する溝とも考えたが、土坑や溝は水平で傾斜もほぼない。機能は不明である。須恵器片が出土している。

309 土坑・310 土坑（第 52 図、写真図版 34 － 2）

12 － 1 区の北東隅に位置する長円形と方形の土坑である。

309 土坑は長円形で、長径 2.7 m、短径 2.0 m、深さ 0.5 mをはかる。断面は椀形を呈する。黒褐色シルトを埋土とする。杭の抜き痕か植物の根痕のような縦方向の痕跡が認められる。遺物は出土しない。

310 土坑は方形で、1 辺 2.2 m、深さ 0.5 mをはかる。断面は椀形を呈する。黒褐色シルトを埋土とする。杭の抜き痕か植物の根痕のような縦方向の痕跡が認められる。309 土坑と 310 土坑の間には、300 土坑と 301 土坑の間にあるのと同じ、長さが 0.3 m、幅が 0.25 m程度の連結溝が存在する。2つの土坑はほぼ水平である。遺物は出土しない。

41 土坑（第 53 図）

12 － 1 区の西半の中央に位置する不定形の土坑である。方形と円形の土坑がつながって 1 つの土坑として検出したとも考えられる。一部は西壁に切られる。

長辺 4.8 m、短辺 1.9 m、深さ 1.6 ～ 2.1 mをはかる。断面は椀形もしくは長方形を呈する。大きくは 3 層に分層できるが、どの層にも黄灰色シルトや灰白色シルトのブロックを多量に含む。土師器片が出土している。

54 土坑（第 53 図、写真図版 41 － 3）

12 － 1 区の西半の南端に位置する不定形の大形土坑である。東西に長く広がり、中には長円形のくぼみ、もしくはもう一つ土坑があると思われる。東端は東壁に切られる。

現存の長辺 7.0 m、短辺 5.0 m、深さ 0.4 ～ 0.6 mをはかる。断面は長方形を呈する。黄灰色シルトに暗灰黄色シルトの細かいブロックを多量に含む。

須恵器壺の頸部～肩部、体部、底部、土師器片などが出土している（第 60 図 107 ～ 109、写真図版 52 － 5）。遺物から判断すると古代の遺構である。

26 土坑・5 土坑（第 54 図、写真図版 40 － 3）

12 － 2 区の東半に位置する円形と方形の土坑である。26 土坑が 5 土坑を切る。

26 土坑は円形の土坑で、直径 1.3 m、深さ 1.0 mをはかる。断面は逆台形を呈する。埋土は灰色シルト、灰白色シルトなどのシルトブロックの混合層である。

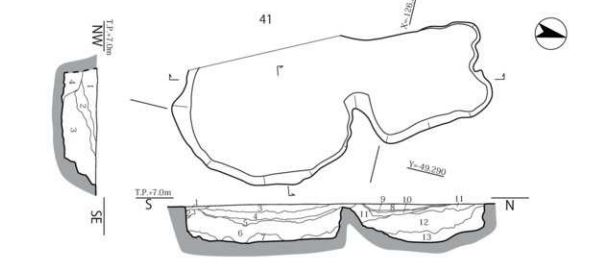
5 土坑は方形の土坑で、1 辺 1.3 m、深さ 0.3 mをはかる。断面は皿形を呈する。埋土は灰色シルトにブロック土を含む。遺物は出土しない。

40 土坑（第 54 図）

12 － 1 区の西半の中央、41 土坑の北東に位置する長方形の土坑である。

長辺 2.5 m、短辺 2.1 m、深さ 0.5 mをはかる。断面は椀形を呈する。黄灰色シルトや黒褐色シルトブロックの混合層である。遺物は出土しない。

27 土坑（第 54 図、写真図版 41 － 1）

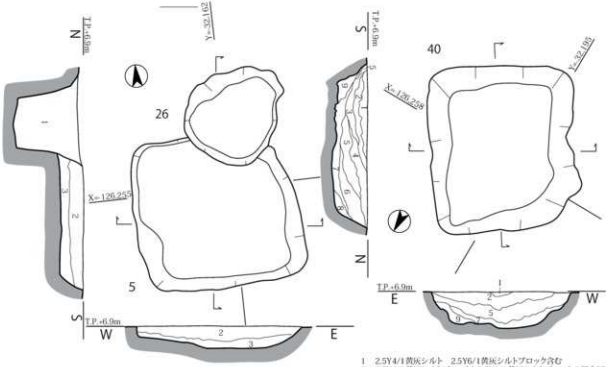


1 2.5Y5/1黄灰シルト 2.5Y7/1灰白シルトブロック含む
2 2.5Y4/1黄灰シルト 2.5Y6/2灰黄シルトブロック少量含む
3 2.5Y6/1黄灰シルト 直径5mm大の2.5Y7/2灰黄シルトブロック少量含む
4 2.5Y5/1黄灰シルトブロックと2.5Y7/1灰白シルトブロックの混合層
5 2.5Y6/1黄灰褐シルト 2.5Y6/2灰黄シルトブロック含む
6 2.5Y3/1黒褐シルト 2.5Y7/2～2.5Y7/1灰黄～灰白シルトブロック多量に含む
7 2.5Y3/1黒褐シルト
8 2.5Y5/1黄灰シルトブロックと2.5Y7/1灰白シルトブロックの混合層
9 2.5Y6/1灰白シルト～極細砂(ラミナ状層)
10 2.5Y5/1黄灰シルト
11 2.5Y4/1黄灰シルト 2.5Y灰白シルトブロック
12 2.5Y3/1黒褐シルト 直径5～20cm大の2.5Y7/1灰白シルトブロック含む
13 2.5Y5/1黄灰シルトブロックと2.5Y7/1灰白シルトブロックの混合層

1 2.5Y4/2暗灰黄微砂混じりシルト やや砂質強い
2 2.5Y5/2暗灰黄シルト
3 10YR5/2灰黄褐シルト わずかにマンガン含む
4 10YR4/1褐灰シルト
5 10YR3/1黒褐シルト
6 10YR5/2灰黄褐シルトに10YR4/1褐灰シルトが斑状されたように混じる
7 2.5Y4/1黄灰シルト
8 2.5Y4/1黄灰シルトに2.5Y4/2暗灰黄シルトの細かいブロック含む
9 2.5Y5/2暗灰黄シルトに10YR4/1褐灰シルトが混じる
10 10YR4/1褐灰シルトに2.5Y4/2暗灰黄シルトが混じる
11 5Y4/1灰シルト
12 5Y3/1オリーブ黒シルト わずかにマンガン含む
13 2.5Y3/2黒褐シルト 粘性強い
14 7.5Y4/2オリーブシルト
15 7.5Y4/1灰シルト
16 5Y4/1灰シルトに12のシルトを細かいブロックで含む
17 2.5Y5/2暗灰黄シルトと2.5Y3/2黒褐シルトがブロック状に混じる
18 2.5Y5/1黄灰シルト、下層に細い帯状の2.5Y3/1黒褐シルトが化粧する
19 2.5Y5/2暗灰黄褐砂～細砂

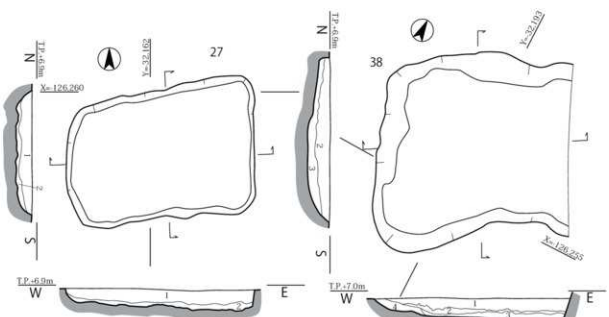
0 (1:60) 2m

第53図 12－2区41土坑・54土坑 平・断面図



1 5Y5/1灰シルトブロック土と5Y7/2灰白シルト～極細砂ブロックと2.5Y4/1中砂混じりシルト～極細砂ブロックとの混合層(旧地表土か?)
2 2.5Y4/2灰黄褐極細砂混じりシルト(下方はややシルト気強い)
3 5Y4/1灰シルト、5Y7/1灰白(シルト～)極細砂ブロック含む(～加工時に崩れたベース土とその後自然に溜まった土の混合層)

1 2.5Y4/1黄灰シルト 2.5Y6/1黄灰シルトブロック含む
2 2.5Y4/1黄灰シルトブロックと2.5Y6/1黄灰シルトブロックの混合層
3 2.5Y5/1～7/1黄灰～灰白シルト～細砂 ラミナ顕著
4 2.5Y4/1黄灰シルトブロックと2.5Y6/1黄灰シルトブロックの混合層(2.に比べブロックが細かい)
5 2.5Y6/1黄灰シルト 2.5Y3/1黒褐シルトブロック含む
6 2.5Y3/1黒褐シルト 2.5Y6/1黄灰シルトブロック含む
7 5Y3/1オリーブ黒シルト
8 5Y6/1灰シルト 2.5Y3/1黒褐シルトブロック少量含む
9 2.5Y3/1黒褐シルト 2.5Y6/1黄灰シルトブロック含む

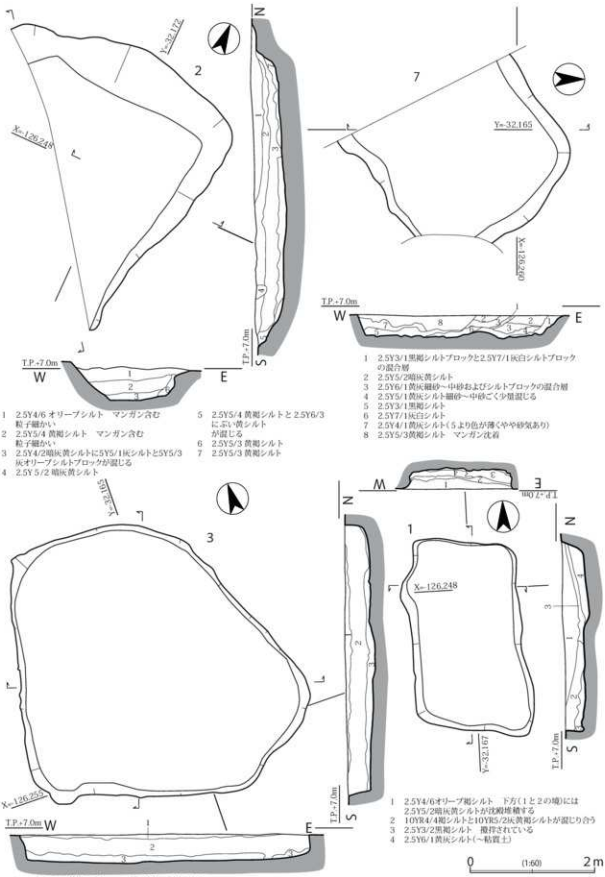


1 2.5Y4/1黄灰シルト、2.5Y7/2灰黄シルトブロック多量に含む～埋め戻し
2 2.5Y6/1黄灰シルト

1 2.2.5Y7/2灰黄シルトブロックと2.5Y4/1黄灰シルトブロックの混合
2 2.5Y5/1黄灰シルト
3 2.5Y7/1灰白シルト 直径5～10mm大の2.5Y4/1シルトブロック含む 2.5Y8/1灰白シルトブロック少量含む
4 2.5Y5/1黄灰シルトブロックと2.5Y7/1灰白シルトブロックの混合層

0 (1:60) 2m

第54図　12－2区５土坑・26土坑・27土坑・38土坑・40土坑　平・断面図



第55図　12－2区１土坑・２土坑・３土坑・７土坑　平・断面図

12－2区の東半に位置する長方形の土坑である。26土坑、5土坑の南にある。東西に長い。

長辺3.0m、短辺2.0m、深さ0.3mをはかる。断面は楕形を呈する。埋土は2層だが、ほとんどは黄灰色シルトに灰黄色シルトのブロックを多量に含む、一挙に埋め戻しが短期間で行われた土の様相である。平瓦や土師器が出土する、古代の遺構である。

38土坑（第54図、写真図版41－2）

12－1区の西半の北側に位置する長方形の大形土坑である。東側何分の1かは調査区外である。

現存の長辺の長さが3.0m、短辺2.8m、深さ0.2～0.4mをはかる。断面は楕形を呈する。埋土は黄灰色シルトに灰黄色シルト、灰白色シルトブロックが混じり合う。遺物は出土しない。

2土坑（第55図、写真図版42－1）

12－2区・12－1区にまたがって、東半に位置する方形の土坑である。12－1区では325土坑と呼称していたが、2土坑に統一した。東南部は調査区外である。

現存の長辺5.1m、短辺3.5m、深さ0.5mをはかる。断面は逆台形を呈する。埋土は暗灰黄色シルトに灰色シルトブロックが混じり合う。須恵器や土師器の破片が出土する。

7土坑（第55図）

12－2区の南半に位置する長方形の土坑である。西半は調査区外である。

現存の長辺3.1m、短辺2.5m、深さ0.3mをはかる。断面は逆台形を呈する。埋土は暗灰黄色シルトに黄灰色シルト、黒褐色シルトブロックが混じり合う。土師器片が出土する。

3土坑（第55図、写真図版40－2）

12－2区の中央、1土坑の南に位置する不整形の大形土坑である。

1辺4.5m、深さ0.45mをはかる。断面は長方形を呈する。埋土は灰黄褐色シルトから褐灰色シルトである。弥生土器壺の底部が出土した（第60図－111、写真図版52－5）。他に須恵器や土師器の小片が出土する。

1土坑（第55図）

12－2区の中央、12－1区近くに位置する長方形の土坑である。

長辺3.0m、短辺1.8m、深さ0.5mをはかる。断面は長方形を呈する。埋土は褐色シルトに灰黄褐色シルトが混じり合う。土師器片が出土している。

307土坑（第56図）

12－1区の中央、北端、296土坑の南に位置する大形の土坑である。296土坑と連結部でつながる。35土坑に続く可能性がある。隅丸方形で280井戸に切られる。

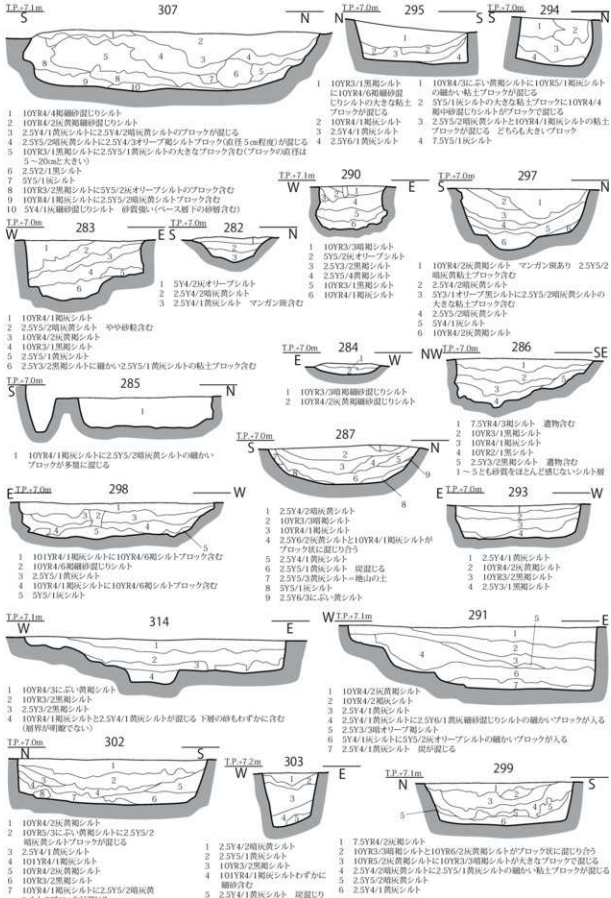
長辺7.0m、短辺3.0m、深さは0.8～0.9mをはかる。断面は楕形を呈する。296土坑と連結部でつながる。

埋土は黒褐色シルトに灰オリーブ色や黄灰色シルトの大きなブロックが混じる。須恵器杯（第60図－117、写真図版52－3）や弥生土器かまたは土師器の壺（第60図－118、写真図版52－4）が出土する。古代の土坑と考えられる。

295土坑（第56図）

12－1区の中央部北側、307土坑の北に位置する土坑である。長円形で、南東部は調査区外である。

長径3.0m、短径1.2m、深さは0.3mをはかる。断面は長方形を呈する。埋土は黒褐色シルトに褐色シルトの大きなブロックが混じる。土師器高杯の杯部が出土している。



第56図　12－１区・13区遺構断面図（１）

294 土坑（第 56 図）

12 － 1 区の西北端に位置する土坑である。長円形で、南部は調査区外である。

長径 1.3 m、短径 0.75 m、深さは 0.45 mをはかる。断面は長方形を呈する。埋土は黄褐色シルトに褐灰色シルトの大きなブロックが混じる。遺物は出土していない。

283 土坑（第 56 図、写真図版 35 － 2）

13 区の西南端に位置する土坑である。円形で、西半は調査区外である。

直径 1.3 m、深さは 0.6 mをはかる。断面は長方形を呈する。埋土は黒褐色シルトに黄灰色シルトブロックが混じる。遺物は出土していない。

282 土坑（第 56 図）

13 区の西南端、283 土坑の北に位置する土坑である。円形で、西半は調査区外である。

直径 1.0 m、深さは 0.25 mをはかる。断面は長方形を呈する。埋土は黒褐色シルトに黄灰色シルトブロックが混じる。遺物は出土していない。

290 土坑（第 56 図、写真図版 35 － 4）

13 区の北に位置する土坑もしくは溝で、297 土坑と接する。

長方形で、全長 3.5 m、幅 0.8 m、深さは 0.45 mをはかる。断面はU字形を呈する。埋土は黒褐色シルトが水平堆積する。土師器片が出土している。

297 土坑（第 56 図、写真図版 35 － 6）

13 区の北に位置する溝で、290 溝と接する。円形で、底面に小円形のくぼみをもつ。

直径 1.5 m、深さは 0.6 mをはかる。断面はU字形を呈する。埋土は黒褐色シルトに暗灰黄色シルトのブロックが混じる。遺物は出土していない。

285 土坑（第 56 図）

13 区の南端に位置する土坑である。隅丸方形である。

長辺 1.8 m、短辺 1.5 m、深さは 0.3 mをはかる。断面は長方形を呈する。埋土は単層で、灰褐色シルトに暗灰黄色シルトの細かいブロックが多量に混じる。遺物は出土していない。

284 土坑（第 56 図）

13 区の南壁際でわずかに検出した土坑である。そのため形状は不明である。

長辺 0.7 m、深さは 0.1 mをはかる。断面は皿形を呈する。埋土は暗褐色細砂混じりシルトである。

286 土坑（第 56 図）

13 区の南半で検出した土坑である。隅丸方形である。

長辺 1.9 m、短辺 1.4 m、深さは 0.5 mをはかる。断面は椀形を呈する。埋土には遺物が含まれる。

298 土坑（第 56 図）

13 区と 12 － 1 区西半の接合部にあたる箇所で検出した、土坑もしくは溝である。長くのびる不定形である。

検出長 4.6 m、幅 2.1 m、深さ 0.3 mをはかる。断面は逆台形を呈する。埋土は褐灰色シルトに褐色シルトブロックを含む。遺物は出土していない。

287 土坑（第 56 図、写真図版 35 － 5）

13 区の中央、286 土坑と 281 土坑の間で検出した土坑である。円形である。直径 1.6 m、深さ 0.4 mをはかる。断面は椀形を呈する。埋土は灰黄色シルトと褐灰色シルトがブロック状に混じり合う。

遺物は出土していない。

293 土坑（第 56 図）

13 区の南壁際で検出した土坑である。302 土坑に切られる。円形と思われる。

直辺 1.3 m、深さ 0.3 mをはかる。断面は長方形を呈する。埋土は黒褐色シルトと褐灰色シルトが水平に堆積する。遺物は出土していない。

314 土坑（第 56 図、写真図版 37 －8）

13 区と 12 －1 区東半の接合部にあたる箇所で検出した土坑である。305 土坑、315 土坑などに切られ、なかには 303 土坑が含まれている。二股の溝状に長くのびる不整形である。

検出長 6.5 m、幅 2.9 m、深さ 0.3 ～ 0.45 mをはかる。断面は逆台形を呈する。埋土は黒褐色シルトである。土師器片が出土している。

291 土坑（第 56 図、写真図版 36 －3）

12 －1 区東半北端で検出した土坑である。314 土坑の北にあたる。円形の北と西に尻尾がついたような形状である。

検出長 3.5 m、幅 2.6 m、深さ 0.6 mをはかる。断面は逆台形を呈する。埋土は黄灰色シルトに灰オリーブ色シルトのブロックが混じる。遺物は出土していない。

302 土坑（第 56 図）

13 区南東隅で検出した土坑である。隅丸方形で南半は調査区外である。

長辺 4.5 m、短辺 2.0 m、深さ 0.45 mをはかる。断面は長方形を呈する。埋土は灰黄褐色シルトに暗灰黄色シルトのブロックが混じる。301 土坑南東隅と 302 土坑北隅が連結部で接続する。連結部は 300 土坑と 301 土坑の連結部と同規模で、幅 0.4 m、長さ 0.7 mをはかる。遺物をわずかに含む。

303 土坑（第 56 図）

13 区と 12 －1 区東半の接合部にあたる箇所で検出した 314 土坑のなかにある土坑で長円形である。

長径 1.5 m、短径 0.6 m、深さ 0.55 mをはかる。断面は逆台形を呈する。埋土は暗灰黄色シルトから褐灰色シルトで、下層に炭が混じる。遺物は出土していない。

299 土坑（第 56 図）

12 －1 区北端で検出した土坑である。隅丸方形で、304 土坑を切る。長辺 1.5 m、深さ 0.5 mをはかる。断面は逆台形を呈する。埋土は暗灰黄色シルトと黄灰色シルトの大きなブロックが混じり合う。遺物は出土していない。

315 土坑（第 57 図）

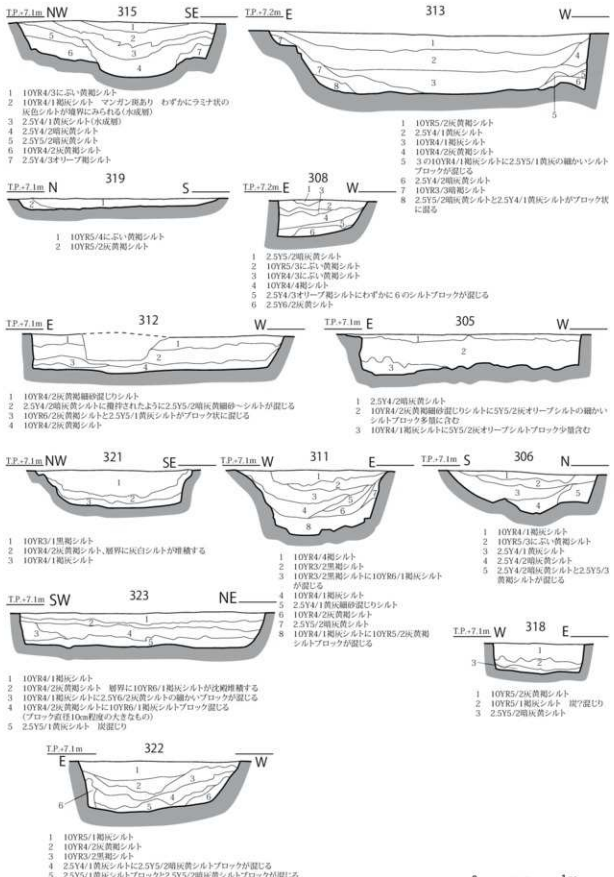
13 区と 12 －1 区東半の接合部にあたる箇所で検出した土坑である。314 土坑、313 土坑、318 土坑を切る。長円形である。

長径 3.0 m、短径 2.1 m、深さ 0.55 mをはかる。断面は逆台形を呈する。埋土は自然堆積のようなラミナが認められる。凸面縄目タタキ、凹面布目の平瓦が出土する（第 61 図－ 130）。古代の土坑である。

313 土坑（第 57 図）

12 －1 区東半北部で検出した長方形の大形土坑である。315 土坑、319 土坑に切られる。

長辺 4.5 m、短辺 3.35 m、深さ 0.6 mをはかる。断面は逆台形を呈する。埋土は下層にブロックがみられるものの、水平に堆積する。土師器片が出土している。312 土坑と長さ 2.0 mの連結部（330 溝）でつながっている。



第57図　12－1区・13区遺構断面図（2）

319 土坑（第 57 図）

12 － 1 区東半北部で検出した土坑である。313 土坑を切る。隅丸方形である。

長辺 2.0 m、短辺 2.1 m、深さ 0.1 mをはかり、断面は皿形を呈する。埋土はにぶい黄褐色シルトである。遺物は出土していない。

308 土坑（第 57 図、写真図版 37 － 7）

12 － 1 区東半北東隅で検出した土坑である。隅丸方形と思われるが、約 1/2 は調査区外である。

長辺 2.0 m、短辺 0.9 m、深さ 0.4 mをはかる。断面は椀形を呈する。埋土はにぶい黄褐色シルトである。遺物は出土していない。

312 土坑（第 57 図）

12 － 1 区東半北部で検出した土坑である。隅丸方形と思われるが、約 1/2 は調査区外である。313 土坑と連結部（330 溝）でつながる。

長辺 4.1 m、短辺 3.1 m、深さ 0.3 mをはかる。断面は逆台形を呈する。埋土は暗灰黄色シルトと灰黄褐色シルトがブロック状に混じり合う。遺物は出土していない。

305 土坑（第 57 図）

12 － 1 区東半と 13 区の接合部で検出した土坑である。隅丸方形で、南西部は調査区外である。

長辺 2.5 m、短辺 2.1 m、深さ 0.4 mをはかる。断面は長方形を呈する。埋土は灰黄褐色シルトに灰オリーブ色シルトがブロック状に混じり合う。遺物は出土していない。

321 土坑（第 57 図、写真図版 36 － 5）

12 － 1 区東半北部で検出した土坑である。隅丸方形である。

長辺 2.7 m、短辺 1.6 m、深さ 0.35 mをはかる。断面は逆台形を呈する。埋土は黒褐色シルトから灰黄褐色シルトである。遺物は出土していない。

311 土坑（第 57 図、写真図版 35 － 7）

12 － 1 区東半北部で検出した土坑である。隅丸方形である。

長辺 2.3 m、短辺 1.5 m、深さ 0.7 mをはかる。断面は逆台形を呈する。埋土は黒褐色シルトから褐灰色シルトである。遺物は出土していない。

306 土坑（第 57 図）

12 － 1 区東半中央部で検出した土坑である。長円形である。

長径 2.0 m、短径 1.6 m、深さ 0.4 mをはかる。断面は椀形を呈する。埋土は暗灰黄色シルトから褐灰色シルトである。土師器片が出土している。

323 土坑（第 57 図、写真図版 36 － 7）

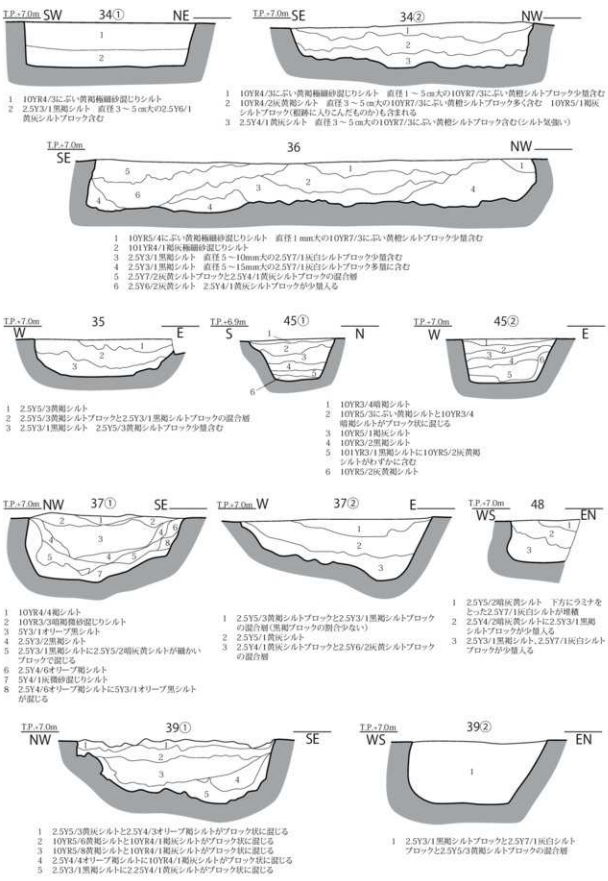
12 － 1 区東半中央部で検出した大形の土坑である。隅丸方形である。

長辺 3.5 m、短辺 2.6 m、深さ 0.35 mをはかる。断面は逆台形を呈する。埋土は灰黄褐色シルトに褐灰色シルトのブロックが混じる。遺物は出土していない。

318 土坑（第 57 図）

12 － 1 区東半北部で検出した土坑である。315 土坑、313 土坑、319 土坑に切られる。隅丸方形もしくは長円形である。

長辺 1.5 m、短辺 1.0 m、深さ 0.3 mをはかる。断面は長方形を呈する。埋土は灰黄褐色シルトである。遺物は出土していない。



第58図　12－2区遺構断面図

322 土坑（第 57 図）

12－1 区東半中央部で検出した土坑である。323 土坑に切られる。隅丸方形である。

長辺 1.6 m、短辺 1.5 m、深さ 0.5 mをはかる。断面は逆台形を呈する。埋土は黄灰色シルトに暗灰黄シルトブロックが混じる。土師器片が出土している。

34 土坑（第 58 図）

12－1 区西半北部で検出した大形の土坑である。長方形で東西に広がり、北は 56 土坑に接する。西側は調査区外である。

検出長辺 5.8 m、短辺 1.8 ～ 2.5 m、深さ 0.4 mをはかる。断面は逆台形を呈する。埋土は褐灰色シルトににぶい黄橙色シルトブロックが混じる。土師器片が出土している。

36 土坑（第 58 図）

12－1 区西半北部で検出した大形の土坑である。正方形で西側は調査区外である。

1 辺は 4.7 ～ 4.9 m、深さ 0.4 mをはかる。断面は長方形を呈する。埋土は大きな土坑が次第に埋まって狭まったような堆積状況を示す。黒褐色シルトや灰黄色シルトに灰白色シルトや黄灰色シルトのブロックが混じる。弥生土器か土師器壺底部（第 60 図－ 112、写真図版 52 －５）や須恵器片が出土する。

35 土坑（第 58 図、写真図版 42 －３）

12－1 区西半北部で検出した 34 土坑の東にある。南北に長い不定形である。

検出長辺は 3.0 m、短辺は 1.5 m、深さ 0.4 mをはかる。断面は長方形を呈する。埋土は黄褐色シルトと黒褐色シルトのブロックが混じる。遺物は出土していない。

45 土坑（第 58 図、写真図版 42 －６）

12－2 区西半で検出した方形の土坑である。西側は壁に切られる。1 辺 0.9 ～ 1.0 m、深さ 0.45 mをはかる。断面は逆台形を呈する。埋土は黒褐色シルトに灰黄褐色シルトがブロックでわずかに混じる。

37 土坑（第 58 図、写真図版 42 －２）

12－2 区西半で検出した不定形の土坑である。東側は調査区外である。

長辺は 2.0 m、短辺は 1.6 m、深さ 0.7 mをはかる。断面は椀形を呈する。埋土は黄褐色シルトと黒褐色シルトブロックの混合層である。遺物は出土していない。

48 土坑（第 58 図）

12－2 区西半で検出した方形の土坑である。東側は調査区外である。1 辺 1.3 m、深さ 0.45 mをはかる。断面は方形を呈する。埋土は暗灰黄色シルトに黒褐色シルトブロックがわずかに混じる。遺物は出土していない。

39 土坑（第 58 図、写真図版 42 －４）

12－2 区西半で検出した方形の土坑である。東側は壁に切られる。

1 辺 1.5 ～ 2.0 m、深さ 0.6 mをはかる。断面は椀形を呈する。埋土は褐灰色シルトと黄褐色シルトがブロックで混じり合う。弥生土器と思われる小片を含む。

46 土坑（第 59 図）

12－2 区西半で検出した方形の土坑である。33 土坑に切られる。

1 辺 1.1 m、深さ 0.45 mをはかる。断面は椀形を呈する。埋土は黒褐色シルトと暗灰黄色シルトの混合層である。土師器片が出土している。

33 土坑（第 59 図）

12－2区西半で検出した不定形の大形土坑である。南北に長く、42土坑、43土坑、52土坑等を切る。

長辺9.0m、短辺2.5m、深さ0.5mをはかる。断面は椀形を呈する。埋土は黒褐色シルトと暗灰黄色シルトの混合層である。

33土坑と46土坑の接する箇所から、凸面縄目タタキ、凹面布目の平瓦が出土する（第61図－133）。底面には須恵器細片もみられた。

47土坑（第59図、写真図版42－7）

12－2区西半で検出した方形の土坑である。33土坑に切られる。

長辺1.9m、短辺1.4m、深さ0.4mをはかる。断面は逆台形を呈する。埋土は黒褐色シルトに黄灰色シルトブロックが混じる。遺物は出土していない。

43土坑（第59図、写真図版42－3）

12－2区西半で検出した長方形の土坑である。33土坑に切られる。

長辺2.2～2.4m、短辺1.4～1.9m、深さ0.4mをはかる。断面は逆台形を呈する。埋土は褐灰色シルトに炭や焼土が含まれていて何かを焼成する目的の土坑とも考えられる。土師器片が出土している。

51土坑（第59図、写真図版42－8）

12－2区西半で検出した長方形の土坑である。

長辺2.1m、短辺1.3m、深さ0.3mをはかる。断面は椀形を呈する。埋土はにぶい黄褐色シルトと灰黄褐色シルトがブロック状に混じる。土師器片が出土している。

52土坑（第59図）

12－2区西半で検出した不定形の土坑である。33土坑に切られる。

長辺1.9m、短辺1.5m、深さ0.3mをはかる。断面は椀形を呈する。埋土はにぶい黄灰色シルトと灰オリーブ色シルトがブロック状に混じる。

475土坑（第59図）

14区北壁際で検出した円形の土坑である。直径0.5m、深さ0.15mをはかる。断面は逆台形を呈する。埋土は灰褐色シルトである。

476土坑（第59図）

14区北壁際で検出した方形の土坑である。1辺2.4m、深さ0.1mをはかる。断面は皿形を呈する。埋土は褐灰色シルトである。遺物は出土していない。

477土坑（第59図）

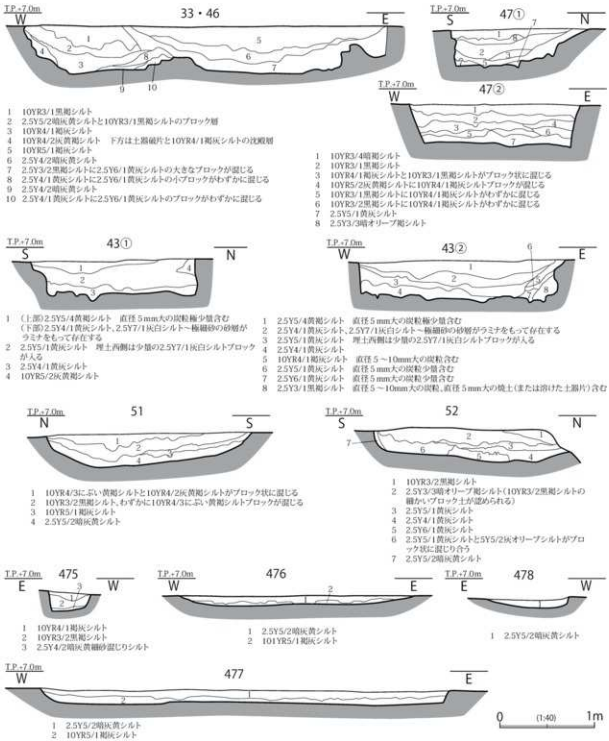
14区北壁際で検出したおそらく隅丸方形の大形土坑である。1辺4.2m、深さ0.1mをはかる。断面は逆台形を呈する。埋土は褐灰色シルトである。遺物は出土していない。

478土坑（第59図）

14区北壁際で検出したおそらく円形の土坑である。直径0.9m、深さ0.1mをはかる。断面は皿形を呈する。埋土は暗灰黄色シルトである。遺物は出土していない。

以上、群集土坑の個々をみてきたが、各群の特徴を抽出していくつかの群に分けることが可能か、検討する。

土坑の配列であるが、12－1区の321土坑から2土坑などは、南北の真方位を意識して、一直線に並んでいるようにもみえる（第48図）。これは土坑を掘削する際には、それぞれの土坑を意識して



第59図　12－2区・14区遺構断面図

いるといえる。一定の間隔をあけて並び切り合いがあるので、322 土坑、324 土坑掘削後、空いている場所を選択して 321 土坑、323 土坑、2 土坑が掘削、あるいは 321 土坑、322 土坑、324 土坑掘削後、323 土坑、2 土坑が掘削されたと考えられる。

この列の西には 312 土坑、313 土坑、319 土坑が、東では 1 土坑、3 土坑、5 土坑がやはり一直線に並ぶ。12 － 1 区の南側の 48 土坑、49 土坑、50 土坑なども一直線上に配列される。

土坑の掘削が一定間隔をもって行われ、掘削されていない場所を探して、新しく土坑が掘られたとすれば、土坑が規則性をもって並ぶのも当然といえる。

また、土坑群が一時に形成されたかのか、長期間にわたって形成されかという問題である。土坑の時期については、土坑から出土する遺物は弥生時代から古代までにわたり、わずかに明らかに構成の混入等が考えられる中世のものも含まれる。とすると、土坑群は長期間で形成されたことになるが、古代の須恵器ほかが多いことなどから、古代の所産となる可能性が最も高い。

ただし、各土坑からの出土遺物が少なく、ほとんどが細片のため、明確な新旧は決めがたい。

上述の一定間隔で配置された土坑は同時か、きわめて短期間に形成され、それと切り合いをもつ土坑は新旧があるのは明白だが、どれほどの時期差があるかは判明できなかった。また、12 土坑と 313 土坑、309 土坑と 310 土坑のような連結溝によってつながれているものは、同時期に掘削された土坑と考えてよいだろう。

次に、土坑の規模であるが、1 辺 2 m程度のものから、7 、8 mのものまで様々である。ただし、大きな土坑は、隣接する複数の土坑がつながった結果、大きくなったと考えられるものもある。

深さも 0.1 m程度のものから、0.7 ～ 1.0 mと深いものもあり、様々である。傾向として、北側の土坑が深く、南にいくと浅くなるようである。これは、土坑の掘削目的が土坑を掘り込んだ基盤層の土壌採取が目的であるならば、土壌の堆積が厚いところで厚く、薄いところで薄く掘削するのは当然だろう。

土坑の埋土であるが、単一層や水平に自然堆積するものもみられるが、多くは数層に分層でき、基盤層のブロックを大小の違いはあるが含んでいる。これは土坑を掘り込んだ後、短期間で埋め戻したことを示している。これらのことから、土坑に大きな類別はできないと判断した。

これらの土坑を掘削した目的であるが、規模が不統一で、形状が長方形でなく円形を基本とすることや、土器などの遺物が少なく人骨や土器棺、木棺などの存在を示唆させる遺物も出土していないことから、墓の可能性は低い。

以上の根拠から、粘土の採掘を目的として掘削された土坑と考えるのが、群集土坑の機能として最も妥当ではないだろうか。

その説の根拠として、当地の北東約 0.5km には梶原寺や東大寺に瓦を供給したとされる梶原瓦窯跡の存在がある。ここでは窯跡や工房跡は検出されているが、粘土採掘場は検出されていない。低地の粘土堆積地で粘土を採掘し、燃料を得やすい山麓に窯を作って焼成したという推測も成り立つ。この推測を補強する一助として、群集土坑を形成する基盤層の土を採取し、これに当遺跡で出土した梶原瓦窯産の瓦や土器、梶原窯跡そのもので出土した瓦をあわせて、胎土分析を行った。その結果は第 4 章に掲載したので、参照されたい。

また、群集土坑については、第 5 章第 2 節でも埋土や深さを指標として、再度詳細な検討を試みた。

（2）遺物（第 60・61 図、写真図版 52 ～ 54）

12 － 1 区、12 － 2 区、13 区遺構・包含層出土遺物（第 60 図、写真図版 52 ～ 54）

107 は 12 － 2 区の 54 土坑から出土した。須恵器壺の頸部から肩部である（写真図版 52 － 5）。

頸部径 5.2cm、肩部径 14.8cm、残存高 5.0cmをはかる。口縁部及び体部以下を欠損する。外面は灰色、内面は灰白色を呈する。

108 は 12 － 2 区の 54 土坑の中央南周辺から出土した。須恵器壺の底部である（写真図版 52 － 5）。

底径 8.0cm、残存高 3.4cmをはかる。内外面とも灰白色を呈する。

109 は 12 － 2 区の 54 土坑、55 土坑の境界から出土した。須恵器壺の体部から底部である（写真

図版 52 － 5）。高さより径が大きく膨らみ下に重心をもつ器形をとる、壺Lの可能性がある。

底径 7.2cm、残存高 8.6cmをはかる。内外面とも灰色を呈する。

110 は 12 － 2区の 58 土坑の最底部から出土した（写真図版 43 － 1）。須恵器壺の体部から底部である（写真図版 52 － 1）。壺Lであろう。

底径 8.5cm、残存高 9.4cmをはかる。内外面とも灰色を呈する。外面には粘土の塊が付着し、自然釉がみられる。平城Ⅲ～Ⅳ型式、8 世紀中頃のものか。

111 は 12 － 2区の 3 土坑から出土した。弥生土器壺の底部である（写真図版 52 － 5）。

底径 4.7cm、残存高 3.3cmをはかる。外面はにぶい黄橙色、内面は灰色を呈する。磨滅のため調整不明だが、外面に土器焼成時の黒斑が残る。

112 は 12 － 2区の 36 土坑から出土した。土師器壺底部である（写真図版 52 － 5）。

底径 5.8cm、残存高 1.5cmをはかる。外面は橙色、内面は灰色を呈する。磨滅のため調整不明である。

113 は 12 － 2区の 28 溝から出土した（第 50 図）。土師器杯である（写真図版 52 － 2）。

口径 16.7cm、器高 3.8cmをはかる。内外面ともにぶい黄橙色を呈する。磨滅が著しく、調整不明である。

114 は 13 区の 281 土坑から出土した（写真図版 35 － 3）。弥生土器壺の体部から底部である。

底径 7.6cm、残存高 15.8cmをはかる。内外面ともにぶい黄橙色を呈する。土坑の北東隅、上層にかたまって出土したが、細片化されていた。磨滅のため調整不明であるが、器形から弥生時代前期中葉、摂津Ⅱ様式の壺と考えられる。

115 は 12 － 1区の 296 土坑から出土した。弥生土器壺の底部である（写真図版 52 － 4）。

底径 5.4cm、残存高 2.0cmをはかる。外面はオリーブ黒色、内面はにぶい黄褐色を呈する。

116 は 12 － 1区の 296 土坑から出土した。土師器壺の底部である。

底径 6.2cm、残存高 2.1cmをはかる。外面は灰色からにぶい黄色、内面は黄灰色を呈する。

117 は 12 － 1区の 307 土坑から出土した。須恵器杯である（写真図版 52 － 3）。

口径 12.4cm、底径 10.0cm、器高 4.3cmをはかる。内外面とも灰色を呈する。底部から体部はやや内弯しながら直立気味にたちあがる。内面にわずかに炭状の痕跡（皮膜）が認められる。

118 は 12 － 1区の 307 土坑から出土した。弥生土器か土師器壺の底部である（写真図版 52 － 4）。

底径 5.8cm、残存高 2.5cmをはかる。外面はにぶい黄橙色、内面は黒色を呈する。

以上のように、12区、13区の群集土坑から出土する土器は弥生土器と古代末の須恵器が多くを占める。

119 は 12 － 1区の 280 井戸の井筒内から出土した。陶器碗の底部である。底径 6.0cm、残存高 2.8cmをはかる。高台が高く、露胎である。素地はにぶい赤褐色だが、内外面とも灰白色の釉薬がかけられ、線状の文様が筆書きされる。内面は体部のたちあがり部分が蛇の目釉剥ぎである。

120 は 12 － 1区の 280 井戸の井筒内から出土した。陶器碗の底部である。

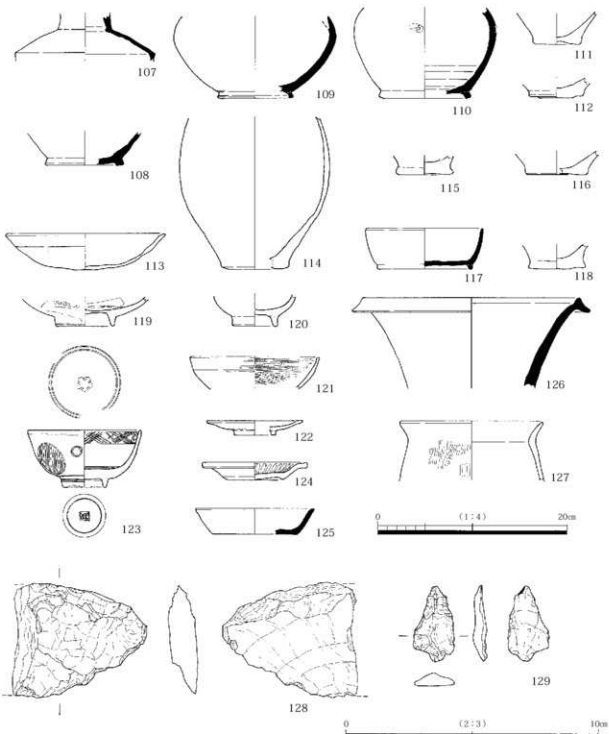
底径 4.4cm、残存高 3.1cmをはかる。高台は端部が丸く、接地面のみ露胎である。内外面とも施釉され、浅黄色を呈する。

121 は 12 － 2区の東側南部、第 2 層から出土した。瓦器椀の口縁部から体部である。

口径 13.6cm、残存高 3.4cmをはかる。内外面とも灰色を呈する。外面は口縁部に、内面は体部に幅 0.5㎜の細いミガキが入る。楠葉型Ⅱ － 1 ～ 2 型式、12 世紀後半の瓦器椀である。

122 は 12 － 2区の西側北部、第 2 層上面から出土した。白磁皿である。

口径 10.1cm、底径 4.3cm、器高 1.5cmをはかる。高台は底面に水平で、体部は浅く口縁は丸みを帯びる。



第60図　12－1・12－2・13区遺構・包含層出土遺物実測図

内外面とも灰白色を呈する。

123は12－1区の西側北部、第2層から出土した。染付磁器碗である。

口径11.8cm、底径4.4cm、器高6.1cmをはかる。底部が厚く、高台は端部が丸く、接地面のみ露胎である。内外面とも呉須で文様が描かれて施釉される。外面は、口縁部に圏線1条、体部には大小の丸文が、高台との境には圏線3条が描かれる。外面底部は1条の圏線を巡らせた後、中心に「國」文を描く。内面口縁部は圏線で区画した中に斜め格子文と花文らしきものを描き、見込みには2条の圏

線と中心に５弁花文を描く。

124は12－1区の東側北部、第２層から出土した。陶器皿である。

口径11.0㎝、底径6.0㎝、器高1.8㎝をはかる。内外面とも灰白色を呈する。これは素地の色で、内外面とも淡緑色の釉薬がかけられていたが、かなり剥離する。内面見込みには鉄釉が認められる。口縁端部は丸く折り返し、内面は菊花状の沈彫りが施される。瀬戸系東海産陶器の折縁ソギ皿と呼ばれるものである。

125は12－2区の東側中央部、黒色シルト層から出土した。須恵器杯である。底径9.0㎝、器高2.7㎝をはかる。内外面とも灰白色を呈する。

126は12－2区の東側南部、西側溝から出土した。須恵器甕の口縁部から体部である（写真図版52－5）。口径23.0㎝、残存高9.5㎝をはかる。外面はにぶい黄褐色、内面は橙色を呈する。口縁部は内外に拡張する。

127は12－2区の西側溝から出土した。土師器甕の口縁部から体部である。口径15.1㎝、残存高6.3㎝をはかる。体部外面にタテハケメを施す。

128は12－1区の西側南端から出土した。石器未製品である（写真図版54－1）。

片端の垂直面は折れにより生じたか。石庖丁等を作成途中の細かな調製や研磨がなされる前のもので、加工の際折れたため製品にならなかったと考える。長さ5.4㎝、幅4.6㎝、厚さ1.1㎝をはかる。北摂山地から亀岡に岩脈をもつ丹波帯、秩父古生層の頁岩もしくは粘板岩製である。

129は12－2区の東側南端から出土した。石鏃であるがかなり磨滅する。わずかに突出した部位が認められるので、平基式有茎の磨製石鏃であろう（写真図版54－1）。

長さ3.0㎝、幅1.7㎝、厚さ0.5㎝をはかる。これも128と同じく、頁岩もしくは粘板岩製である。

12－1区、12－2区、13区出土瓦（第61図、写真図版53）

130は12－2区の2土坑の最下層から出土した。平瓦である（写真図版53）。

残存長11.5㎝、残存幅13.2㎝、厚さ2.5㎝をはかる。凹凸面とも明黄褐色を呈する。凸面は粗い斜め格子タタキが認められる。凹面は布目痕がわずかに残る。

131は12－1区の315土坑から出土した。平瓦である。残存長9.5㎝、残存幅6.0㎝、厚さ2.0㎝をはかる。凹凸面とも灰白色を呈する。凸面は縄目タタキが認められる。凹面は布目痕が残る。

132は12－1区の304土坑から出土した。平瓦である（写真図版53）。残存長10.0㎝、残存幅12.2㎝、厚さ3.1㎝をはかる。凸面灰褐色、凹面褐色を呈する。凸面は縄目タタキが認められる。凹面は布目痕が残る。

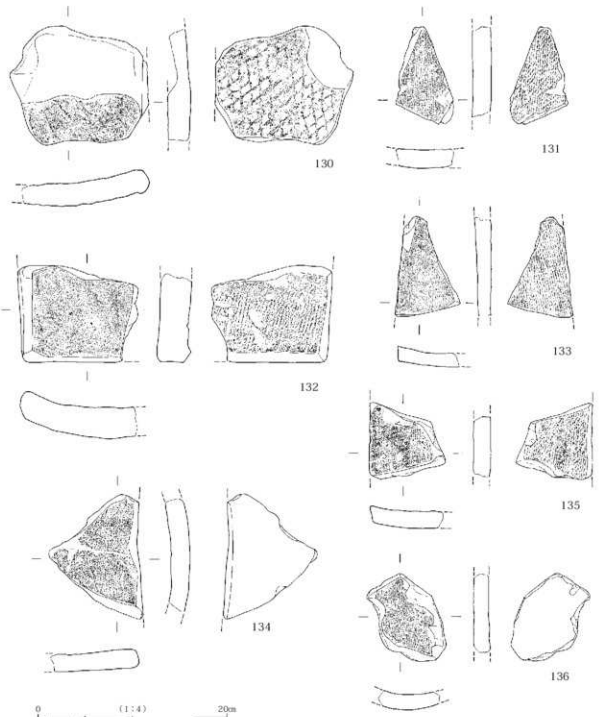
133は12－2区の33土坑、46土坑の境界から出土した。平瓦である。残存長10.3㎝、残存幅6.5㎝、厚さ1.7㎝をはかる。凹凸面とも青灰色を呈する。凸面は縄目タタキが認められ、凹面は布目痕が残る。

134は12－2区の東側南端部、第２層から出土した。平瓦もしくは軒平瓦である。

残存長11.5㎝、残存幅9.0㎝、厚さ2.1㎝をはかる。凸面にぶい黄橙色、凹面浅黄色を呈する。凸面はナデ、凹面は布目痕が残る。

135は12－1区の東側北端部、第２層から出土した。平瓦である。残存長6.4㎝、残存幅7.7㎝、厚さ1.8㎝をはかる。凹凸面とも浅黄色を呈する。凸面は縄目タタキ、凹面は布目痕が残る。

136は13区の第３層上面から出土した。丸瓦である。残存長7.6㎝、残存幅6.0㎝、厚さ1.8㎝をはかる。凹凸面とも明黄褐色を呈する。凸面はナデか、凹面は布目痕が残る。



第61図　12－1・12－2・13区出土瓦実測図

12－1区、12－2区、13区で出土した瓦は1－3区や6－2区で出土した瓦と同様に、梶原寺窯跡で作られた可能性が高く、時期も同じものである。

＜参考文献＞

鎌田博子編　1998 『梶原瓦窯跡発掘調査報告書』 名神高速道路内遺跡調査会

岡村勝行編　1999 『細工谷遺跡発掘調査報告Ⅰ』（財）大阪市文化財協会

井上智博編　2008 「土坑状変形」『讃良郡条里遺跡Ⅵ』（財）大阪府文化財センター

森田克行　1990 「摂津地域」『弥生土器の様式と編年』 近畿編Ⅱ　木耳社

第４章　自然科学分析

第１節　群集土坑の粘土、出土瓦と梶原瓦窯跡出土瓦の胎土分析

（１）分析の目的と遺構の概要

埴輪や土師器などの胎土分析は、一般的には製作地の推定を目的として行われる場合が多い。しかしながら、例えば胎土中に含まれる岩石片の鉱物組成から、砂粒物の示す地域がいずれであるかを推定するのは容易でない。焼物は、基本材料として粘土と砂粒などの混和材から構成されるが、粘土材料が比較的良質とも思える粘土層から採取されていたことが、粘土採掘坑の調査から推察される（藤根・今村 2001）。また、粘土自体に珪藻化石やプラント・オパール、放散虫化石が混在している場合があり、材料の粘土が生成された時の環境がわかる。

一方、混和材としての砂粒物は、粘土層から粘土を採取する際に、粘土層の上下層や周辺に分布する砂層などから採取されたと予想される。東海地域の弥生時代後期の赤彩を施したパレススタイル土器では、３分の１程度の土器に、砂粒物として火山ガラスが多量に含まれている（藤根 1998、車崎ほか 1996）。これらの火山ガラスは、粘土採取場所の上下層や周辺に分布するテフラ層由来と考えられる。胎土分析においては、粘土や混和材について微化石類およびテフラなどの鉱物を含めて検討する必要がある。

本章では、梶原西遺跡の中央域と南部域から出土した瓦、土器及び梶原瓦窯跡から出土した瓦について、蛍光Ｘ線分析および薄片の偏光顕微鏡観察を行い、化学組成および粘土の種類と砂粒組成等の特徴について調べ、報告する。

今回胎土分析を試みる目的は、主に南部域で検出した群集土坑の性格を明確にすることにある。

群集土坑は 80 ～ 90 基を検出したが、13 区と 14 区の間の未調査地にも土坑は存在し、一帯には 100 基以上の土坑が広がっていたと考えられる（第 48 図）。

土坑は平面形が隅丸方形もしくは長方形が主であるが、円形に近いものや不整形のものもある。規模は小さいものでは１辺 1.5 ～ 2.0 m程度であるが、大きなものは１辺 5.0 ～ 8.0 mある。深さは浅いもので 0.3 m程度、深いものは 0.7 ～ 0.8 mある。北側に深い土坑が集中する傾向がある。底面はほぼ平らで、壁面が袋状にオーバーハングしたものはなかった。断面形は椀形や逆台形をなす。埋土は数層が層序をなして堆積する自然堆積と思われるものと、シルトから粘土のブロックを含む埋め戻し土の単一層と思われるものが混在する。

土坑は、北側に密集する傾向があり、切り合いが認められるが、南ではやや疎らである。

また、群集土坑の形成された時期であるが、土坑出土遺物は弥生時代、古墳時代、古代とあるが、遺物量も少量で完形になるものもなく、長期間土坑が掘られ続けたのか、古い時代の土器が後世の混入なのかも現時点では明確な判断がつかない。最も高い可能性としては、古代の所産と推定している。

この群集土坑の性格であるが、木棺や骨などの有機遺物は残存せず、土器棺や副葬品になるような遺物も出土していない。また、深さも浅いものが多いことから墓とは考えにくい。貯水や貯蔵施設としたとするにも、このままでは貯水施設にならず、貯蔵穴としても断面や埋土に穀物などの有機物、炭化物も認められなかった。埋土に大きな土の塊が混じってみられることから、発掘調査段階では土を採取するために掘削した粘土採掘坑と推測した。

現地調査においては推測に基づき、土坑の埋土ではなく土坑がつくられた基盤土壌を採取した。

粘土の胎土分析という理化学的分析を行うことによって、胎土組成が土器などの製品製作に適しているかどうか判断できるが、梶原西遺跡やその周辺の遺跡から出土する土器・土製品と近似すれば、この粘土を用いて当遺跡周辺でこれらの製品が作られたとする推論を導き出せる。

当遺跡で群集土坑が検出できるのは、6－2区の南壁際、12－1区、12－2区、13区、14区に限定される（第62図）。これは12－2区の南半や6－2区の南半が低地部という、地形環境に起因すると考えられる。また、土坑の深さが12－2区より北にいくほど深く、12－1区の北壁際が最も深いのも、ここに粘土が厚く堆積し粘土採掘に適していたという、粘土採掘坑説の裏付けになりうる。

粘土採掘坑と仮定するとこの粘土で何を作ったかという疑問が生じる。当調査区内では窯跡などの生産遺構や特定種の未製品、製品が大量に検出されていない。粘土を採取し、どこかに運搬し生産したと考えるしかない。

そこで、出土遺物で瓦に着目した。瓦は1－3区、6－2区、12－1区、12－2区、13区、14区の広い範囲で出土した（第62図）。ただし、小片が多く、まとまって出土しないので二次的な遺物と言える。平瓦と丸瓦が主であるが、梶原瓦窯跡から出土したものと類似する特徴をもつ瓦も認められた。

梶原瓦窯跡は当遺跡の北約0.5kmの山麓部に位置する（第4図）。7世紀半ばから8世紀半ばまでの窯5基と工房跡とされる掘立柱建物などを名神高速道路内遺跡調査会が調査している。梶原寺や東大寺に瓦を供給したとされる。この生産遺構で出土した瓦（現在は高槻市教育委員会埋蔵文化財調査センターが保管）も比較資料として分析を行えば、より精度が高い結果が得られると考える。

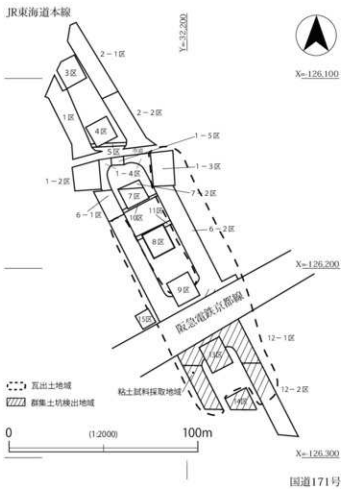
（2）分析試料の概要

胎土分析試料は表1のとおりである。

試料1・2は12－2区西半北側で採取した。近接した地点で採取した大きなブロック2かたまりからそれぞれ作製する。試料3・4は12－1区と1－3区の包含層、遺構から出土した瓦の小片である。梶原瓦窯跡出土資料と類似し、出土地点・層が限定される点から選択した。

試料5・6は高槻市教育委員会で保管する梶原瓦窯跡出土瓦である。報告書未掲載資料であるが、試料3・4と類似した1号窯から出土した資料を選択した。

試料7・8は粘土採掘坑と考える土坑や古代の遺構から出土した土師器である。従って、試料3から6よりは新しくなると考えられる。瓦以外の製品を制作した可能性を考え、在地生産の可能性も想定される



第62図　試料採取地点

表1　分析を行った試料とその詳細

分析 No.	地区名	地区別	層位・遺構名	登録番号	種類	色調	時期	備考	分析項目 薄片観察	分析項目 蛍光X線
1	12-2	3C-1f	第1面ベース直下層		粘土	10YR5／1褐灰			○	○
2			第1面ベース土			5YR5／1褐灰				○
3	12-1	2C-9f（j）	1層・2層	278	瓦	2.5YR5／2明赤褐			○	○
4	1-3	3B-2f	434 周溝（南辺）上層（平安）	425		5YR6／1灰	7～8世紀	高槻市提供資料		○
5	幟原瓦窯		1号窯出土		瓦（平瓦f、g）	5B5／1青灰			○	○
6					瓦（平瓦a1）	5PB5／1青灰				○
7	1-3	3B-1e・f	432 井戸（断面図6層）出物内	489	土師器羽釜	5Y6／6橙	9～10世紀		○	○
8	12-2	2C-7g	27 土坑	151	土師器甕	7.5Y6／6橙				○

土師器を選択した。

胎土分析には薄片を作成して観察する分析と蛍光X線分析がある。前者は鉱物組成や岩石組成、粒度組成が、後者は化学組成が求められる。両者を並行して行うのが効果的であるが、薄片分析はグループで1点の計4点、蛍光X線分析は8点の計12点行った。

（3）分析方法

薄片の偏光顕微鏡観察

薄片作製は、（1）試料は、はじめに岩石カッターなどで整形し、恒温乾燥機により乾燥させた。全体にエポキシ系樹脂を含浸させ、固化処理を行った。これをスライドグラスに接着し、接着面と反対の面に平面を作製した後、同様にしてその平面の固化処理を行った。なお、粘土試料は、電気炉を用いて750℃、6時間で焼成し、同様の処理を行った。（2）さらに、研磨機およびガラス板を用いて研磨し、平面を作製した後、スライドグラスに接着した。（3）その後、精密岩石薄片作製機を用いて試料を切断し、ガラス板などを用いて研磨し、厚さ0.02㎜前後の薄片を作製した。仕上げとして、研磨剤を含ませた布板上で琢磨し、コーティング剤を塗布した。

薄片は、偏光顕微鏡を用いて薄片全面にみられた微化石類（放散虫化石、珪藻化石、骨針化石など）と大型粒子の特徴およびその他の混和物について、観察と記載を行った。

なお、以下に、土器胎土中粒子を同定または分類する際の各分類群の特徴を示す。

[放散虫化石]

放散虫は、放射仮足類に属する海生浮遊性原生動物で、その骨格は硫酸ストロンチウムまたは珪酸からなる。放散虫化石は、海生浮遊生珪藻化石とともに外洋性堆積物中に含まれる。

[珪藻化石]

珪酸質の殻をもつ微小な藻類で、大きさは10～数百μm程度である。珪藻は、海水域から淡水域に広く分布する。小杉（1988）や安藤（1990）は、現生珪藻に基づいて環境指標種群を設定し、具体的な環境復原を行っている。ここでは、種あるいは属が同定できる珪藻化石（海水種、淡水種）を分類した。

[骨針化石]

海綿動物の骨格を形成する小さな珪質、石灰質の骨片で、細い管状や針状からなる。海綿動物の多くは海産であるが、淡水産としても23種ほどが知られ、湖や池あるいは川の底に横たわる木や貝殻などに付着して生育する。したがって、骨針化石は水成環境を指標する。

[植物珪酸体化石]

主にイネ科植物の細胞組織を充填する非晶質含水珪酸体であり、長径約10～50μm前後である。一般にプラント・オパールとも呼ばれ、イネ科草本やスゲ、シダ、トクサ、コケ類などに存在する。

[胞子化石]

胞子は、直径約 10 ～ 30 μ m 程度の珪酸質の球状粒子である。胞子は、水成堆積物中に多く見られるが、土壌中にも含まれる。

[石英・長石類]

石英および長石類は、いずれも無色透明の鉱物である。長石類のうち、後述する双晶などのように、光学的な特徴をもたないものは石英と区別するのが困難である場合が多く、一括して扱う。

[長石類]

長石は、大きく斜長石とカリ長石に分類される。斜長石は、双晶（主として平行な縞）を示すものと累帯構造（同心円状の縞）を示すものに細分される（これらの縞は組成の違いを反映している）。カリ長石は、細かい葉片状の結晶を含むもの（パーサイト構造）と格子状構造（微斜長石構造）を示すものに分類される。また、ミルメカイトは斜長石と虫食い状石英との連晶（微文象構造という）である。累帯構造を示す斜長石は、火山岩中の結晶（斑晶）に見られることが多い。パーサイト構造を示すカリ長石は、花崗岩などケイ酸分の多い深成岩などに産出する。

[雲母類]

一般的には黒雲母が多く、黒色から暗褐色で、風化すると金色から白色になる。形は板状で、へき開（規則正しい割れ目）にそって板状に剥がれ易い。薄片上では長柱状や層状に見える場合が多い。花崗岩などのケイ酸分の多い火成岩に普遍的に産し、変成岩類や堆積岩類にも産出する。

[輝石類]

主として斜方輝石と単斜輝石とがある。斜方輝石（主に紫蘇輝石）は、肉眼的にビール瓶のような淡褐色および淡緑色などの色を呈し、形は長柱状である。ケイ酸分の少ない深成岩類や火山岩類、ホルンフェルスなどのような高温で生じた変成岩類に産する。単斜輝石（主に普通輝石）は、肉眼的に緑色から淡緑色を呈し、柱状である。主としてケイ酸分の少ない火山岩類やケイ酸分の最も少ない火成岩類や変成岩類中にも産出する。

[角閃石類]

主として普通角閃石であり、色は黒色から黒緑色で、薄片上では黄色から緑褐色などである。形は、細長く平たい長柱状である。閃緑岩のような、ケイ酸分が中間的な深成岩類や変成岩類あるいは火山岩類に産出する。

[ガラス質]

透明の非結晶の物質で、電球のガラス破片のような薄く湾曲したガラス（バブル・ウォール型）や小さな泡をたくさんもつガラス（軽石型）などがある。主に火山噴火により噴出した噴出物（テフラ）である。

[片理複合石英類]

石英、長石類、岩片類などの粒子が集合し、片理構造を示す岩石である。

[砂岩質・泥岩質]

石英、長石類、岩片類などの粒子が集合し、基質部分をもつ。構成粒子の大きさが約 0.06㎜以上のものを砂岩質、約 0.06㎜未満のものを泥岩質とした。

[複合石英類]

複合石英類は、石英の集合している粒子で、基質（マトリックス）の部分をもたないものである。個々

の石英粒子の粒径は、粗粒から細粒までさまざまである。ここでは便宜的に、個々の石英粒子の粒径が0.01㎜未満のものを微細、0.01～0.05㎜のものを小型、0.05～0.10㎜のものを中型、0.10㎜以上のものを大型と分類した。微細結晶の集合体である場合には、堆積岩類のチャートなどに見られる特徴がある。

[石灰質類]

微小～小型～大型の方解石から構成され、結晶度は低いものから高いものまで見られる。結晶度、構成粒子の大きさなどの構造に基づいて分類される。

[斑晶質・完晶質]

斜長石や輝石・角閃石などの結晶からなる斑晶構造を示し、基質は微細な鉱物やガラス質物からなる岩石である。

[流紋岩質]

石英や長石などの結晶からなる斑晶構造を示し、基質は微細な鉱物やガラス質物からなり、流理構造を示す岩石である。

[凝灰岩質]

ガラス質で斑晶質あるいは完晶質構造を持つ粒子のうち、結晶度が低く、直交ニコルで観察した際に全体的に暗い粒子である。

[不明粒子]

下方ポーラーのみ、直交ポーラーのいずれにおいても不透明な粒子や、変質して鉱物あるいは岩石片として同定不可能な粒子を不明粒子とした。

蛍光X線分析

蛍光X線分析では、土器のガラスビードを作製し、ガラスビード法による分析を行った。まず採取した土器破片を、表面の汚れ等の影響を排除するため、岩石カッターで表面を削った後、さらに精製水で超音波洗浄を行った。試料をセラミック乳鉢で粉末にして、るつぼに入れ、電気炉で750℃、6時間焼成した後、デシケータ内で放冷し、1.8000 g秤量した。これを、無水四ホウ酸リチウム $Li_2B_4O_7$ と、メタホウ酸リチウム $LiBO_2$ を8:2の割合で調製した融剤3.6000 gと十分に混合し、白金製るつぼに入れ、ビードサンプラーにて約750℃で250秒間予備加熱、約1100℃で150秒間溶融させ、約1100℃で450秒間揺動加熱してガラスビードを作製した。

分析は、フィリップス社製波長分散型蛍光X線分析装置MagiX（PW2424型）にて、検量線法による定量分析を行った。標準試料には、独立行政法人産業技術総合研究所地質調査総合センターおよび米国標準技術研究所（NIST）の岩石標準試料計15種類を用いた。定量元素は、酸化ナトリウム（Na_2O）、酸化マグネシウム（MgO）、酸化アルミニウム（Al_2O_3）、二酸化ケイ素（SiO_2）、五酸化二リン（P_2O_5）、酸化カリウム（K_2O）、酸化カルシウム（CaO）、酸化チタン（TiO_2）、酸化マンガン（MnO）、酸化鉄（Fe_2O_3）の主成分10元素と、ルビジウム（Rb）、ストロンチウム（Sr）、イットリウム（Y）、ジルコニウム（Zr）、バリウム（Ba）の微量成分5元素の計15元素である。また、焼成前後の重量（0.1mg単位）より強熱減量（LOI）を算出した。

（4）結果および考察

以下に、土器胎土薄片の顕微鏡観察および蛍光X線分析結果について述べる。土中の粒子組成については、微化石類や鉱物・岩石片を記載するために、プレパラート全面を精査・観察した。以下では、

表２　胎土中の微化石類と砂粒物の特徴

分析 No.	種類	粒度	最大粒径	微化石類の特徴	砂粒物岩石・鉱物組成
1	粘土	80μm－200μm	0.37㎜	珪藻化石（海水種 Coscinodiscus 属 /Thalassiosira 属、淡水種湖沼浮遊生指標種群 Aulacoseira granulata）、骨針化石多産（302）、植物珪酸体化石多産、脆子化石	岩母類）石英・長石類）斜長石（双晶）、カリ長石（パーサイト）、複合石英類（微細）、角閃石類、ガラス質、ジルコン
3	瓦	80μm－140μm	1.88㎜	骨針化石（４）、植物珪酸体化石	石英・長石類）複合石英類（微細）、斜長石（双晶）複合石英類（大型）、雲母類、砂岩質、凝灰岩質、斜方輝石、ガラス質、ジルコン、単斜輝石
5	瓦 （平瓦ｆ、ｇ）	60μm－180μm	1.14㎜	骨針化石（５）、植物珪酸体化石	石英・長石類）複合石英類（微細）斜長石（双晶）、ガラス質、複合石英類（大型）、雲母類、流紋岩質、角閃石類、ミルメカイト、ジルコン
7	土師器羽釜	100μm－650μm	2.11㎜	珪藻化石（淡水種 Cymbella 属 /Pinnularia 属、Navicula 属、陸生珪藻 Pinnularia borealis）、骨針化石、植物珪酸体化石多産、脆子化石	ガラス質）石英・長石類、斜長石（双晶）カリ長石（パーサイト）、複合石英類（微細）複合石英類（大型）、流紋岩質、角閃石類、凝灰岩質、ジルコン、単斜輝石

粒度組成や 0.1㎜前後以上の鉱物・岩石片の砂粒組成、計数も含めた微化石類などの記載を示す。なお、表２における不等号は、おおまかな量比を示す。

微化石類による粘土材料の分類

各土器および粘土の薄片全面の観察の結果、珪藻化石や骨針化石などの微化石類が検出された。微化石類の大きさは、放散虫化石が数 100 μm、珪藻化石が 10～数 100 μm、骨針化石が 10～100 μm 前後である（植物珪酸体化石が 10～50 μm 前後）。一方、砕屑性堆積物の粒度は、粘土が約 3.9 μm以下、シルトが約 3.9～62.5 μm、砂が 62.5 μm～２㎜である（地学団体研究会・地学事典編集委員会，1981）。主な堆積物の粒度分布と微化石類の大きさの関係から、微化石類は土器の粘土材料中に含まれると考えられ、粘土材料中に含まれている植物珪酸体化石以外の微化石類の特徴は、粘土の起源を知るのに有効な指標になると考える。なお、植物珪酸体化石は、堆積物中に含まれてはいるものの、土器製作の場では灰質が多く混入する可能性が高いなど、他の微化石類のように必ずしも粘土の起源を指標するとは限らないと思われる。

土器胎土は、粘土中に含まれていた微化石類により、a）海成粘土、b）淡水成粘土、c) 水成粘土、の３種類に分類された（表３）。表３において、◎は非常に多い、○は多い、△は検出、空欄は未検出である。以下では、各粘土の特徴について述べる。なお、海成粘土は、海水種珪藻化石のほかに淡水種珪藻化石も含む。

a) 海成粘土（分析 No. １：粘土）

粘土中には、海水種 Coscinodiscus 属 /Thalassiosira 属や湖沼浮遊生指標種群 Aulacoseira granulata が含まれていた。また、骨針化石が多量に含まれていた。

b) 淡水成粘土を用いた土師器羽釜（分析 No. ７）

この土師器羽釜胎土中には、淡水種 Cymbella 属または Pinnularia 属や Navicula 属が含まれていた。また、陸生珪藻 Pinnularia borealis や骨針化石も含まれていた。

c) 水成粘土を用いた瓦（分析 No. ３、No. ５）

これらの瓦胎土中には、骨針化石が少量含まれていた。なお、具体的な堆積環境を示す珪藻化石は含まれていなかった。

砂粒組成による分類

本稿で設定した分類群は、構成する鉱物種や構造的特徴から設定した分類群であるが、地域を特徴づける源岩とは直接対比できない。そのため、各胎土中の鉱物と岩石粒子の岩石学的特徴は、地質学的状況に一義的に対応しない。特に、深成岩類の可能性のある複合石英類の場合、構成する鉱物の粒度が大きく、細粒質の砂粒からなる土器胎土の場合には深成岩類と推定するのが困難となる。

表３　粘土および砂粒組成の特徴

分析 No.	種類	粘土の特徴							砂粒の特徴									鉱物の特徴									風化等の影響を受けた	その他の特徴・特徴
		種類	焼成後の色	混和剤	混和剤	混和剤	混和剤	混和剤	種子含む	石英	片岩類	深成岩類	堆積岩類	火山岩類	凝灰岩類	流紋岩類	頁岩類	テフラ	石英	斜長石	カリ長石	雲母	ジルコン	角閃石	輝石	黒雲母	岩片類		
1	粘土	海　成		△	△			○	△	◎								△	○	○	○	△	△			○	○	実った粒子が多い、貝殻らにたわみがみられる
3	瓦	水　成						△		Ob		△	△		△			△	◎	○		△		△		○	△	実った粒子が多い
5	瓦（平瓦、ｇ）	水　成						△		Ob		△	○		△			◎	△			△	△			○	○	実った粒子が多い、貝殻らにたわみがみられる
7	土師器甕	淡水成		△	△			△	△	Ob		△	△		△	△	○	△	○	△	△	△	△			○	○	貝殻にたわみがみられる

ここでは、比較的大型の砂粒について起源岩石の推定を行った（表３）。岩石の推定では、片岩質を片岩類（Ａ／ａ）、複合石英類を深成岩類（Ｂ／ｂ）、複合石英類（微細）や砂岩質を堆積岩類（Ｃ／ｃ）、斑晶質・完晶質を火山岩類（Ｄ／ｄ）、凝灰岩質を凝灰岩類（Ｅ／ｅ）、流紋岩質を流紋岩類（Ｆ／ｆ）、ガラス質または軽石質をテフラ（Ｇ／ｇ）とした。ただし、斑晶質・完晶質の多くは結晶度が低く、凝灰岩類に属する場合もある。推定した起源岩石は、表４の組み合わせに従って分類した。以下に、粘土および瓦・土師器釜胎土中の砂粒物の岩石組み合わせについて述べる。なお、表４において全体的に大型の砂粒が少ない試料は（　）書きで表した。

１）主に堆積岩類からなるＣ群（１試料：粘土（分析 No. １））

これら粘土中の砂粒は、少ないものの複合石英類（微細）からなる堆積岩類を含む。

２）主に堆積岩類と深成岩類からなるＣb 群（３試料：瓦（分析 No. ３）、瓦（分析 No. ５）、土師器釜（分析 No. ７））

この瓦および土師器釜胎土中の砂粒は、複合石英類（微細）や砂岩質からなる堆積岩類や複合石英類（大型）からなる深成岩類を含む。

表４　岩石片の起源と組み合わせ

		第１出現群						
		A	B	C	D	E	F	G
		片岩類	深成岩類	堆積岩類	火山岩類	凝灰岩類	流紋岩類	テフラ
第２出現群	a　片岩類		Ba	Ca	Da	Ea	Fa	Ga
	b　深成岩類	Ab		Cb	Db	Eb	Fb	Gb
	c　堆積岩類	Ac	Bc		Dc	Ec	Fc	Gc
	d　火山岩類	Ad	Bd	Cd		Ed	Fd	Gd
	e　凝灰岩類	Ae	Be	Ce	De		Fe	Ge
	f　流紋岩類	Af	Bf	Cf	Df	Ef		Gf
	g　テフラ	Ag	Bg	Cg	Dg	Eg	Fg	

蛍光Ｘ線分析

表５に、蛍光Ｘ線分析の測定結果を示す。

分析の結果、粘土は、Na_2O が 1.09 % と 0.90 %、MgO が 1.05 % と 1.14 %、Al_2O_3 が 20.9 % と 18.8 %、SiO_2 が 63.9 % と 59.3 %、P_2O_5 が 0.110 % と 0.273 %、K_2O が 2.39 % と 2.09 %、CaO が 0.45 % と 0.48 %、TiO_2 が 0.98 % と 0.93 %、MnO が 0.033 % と 0.104 %、Fe_2O_3 が 5.05 % と 12.28 %、Rb が 129ppm と 120ppm、Sr が 83 ppm と 81ppm、Y が 30 ppm と 24ppm、Zr が 217 ppm と 213ppm、Ba が 456 ppm と 535ppm であった。瓦は、Na_2O が 0.85 ～ 1.63 %、MgO が 1.06 ～ 1.51 %、Al_2O_3 が 19.3 ～ 21.8 %、SiO_2 が 61.2 ～ 64.5 %、P_2O_5 が 0.068 ～ 0.177 %、K_2O が 2.01 ～ 2.41 %、CaO が 0.40 ～ 0.78 %、TiO_2 が 0.87 ～ 1.03 %、MnO が 0.029 ～ 0.115 %、Fe_2O_3 が 4.81 ～ 7.30 %、Rb が 101 ～ 125ppm、Sr が 75 ～ 124ppm、Y が 34 ～ 45ppm、Zr が 199 ～ 237ppm、Ba が 344

表5　蛍光X線分析結果(重量%)

分析No.	種類	Na_2O (%)	MgO (%)	Al_2O_3 (%)	SiO_2 (%)	P_2O_5 (%)	K_2O (%)	CaO (%)	TiO_2 (%)	MnO (%)	Fe_2O_3 (%)	Total (%)	Rb (ppm)	Sr (ppm)	Y (ppm)	Zr (ppm)	Ba (ppm)	LOI (%)
1	粘土	1.09	1.05	20.9	63.9	0.110	2.39	0.45	0.98	0.033	5.05	96.0	129	83	30	217	456	6.88
2		0.90	1.14	18.8	59.3	0.273	2.09	0.48	0.93	0.104	12.28	96.3	120	81	24	213	535	7.88
3		1.63	1.51	19.3	64.1	0.173	2.41	0.78	0.87	0.115	6.13	97.0	125	124	34	237	399	0.85
4	瓦	0.85	1.22	20.8	61.2	0.177	2.01	0.40	0.98	0.038	7.30	95.0	101	75	35	212	388	0.68
5		1.08	1.14	21.5	63.3	0.113	2.18	0.56	1.03	0.052	5.49	96.4	113	89	38	213	344	0.70
6		1.10	1.06	21.8	64.5	0.068	2.31	0.46	1.00	0.029	4.81	97.1	120	86	45	199	374	0.81
7	土師器	1.97	0.22	17.6	69.0	2.010	2.33	0.92	0.48	0.015	2.01	96.6	93	131	24	212	528	4.46
8		1.39	0.93	20.1	66.3	0.150	2.28	0.67	0.86	0.031	4.46	97.2	97	109	26	220	368	1.20
最小値		0.85	0.22	17.6	59.3	0.068	2.01	0.40	0.48	0.015	2.01	95.0	93	75	24	199	344	0.68
最大値		1.97	1.51	21.8	69.0	2.010	2.41	0.92	1.03	0.115	12.28	97.2	129	131	45	237	535	7.88

～399ppmであった。土師器は、Na_2Oが1.97％と1.39％、MgOが0.22％と0.93％、Al_2O_3が17.6％と21.8％、SiO_2が69.0％と66.3％、P_2O_5が2.010％と0.150％、K_2Oが2.33％と2.28％、CaOが0.92％と0.67％、TiO_2が0.48％と0.86％、MnOが0.015％と0.031％、Fe_2O_3が2.01％と4.46％、Rbが93ppmと97ppm、Srが131 ppmと109ppm、Yが24 ppmと26ppm、Zrが212 ppmと220ppm、Baが528 ppmと368ppmであった。

第63図に各元素の分布図を粘土、瓦（梶原西遺跡、梶原瓦窯跡1号窯）、土師器別に示す。

各種別の試料点数が2点ずつと少ないため判断が難しいが、分析No. 7はNa_2O、MgO、Al_2O_3、SiO_2、P_2O_5、CaO、TiO_2、Fe_2O_3等といった多くの元素において他の瓦、土師器と大きく異なる化学組成を示した。また、分析No. 3もNa_2O、MgO、CaO、MnO、Sr、Zr等の元素が他の瓦、土師器とは異なる化学組成とみられる。粘土については、分析No. 1は分析No. 3、No. 7以外の瓦、土師器の化学組成と比較して大きく逸脱しないと見受けられるものの、分析No. 2はMnO、Fe_2O_3が多い傾向がみられた。

（5）土器材料の特徴

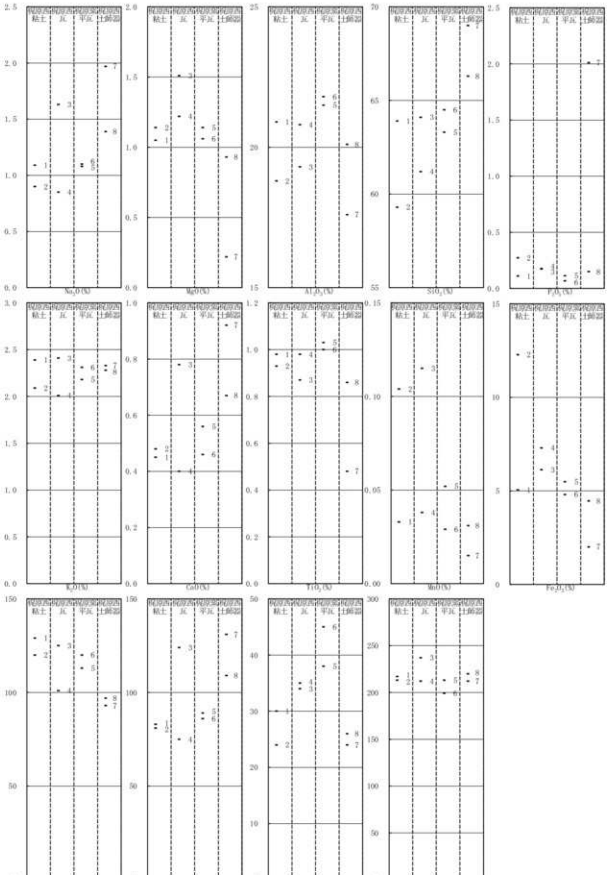
薄片観察では、瓦（分析No. 3、No. 5）および土師器羽釜（分析No. 7）は、骨針化石あるいは淡水種珪藻化石が僅かに検出され、水成粘土あるいは淡水成粘土と推定された。一方、粘土試料（分析No. 1）は、骨針化石を多量に含み、海水種あるいは淡水種珪藻化石を僅かに含む海成粘土であった。

これら胎土中の砂粒組成は、瓦（分析No. 3、No. 5）および土師器羽釜（分析No. 7）は、概ね堆積岩類と深成岩類からなるCb群であった。ただし、土師器羽釜（分析No. 7）の胎土中には、火山ガラスを多く含んでいた。一方、粘土試料（分析No. 1）は砂粒分は少なく、堆積岩類の砂粒が認められた。

蛍光X線分析では、薄片観察を行った試料に関して、数％以上の含有率を示す酸化アルミニウム（Al_2O_3）や二酸化ケイ素（SiO_2）、酸化カリウム（K_2O）や酸化鉄（Fe_2O_3）に注目すると、瓦（分析No. 3、No. 5）や粘土試料（分析No. 1）は概ね類似した値を示すが、土師器羽釜（分析No. 7）は酸化カリウム（K_2O）以外の元素において異なった値を示す。これは、土師器羽釜（分析No. 7）の薄片観察において、二酸化ケイ素（SiO_2）を多く含む火山ガラスが多いためと考えられる。

なお、一般的に土器などの土製品において、粘土と砂粒分の混合度合いは、酸化アルミニウム（Al_2O_3）と二酸化ケイ素（SiO_2）において示され、粘土の種類や鉄分の含有量などにより分布傾向が異なる（小村・藤根，2001、第64図）。

薄片分析を行っていない瓦や土師器甕あるいは粘土試料については、化学組成に関して大きな違いはなく、材料として類似した結果と考えられる。


Na2O(%)
MgO(%)
Al2O3(%)
SiO2(%)
P2O5(%)
K2O(%)
CaO(%)
TiO2(%)
MnO(%)
Fe2O3(%)
Rb(ppm)
Sr(ppm)
Y(ppm)
Zr(ppm)
粘土
灰
平灰
土師器

第63図　元素分布図

以上の結果から、粘土試料（分析 No. 1）は、骨針化石を多量に含む海成粘土であり、瓦や土師器釜の粘土材料とは異なった特徴を示す。また、砂粒組成では、土師器羽釜（分析 No. 7）は火山ガラスを多く含む点で異なり、化学組成に反映されていると考えられる。

なお、梶原西遺跡出土瓦と梶原瓦窯跡出土瓦は、少なくとも薄片観察を行った分析 No.3 と分析 No.5 は微化石類と岩石片の組成および化学組成において類似している。また、分析 No.4 と分析 No.6 は、薄片観察を行っていないが、化学組成では類似していると考えられる。

（6）おわりに

瓦や土師器あるいは粘土試料について、一部試料の薄片観察と蛍光X線分析を行った。

粘土試料（分析 No. 1）は、骨針化石を多量に含む海成粘土であり、瓦や土師器羽釜の粘土材料とは異なった特徴を示す。また、砂粒組成では、土師器羽釜（分析 No. 7）は火山ガラスを多く含む点で異なり、化学組成に反映されていると考えられた。

少なくとも薄片分析を行った結果から、土坑の粘土試料は、分析対象とした瓦や土師器羽釜の特徴と比較した場合、これら土製品の粘土材料に使用されたとは言い難い。なお、梶原西遺跡出土瓦と梶原瓦窯跡出土瓦は、薄片観察あるいは化学組成において類似していると考えられた。

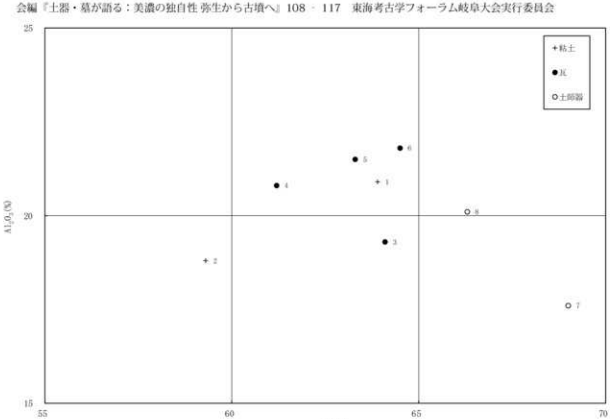
（株式会社パレオ・ラボ　竹原弘展）

＜参考・引用文献＞

安藤一男　1990「淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用」『東北地理』42（2）73 - 88

地学団体研究会・地学事典編集委員会編　1981『増補改訂 地学事典』1612 p　平凡社

藤根　久　1998「東海地域（伊勢 - 三河湾周辺）の弥生および古墳土器の材料」東海考古学フォーラム岐阜大会実行委員会編『土器・墓が語る：美濃の独自性 弥生から古墳へ』108 - 117　東海考古学フォーラム岐阜大会実行委員会



第64図　Al_2O_3 - SiO_2分布図

藤根　久・今村美智子　2001「第３節　土器の胎土材料と粘土採掘坑対象堆積物の特徴」群馬県埋蔵文化財調査事業団編『波志江中宿遺跡』262 － 277　日本道路公団・伊勢崎市・群馬県埋蔵文化財調査事業団
笹野稔洋・嶋田有里奈・福岡孝昭・藤根　久　2010「土器中軽石の起源－千葉県長平台遺跡と鹿児島県牟礼川遺跡の場合－」日本文化財科学会第 27 回大会研究発表要旨集　126 － 127
小杉正人　1988「珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用」『第四紀研究』27　1 － 20
小村美代子・藤根　久　2001「須恵質土器胎土中の砂粒分の化学的評価」『日本文化財科学会第 18 回大会研究発表要旨集』114 － 115　日本文化財科学会
車崎正彦・松本　完・藤根　久・菱田　量・古橋美智子　1996「土器胎土の材料－粘土の起源を中心に－」日本考古学協会編『日本考古学協会第 62 回大会研究発表要旨』153 － 156　日本考古学協会

写真20－１　試料３凸面

写真20－２　試料４凸面

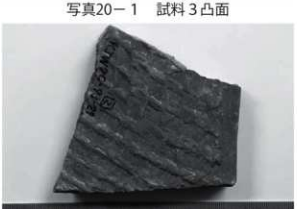


写真20－３　試料５凸面

写真20－４　試料６凸面

写真20－５　試料７外面

写真20－６　試料８外面

写真20　胎土分析試料

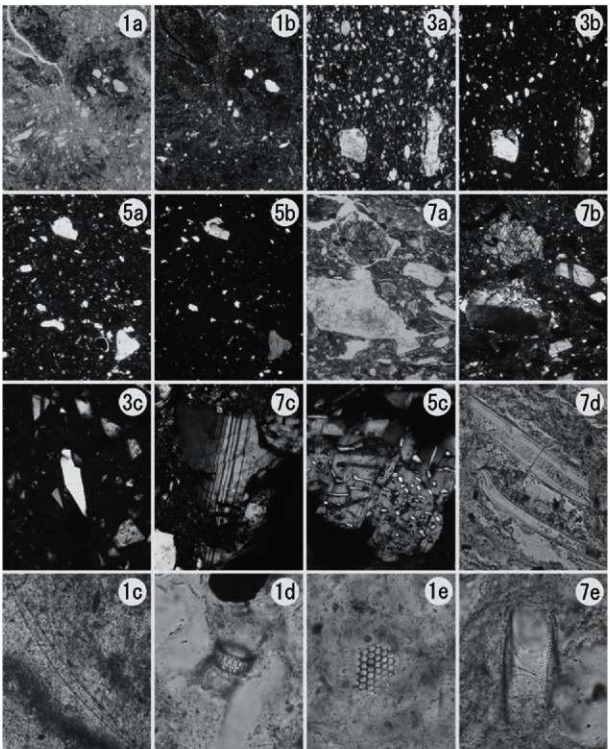


写真21　胎土中の粒子の偏光顕微鏡写真

（スケール；1a－7b：500μm、3c，7c，5c：100μm、7d：50μm、1c－1d,7e：20μm、）

1a．試料№1（開放ニコル）　1b．試料№1（直交ニコル）　3a．試料№3（開放ニコル）　3b．試料№3（直交ニコル）

5a．試料№5（開放ニコル）　5b．試料№5（直交ニコル）　7a．試料№7（開放ニコル）　7b．試料№7（直交ニコル）

3c．尖った粒子　7c．斜長石（双晶）　5c．ミルメカイト　7d．ガラス質 1c．骨針化石

1d．珪藻化石（潮沼浮遊生*Aulacoseira granulata*）

1e．珪藻化石（海水種*Coscinodiscus*属/*Thalassiosira*属）　7e．珪藻化石（淡水種*Navicula*属）

第5章　総　括

第1節　方形周溝墓について

第3章では、調査区を北部域、中央域、南部域に分けて出土遺構・遺物について解説した。方形周溝墓は北部域と、中央域の北側に分れて検出したため、個々の説明にとどまり全体像をつかみにくいきらいがある。そこで、この節で再度、方形周溝墓群としての梶原西遺跡でみつかった方形周溝墓の特徴や傾向について総括し、近隣の安満遺跡や神内遺跡の方形周溝墓群との比較対照を行いたい。

今回の調査で検出した方形周溝墓を表にまとめ、方形周溝墓だけを抽出した平面図を作成した（表6、第65図）。

（1）単位・立地環境

梶原西遺跡では方形周溝墓を8基検出した。周溝のみ検出したものや可能性のあるものも含めると9、10基あった可能性がある。

方形周溝墓を検出した調査区は、1区、2－2区、4区、5区、1－2～1－5区、6－1・6－2区、7・7－2区が該当する。X＝－126,120～－126,165の南北約35mの区域に3列にわたり存在する（第11、25、65図）。

1列には東西に2～3基の方形周溝墓が存在する。ただし、X＝－126,120より北は撹乱により当該期の遺構は失われているが、方形周溝墓6など周溝北辺が未検出なものもあるため、方形周溝墓がさらに北に存在していた可能性もある。東西列は調査区東端にある449周溝から、少なくとも東には続いていたと推測される。

梶原西遺跡の方形周溝墓群が立地するのは、北摂山地の山裾、山間部から流れる檜尾川によって形成された扇状地の微高地にあたる。檜尾川左岸には三島地域の弥生時代拠点集落である安満遺跡が存在する。檜尾川右岸、南の淀川との間の狭隘部には萩之庄南遺跡、梶原西遺跡、梶原南遺跡、梶原遺跡、神内遺跡が山裾を取り囲むように立地する（第66図）。

安満遺跡や神内遺跡では当遺跡と同じ弥生時代中期の方形周溝墓群が、萩之庄南遺跡では弥生時代後期の方形周溝墓が検出されている。安満遺跡では弥生時代前期からの環濠集落や水田域も知られるが、中期には居住域の西と東に墓域が形成される。また、水田域は微高地南側の縁辺部で確認される。

萩之庄南遺跡でも、微高地で居住域と墓域が、南の低地に水田域が確認されている。梶原西遺跡では、弥生時代の住居や水田は確認できなかったが、他の遺跡と同様、自然地形を活かして微高地上に墓域が形成されたと考えられる。

（2）規模・形状

方形周溝墓群は南北、東西とも約3基が並んで形成されるが、市道で寸断されたり、周溝の1辺が調査区外にあったりするため、周溝に4辺とも取り囲まれて検出できたのは、方形周溝墓1、方形周溝墓2、方形周溝墓7の3基にすぎない。それでも、推定復元も含め、7、8基は縦横の規模とその平面形状により大小2グループに類別可能なことが判明した（表6）。

1辺が12、13mと14、15mの長方形の規格をなすのが大形のグループである（方形周溝墓1・2）。方形周溝墓3も東側約半分のみの検出であるが、このグループと考えられる。周溝幅も2～4m以上と広く、深さも1m以上ある。南北を長軸とするのが主であるようだが、最大の方形周溝墓1は427

周溝まで続くとすると、東西が長くなる。

小形のグループは、1辺が7、8mあるいは10m程度のものが多く、正方形に近い形状である（方形周溝墓4～8）。方形周溝墓4と5、方形周溝部7と8のように隣接する周溝を共有するものもあるが、これは安満遺跡などでもよくみられる。陸橋部になるか、周溝がとぎれる箇所もある。周溝幅は1.5～3m程度、深さ1m未満のものが多い。

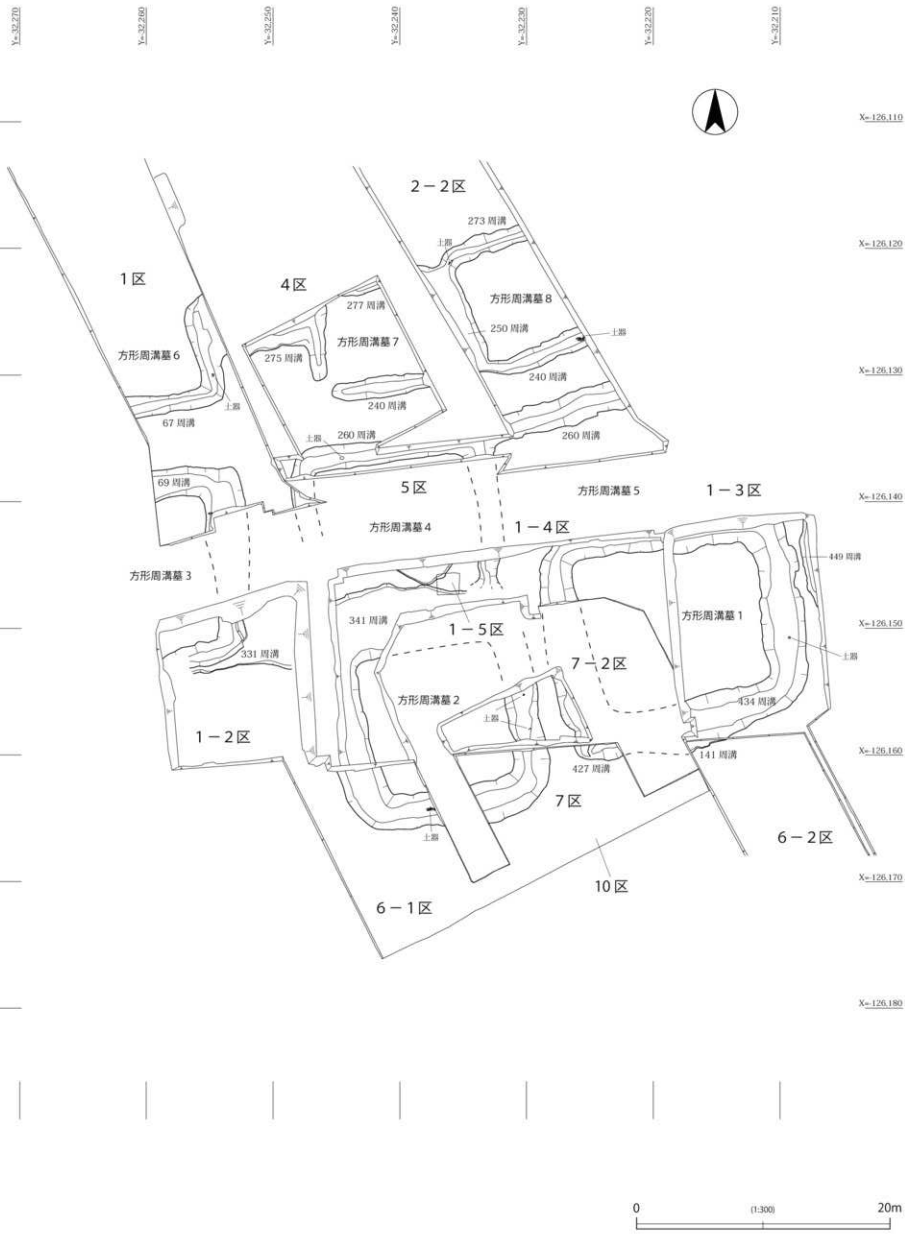
大形、小形のグループとも墳丘は後世に削平されたため、弥生時代の盛土は検出できなかった。地山面で木棺などの埋葬主体も検出し得なかったため、墳丘が最初から低かったのでなく、築造当初は周溝掘削で得た土などを盛り上げていたと考えられる。よって、埋葬主体から得られる情報は皆無である。

周溝の埋没状況は墳丘とベース土の崩落によって下層から中層までは早い時期に埋没していると思われる。ただ、短期で人為的な埋め戻しではなく、自然に埋没した状況を示す。

上層は第2層による埋土となり、古代末から中世の遺物が一定量含まれる。後出遺構として掘立柱建物などからなる居住域が確認されており、この時期には周溝としての機能は失っていたとしても、ある程度のたわみが残っていた、つまり弥生時代から古代に至るまでの長期間、浅くとも溝の形状を保っていたと予測できる。

表6　梶原西遺跡方形周溝墓一覧

名称	地区	周溝（東西南北の順で）	形状	主軸方向	規模（東西×南北：m）	周溝幅（m）	周溝深さ（m）	供献土器	時期
方形周溝墓1	1－3、1－4、7－2	434、○、434・427・141、434	長方形	東西	14～15×12～13	2.5～4.5	1.0～1.2	壺、甕	弥生時代中期前葉（Ⅱ様式）
方形周溝墓2	1－4、1－5、6－1、7	すべて341（方形周溝墓4と341周溝を共有か）	長方形	南北	12～13×14～15	3.1～3.3	0.9～1.0	広口壺（2）、甕（2）	弥生時代中期前葉（Ⅱ様式）
方形周溝墓3	1、1－2	331、不明、331、69	長方形	？	？×12	2.3～3.0	0.8～1.3		
方形周溝墓4	5、1－4、1－5、1	不明、不明、341？、260（方形周溝墓5と260周溝を共有、方形周溝墓2と341周溝を共有か）	長方形	東西	？×12	1.85～3.6	0.9～1.3	甕	弥生時代中期前葉（Ⅱ様式）
方形周溝墓5	2－2、5	不明、260、○、260（方形周溝墓4と260周溝を共有）	長方形？	東西	10以上×10	2.2～3.0	1.0		
方形周溝墓6	1	67、不明、67、不明	？	？	7～8×7～8	1.5	0.9	壺	弥生時代中期前葉（Ⅱ様式）
方形周溝墓7	4	250、275、240、277（方形周溝墓8と250周溝を共有）	長方形	東西	10×7	1.5	0.8	広口壺	弥生時代中期前葉（Ⅱ様式）
方形周溝墓8	2－2	不明、250、240、273（方形周溝墓7と250周溝を共有）	長方形か正方形	東西？	8以上×8	1.4～2.0	0.65～1.0	高杯、甕（2）、壺（2）、広口壺（2）、直口壺	弥生時代中期前葉～中期前半（Ⅱ・Ⅲ様式）
	1－3	不明、449、不明、不明							
	4	275、67、275、○			？×7～8程度				

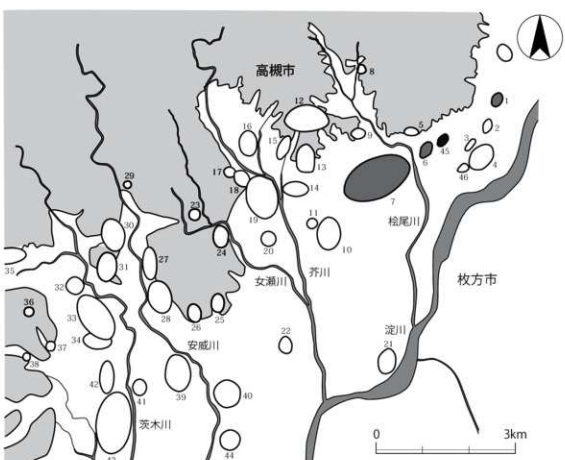


第65図　方形周溝墓群平面図

供献土器はすべて周溝から出土した。器形を確認できる状態で出土したのは、方形周溝墓1の434周溝東辺から出土した壺（第41図－26）のみである。これも周溝底近くから横位で検出したが、元来周溝底に据置かれたものが横転したのか、あるいは、墳丘上にあったものが周溝内に滑り落ちたのか判断し難い。この壺は体部に1箇所穿孔ともみられる孔が認められる。

これ以外の土器は、周溝の最底部で出土したものもあれば、比較的上層で出土したものもある。かなり細片化していたが、まとまって出土したものが多く、壺や甕に復元できた（第23・41図）。いずれも残存状況が悪く、穿孔などは判断できない。

1つの方形周溝墓から壺と甕、各1点ずつ位の出土点数である。方形周溝部に伴う供献土器としては、他の出土例と比較してもきわめて少ない。器種も高杯1点（第23図－4）がある以外は、壺と甕に限定される。これは築造時からそうだったか判断できないが、おそらく他の各種土器類は後世の削平、造成などで失われたのであろう。包含層からの弥生土器の出土も少ない。



第66図　三島地方の弥生時代遺跡分布図（「史跡・安満遺跡　保存管理計画書」の図7をもとに作成）

1 神内遺跡　2 梶原遺跡　3 梶原南遺跡　4 上牧遺跡　5 萩之庄遺跡　6 萩之庄南遺跡　7 安満遺跡　8 成合遺跡
9 紅茸山遺跡　10 高槻城下層遺跡　11 上田部遺跡　12 古曽部・芝谷遺跡　13 天神山遺跡　14 芥川遺跡　15 慈願寺山遺跡
16 大蔵寺山遺跡　17 上野遺跡　18 郡家本町遺跡　19 川西遺跡　20 津之江南遺跡　21 大塚遺跡　22 芝生遺跡
23 ツゲノ遺跡　24 宮田遺跡　25 富田遺跡　26 中城遺跡　27 太田遺跡　28 総持寺遺跡　29 塚原遺跡　30 安威遺跡
31 耳原・五日市遺跡　32 中河原遺跡　33 郡・倍賀遺跡　34 春日遺跡　35 宿久庄遺跡　36 地蔵池遺跡　37 見付山遺跡
38 松沢池遺跡　39 牟礼遺跡　40 溝咋遺跡　41 新庄遺跡　42 中条遺跡　43 東奈良遺跡　44 目垣遺跡　45 梶原西遺跡
46 井尻遺跡

（3）時期

次に、この方形周溝墓群の中で新旧の時期差があるか検討する。

隣接する方形周溝墓、周溝を共有する方形周溝墓の切り合いなどから、同時に造られたか、どちらかが後から造られたかは、周溝に対しての二次的な掘削や改変が行われたかが指標となる。しかし、周溝断面を観察する限りその類の把握はできなかった。

また、周溝内で出土した供献土器から時期を考察すると、一定の土器点数が得られた方形周溝墓8の240周溝から出土した直口壺のみが、弥生時代中期前半、摂津Ⅲ様式とやや新しい様相の可能性を示した（第23図－9）。それ以外は、弥生時代中期前葉、摂津Ⅱ様式におさまるものである（第23･41図）。

調査当時は規模の点からみて、方形周溝墓1と方形周溝墓2が方形周溝墓群の中心的役割を果たす墓で、時期的にも初めに造られ、これに追随するように、北に方形周溝墓が追加されていったと仮定した。両墓が中心的役割を果たす墓であるのは変わりないとしても、両墓には大きな時期差はみられない。それに遅れて造られたと推測する他の方形周溝墓も、出土遺物をみる限りでは方形周溝墓相互にはさほど時期差はない。つまり、この方形周溝墓群では、間断をおかず墓が造営されていったと考えられる。

（4）他遺跡との比較

梶原西遺跡方形周溝墓群が、近接する地域の同時期の方形周溝墓と比べると普遍的なものだったのか、特異なものだったのか、いくつかの遺跡をあげて比較対照を試みる。

安満遺跡

大阪府高槻市東部に所在し、梶原西遺跡との距離は1㎞弱と近い（第4・66図）。梶原西遺跡同様、山麓裾部の檜尾川岸の扇状地、標高約10ｍに形成される。北摂三島地域を代表する弥生時代遺跡である。

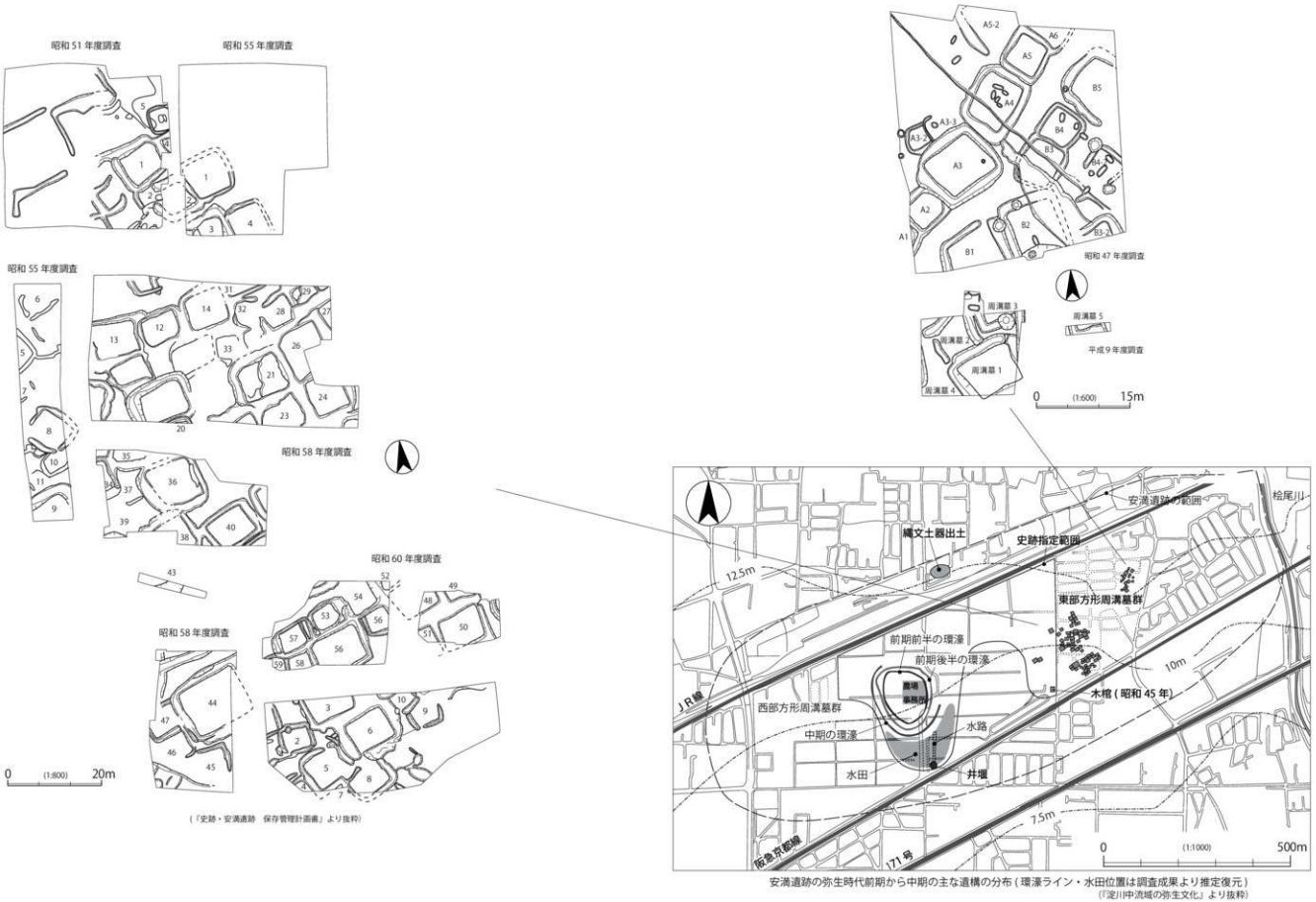
その規模は東西約1.5km、南北約0.5km、面積約70haにも及ぶ。昭和初期の京都大学農学部付属農場での遺跡の発見から、昭和40年代の宅地などの大規模開発に伴って、中期の墓域や前期の環濠集落など耳目に値する発見が相次ぎ、遺跡の範囲が拡大されていった。数十年にわたる調査の結果、平成23年には中心部約12.8haが史跡として保存されることになり、取り組みが進められている。

弥生時代前期前半に環濠集落が形成されるが、前期後半には環濠が埋められ、外側に新たな環濠が形成される。また、水田域が環濠の南に形成される。この時期の墓域は確認されていない。環濠や水路からは農具などの木製品が大量にみつかっている。その後、前期終りごろ、洪水に集落全体が見舞われたと考えられる。そのためか、弥生時代中期初頭にはいったん衰退し、山側の天神山遺跡に移住したとも考えられる。

中期前葉には前期の居住域の東に溝が掘削され、集落が拡大しムラが再興される。弥生時代中期前葉Ⅱ様式の頃、居住域の北西と東に100基以上の方形周溝墓が形成される（第67図）。北西部（西部方形周溝墓群）では木棺が3基みつかっている。また、東部（東部方形周溝墓群）では保存状態がよい組み合わせ式木棺1基を含む、多数の方形周溝墓がみつかっている。

方形周溝墓は1辺5～10m程度の方形のもので、中央に墓棺が複数基検出された。数基が周溝を共有しながら列をなすように連なり、いくつかのグループに分れて、方形周溝墓群として長期間継続していく。方形周溝墓の一部は前期になる可能性のものもあるが、多くは中期前葉Ⅱ様式のものである。周溝幅は2～3ｍである。周溝内からは、壺、水差し、甕などの供献土器が出土している。農場北側では、土壙墓もみつかっている。

後期前半には再び遺構が希薄となり、古曽部・芝谷遺跡へ移住したとも考えられる。後期中頃には、



（「史跡・安満遺跡　保存管理計画書」より抜粋）

安満遺跡の弥生時代前期から中期の主な遺構の分布（環濠ライン・水田位置は調査成果より推定復元）
（『淀川中流域の弥生文化』より抜粋）

第67図　安満遺跡遺構分布及び東部方形周溝墓群平面図

前期環濠集落より東に居住域が形成される。より東には萩之庄南遺跡が出現し、再び沖積地への回帰がみられる。安満遺跡の方形周溝墓は、規模、形状、時期など梶原西遺跡方形周溝墓群と類似する。

萩之庄南遺跡

大阪府高槻市に所在する。安満遺跡の東に隣接し、安満遺跡と梶原西遺跡の間に位置する（第4・65図）。安満遺跡や梶原西遺跡同様、北摂山地の山裾にある微高地に立地する。

萩之庄南遺跡が遺跡として明確になるのは、弥生時代後期以降である。後期後半には、微高地上に方形周溝墓2基、大溝や溝をもった居住域が、低地部には水田域が造られる。梶原西遺跡の方形周溝墓群よりは時期が新しく、むしろ安満遺跡の後期中頃以降の居住域との関連が示唆される。

神内遺跡

大阪府高槻市の東端に所在し、島本町に隣接する。やはり、安満遺跡や梶原西遺跡同様、北摂山地の山裾から淀川までの狭隘な平野部に立地する（第4・66図）。

古くから「神内（こうない）」は「神南備（かむなび）の森」が語源であり、西国街道や淀川に挟まれた交通の要所であった。そのため、京から西国などへ赴任する人の別れの場所として知られる。区画整理に伴って、約20000㎡が調査された。調査後は、一部は公園として整備されている。

弥生時代の遺構としては、弥生時代中期前半、Ⅱ様式後半を中心とする方形周溝墓20基と竪穴住居1棟を検出している。方形周溝墓は調査区より西にさらに広がり、かなり大規模な方形周溝墓群だったと予想される。竪穴住居は方形周溝墓より古い時期のものである。

方形周溝墓は1辺が10 m以上の大規模なもの、7～8 mの中規模なもの、5～6 mの小規模なものの3群に分けられる（第68図）。大規模な方形周溝墓に小規模な方形周溝墓が溝を共有して接している。最も大規模な15号方形周溝墓は長辺17 m、短辺15 mで、周溝幅は約2 m、深さは1.6 mをはかる。

方形周溝墓の周囲や北のⅢ区南端で、木棺墓2基と土壙墓5基が検出されている。供献土器から、方形周溝墓とほぼ同時期とみられる。

方形周溝墓が規模によりグループに分けられる点や、形状、時期、立地条件などは梶原西遺跡方形周溝墓群と類似する。ただ、方形周溝墓以外の墓制をもつなど相違する点もある。

下植野南遺跡

京都府大山崎町に所在する。神内遺跡よりさらに東、山城に位置する遺跡だが、ＪＲ東海道本線より南で、桂川の支流、小泉川と小畑川に挟まれた沖積低地に広がるという、立地条件が似た弥生遺跡としてここにあげた。弥生時代遺構面は標高9.6 m前後である。

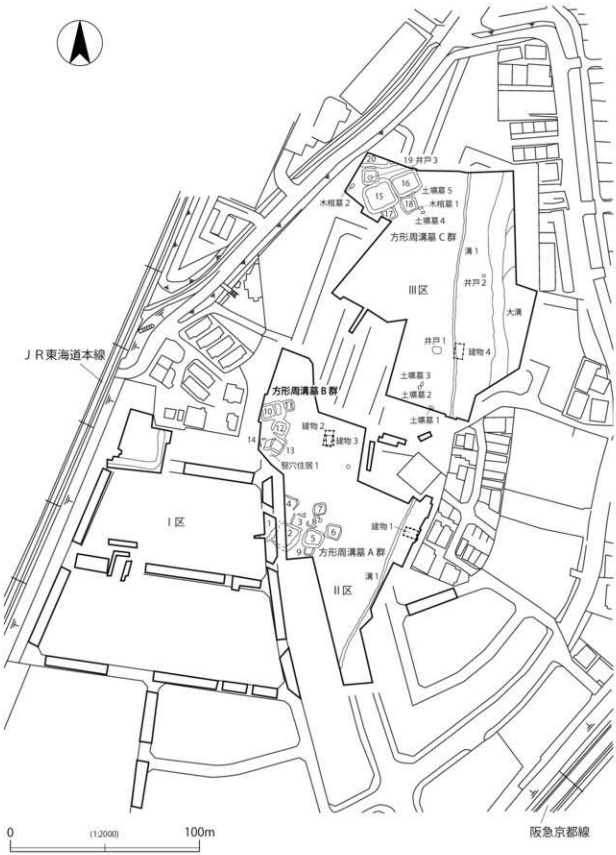
調査面積約17000㎡のなかで、方形周溝墓82基を検出した。方形周溝墓は大半はⅢ様式古段階に属するものである。また、3基の木棺墓、土壙墓も検出されている。

方形周溝墓は南北に長いものが多く、南北辺は5～12 m、東西辺は5～9 m程度のものが多い。周溝を共有して東西または南北に4、5基が連なっているものが多く、埋葬主体も27基の方形周溝墓中、38基で確認された。供献土器も多数出土したが、穿孔はもたない。

蛍池（宮の前）遺跡

豊中市と池田市に所在する。待兼山丘陵からのびた台地上に立地し、標高約30 mである。梶原西遺跡よりはさらに西に位置する。摂津地域で、千里丘陵の山裾に形成される方形周溝墓群として取り上げた。

1968年に中国自動車道、大阪中央環状線建設に伴って約15000㎡を調査し、弥生時代中期（Ⅱ～



第68図　神内遺跡方形周溝墓群平面図（『神内遺跡の調査』の図２をもとに作成）

Ⅳ様式）の方形周溝墓20基を検出した。他に土壙墓91基、甕棺墓2基、壺棺墓7基の墓域と竪穴住居10棟が検出された。方形周溝墓はⅢ様式のものが多い。方形周溝墓は調査区の東と西に大きく分かれ、その中でさらに小群を形成する。

第12次調査は1968年調査の中央部南にあたる。弥生時代の遺構は7基の方形周溝墓と土壙墓、木棺墓6基、溝3条などを検出した。方形周溝墓は中期前葉（Ⅱ様式）が1基、中期中葉（Ⅲ様式）が5基、中期後葉（Ⅳ様式）が1基である。方形周溝墓の規模は、1辺が7～8mで、周溝幅が1～3.7m程度である。周溝内で埋葬施設が認められることや、周溝の深さが0.2m程度と浅いが、供献土器が多く出土するのが特徴である。方形周溝墓6では、大量の土器が周溝の2、3mの狭い範囲に集中して出土することから、破片の状態で周溝内に一括投棄されたと報告している。

この大量土器廃棄行為が出現する、中期前葉までの方形周溝墓は、単数埋葬を基本として周溝墓同士が列状に並び、埋葬主体の主軸が列の軸と並行する。これに対し、中期中葉以降は群構造が変化し、1つの墳丘への多数埋葬、数基を単位とする方形周溝墓同士の群集化がみられるようになる、としている。

第26次調査で、第12次調査で検出された方形周溝墓4の続きや土壙墓を検出した。弥生時代中期中頃である。

蛍池・宮の前遺跡は弥生時代中期前半に方形周溝墓群が形成され、中期中頃には増加する。方形周溝墓は6つの群に分けられ、土坑墓群、木棺墓群も認められる。中期後半には遺構が減り、後期には集落は消滅する。

（5）まとめ

梶原西遺跡の方形周溝墓群について検討を試みた。

そのうち対比資料としていくつかの遺跡例を紹介してきたが、本遺跡において8～10基の方形周溝墓が北摂山地の山裾に列をなして構成される点、時期も弥生時代中期前葉（Ⅱ様式）に限定されるなどの点は、近隣の安満遺跡や神内遺跡と類似している。北摂津、三島地域での方形周溝墓としては、特異なものでなく、普遍的なありかたを示す方形周溝墓群といえよう。

一方、埋葬主体などは確認できず、供献土器も限られるなど、方形周溝墓の性格を解明する情報量としては少なく、十分な検討に至らなかったところもある。

また、梶原西遺跡では、方形周溝墓群の近隣で方形周溝墓以外の墓、土壙墓や甕棺墓も検出されていない。墓域より約40m南下した、6－2区の南端で弥生時代後期の甕棺墓が1基検出された。距離的にも、時期的にも隔たりがあり、相関性がある墓域とは言い難い。現時点では、方形周溝墓のみの小規模な独立した墓域として捉えるべきだろう。

墓域は検出したものの、これらの墓域を形成した人の居住域や水田域なども検出されていない。墓域自体もさらに西や北に広がることが予測されるが、居住域はさらに西や東に存在するのだろうか。

地形環境からすると、水田域は墓域より南に存在すると思われるが、調査区の南側をトレンチ調査した結果、調査区南端までいくと湿地状の自然堆積になり、人が生活していた痕跡は認められない。

安満遺跡のように居住域、墓域、水田域がセットで検出されれば、梶原西遺跡周辺での弥生時代の様相解明にさらに近づけるだろう。調査区外の近接した箇所に、今回未検出だった居住域や水田域を示す遺構があると考え、今後の調査に期待したい。

<参考文献>

森田克行編　1977『高槻市文化財調査報告書第10冊　安満遺跡発掘調査報告書－9地区の調査－』高槻市

教育委員会
橋本久和編　2007『史跡・安満遺跡　保存管理計画書』高槻市教育委員会
高槻市今城塚古代歴史館　2013『平成25年度春季特別展　三島文化の黎明　安満遺跡の探求』
黒須亜希子編　2013『萩之庄南遺跡』公益財団法人大阪府文化財センター
橋本久和・高橋公一・木曽広　2002「神内遺跡の調査」『高槻市文化財年報』平成4年度　高槻市教育委員会
高槻市今城塚古代歴史館　2014『平成26年度春季特別展　淀川中流域の弥生文化』
石井清司・藤井整ほか編　2004『京都府遺跡調査報告書第35冊　下植野南遺跡Ⅱ』財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
服部聡志編　1995『蛍池北遺跡（宮の前遺跡）第12次発掘調査報告－弥生時代中期方形周溝墓群の調査－』蛍池北遺跡調査団・豊中市教育委員会
池田市教育委員会教育部文化財担当編　2004『宮の前遺跡発掘調査概要』池田市教育委員会

写真22　梶原西遺跡方形周溝墓群

第２節　群集土坑について

第３章第３節の南部域の調査成果において、群集土坑を 80 基以上検出し、代表的な土坑について形状や埋土、出土遺物などを挿図、写真図版と共に解説した（群集土坑には、南部域以外にも中央域の６－２区南端の 160 土坑、161 土坑、198 土坑までを含む）。

第３節では、群集土坑の性格については粘土採掘坑と推測し、近接する梶原瓦窯跡の瓦用に粘土を掘削したのではないかと考えた。そこで、群集土坑を掘削した基盤土壌を採取し、梶原西遺跡、梶原瓦窯跡から出土した瓦と薄片観察や蛍光Ｘ線を用いた胎土分析を行った（第４章第１節）。しかし、梶原西遺跡及び梶原瓦窯跡から出土した瓦と、群集土坑の基盤から採取した粘土の胎土組成は一致しなかった。

この節では、まず、群集土坑の各土坑を類型するいくつかの特徴を摘出して、一覧表にまとめた（表７）。

次に、その特徴から土坑を分類する鍵となり得る要素を摘出して分析し、その要素から土坑の分類が可能か、土坑の性格や機能を解明できるか検討を試みたい。

（１）土坑埋土による分類

梶原西遺跡で検出した土坑の多くは、黄褐色や灰褐色シルト層の地山（基盤層）に形成され、土坑中には黒褐色シルトや褐灰色シルトが埋積していた。土坑の埋土は単層のものもあるが、累層堆積するものがほとんどである。その中に大きさの差はあるが、基盤層を掘り起こした際生じたブロックを含むものが、一定割合存在する。

ブロックは各層に含まれる場合と、ある層にのみ含まれ、上層や下層には含まれない層をもつ場合とあるが、１層でも含む場合はすべてブロック土とした。ただし、最下層に壁際の崩れた土をわずかに含む場合はブロック土でないとみなした。

同様の埋土による類型は、吹田市、摂津市に所在する吹田操車場遺跡、明和池遺跡でも行われている。この中では、埋積状況をＡからＤの４タイプに分類している。Ａタイプはすべてブロック土が充填しているもの、Ｂタイプはブロック土堆積の中間もしくは上部に水成堆積と思われる自然堆積層が認められるもの、Ｃタイプはブロック土堆積の下層に水成堆積と思われる自然堆積層が認められるもの、Ｄタイプはブロック土でないものとしている。

梶原西遺跡の埋積状況をこれにあてはめると、ＡからＣタイプをブロック土のタイプに含め、Ｄタイプのみをブロック土でないとしたことになる。梶原西遺跡では、どの時点で自然堆積が進んだかは土坑の全体数が少ないこともあり類別の対象とせず、大きく２つに分類している。

吹田操車場遺跡、明和池遺跡における類別から何が分るかというと、人為堆積と自然堆積かという堆積状況の違いと、それが起こった時期である。つまり、Ａタイプは土坑掘削後すぐに人為的に埋め戻されたもの、Ｂタイプは土坑掘削後ある程度埋め戻され、一時放置されて自然堆積が進み、その後再び埋め戻されたもの、Ｃタイプは掘削後一時放置されて自然堆積が進み、その後人為的な埋め戻しが行われた、埋没過程の違いによるとする。

吹田操車場遺跡での各タイプの比率は、Ａが 52％、Ｂが 16％、Ｃが 13％、Ｄが３％とし、広範囲で検出しているため各エリアの分布も示している。

埋没過程の違いによって、埋土の堆積状況やブロックを含むか否かが異なってくるという着眼点は、梶原西遺跡でも適用できると考えた。

梶原西遺跡で埋土を確認できた土坑は 74 基、そのうちブロック土（Ａ～Ｃタイプ）が 49 基で

表7　梶原西遺跡群集土坑一覧

番号	土坑名称	地区	法量（m）			平面形	断面形	土坑埋土	出土遺物	挿図番号	写真図版番号	備考
			長径	短径	深さ							
1	1(=327)	12-2 東	3.0	1.8	0.5	長方形	皿形	ブロックでない	上師器	55		
2	2(=325)	12-2 東・12-1	5.1	3.5	0.3	方形	逆台形	ブロック	須恵器、上師器	55	42-1	
3	3	12-2 東	4.5	4.5	0.5	不定形	長方形	ブロックでない	須恵器、上師器、弥生土器 (60-111)	55	40-2	
4	4	12-2 東	1.0	0.5	0.4	長円形	長方形	ブロック	瓦器、上師器			
5	5	12-2 東	1.3	1.3	1.0	方形	皿形	ブロック	上師器	54	40-3	
6	6	12-2 東	1.05	(0.2)	0.1	長円形？	皿形	ブロックでない	×			
7	7	12-2 東	3.1	2.5	0.3	長方形	逆台形	ブロック	上師器	55		
8	26	12-2 東	1.3	1.3	1.0	円形	逆台形	ブロック	×	54	40-3	
9	27	12-2 東	3.0	2.0	0.3	長方形	椀形	ブロック	平瓦、上師器	54	41-1	
10	33	12-1	9.0	2.5	0.5	不定形	椀形	ブロック	須恵器、平瓦 (61-133)	59		
11	34	12-2 西	(5.8)	1.8 ～ 2.5	0.4	長方形	逆台形	ブロック	上師器	58		
12	35	12-2 西	3.0	1.5	0.4	不定形	長方形	ブロック	×	58	42-5	
13	36	12-2 西	4.7 ～ 4.9	4.7 ～ 4.9	0.4	正方形	長方形	ブロック	上師器 (60-112)、須恵器	58		
14	37	12-2 西	2.0	1.6	0.7	不定形	椀形	ブロック	×	58	42-2	
15	38	12-2 西	3.0	2.8	0.2 ～ 0.4	長方形	椀形	ブロック	×	54	41-2	
16	39	12-2 西	1.5 ～ 2.0	1.5 ～ 2.0	0.6	方形	椀形	ブロック	弥生土器？	58	42-4	
17	40	12-2 西	2.5	2.1	0.5	長方形	椀形	ブロック	×	54		
18	41	12-2 西	4.8	1.9	1.6 ～ 2.1	不定形	椀形	ブロック	上師器	53		
19	42	12-2 西	(1.5)	(1.2)		方形？			上師器			
20	43	12-2 西	2.2	1.9	0.4	長円形	逆台形	ブロック	上師器	59	42-3	
21	44	12-2 西	1.5	(0.5)	0.5	隅丸方形？	逆台形	ブロック	×			
22	45	12-2 西	0.9 ～ 1.0	0.9 ～ 1.0	0.45	方形	逆台形	ブロック	×	58	42-6	
23	46	12-2 西	1.1	1.1	0.45	方形	椀形	ブロック	上師器	59		
24	47	12-2 西	1.9	1.4	0.4	方形	逆台形	ブロック	×	59	42-7	
25	48	12-2 西	1.3	1.3	0.45	方形	方形	ブロック	×	58		
26	49(=50)	12-2 西	3.4	(1.5)	0.55	隅丸方形	逆台形	ブロック	上師器			
27	51	12-2 西	2.1	1.3	0.3	方形	椀形	ブロック	上師器	59	42-8	
28	52	12-2 西	1.9	1.5	0.3	不定形	椀形	ブロック	あり	59		
29	53	12-2 西	2.0	(1.3)	(0.3)	不定形			上師器			
30	54	12-2 西	(7.0)	5.0	0.4 ～ 0.6	不定形	長方形	ブロック	須恵器、上師器 (60-107 ～ 109)	53	41-3	
31	55	12-2 西	(1.0)	(0.6)		円形？			須恵器			
32	56	12-2 西	(1.8)	0.8	0.2	長方形？	椀形	ブロック	須恵器			
33	57	12-2 西	4.1		0.35	不定形	長方形	ブロック	須恵器 (60-110)			

番号	土坑名称	地区	法量（m）			平面形	断面形	土坑埋土	出土遺物	挿図番号	写真図版番号	備考
			長径	短径	深さ							
34	281	12-1	4.0	4.0	0.6	不定形	長方形	ブロック	須恵器、弥生土器（60-114）	51	35-1・3	
35	282	13	1.0	1.0	0.25	円形	長方形	ブロック	×	56		
36	283	13	1.3	1.3	0.6	円形	長方形	ブロック	×	56	35-2	
37	284	13	0.7		0.1	不明	皿形	ブロックでない	×	56		
38	285	13	1.8	1.5	0.3	隅丸方形	長方形	ブロック	×	56		
39	286	13	1.9	1.4	0.5	隅丸方形	楕形		あり	56		
40	287	13	1.6	1.6	0.4	円形	楕形	ブロック	×	56	35-5	
41	290	13	3.5	0.8	0.45	長方形	U字形	ブロックでない	土師器	56	35-4	
42	291	12-1 東	3.5	2.6	0.6	不定形	逆台形	ブロック	×	56	36-3	
43	293	13	1.3	1.3	0.3	円形	長方形	ブロックでない	×	56		
44	294	12-1	1.3	0.75	0.45	長円形	長方形	ブロック	×	56		
45	295	12-1	3.0	1.2	0.3	長円形	長方形	ブロック	土師器	56		
46	296	12-1	6.5	4.0	0.8～0.9	隅丸方形	長方形	ブロック	弥生土器?、土師器（60-115・116）	51	35-8	307 と連結
47	297	12-1・13	1.5	1.5	0.6	円形	U字形	ブロック	×	56	35-6	
48	298	12-1	4.6	2.1	0.3	不定形	逆台形	ブロック	×	56		
49	299	12-1	1.5	1.5	0.5	隅丸方形	逆台形	ブロック	×	56		
50	300	12-1	5.5	3.1	0.3	長円形	長方形	ブロックでない	土師器	52	34-3	301 と連結
51	301	13	4.5	3.0	0.5	長円形	長方形	ブロックでない	須恵器	52	34-3	300、302 と連結
52	302	13	4.5	2.0	0.45	隅丸方形	長方形	ブロック	あり	56		301 と連結
53	303	12-1 東	1.5	0.6	0.55	長円形	逆台形	ブロックでない（炭混じり）	×	56		
54	304	12-1	3.9	3.0	0.6	隅丸方形	長円形	ブロックでない	土師器、平瓦（61-132）	52	34-3	
55	305	12-1・13	2.5	2.1	0.4	隅丸方形	長方形	ブロック	×	57		
56	306	12-1 東	2.0	1.6	0.4	長円形	楕形	ブロックでない	土師器	57		
57	307	12-1・13	7.0	3.0	0.8～0.9	隅丸方形	楕形	ブロック	須恵器（60-117）、土師器（60-118）	56		296 と連結
58	308	12-1 東	2.0	0.9	0.4	隅丸方形	楕形	ブロックでない	×	57	37-7	
59	309	12-1 東	2.7	2.0	0.5	長円形	楕形	ブロックでない	×	52	34-2	310 と連結
60	310	12-1 東	2.2	2.2	0.5	方形	楕形	ブロックでない	×	52	34-2	309 と連結
61	311	12-1 東	2.3	1.5	0.7	隅丸方形	逆台形	ブロックでない	×	57	35-7	
62	312	12-1 東	4.1	3.1	0.3	隅丸方形	逆台形	ブロック	×	57		313 と連結
63	313	12-1 東	4.5	3.35	0.6	長方形	逆台形	ブロック（水平）	土師器	57		312 と連結
64	314	12-1 東	6.5	2.9	0.3～0.45	不定形	逆台形	ブロックでない	土師器	56	37-8	
65	315	12-1 東	3.0	2.1	0.55	長円形	逆台形	水平堆積	平瓦（61-130）	57		

番号	土坑名称	地区	法量（m）			平面形	断面形	土坑埋土	出土遺物	挿図番号	写真図版番号	備考
			長径	短径	深さ							
66	318	12-1 東	1.5	1.0	0.3	長円形	長方形	ブロックでない	×	57		
67	319	12-1 東	2.1	2.0	0.1	隅丸方形	皿形	ブロックでない	×	57		
68	321	12-1 東	2.7	1.6	0.35	隅丸方形	逆台形	ブロックでない	×	57	36-5	
69	322	12-1 東	(1.5)	1.6	0.5	隅丸方形	逆台形	ブロック	土師器	57		
70	323	12-1 東	3.5	2.6	0.35	隅丸方形	逆台形	ブロック	×	57	36-7	
71	324	12-1 東	2.6	2.3		方形	逆台形	ブロック	土師器			
72	326	12-1 東	1.0	(0.6)		長円形ヲ			×			
73	475	14	0.5	0.5	0.15	円形	逆台形	ブロックでない	×	59		
74	476	14	2.4	2.4	0.1	方形	皿形	ブロックでない	×	59		
75	477	14	4.2	4.2	0.1	隅丸方形	逆台形	ブロックでない	×	59		
76	478	14	0.9	0.9	0.1	円形	皿形	ブロックでない	×	59		
77	160	6-2	2.7	(0.6)	0.4	方形	U字形	ブロックでない	あり	40		
78	161	6-2	3.5	(0.6)	0.4	方形	椀形	ブロック	×	40		

66%、ブロック土でないもの（Dタイプ）が25基で34%となる。吹田操車場遺跡の全くブロック土でないものと比較すると、比率が大きい。つまり、梶原西遺跡では、土坑が掘削されてから埋め戻されるまでの期間が短いものが多い、という結果がでた。

この土坑埋土にブロック土が含まれているか否かで2タイプに分類した、その土坑の分布状況を図に示すと興味深い結果が出た（第69図）。

ブロック土でない土坑は調査区の東半、特に北東部に多い。逆に、西部の12－1区などはほとんどの土坑同士が切り合い、埋土はブロック土である。土坑が密集し、切り合いが多いほどブロック土が混じる割合が多いといえる。

300土坑と301土坑、309土坑と310土坑の様に細い溝で連結する土坑は、同時期形成されたと考えられ、埋土の堆積状況も同じでブロック土でないものが多い。

また、ブロック土でない土坑は、複数の土坑が切り合っている場合では、上位に位置するものが多い。あるいは、切り合いをもたず単独で存在するものが多い。

これらの違いの理由として、土坑が密集して切り合いが多い個所では、新しい土坑を掘削する場合に以前の土坑の壁などを攪乱することになるので、ブロック土が混じる割合が必然的に多くなると言えるだろう。ところが、独立した土坑の場合は、土坑がそのまま放置されていたとしても他の影響を受けずに、経年によって自然堆積すると考えられる。

あるいは、比較的古い時期の土坑は、後で土坑が付近で掘削されることを考えてか土坑を埋め戻しているが、それより新しいか最終段階の土坑は埋め戻しが行われず、時間経過による自然堆積によって次第に埋積していったとも推測される。

（2）形状、法量による分類

検出した土坑の平面形は、方形（隅丸方形を含む）、長円形、不整形がほとんどで、円形などが若干混じる。不整形も複数の円形や方形の土坑が一つになって生じたか、それに溝などが連結したものと考えられ、特異な形状はみあたらない。

断面形は皿形、椀形、長方形、逆台形などである。側面を掻きとる、あるいは袋状にオーバーハングしたものはみあたらない。長辺（直径）に対して深さのほうが深い柱穴のような形状のものもない。

規模は、長辺（長径）はほとんどが1mを超え、5m超のものも10基未満であるが存在する。最少でも0.7mある。短辺（短径）は0.5～4.0m程度の範囲におさまるが、0.5m程度、1.5～2.0m程度、それ以上の3つに大別できる。

土坑の深さは0.1mから1m近くと様々であるが、深さと土坑の位置、分布状況に相関関係があるか図化した（第70図）。

0.1m単位で同じ深さのものを等高線状に結ぶと、面白い傾向がみてとれる。一番深い土坑が存在するのは、南部域の中央北端（13区や12－1区の北端）、296土坑や307土坑となり、0.8～0.9m掘削している。これを取り囲むように、南や東西に離れていくほど、0.6m、0.5m、0.4mと、徐々に土坑の深さが浅くなる。東西最南端の7土坑や27土坑、51土坑などでは深さ0.3m前後である。言い換えると、近接する土坑は深さも近似している。

群集土坑が掘削されている地盤の標高は、北側（13区、12－1区）、X＝－126,230位までは7.0m前後、12－1区西側及び東側の南端では6.7～6.8m前後と、比高差は0.2mほどである。

北壁や12－1区西壁、12－1・2区東壁断面をみると、基盤層の厚さは0.1mほどで平均しているが、その下層のオリーブ褐色シルト層は北が厚く、次第に薄くなり、土坑の深さの分布状況に合致する。これらのシルト層を掘削する目的で土坑を掘削したとすれば、堆積が厚いところで深く掘削し、薄いところでは浅く掘削することになる。そう考えると、梶原西遺跡の土坑はやはり土壌採集を目的として掘削された土坑と考えるのが、有力である。

（3）出土遺物による時期の検討

表7に示す通り、検出土坑の約4割から遺物が出土している。ただし、細片化しているものがほとんどで、図示し得たものはわずかである。

土坑からの出土遺物は弥生土器、古墳時代の須恵器、土師器、古代の須恵器、土師器、黒色土器、瓦などである。量的には古代の遺物が最も多い。

遺物は器形を完全に復元できるものはなく、また、出土位置も上層、下層など様々で、281土坑を除けば同一個体片がかたまって検出されたものもなかった。従って、意図的に埋納されたものではないと考える。土坑の埋め戻しの際や自然堆積に伴って混入したと考えられる。

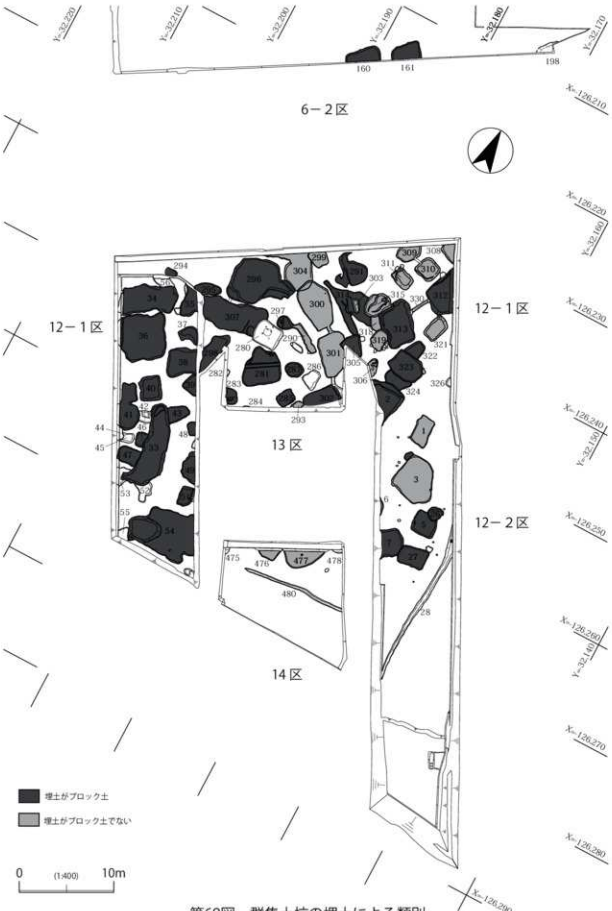
また、出土位置によって出土遺物の時期が分れることもなく、まんべんなく上記の時期の遺物が散在する。この地域で群集土坑以外に検出した遺構といえば、中世後半以降の280井戸や、古代の土師器椀が出土した28溝があるが、古代の集落跡があったか等は不明である。

群集土坑群は古代を含みそれ以前の遺構とはいえるが、弥生時代から古代まで連続的に続いた遺構だったかは疑問である。出土量や出土状態から判断するならば、弥生時代や古墳時代の遺物などは、土坑掘削の際に混入したと考えた方が妥当だろう。従って現状では、一定量の遺物の出土をみた古代の所産（奈良時代後半が主体か）である可能性が最も高いと理解しておきたい。

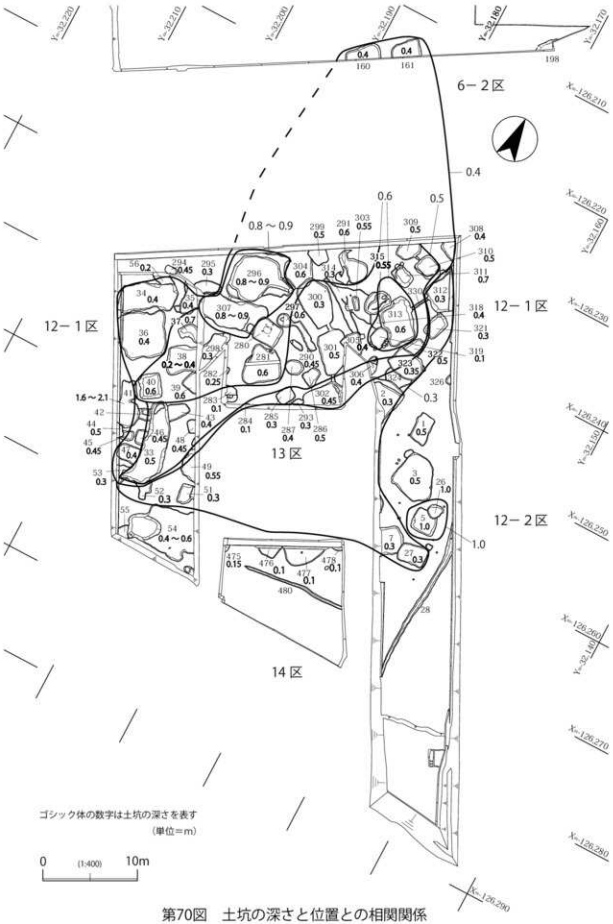
（4）群集土坑の機能・性格

土坑がある範囲にかたまって検出される群集土坑群は、先述の吹田操車場遺跡の他、これまでにもいろいろな遺跡で報告されてきた。

群集土坑の性格については、多くは土壙墓か粘土採掘坑が考えられている。



第69図　群集土坑の埋土による類別



第70図　土坑の深さと位置との相関関係

梶原西遺跡の群集土坑については、墓とするには難しい。脂肪酸分析などの理化学的分析は実施していないが、骨などの出土は1基も認められなかった。副葬品となるような遺物や埋葬施設も皆無であった。他にも、土坑の規模が不統一で、人間を埋葬するには規模が法量的に大きすぎるものが多いこと、深さも不統一なことなどがあげられる。

土坑同士をつなぐ連結溝があることに着目して、水などを貯めておく貯水穴などの可能性も考えた。しかし、当地の土壌では水を貯めるには素掘り土坑での防水機能を持たない。また、排水機能を想定しても連結された土坑間に高低差がなく、土坑内堆積も水平で傾斜がない。穀物などの貯蔵穴としても、有機遺物の出土はまったくなかった。

やはり、粘土採掘坑とするのが法量的にも、粘土ブロックを含む埋め戻しが行われた状況からも、最も妥当だろう。しかし、この採取した粘土を何に用いたかについては、調査区内からは工房的な遺構も検出しておらず、未製品や廃棄品などの遺物もみつかっておらず、不明である。ここで粘土を採掘したとしても製作地は別の場所と考えられる。

そこで、古代の遺構である可能性が高いことと、当遺跡より北東約0.5kmの山麓部に東大寺などにも瓦を供給したとされる梶原瓦窯跡があり、ここでは窯跡や工房跡は見つかっているものの粘土の採取地が不明であることから、梶原瓦窯の粘土原材料採取地でないかという仮説をたててみた。

群集土坑から採取した土となる基盤層の土と、梶原西遺跡で出土した梶原瓦窯と類似した平瓦、梶原瓦窯出土瓦について薄片観察及び蛍光X線分析による胎土分析を実施した。その結果、瓦同士は似た組成を示し同一材料で作られたと判断できるが、採取粘土と瓦は異なり、この粘土から梶原瓦窯跡の瓦が作られた可能性が低い、という結果が出た。

現時点では、粘土採掘坑であったとして捉えるが、何を製作する目的でこれだけの土坑を掘削して、粘土が採取されたのか、その製品はどこで作られたのかは解明できなかった。古代の集落遺構も限られた地域でしか検出されておらず、調査区外の群集土坑群にほど近い場所にあったのでは、と推測するしかない。

<参考文献>

鹿野　塁編　2014「第3節　古墳時代の遺構・遺物　1．群集土坑」『吹田操車場跡10・明和池遺跡3』
公益財団法人大阪府文化財センター

写 真 図 版

１．調査区全景（西から）

２．調査区全景（南から）

写真図版２

１．１区、２－１区、３区全景（北から）

２．１区全景（北から）

１．１区方形周溝墓３　69 周溝（西北から）

２．１区方形周溝墓６　67 周溝（南西から）

写真図版４

１．１区 67 周溝土器出土状況
（南東から）

２．１区 67 周溝土器出土状況
（南から）

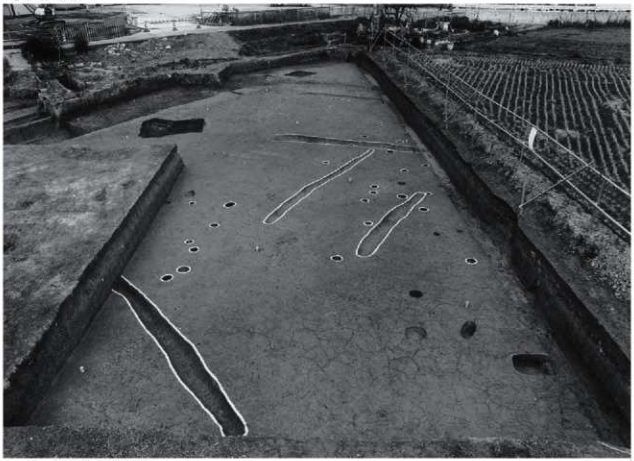
３．１区 72 土坑完掘状況
（南東から）

１．１区 69 周溝東西断面
（北から）

２．１区 69 周溝南北断面
（東から）

３．１区 67 周溝南北断面
（東から）

写真図版６



１．２－１区全景（南から）

２．２－２区、４区、５区全景（南から）

１．４区方形周溝墓７（北東から）

２．２－２区方形周溝墓８（南西から）

写真図版８

１．２－２区方形周溝墓８　273 周溝（西から）

２．４区 275 周溝（北東から）

１．２－２区方形周溝墓８　240 周溝（西から）

２．２－２区 260 周溝（南東から）

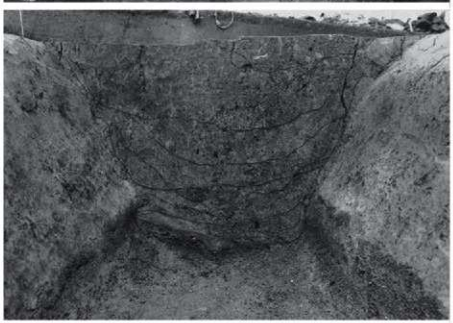
写真図版 10

1．2－2区 260 周溝断面
（西から）

2．2－2区 260 周溝断面
（東から）

3．5区 260 周溝断面
（西から）

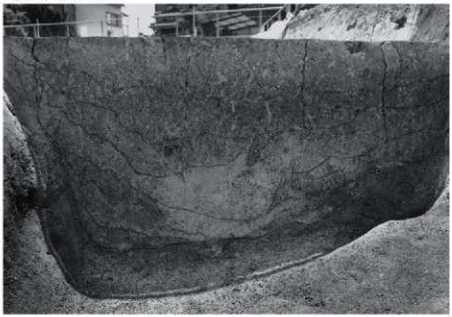
1．2－2区 240 周溝
土器出土状況（西北から）



2．2－2区 240 周溝断面
（東から）

3．4区 240 周溝断面
（東から）

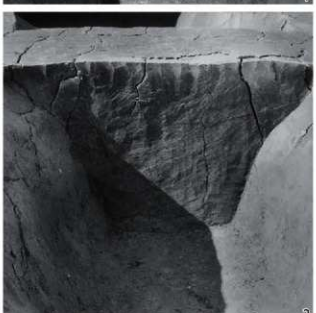
写真図版 12

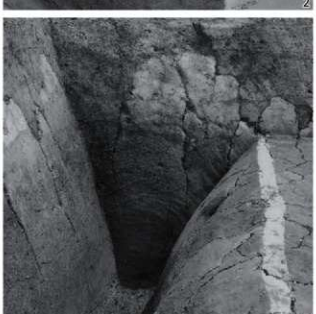


1．2－2区 250 周溝断面
（北から）

2．2－2区 273 周溝
土器出土状況（西から）

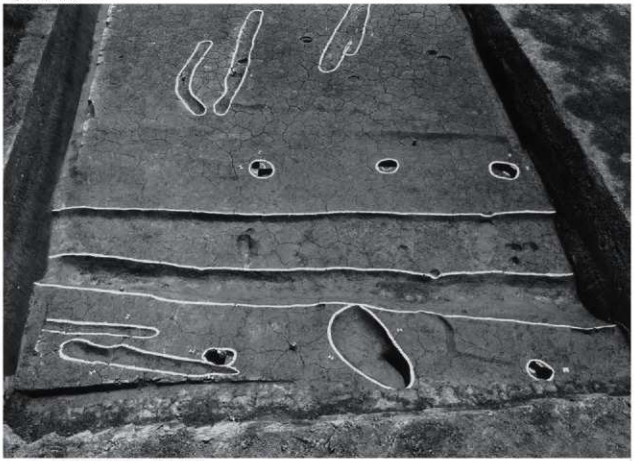
3．2－2区 273 周溝断面
（西から）





1．4区 275 周溝東西断面（南から）　2．4区 275 周溝南北断面（西から）　3．4区 277 周溝断面（西から）
4．2－2区 279 周溝断面（西から）　5．2－2区 245 土坑断面（南東から）　6．2－2区 272 土坑断面（北から）

写真図版 14

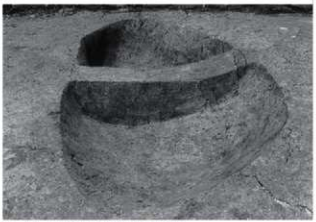


1．2－2区掘立柱建物1（北から）

2．掘立柱建物1　261ピット（南東から）

4．掘立柱建物1　263ピット（東から）

3．掘立柱建物1　262ピット（南から）



5．2－2区271土坑（南から）

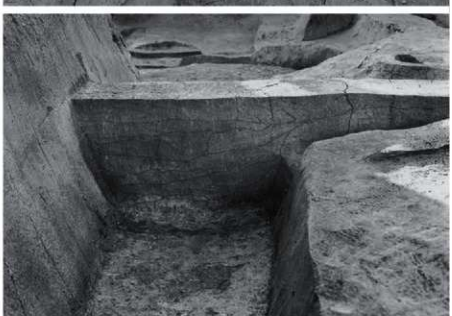
1．1－2区全景（南から）

2．1－2区方形周溝墓3　331 周溝（南東から）

写真図版 16

1．1－2区 331 周溝断面
（東から）

2．1－2区 334 土坑断面
（南から）



3．1－4区 341 周溝断面
（東から）

1．6－1区、7区方形周溝墓2　341 周溝（南東から）

2．6－1区、7区方形周溝墓2　341 周溝（西北から）

写真図版 18

1．6－1区341周溝土器出土状況（南西から）

2．6－1区341周溝断面（西から）

1．6－1区、7区掘立柱建物2、柱列2・3（南東から）

2．7区掘立柱建物3・4（南西から）

写真図版 20

1．６－１区、７区掘立柱建物２、柱列１（西から）

2．７区掘立柱建物３（北から）

3．７区掘立柱建物４（南西から）

1．掘立柱建物2　357 ピット（南西から）

2．掘立柱建物2　358 ピット（南から）

3．掘立柱建物3　416 ピット（南から）

4．掘立柱建物4　409 ピット、364 ピット（南から）

5．柱列2　388 ピット（南から）

6．柱列2　387 ピット（南から）

7．柱列1　352 ピット（西から）

8．柱列3　391 ピット（南から）

写真図版 22

1．1－3区方形周溝墓1検出状況（南から）

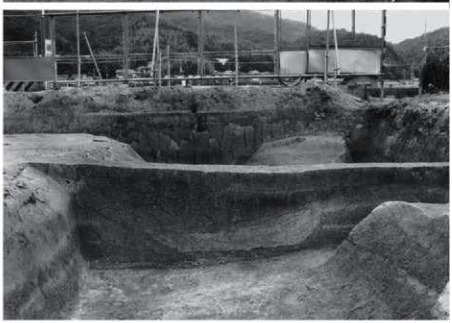
2．1－3区全景（南から）

1．方形周溝墓 1　434 周溝完掘状況（南から）

2．434 周溝東辺（北西から）

写真図版 24

1．434 周溝土器出土状況
（北西から）



2．434 周溝東西断面
（南から）

3．434 周溝南北断面
（東から）

1．432 井戸最上層（西から）

2．432 井戸上層（南から）

3．432 井戸土器検出状況（東から）

4．432 井戸石組検出状況（南から）

5．432 井戸最下層曲物井筒検出状況（西から）

6．433 溝断面（東から）

7．446 土坑（南西から）

8．449 溝断面（南から）

写真図版 26

1．6－2区全景（西から）

2．6－2区東半全景（北から）

1．6－2区西半全景（北から）

2．155 土坑土器出土状況（南から）

写真図版 28

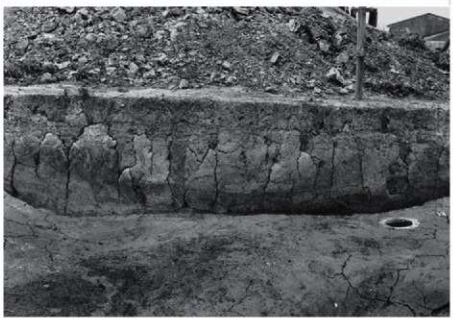
1．６－２区東半北部近景
（北西から）

2．６－２区東半中央部近景
（北東から）

3．６－２区東南部近景
（北西から）

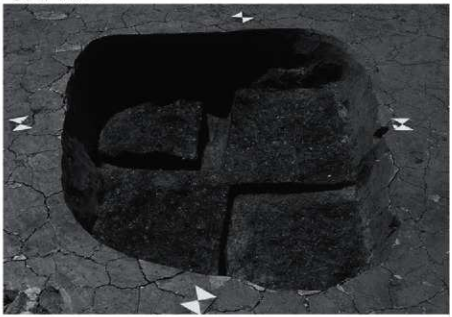
1．6－2区171土坑
（東から）

2．6－2区171土坑
北半南北断面（東から）



3．6－2区東半西壁地震による変形土坑断面（東から）

写真図版 30



1．6－2区 106 土坑炭検出状況
（北から）

2．6－2区 106 土坑完掘状況
（南から）

3．6－2区 211 土坑完掘状況
（西から）

1．8区、11区全景（北から）

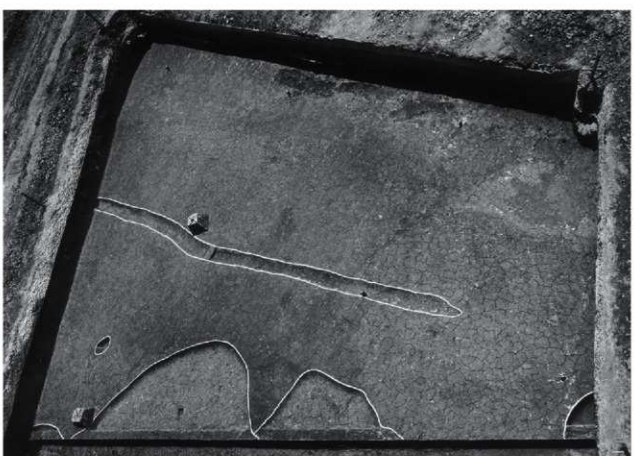
2．9区全景（北から）

写真図版 32

1．12－1区、13区遺構検出状況（南西から）

2．12－1区、13区全景（西から）

1．12－1区、13区全景（西から）



2．14区全景（北から）

写真図版 34

1．12－1区近景
（北西から）

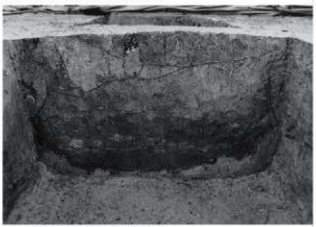
2．12－1区近景
（西南から）

3．12－1区、13区近景
（北から）

1．281 土坑断面（南から）

2．283 土坑断面（東北から）

3．281 土坑土器出土状況（南から）



4．290 土坑断面（南東から）

5．287 土坑断面（東から）

6．297 土坑断面（東から）

7．311 土坑断面（南東から）

8．296 土坑断面（東から）

写真図版 36

1．295 土坑断面（西から）

2．298 土坑断面（東から）

3．291 土坑断面（南から）

4．299 土坑断面（南から）

5．321 土坑断面（西南から）

6．322 土坑断面（北東から）

7．323 土坑断面（南から）

8．324 土坑断面（南東から）

1．280 井戸最上面平面（東南から）

2．280 井戸掘形掘削状況（東南から）

3．280 井戸 1 段目桶枠（東南から）

4．280 井戸 2 段目側板（東南から）

5．280 井戸 2 段目桶枠（東南から）

6．280 井戸 2 段目断面（東南から）

7．308 土坑断面（北西から）

8．314 土坑断面（南から）

1．12－2区西半遺構検出状況（南から）

2．12－2区東半全景（南から）

1．12－2区西半全景（南から）

2．12－1区東半全景（南から）

写真図版 40

1．12－1区西半近景(南東から)

2．12－1区3土坑（南西から）

3．12－1区5・26土坑
（南西から）

1．12－2区 27 土坑（南から）

2．12－2区 38 土坑(南西から)

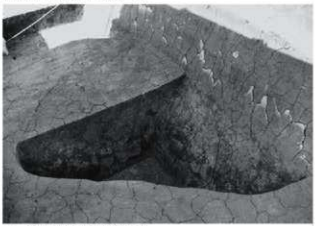
3．12－1区 54 土坑（西から）

写真図版 42

1．2 土坑断面（南西から）

2．37 土坑断面（南から）

3．43 土坑断面（南西から）

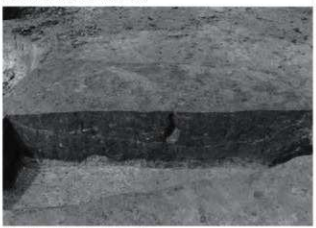


4．39 土坑断面（南から）

5．35 土坑断面（南から）

6．45 土坑断面（南から）

7．47 土坑断面（南西から）



8．51 土坑断面（西から）

1．58 土坑土器出土状況(西から)

2．12－1区東壁断面（西から）

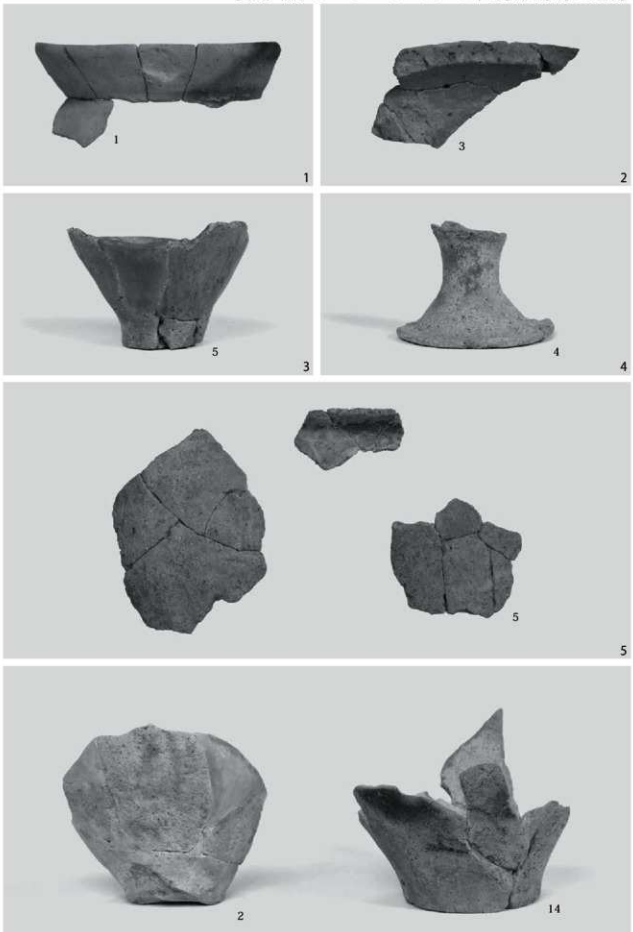
3．12－1区東壁断層（西から）

写真図版 44

1．1－4区、7－2区全景（南西から）

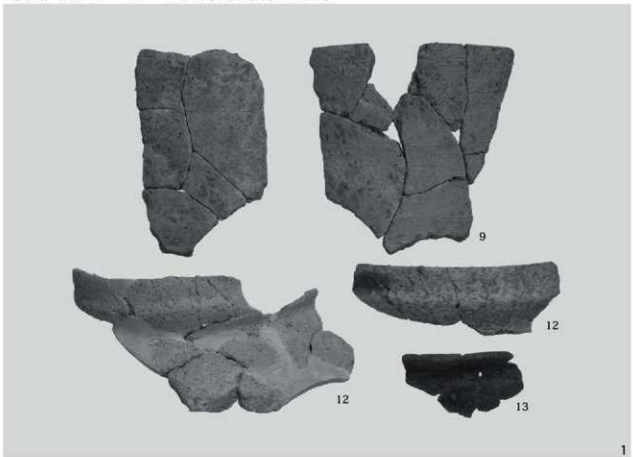
2．1－4区、7－2区全景（北東から）

写真図版45　1・4・2－2区方形周溝墓遺物

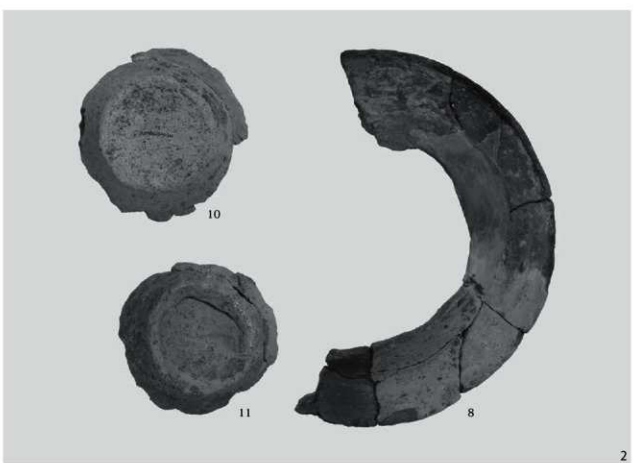


1．1区67周溝　2．4区273周溝　3～5．2－2区273周溝　6．1区67周溝、5区260周溝

写真図版 46　２－２区方形周溝墓遺物



1．２－２区 240 周溝、250 周溝

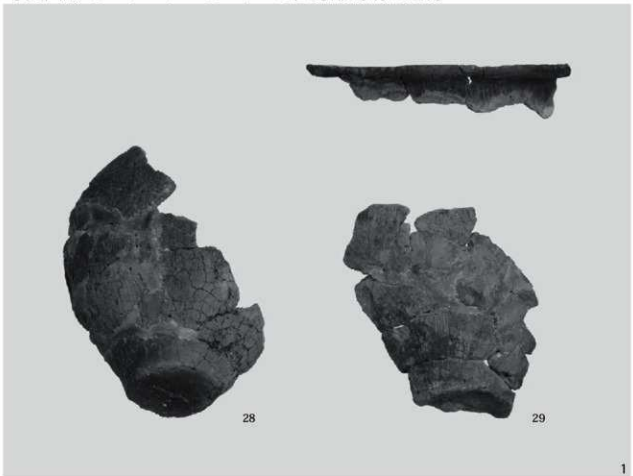


2．２－２区 240 周溝

写真図版 47　2－2・6－1・7－2区方形周溝墓遺物

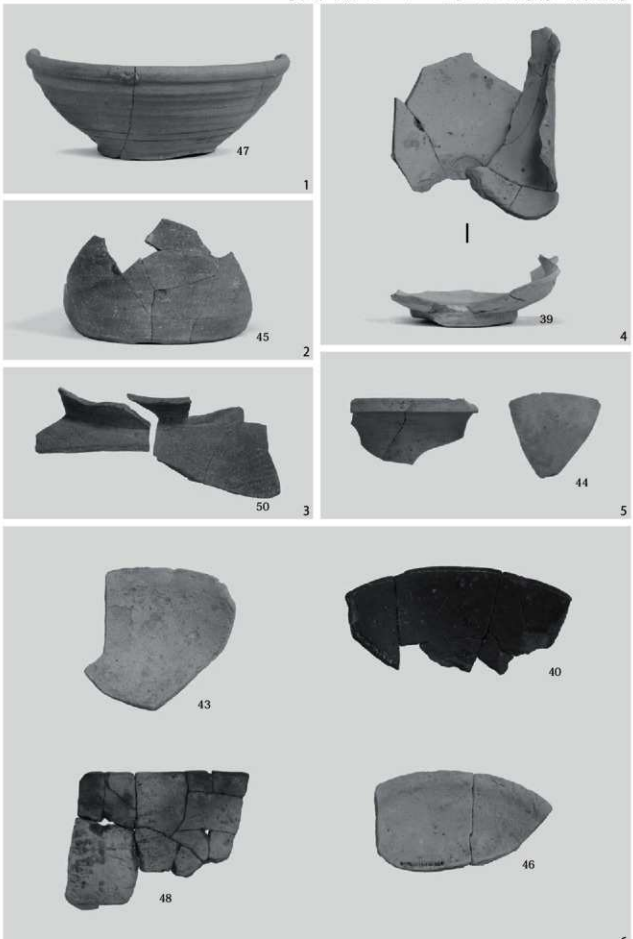
1．2－2区240周溝　　2．6－1区341周溝　　3．7－2区341周溝

写真図版48　7・7－2・1－3区方形周溝墓遺物



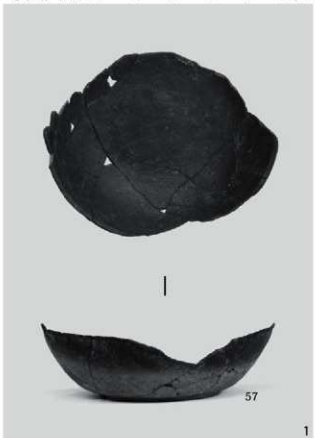
1．7区341周溝、1－3区434周溝　2．7－2区341周溝　3．1－3区434周溝

写真図版 49　1－3区 434 周溝上層遺物



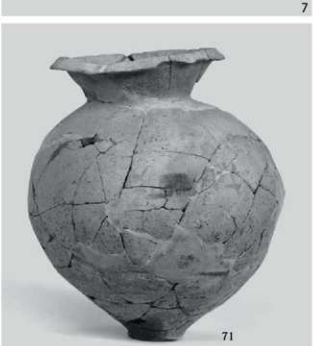
1～6．1－3区 434 周溝上層

写真図版50　1－3・6－1・7区遺構・包含層遺物



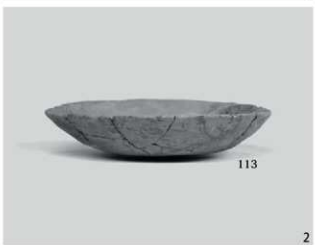
1．6－1区391ピット　　2、3．1－3・7－2区433溝　　4、8、9．1－3区432井戸
5．6－2区第3層　　6．6－1区387ピット　　7．6－1区357ピット

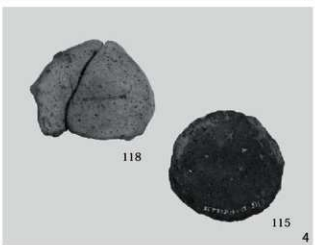
写真図版 51　6－2区遺構・包含層遺物

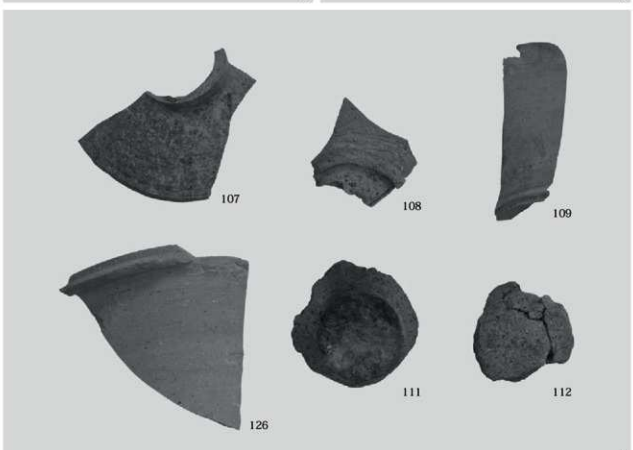


1、2．6－2区第2層　　3～5．6－2区141周溝　　6．6－2区171土坑
7、8．6－2区155土坑

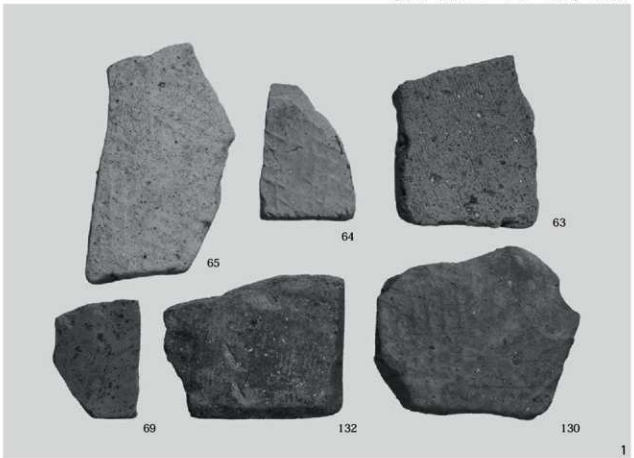
写真図版 52　12 ～ 14 区遺構・包含層遺物



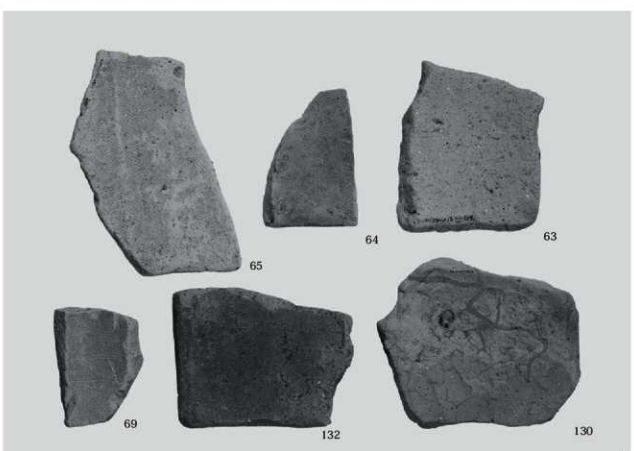




1．12 － 2 区 57 土坑　　2．12 － 2 区 28 溝　　3．12 － 1 区 307 土坑
4．12 － 1 区 307 土坑、296 土坑　　5．12 － 2 区 54 土坑、55 土坑、3 土坑、36 土坑、第 2 層

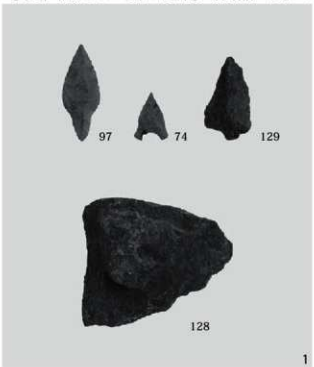


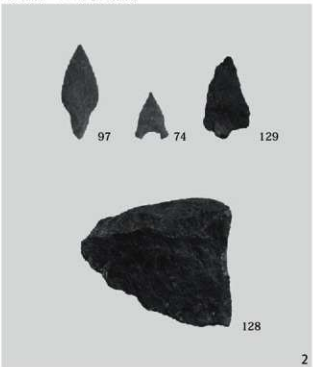
1．1－3・12－1・12－2区丸瓦・平瓦（凸面）

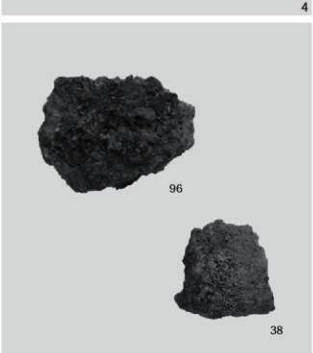


2．1－3・12－1・12－2区丸瓦・平瓦（凹面）

写真図版 54　出土遺物（石器・瓦・土製品・金属製品）







1、2．6－2区第2層、163ピット、12－2区第2層、12－1区第2層　　3．1－3区第2層
4．6－2区第2層　　5．1－4区341周溝　　6．6－2区第2層、1－3区432井戸

報 告 書 抄 録

ふりがな	かじわらにしいせき
書名	梶原西遺跡
副書名	主要地方道伏見柳谷高槻線（高槻東道路　梶原工区）道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	公益財団法人　大阪府文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第261集
編著者名	川瀬貴子
編集機関	公益財団法人　大阪府文化財センター
所在地	〒590－0105　大阪府堺市南区竹城台３丁21番４号　　TEL072(299)8791
発行年月日	2015年８月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
かじわらにしいせき 梶原西遺跡	たかつきし 高槻市 かじわら 梶原５・６丁目	27027	9579	34° 51′ 44″	135° 38′ 57″	2014．１．６ ～ 2015．４．22	5072	主要地方道 伏見柳谷高槻線 （高槻東道路 梶原工区） 道路改良事業

所収遺跡名	種別	主な時期	主な遺構	主な遺物	特記事項
梶原西遺跡	墓	弥生	方形周溝墓・ 土器棺墓・土坑	弥生土器・石器	弥生時代中期前半の方形周溝墓域
	集落	古代	掘立柱建物・井戸・ 土坑・溝	黒色土器・土師器・須恵器 瓦器・瓦	古代末の居住域
	生産	古代か	土坑	須恵器・土師器・ 弥生土器・瓦	推定古代の群集土坑

要約

今回の調査地は高槻市の東部、北は北摂山地、南は淀川、西は檜尾川に画された沖積低地に位置する。山裾部の北部域では、弥生時代中期前葉の方形周溝墓を約10基検出し、西にある安満遺跡等と同時期の弥生時代中期の墓域がひろがっていたことを確認した。

中央域では古代末の掘立柱建物や石組井戸などを検出し、居住域を確認した。

南部域では、古代と推定できる群集土坑を多数検出した。粘土採掘坑と理解される。近隣には梶原寺などの瓦窯跡も存在し、関連性に注意される。

公益財団法人　大阪府文化財センター調査報告書　第261集

梶原西遺跡

主要地方道伏見柳谷高槻線（高槻東道路　梶原工区）
道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

発行年月日／2015年8月31日

編集・発行／公益財団法人　大阪府文化財センター
〒590-0105
大阪府堺市南区竹城台3丁21番4号
印刷・製本／株式会社　明新社
奈良県奈良市南京終町3丁目464番地